



PERCY JACKSON & THE OLYMPIANS BOOK ONE

# THE LIGHTNING THIEF

RICK RIORDAN

雷泥棒

## パーシー・ジャクソンとオリンポスの神々 - Book 1

リック・リオーダン

散らかった心でスキャン

Mors によって校正された V1 テキスト

### コンテンツ

1 代数前の先生をうっかり蒸発させてしまいました

2 3人の老婦人が死の靴下を編む

3 グローバーが予期せずズボンを脱ぐ

4 母が私に闘牛を教えてくれる

5 馬でピノクルをする

6 バスルームの覇者になる

7 私の夕食は煙に包まれて消えてしまう

8 旗を掴む

9 クエストを依頼されました

10 完璧に良いバスを台無しにしてしまった

11 ガーデン ノーム エンボリアムを訪問します

12 プードルからアドバイスをもらいました

13 私は死に飛び込みます

14 私は有名な逃亡者になる

15. 神はチーズバーガーを買ってくれる

16 シマウマに乗ってラスベガスへ行く

17 ウォーターベッドを購入します

18 アナベスは服従学校に通っています

19 真実を見つけた、ある意味

20 私は親戚と戦う

21 タブを決済します

22 予言は当たる

---

1 代数以前の記憶を誤って蒸発させてしまう

教師

ほら、私は半純血になりたくなかった。

もしあなたが自分もそのような人かもしれないと思ってこれを読んでいるのであれば、私からのアドバイスはこうです。今すぐこの本を閉じてください。あなたの誕生についてお父さんやお母さんがついた嘘をすべて信じて、普通の生活を送るよう努めてください。

半純血であることは危険です。それは怖い。ほとんどの場合、苦痛で死んでしまいますが、意地悪なやり方。

普通の子供なら、フィクションだと思ってこれを読むのは素晴らしいことだ。読む。こんなことは何も起こらなかったと信じられるあなたがうらやましいです。

しかし、これらのページの中に自分自身がいることに気づいた場合、心の中で何かがかき乱されていると感じた場合は、すぐに読むのをやめてください。あなたも私たちの一員かもしれません。そして、あなたがそれを知れば、彼らもそれを察知し、あなたを迎えに来るのは時間の問題です。

私が警告しなかったとは言わないでください。

私の名前はパーシー・ジャクソンです。

私は12歳です。数か月前まで、私はニューヨーク州北部の問題を抱えた子供たちのための私立学校であるヤンシー・アカデミーの寄宿生でした。

私は問題のある子供ですか？

うん。そう言えるかもしれません。

それを証明するために、私の短い悲惨な人生のどの時点からでも始めることができましたが、物事は本当に進み始めました。昨年の5月、私たちの6年生のクラスがマンハッタンへ校外旅行に行ったとき、28人の精神疾患を持つ子供たちと2人の教師が黄色いスクールバスに乗って、古代ギリシャとローマのものを見るためにメトロポリタン美術館に向かった。

それは拷問のように聞こえます。ヤンシーの遠足はほとんどそうだった。

しかし、私たちのラテン語教師であるブルナー先生がこの旅行を引率してくれたので、私は希望を持っていました。

ブルナー氏は電動車椅子に乗った中年男性でした。彼は薄毛で、もじゃもじゃのひげを生やし、擦り切れたツイードのジャケットを着ており、いつもコーヒーのような匂いがしていました。彼がクールな人だとは思わないかもしれませんが、彼は物語やジョークを話し、授業中に私たちにゲームをさせてくれました。彼はローマの鎧や武器の素晴らしいコレクションも持っていたので、授業で私を眠らせなかった唯一の教師でした。

旅行がうまくいくことを願っていました。少なくとも、一度はトラブルに巻き込まれないことを望みました。

おい、私が間違っていたのか。

ほら、遠足中に悪いことが起こるんだよ。私の5年生の学校と同じように、サラトガの戦場に行ったとき、独立戦争の大砲による事故に遭いました。スクールバスを狙っていたわけではありませんが、いずれにしてももちろん退学になりました。その前に、私が通っていた4年生の学校で、マリリン・ワールドのサメ・プールの舞台裏ツアーに参加したとき、キャットウォークで間違っただけのレバーを押してしまったため、クラス全員が予定外に泳ぐことになりました。そしてその前のことは…まあ、おわかりでしょう。

この旅行では、良いものにしようと決心しました。

市内に入るまでずっと、ピーナッツバターとケチャップのサンドイッチの塊で親友のグローバーの後頭部を殴るそばからだらけの赤毛の窃盗癖のある少女ナンシー・ボボフィットを我慢していた。

グローバーは格好の標的だった。彼はやせ細っていた。彼はイライラすると泣いた。6年生の中でニキビがあり、あごにうっすらとひげが生え始めていたので、彼はおそらく数学年進級できなかったに違いない。その上、彼は身体が不自由でした。彼は、足に何らかの筋肉の病気があるため、体育の仕事を一生涯を免れることを免除するメモを持っていました。彼は歩くたびに痛むようなおかしな歩き方をしていましたが、騙されないのでください。エンチラーダの日にカフェテリアで彼が走っているのを見るべきだった。

とにかく、ナンシー・ボボフィットが投げたサンドイッチの塊が彼の茶色の巻き毛に挟まり、彼女は私がすでに執行猶予中だったため何も返すことができないことを知っていました。校長は、この旅行中に何か悪いこと、恥ずかしいこと、あるいはちょっと面白いことが起こったら、停学処分にして殺すと私を脅迫しました。

「彼女を殺してやる」と私はつぶやいた。

グローバーは私を落ち着かせようとした。「大丈夫です。私はピーナッツバターが好きです。」

彼はナンシーのランチをもう一枚食わずに食べた。

"それでおしまい。"私は立ち上がろうとしましたが、グローバーが私を席に引き戻しました。

「あなたはもう執行猶予中だよ」と彼は私に思い出させた。「何かあったら誰が責められるか知っているだろう。」

振り返ってみると、その場でナンシー・ボボフィットを着飾っていれば良かったと思います。私がこれから巻き込まれようとしていた混乱に比べれば、停学など大したことはなかったでしょう。

ブルナー氏が博物館ツアーを案内した。

彼は車椅子で前に乗り、大理石の前を通り、反響の大きいギャラリーを通過して私たちに案内してくれました。彫像や本当に古い黒とオレンジ色の陶器でいっぱいガラスケース。

これが二千年、三千年も生き残っていたということに驚きました。

彼は私たちを、頂上に大きなスフィンクスのある高さ13フィートの石柱の周りに集め、それが私たちと同じくらいの年齢の女の子にとっていかに墓標であり、石碑であるかを話し始めました。彼は側面の彫刻について教えてくれました。ちょっと興味深かったので、私は彼の話を聞こうとしましたが、周りのみんなが話していて、私が彼らに「黙っててください」と言うたびに、もう一人の引率教師であるドッズ夫人が私にこう言いました。悪意に満ちた目。

ドッズ夫人はジョージア州出身の小さな数学教師で、50歳になっていたにもかかわらず、いつも黒い革のジャケットを着ていました。彼女はハーレーに乗ってあなたのロッカーに直行するほど意地悪そうに見えました。彼女は年の半ばにヤンシーのところに来ていましたが、そのとき私たちの最後の数学教師は神経衰弱になりました。

ドッズ夫人は初日からナンシー・ボボフィットを愛し、私を悪魔の子だと思っていました。彼女は曲がった指を私に向けて、「さあ、ハニー」と本当に優しく言いました、そして私は私が1か月間放課後拘留されるだろうと知っていました。

ある時、彼女が真夜中まで私に古い数学の問題集から答えを消させた後、私はドッズ夫人が人間だとは思わないとグローバーに言いました。彼は真剣な眼差しで私を見て、「その通りです」と言いました。

ブルナー氏はギリシャの葬儀芸術について話し続けた。

最後に、ナンシー・ボボフィットが石碑の裸の男について何か笑いながら言ったので、私は背を向けました

周りに「黙ってくれる？」と言いました。

思った以上に大きな声が出てしまいました。

グループ全体が笑いました。ブルナー氏は話を止めた。

「ジャクソンさん、何かコメントはありましたか？」と彼は言った。

顔が真っ赤になってしまいました。私は「いいえ、先生」と言いました。

ブルナー氏は石碑の写真の1枚を指さした。「この絵が何を表しているか教えてくださいませんか？」

私はその彫刻を見て、本当にそれを認識できたので、ほっとした気持ちになりました。「それはクロノスが子供たちを食べているんだろ？」

「そうだね」ブルナー氏は明らかに満足していないように言った。「そして彼がこんなことをしたのは…」

「そうですね…私は頭を悩ませて思い出しました。「クロノスは王神であり、そして—」

"神様？"ブルナー氏は尋ねた。

「タイタン」と私は訂正した。「そして..彼は自分の子供たち、つまり神である子供たちを信用していませんでした。それで、クロノスは子供たちを食べましたね？しかし、彼の妻は赤ん坊のゼウスを隠し、代わりにクロノスに食べる石を与えました。そしてその後、ゼウスが成長したとき、彼は父親のクロノスをだまして兄弟姉妹を脅迫した—」

「えーっ！私の後ろにいた女の子の一人が言いました。

「—それで、神々とタイタンの間で大きな戦いがあった」と私は続けた。

神々が勝った。」

グループの何人かの笑い者。

私の後ろで、ナンシー・ボボフィットが友人にこうつぶやいた。「これを実生活で使うみたいね。

私たちの求人応募書に「なぜクロノスが子供たちを食べたのか説明してください」と書かれているようなものだ。」

「それで、なぜですか、ジャクソンさん」とブルナー氏は言った、「ミス・ボボフィットの素晴らしい質問を言い換えると、これは実生活でも重要ですか？」

「潰れた」とグローバーはつぶやいた。

「黙れ」ナンシーは髪よりも真っ赤な顔で声を上げた。

少なくともナンシーも荷物をまとめた。彼女の言葉を聞き取ったのはブルナー氏だけだった

何か間違っている。彼にはレーダー耳があった。

私は彼の質問について考えて、肩をすくめました。「分かりません、先生。」

「なるほど。」ブルナー氏は残念そうな顔をした。「そうですね、半分は功績です、ジャクソンさん。ゼウスは確かにクロノスにマスタードとワインを混ぜたものを与えました。そのおかげで彼は他の5人の子供たちを吐き出しました。もちろん、彼らは不死の神であり、地球の中でまったく消化されずに生き、成長していたのです」タイタンの胃。神々は父親を打ち負かし、自らの大鎌で彼を切り刻み、その亡骸を冥界の最も暗い部分であるタルタロスに散骨しました。そんな幸せな気分で、昼食の時間です。ドッズ夫人、私たちを導いていただけますか外に戻って？」

クラスの雰囲気は漂い、女子たちはお腹を抱え、男子たちはお互いを押しのけたり、愚か者のように振る舞ったりしていた。

グローバーと私がついて行こうとしたとき、ブルナー氏が「ジャクソンさん」と言った。

それが来ることは分かっていました。

私はグローバーに、続けるように言いました。それから私はブルナー氏の方を向いた。「お客様？」

ブルナー氏は、あなたを放すことのできないこの表情をしていました。

千年も生きていて、すべてを見ていた。

「私の質問に対する答えを学ばなければなりません」とブルナー氏は私に言いました。

「タイタンのこと？」

「実生活について。そして自分の勉強が実生活にどう応用されるかについて。」

"おお。"

「あなたが私から学ぶことは非常に重要です。私はあなたがそれをそのように扱うことを期待しています。私はそうします」と彼は言った。

あなたから最高のものだけを受け取ってください、パーシー・ジャクソン。」

私は怒りたかった、この男は私にとっても強く押し付けました。

つまり、確かに、トーナメントの日、彼がローマの甲冑を着て「なんてことだ！」と叫び、チョークに剣を突きつけて、ボードと名前に向かって走るように私たちに挑戦したのは、ある意味クールでした。これまでに生きてすべてのギリシャ人とローマ人、そしてその母親、そして彼らが崇拝した神。しかし、ブルナー氏は、私が失読症と注意欠陥障害を抱えており、人生でC-以上の成績を収めたことがないにもかかわらず、私が他の人たちと同じように優れていることを期待していました。いいえ、彼は私がこれほど優れているとは期待していませんでした。彼は私よりもっと良くなると期待していました。そして、私はそれらの名前や事実をすべて学ぶことができず、ましてやそれらを正確に綴ることはできませんでした。

私よりもっと頑張ろうとつぶやいた間、ブルナー氏は悲しそうに長い目で見つめていた。

彼がこの少女の葬儀に出席したときのように、石碑があった。

彼は私に外に出て昼食を食べるように言いました。

クラスは博物館の正面階段に集まり、そこでは5番街に沿った人の流れを眺めました。

頭上では巨大な嵐が巻き起こり、街の上にはこれまで見たことのないほど黒い雲がかかっていた。クリスマス以来、ニューヨーク州全体の天気は異常だったので、地球温暖化が何かのせいではないかと思いました。大規模な吹雪、洪水、落雷による山火事に見舞われました。これがハリケーンの直撃だったとしても驚かなかったでしょう。

他の誰も気づいていないようでした。中にはランチャブルズのクラッカーをハトに投げつけている者もいた。ナンシー・ボボフィットは女性の財布から何かをスリ取ろうとしていたが、もちろんドッズ夫人は何も見えていなかった。

グローバーと私は他の人たちから離れて噴水の端に座っていました。もしそうすれば、私たちがその学校の出身であることを誰もが気づかないかもしれないと私たちは考えました。他の学校ではうまくいかない負け組の学校です。

「拘留？」グローバーは尋ねた。

「いや」と私は言った。「ブルナーからではありません。時々彼が私を解雇してくれたらいいのにと私は思います。つまり、私は天才ではありません。」

グローバーはしばらく何も言わなかった。それで、何かくれるかと思ったら、私の気分を良くするための深い哲学的なコメントで、彼は「リンゴをもらえますか？」と言いました。

あまり食欲がなかったので、飲ませてあげました。

私は五番街に行くタクシーの流れを眺めながら、私たちが座っていた場所からアップタウンの少し離れたところにある母のアパートのことを思い出しました。私はクリスマス以来彼女に会っていませんでした。タクシーに乗って家に帰らなかったのです。彼女は私を抱きしめて、私に会えて喜んでくれるでしょうが、同時にがっかりするでしょう。彼女は私をすぐにヤンシーに送り返し、たとえこれが6年間で6回目の学校で、おそらく再び退学になる可能性があるとしても、もっと頑張らなければならないと思わせてくれました。彼女が私に向けるその悲しそうな表情に私は耐えられないでしょう。

ブルナーさんは障害者用スロープの根元に車椅子を駐車した。彼はペーパーバックの小説を読みながらセロリを食べた。椅子の背もたれからは赤い傘が突き出ており、まるで電動カフェテーブルのようだ。

私がサンドイッチの包みを開けようとしていたとき、ナンシー・ボボフィットが醜い友人たちとともに私の前に現れて――観光客から物を盗むのに飽きたのだらう――食べかけのランチをグローバーの膝の上に放り投げた。

"おっと。"彼女は歪んだ歯で私に笑いました。彼女のそばかすはオレンジ色で、まるで誰かのようだった彼女の顔に液体チークスをスプレーで塗っていた。

私は冷静でいようと努めました。スクールカウンセラーは私に何百万回も言いました、「10まで数えて、しかし、私はあまりに腹が立って頭が真っ白になり、波が耳の中で轟きました。

彼女に触れた覚えはありませんが、次に気づいたときには、ナンシーは彼女のお尻の上に座っていました。噴水は「バーシーが私を押してくれた！」と叫びました。

ドッズ夫人が私たちの隣に現れました。

何人かの子供たちはささやきました：「見たか――」「――水――」

「――まるで彼女を掴んだかのように――」

彼らが何について話しているのかわかりませんでした。私が知っていたのは、またトラブルに見舞われたということだけだった。

ドッズ夫人は、かわいそうなナンシーが大丈夫だと確信し、博物館のギフトショップで新しいシャツを買ってあげるなどと約束するとすぐに、私に敵対しました。彼女の瞳には勝利の炎が宿っていて、あたかも私が彼女が学期中待ち望んでいた何かを成し遂げたかのようにだった。「さあ、ハニー――」

「わかってるよ」と私はつぶやいた。「ブックを消去するのに1か月。」

それは正しい言い方ではありませんでした。

「一緒に来てください」とドッズ夫人は言いました。

"待って！"グローバーは叫んだ。「それは私でした。彼女を押したのは私です。」

私は啞然として彼を見つめた。彼が私をかばおうとしていたとは信じられませんでした。ドッズ夫人はグローバーを死ぬほど怖がらせた。

彼女は彼のひげの鬚が震えるほど激しく彼を睨みつけた。

「私はそうは思いません、アンダーウッドさん」と彼女は言った。

"しかし-"

「あなたは――ここに――残るのです。」

グローバーは必死に私を見つめた。

「大丈夫だよ、おい」私は彼に言った。「試してくれてありがとう。」

「ハニー」ドッズ夫人が私に向かって吠えました。「今。」

ナンシー・ボボフィットはニヤリと笑った。

私は彼女に、後で殺すぞという贅沢な視線を送りました。それから私はドッズ夫人の方を向きましたが、彼女はそこにはいませんでした。彼女は美術館の入り口、階段のかなり上に立って、せっかちな身ぶりをしていた。

私に来てください。

彼女はどうやってそんなに早くそこに着いたのですか？

脳が眠りに落ちたときか何かで、そのような瞬間がよくありますが、次の瞬間には何かを見逃していることに気づきました。あたかもパズルのピースが宇宙から落ちて、その後ろの何も無い場所を見つめたままになったかのように。スクールカウンセラーは、これはADHDの一部であり、私の脳が物事を誤解していると言った。

あまり確信が持てませんでした。

私はドッズ夫人を追った。

階段の途中で、私はグローバーを振り返った。彼は青白く見え、目を切った

私とブルナー氏の間では、彼はブルナー氏に何が起きているのか気づいてほしかったかのように、しかし氏は。ブルナーは自分の小説に夢中になった。

私は振り返った。ドッズ夫人は再び姿を消した。彼女は今、建物の中の、エントランスホールの上端。

さて、私は思いました。彼女はギフトショップでナンシーに新しいシャツを買わせるつもりです。

しかし、どうやらそれは計画ではなかったようです。

私は彼女を追って博物館の奥深くまで入って行きました。ようやく彼女に追いついたとき、私たちは元の場所に戻っていました。ギリシャとローマのセクション。

私たち以外、ギャラリーは空でした。

ドッズ夫人はギリシャの神々を描いた大きな大理石のフリーズの前に腕を組んで立っていた。彼女は喉でうなり声のような奇妙な音を立てていました。

たとえ騒音がなかったとしても、私は緊張していただろう。先生、特にドッズ先生と二人きりになるのは奇妙だ。フリーズを見つめる彼女の視線は、まるでそれを粉砕したいかのように...

「あなたは私たちに問題を引き起こしています、ハニー」と彼女は言いました。

私は安全なことをしました。私は「はい、奥様」と言いました。

彼女は革のジャケットの袖口を引っ張った。「本当に逃げられると思ったのかそれ？」

彼女の目の表情は狂気を超えていた。それは悪でした。

彼女は先生だ、と私は緊張しながら思いました。彼女は私を傷つけるつもりはない。

私は言いました、「私は——もっと頑張ります、奥様。」

雷が建物を揺さぶった。

「私たちは愚か者ではありません、パーシー・ジャクソン」とドッズ夫人は言った。「あなたを見つけるのは時間の問題でした。告白してください。そうすればあなたの苦しみは軽くなります。」

彼女が何について話しているのかわかりませんでした。

私が思いついたのは、私が寮の部屋から売りに出ている違法なキャンディーの隠し場所を教師たちが見つけたに違いないということだけでした。それとも、私が本を読まずにインターネットからトム・ソーヤに関するエッセイを入手したことに彼らは気づいて、今度は私の成績を剥奪しようとしているのかもしれませんが。さらに悪いことに、彼らは私に本を読ませようとしていた。

"良い？"彼女は要求した。

「奥様、私はそうではありません...」

「もう時間です」と彼女は声を上げた。

それから最も奇妙なことが起こりました。彼女の目はバーベキューの炭のように輝き始めました。彼女の指は伸びて鉤爪に変わった。彼女の上着は溶けて大きな革のような翼になった。彼女は人間ではありませんでした。彼女はコウモリの翼と爪と黄色い牙でいっぱい口を持ったしわくちゃのパパアで、私をリボン状に切り裂こうとしていた。

その後、事態はさらに奇妙になりました。

ブルナー氏は1分前に美術館の前に出ていたが、手にペンを持って椅子を押して美術館の出入り口に入った。

「なんてことだ、パーシー！」彼は叫び、ペンを空中に投げた。

ドッズ夫人が私に向かって突進してきました。

叫び声を上げて私がそれを避けたとき、爪が私の耳の横の空気を切り裂くのを感じました。ボールペンを空中からひたたくりましたが、手に当たったとき、それはもうペンではありませんでした。それは剣だった——ミスター。ブルナーさんの



彼が大会当日にいつも使用していた銅の剣。

ドッズ夫人は殺意のこもった目をしながら私に向かって回転した。

膝がゼリー状になっていました。手が震えて剣を落としそうになった。

彼女は「死ね、ハニー！」と怒鳴りました。

そして彼女は真っ直ぐ私に向かって飛んできました。

絶対的な恐怖が私の体を駆け巡りました。私が自然にやったことはただ一つ、  
剣。

金属の刃が彼女の肩に当たり、まるで彼女が何でできているかのように彼女の体を通り抜けた。

水。ヒスッ！

ドッズ夫人は扇風機の中の砂の城でした。彼女は黄色い粉に爆発し、その場で蒸発し、硫黄の匂いと瀕死の金切り声、そして空気中に邪悪な悪寒だけを残して、あたかもその二つの輝く赤い目がまだ私を見ているかのようでした。

私は孤独であった。

手にはボールペンがあった。

ブルナー氏はそこにいなかった。私以外には誰もいませんでした。

私の手はまだ震えていました。私の昼食はマジックマッシュルームが何かで汚染されていたに違いありません。

私はすべてを想像していましたか？

外へ戻りました。

雨が降り始めていた。

グローバーさんは噴水のそばに座り、頭の上に博物館の地図をテントでかぶせていた。ナンシー・ボボフィットは噴水で泳いずぶ濡れになりながら、醜い友人たちに不平を言いながらまだそこに立っていました。彼女は私を見ると、「カー夫人があなたのお尻を鞭で打ってくれるといいのですが」と言った。

私は「誰？」と言いました。

「私たちの先生。当然です！」

私は瞬きました。私たちにはカー夫人という名前の教師はいませんでした。私はナンシーに何のことを言っているのか尋ねました。

彼女はただ目を丸くして背を向けた。

私はグローバーにドッズ夫人がどこにいるのか尋ねました。

彼は「誰？」と言いました。

でも彼は先に立ち止まって、私を見ようとしなかったのだから、彼が私をからかっているのだと思いました。

「面白くないよ、おい」私は彼に言った。"これは深刻です。"

頭上で雷鳴が轟いた。

ブルナー氏が赤い傘の下に座って、まるでまるで動かなかったかのように本を読んでいるのが見えました。

私は彼のところへ行きました。

彼は少し気を紛らわせながら顔を上げた。「ああ、それは私のペンです。自分で書いたものを持ってきてください」

将来の食器です、ジャクソンさん。」

私はブルナー氏にペンを渡しました。まだ持っていることにすら気づきませんでした。

「先生、ドッズ夫人はどこですか？」と私は言いました。

彼はぼんやりと私を見つめた。"誰が？"

「もう一人の付添人です。ドッズ夫人。代数以前の先生です。」

彼は眉をひそめて前に座り、少し心配そうな表情を浮かべた。「パーシー、この旅行にはドッズ夫人はいません。私の知る限り、ヤンシーアカデミーにドッズ夫人はいませんでした。体調は大丈夫ですか？」

---

## 23人の老婦人が死の靴下を編む

時々奇妙な体験をすることには慣れていましたが、たいていはすぐに終わりました。この24時間365日の幻覚は私には耐えられないほどでした。学年度の残りの間、キャンパス全体が私に何らかのいたずらをしているように見えました。生徒たちは、カー夫人——フィールドトリップの終わりにバスに乗るまで、私が人生で一度も見たことのなかった元気な金髪の女性——が代数以前の教師だったことを完全に確信しているかのように振る舞った。

クリスマス以来。

時々、私はドッズ夫人の誰かについての言及をして、彼らをつまづかせることができるかどうかを確認しましたが、彼らは私が精神異常者であるかのように私を見つめました。

それで私は彼らの言うことをほとんど信じてしまいました。ドッズは存在しませんでした。  
ほとんど。

しかし、グローバーは私をだますことができませんでした。私がドッズの名前を彼に言うと、彼は躊躇し、その後彼女は存在しないと主張しました。しかし、私は彼が嘘をついていることを知っていました。

何かが起こっていました。博物館で何かが起こった。

日中はそのことについて考える暇はあまりありませんでしたが、夜になると、かぎ爪と革のような羽を持つドッズ夫人の幻影を見て、冷や汗をかきながら目が覚めることもありました。

異常気象が続き、私の気分は良くなりませんでした。ある夜、雷雨が私の寮の部屋の窓を吹き飛ばしました。数日後、ハドソン渓谷でこれまでに目撃された最大の竜巻が、ヤンシー・アカデミーからわずか50マイルの地点に到達した。私たちが社会科の授業で勉強した時事問題の一つは、その年、大西洋で突然のスコールにより異常な数の小型飛行機が墜落したということでした。

ほとんどの場合、不機嫌でイライラするようになりました。私の成績はDsからFsに下がりました。ナンシー・ボボフィットと彼女の友達と喧嘩が増えました。私はほぼすべてのクラスで廊下に追い出されました。

最後に、英語教師のニコル先生が、なぜスペルテストの勉強をするのが怠けているのかと何百万回も尋ねたとき、私は腹を立てました。私は彼を老人と呼びました。意味はよくわかりませんでしたが、いい音でした。

翌週、校長は母に手紙を送り、それを正式に伝えた。

来年もヤンシーアカデミーに招待されます。

いいよ、私は自分に言い聞かせた。大丈夫です。

ホームシックになってしまいました。

たとえそうしなければならなかったとしても、アップパーイーストサイドの小さなアパートで母と一緒にいたかった公立学校に行き、不愉快な義父と彼の愚かなポーカーパーティーに我慢してください。

それでも...ヤンシーには恋しいものがありました。寮の窓から見える森の景色、遠くに見えるハドソン川、松の木の香り。たとえ彼が少し変わっていても、良い友達だったグローバーがいなくなると寂しいです。私なしで彼は来年どうやって生きていけるのかと心配した。

私もラテン語の授業が恋しいです—先生。ブルナーのクレイジーなトーナメント時代と、私ならうまくやれるという彼の信念。

試験週間が近づくにつれ、私が勉強した試験はラテン語だけでした。私は先生のことを忘れていませんでした。ブルナーは、このテーマは私にとって生死にかかわることだと話してくれました。理由はわかりませんでしたが、私は彼のことを信じ始めました。

決勝戦の前夜、私はイライラのあまり、ギリシャ神話のケンブリッジガイドを寮の部屋に投げ捨てました。言葉がページから流れ出て頭の中を巡り始め、文字はまるでスケートボードに乗っているかのように180度を超えていた。カイロンとカロン、あるいはポリディクテスとポリュデウケスの違いを思い出すつもりはありませんでした。そして、それらのラテン語動詞を活用するのでしょうか？忘れて。

アリがシャツの中を這っているように感じながら、私は部屋を歩き回った。

私はブルナー氏の真剣な表情、千年前の目を思い出しました。私はあなたから最高のものだけを受け取ります、パーシー・ジャクソン。

私は深呼吸をしました。神話の本を手に取りました。

私はこれまで先生に助けを求めたことがありませんでした。もしかしたらブルナー氏に話せば、ヒントをくれるかも知れません。少なくとも、太ったFが試験で得点しようとしていたことについては謝ることができた。私は努力しなかったと思われてヤンシーアカデミーを彼と一緒に去りたくなかった。

私は階下の教員室へ歩いて行きました。ほとんどは暗くて誰もいなかったが、Mr.

ブルナーのドアは半開きで、窓からの光が廊下の床まで広がっていた。

オフィス内で声が聞こえたとき、私はドアノブから3歩離れたところでした。ブルナー氏質問した。明らかにグローバーの声だった、「...パーシーが心配です、先生。」

私は凍った。

私は普段は盗聴者ではありませんが、親友の声を聞いてもあえて聞かないでください大人にあなたのことを話しています。

私は少しずつ近づきました。

「...この夏は一人で」とグローバーさんは言った。「つまり、学校の優しい人です！さて、私たちは確かに知っています、そして彼らも知っています—」

「彼を急かしても問題はさらに悪化するだけだ」とブルナー氏は語った。「少年にはもっと成長してもらう必要がある。」

「しかし、彼には時間がないかもしれない。夏至の締め切りは—」

「グローバー、彼なしで解決しなければならないだろう。まだできるうちに、彼には自分の無知を楽しんでもらいなさい。」

「先生、彼は彼女を見ました...」

「彼の想像力だ」とブルナー氏は主張した。「学生と職員の上に霧がかかっていたら十分だ、それを彼に納得させるためだ。」

「先生、... 私は再び職務を失敗することはできません」とグローバーさんの声は感情で詰まった。それが何を意味するかはわかっています。」

「グローバーさん、あなたは失敗していませんよ」とブルナー氏は優しく言った。「私は彼女のありのままを見るべきだった。さて、来年の秋までパーシーを生かしておくことだけを考えましょう—」

神話の本が手から落ち、ドスンと床にぶつかりました。

ブルナー氏は沈黙した。

心臓が高鳴りながら、私は本を手に取り、廊下を後ずさりしました。

影がブルナーのオフィスのドアの明かりのついたガラスを横切りました。それは、車椅子に乗った私の先生よりもずっと背が高く、射手の弓のような怪しいものを持ったものの影でした。

私は一番近いドアを開けて中に滑り込みました。

数秒後、木のブロックがくぐもったようなゆっくりとしたカチコチという音が聞こえ、それからドアのすぐ外で動物が鼻を鳴らしているような音が聞こえました。大きくて暗い物体がガラスの前で止まり、そして先に進みました。

首から玉のような汗が流れ落ちた。

廊下のどこかで、ブルナー氏が話した。「何もない」と彼はつぶやいた。「冬至以来、私の神経は正常ではありません。」

「私のものでもありません」とグローバーは言った。「でも、誓ってもよかった…」

「寮に戻りなさい」とブルナー氏は彼に言った。「明日は長い試験があるよ。」

「思い出さないでください。」

ブルナー氏のオフィスの明かりが消えた。

私は暗闇の中で永遠のように思える時間を待ちました。

ようやく廊下に出て、寮に戻った。

グローバーはベッドに横たわり、まるで一晩中そこにいたかのようにラテン語の試験ノートを勉強していた。

「やあ」と彼はかすみ目で言った。「このテストの準備はできていますか？」

私は答えませんでした。

"ひどい顔しているね。"彼は顔をしかめた。"大丈夫ですか?"

「ただ……疲れたんだ」

私は彼に私の表情が読めないように背を向け、寝る準備を始めました。

階下で何を聞いたのか理解できませんでした。私はすべてを想像していたと信じたかった。

しかし、一つだけ明らかなことは、グローバーとブルナー氏が私の陰で私のことを話していたということです。

彼らは私が何らかの危険にさらされていると思ったのです。

翌日の午後、私がスペルを間違えたギリシャ語やローマ人の名前を目に浮かべながら、3時間のラテン語試験を終えて帰ろうとしたとき、ブルナー氏が私を部屋に呼び戻した。

一瞬、昨夜の私の盗聴がバレたのではないかと心配したが、

それは問題ないようでした。

「パーシー」と彼は言った。「ヤンシーと離れることに落胆しないでください。それは...それが最善です。」

彼の口調は優しくだったが、その言葉はやはり恥ずかしくかった。彼は静かに話していましたが、テストを終えた他の子供たちには聞こえました。ナンシー・ボボフィットは私に笑いかけ、唇で皮肉っぽく小さなキスの動きをしました。

私は「わかりました、先生」とつぶやきました。

「つまり…」ブルナー氏は何と言っているのか分からない様子で椅子を前後に動かした。

「ここはあなたにふさわしい場所ではありません。それは時間の問題でした。」

目が痛くなりました。

私のお気に入りの先生がクラスの前で、私には耐えられないと言いました。後

彼は一年中私を信じていると言いましたが、今では私が追い出される運命にあると言いました。

「そうですね」と私は震えながら言いました。

「いや、いや」とブルナー氏は言った。「ああ、すべてを混乱させてください。私が言おうとしているのは...あなたは普通ではありません、パーシー。そんなはずはない——」

「ありがとう」私は口走ってしまった。「思い出させてくれて、本当にありがとう。」

「パーシー——」

しかし、私はすでに去っていました。

学期の最終日、私は服をスーツケースに押し込みました。

他の男たちは冗談を言いながら休暇の計画について話していました。そのうちの1人はスイスへハイキング旅行に行く予定でした。もう一人はカリブ海を1か月間クルージングしていました。彼らは私と同じ非行少年でしたが、裕福な非行少年でした。彼らの父親は経営者、大使、または有名人でした。私は何者でもない、何者でもない家族の出身でした。

彼らは私にこの夏何をするのかと尋ねたので、私は街に戻ると答えました。

私が彼らに伝えなかったことは、夏は犬の散歩か雑誌の定期購読販売の仕事に就き、秋にはほどこの学校に行くか心配して自由時間を過ごすことになるということだった。

「ああ」男の一人が言った。「かっこいい。」

彼らはまるで私が存在しなかったかのように会話に戻りました。

別れを告げるのが怖かった唯一の人はグローバーでしたが、結局のところ、別れを告げる必要はありませんでした。彼は私と同じグレイハウンドでマンハッタン行きチケットを予約していたので、そこで私たちは再び一緒に市内へ向かいました。

バスに乗っている間、グローバーさんは緊張した面持ちで通路をちらっと見ながら、他の乗客を観察し続けた。私たちがヤンシーと別れるとき、彼はいつも何か悪いことが起こることを予期していたかのように、緊張してそわそわした態度をとっていたことを思い出しました。以前は、彼はからかわれるのを心配しているのだといつも思っていました。しかし、グレイハウンドで彼をからかう人は誰もいませんでした。

ついに我慢できなくなりました。

私は「親切な人を探していますか？」と言いました。

グローバーは席から飛び降りそうになった。「え、どういう意味ですか？」

私は試験の前夜に彼とブルナー氏の話盗聴したことを告白した。

グローバーの目がピクピクと動いた。「どれくらい聞こえましたか？」

「ああ……あまりないですね。夏の締め切りはいつですか？」

彼は顔をしかめた。「ほら、パーシー…… 私はただあなたのことを心配していたんです、わかりますか？つまり、悪魔の数学教師の幻覚を見ているのです……」

「グローバー——」

「そして私はブルナー氏に、もしかしたらあなたは過度のストレスか何かを抱えているのかもしれないと話していました。

ドッズ夫人のような人物ではありませんでした、そして...」

「グローバー、あなたは本当にひどい嘘つきです。」

耳がピンク色になりました。

彼はシャツのポケットから汚れた名刺を取り出した。「これだけ受け取ってね？  
この夏は私が必要です。

カードは派手な文字で書かれており、失読症の私の目には殺人的でしたが、私は最終的に次のようなことを理解しました。

グローバー・アンダーウッド

キーパー

謎の丘

ニューヨーク州ロングアイランド

(800) 009-0009

「半分って何だ——」

「大声で言わないでください！彼は叫びました。「それは私の、ええと...夏の演説です。」

私の心は沈みました。グローバーには別荘がありました。彼の家族がヤンシーの他の家族と同じくらい裕福であるとは考えもしませんでした。

「わかった、私は不機嫌そうに言った。「それで、あなたの邸宅に遊びに行きたいのですが。」

彼はうなずきました。「あるいは...あるいは、あなたが私を必要とするなら。」

「なぜあなたが必要なのですか？」

それは私が意図していたよりも厳しい結果になりました。

グローバーは喉仏まで真っ赤になった。「ほら、パーシー、本当のことを言うと、私はあなたを守らなければいけないんです。」

私は彼を見つめた。

一年中、私は喧嘩ばかりして、いじめっ子たちを彼から遠ざけていました。私なしでは来年彼が殴られるのではないかと心配して眠れなくなりました。そしてここで彼はあたかも自分が私を擁護しているかのように振る舞っていました。

「グローバー、一体何から私を守ってくれているの？」と私は言った。

私たちの足の下で大きな軋むような音が聞こえました。ダッシュボードからは黒煙が立ち上り、バス中には腐った卵のような臭いが充満した。運転手は悪態をつき、グレイハウンドを足を引かずしながら高速道路の脇に追いやった。

エンジンルーム内で数分カタカタした後、運転手はこう告げた。

私たち全員が降りなければなりません。グローバーと私は他のみんなと一緒に外に並んだ。

私たちは田舎道が続くところにいたのですが、そこで道を踏み外さなければ気づかないような場所でした。

高速道路の私たちの側にはカエデの木と通過する車のゴミだけがありました。反対側には、午後の暑さできらめくアスファルトの4車線の向こうに、昔ながらの果物屋があった。

売られているものは本当に美味しそうだった。血のように赤いチェリーやリンゴ、クルミやアプリコットが入った箱が山盛りで、氷がいっぱい入った猫足の浴槽に入ったサイダーの水差し。客はおらず、ただ3人の老婦人がカエデの木陰でロッキングチェアに座り、私が考えた中で一番大きな靴下を編んでいた。

今まで見た。

つまり、この靴下はセーターと同じくらいのサイズだったのですが、明らかに靴下でした。右側の女性はそのうちの1つを編みました。左側の女性はもう一方を編みました。真ん中の女性は、エレクトリックブルーの毛糸が入った巨大なバスケットを持っていました。

三人の女性は皆老けて見え、青白い顔には果物の皮のようにしわが寄り、銀色の髪を結んでいた。白いバンダナを巻き、漂白された綿のドレスから骨ばった腕が突き出ている。

最も奇妙だったのは、彼らが私をまっすぐに見ているように見えたことです。

このことについて何か言おうとグローバーの方を見ると、血が引いているのが見えた。

彼の顔。彼の鼻はピクピクしていました。

「グローバー？」私は言いました。"ちょっと-"

「彼らはあなたを見ていないと言ってください。彼らはあなたを見ているでしょう？」

「ええ。変ですね？ その靴下は私に合うと思いますか？」

「面白くないよ、パーシー。全然面白くないよ。」

真ん中のおばあさんは、金と銀の、刃の長い、大きなハサミを取り出しました。

ハサミ。グローバーが息を整えるのが聞こえた。

「バスに乗ります」と彼は私に言いました。"来て。"

"何？"私は言いました。「そこは千度です。」

「さあ！」彼はドアをこじ開けて中に入りましたが、私はそこに戻りました。

道路の向こう側では、おばあさんたちがまだ私を見ていました。真ん中の糸が糸を切り、その音が4車線を横切る音が聞こえたと言います。彼女の2人の友人がエレクトリックブルーの靴下を丸めて履いていたので、サスカッチとゴジラのどちらに靴下を履かせたのか疑問に思いました。

バスの後部で、運転手はエンジンルームから発煙金属の大きな塊をひねり出した。バスは震え、エンジンは轟音を立てて復活した。

乗客たちは歓声を上げた。

「まったくそのとおりです！」運転手は叫んだ。彼は帽子でバスをたたきました。「全員、船に戻ってください！」

出発すると、まるでインフルエンザにでもかかったかのような熱を感じ始めました。

グローバーの様子はあまり良くなかった。彼は震えていて、歯がガタガタしていました。

「グローバー？」

"うん？"

「何を言わないのですか？」

彼はシャツの袖で額を軽くたたいた。「パーシー、果物の後ろに何をみましたか？」

立つ？"

「おばあさんたちのことを言うのですか？あの人たちはどういことですか？彼らは…ドッズ夫人とは違いますね？」

表情は読みにくかったけど、果物屋のお姉さんたちの気持ちが伝わってきました。

ドッズ夫人よりもずっとずっと悪い何か。彼は「何を見たのか教えてください」と言いました。

「真ん中の人ハサミを取り出して、糸を切りました。」

彼は目を閉じて、自分自身を交差させているかもしれない指でジェスチャーをしました。

しかしそうではありませんでした。それは別のものであり、ほとんど古いものでした。

彼は「彼女が紐を切っているのを見たでしょうね」と言いました。

「ええ。それで？」しかし、そうは言いながらも、それが大変なことであることはわかっていました。

「そんなことは起こっていない」とグローバー氏はつぶやいた。彼は親指を噛み始めました。「これはいらぬ前回と同じように。」

「前回は何でしたか？」

「いつも6年生。6年生を超えることは決してない。」

「グローバー」と私は言った。なぜなら彼は私を本当に怖がらせ始めていたからだ。"あなたは何について話しているのですか？"

「バス停から家まで送ってあげるよ。約束してね。」

これは私にとって奇妙な要求のように思いましたが、私は彼ができるよう約束しました。

「これは迷信か何かですか？」私は尋ねた。

答えはありません。

「グローバー——糸が切れたということは、誰かが死ぬということですか？」

彼は悲しそうに私を見つめた。まるで私が一番着たい花をすでに摘んでいるかのようだった

私の棺。

---

### 3 グローバーが予期せずズボンを脱ぐ

告白の時: バスターミナルに着くとすぐにグローバーを捨てました。

分かった分かった。失礼でした。しかし、グローバーは私を怖がらせ、死んだ人間のように私を見て、「なぜいつもこんなことが起こるんだ？」とつぶやいていました。「なぜいつも6年生でなければならぬのですか？」

グローバーが機嫌を損ねるたびに、グローバーの膀胱が作動するので、バスを降りるとすぐに彼が私に待つことを約束させ、それから一直線にトイレに行っても、私は驚きませんでした。

待つ代わりに、私はスーツケースを手に取り、外へ抜け出し、アップタウンで最初のタクシーに乗りました。

「東百四番一番です」と私は運転手に言いました。

母に会う前に、私の母について一言。

彼女の名前はサリー・ジャクソン、彼女は世界で最高の人です。これは、最高の人は最も運が悪いという私の理論を証明しています。彼女自身の両親は、彼女が5歳のときに飛行機事故で亡くなり、彼女は彼女のことをあまり気にしなかった叔父によって育てられました。彼女は小説家になりたかったので、優れた創作プログラムのある大学に進学するために十分なお金を貯めるために高校時代を過ごしました。その後、叔父がガンになり、彼女は叔父の世話をするために大学4年生の時に学校を辞めなければならませんでした。彼の死後、彼女にはお金も家族も卒業証書も残されませんでした。

彼女にとって唯一の良い休息は父に会ったことだった。

私には彼の思い出は何もない、ただこの種の温かい輝きだけ、おそらく彼の最もむき出しの痕跡笑顔。私の母は彼のことを話すのが嫌いです、なぜならそれは彼女を悲しませるからです。彼女には写真がありません。

ほら、彼らは結婚していませんでした。彼女は、彼は裕福で重要人物であり、二人の関係は秘密だと言いました。そしてある日、彼は重要な旅のために大西洋を渡って出航し、そのまま戻ってきませんでした。

海で迷った、と母が私に言いました。死んでいません。海で行方不明になった。

彼女は雑用の仕事をし、高校卒業資格を取得するために夜間授業を受けて、私を育ててくれました。

自分の、彼女は決して不平を言ったり怒ったりしませんでした。一度もありません。しかし、私は自分が簡単な子供ではないことを知っていました。

最後に、彼女はゲイブ・ウリアーノと結婚しました。ゲイブ・ウリアーノは、私たちが彼を知った最初の30秒間は親切でしたが、その後、ワールドクラスのジャークとしての彼の本性を示しました。若い頃、私は彼に臭いゲイブというあだ名を付けていました。

申し訳ありませんが、それが真実です。その男は体操服を着た、カビの生えたガーリックピザのような悪臭を放っていた。

私たち二人のせいで、母の人生はかなり大変なものになりました。スメル・ゲイブの扱い方彼女、彼と私が仲良くしていく様子は…そうですね、私が家に帰ったときが良い例です。



私は母が仕事から帰ってくることを祈りながら、小さなアパートに入りました。代わりに、スメリー・ゲイブはリビングルームで仲間とポーカーをしていました。テレビはESPNを大音量で流した。ポテトチップスとビール缶がカーペットの上に散らばっていました。

彼はほとんど顔を上げず、葉巻を吸いながらこう言った、「それで、帰ってきたんだね」

「私のお母さんはどこですか？」

「働いています」と彼は言った。「現金はありますか？」

それはそれでした。いいえ、おかえりなさい。会えてうれしいです。この半年間のあなたの生活はどうでしたか？

ゲイブは太ってしまいました。彼はリサイクルショップの服を着た牙のないセイウチのように見えました。彼の頭には3本ほどの髪の毛があり、それが彼をハンサムか何かにするかのように、すべてハゲの頭皮にとかされていました。

彼はクイーンズのエレクトロニクス・メガマートを経営していましたが、ほとんどの時間は家にいたのです。なぜ彼がずっと前に解雇されなかったのかわかりません。彼はただ給料を集め続け、そのお金を私に吐き気を催すほどの葉巻と、もちろんビールに費やした。いつもビール。私在家にいるときはいつも、彼は私がギャンブル資金を提供することを期待していました。彼はそれを私たちの「男の秘密」と呼びました。

つまり、もし私が母親に話したら、彼は私のライトを打ち消すでしょう。

「現金がありません」と私は彼に言いました。

彼は油っぽい眉を上げた。

ゲイブはブラッドハウンドのようにお金を嗅ぎ分けることができましたが、自分の匂いで他のすべてを隠していたはずなので、これは驚くべきことでした。

「バス停からタクシーに乗ったんですね」と彼は言った。おそらく20ドルで支払われました。6,7ドルのお釣りをもらいました。誰かがこの屋根の下に住むことを期待しているなら、彼は自分の体重を背負わなければなりません。私は正しいですか、エディ？」

アパートの管理人であるエディが、同情のような目で私を見つめた。「来る

さあ、ゲイブ」と彼は言った、「あの子はたった今ここに来たところだよ」

「私は正しいですか？」ゲイブは繰り返した。

エディはプレッツェルのボウルに顔をしかめました。他の2人は調和してガスを抜きました。

「わかりました」と私は言いました。私はポケットから札束を取り出し、テーブルの上にお金を投げました。「あなたが負けることを願っています。」

「通知表が来たよ、頭脳派！」彼は私の後に向かって叫びました。「私ならそんな偉そうなことしないよ！」

私は自分の部屋のドアをバタンと閉めました。そこは実際には私の部屋ではありませんでした。学校に通っている間、それはゲイブの「勉強」でした。彼はそこで古い自動車雑誌以外何も勉強しませんでした。私のものをクローゼットに押し込み、泥だらけのブーツを窓辺に置き、その場所を彼の不快なコロンと葉巻と古くなったビールの匂いにするために最善を尽くすのが大好きでした。

スーツケースをベッドの上に落としてしまいました。ホームスイートホーム。

ゲイブの匂いは、ドッズ夫人の悪夢やその音よりも悪かった。

果物の老婦人のハサミが糸を切っています。

しかし、そう思った瞬間、足に力が入らなくなった。私はグローバーのパニックの様子を思い出した——彼が私に、彼なしでは帰らないと約束させたことだ。突然悪寒が私を駆け抜けました。今、誰かが、何かが、私を探しているような気がした。おそらく、階段をドキドキしながら登っていき、長く恐ろしい爪を伸ばしているのかもしれない。

すると母の声が聞こえました。「パーシー？」

彼女が寝室のドアを開けたので、私の不安は消えました。

母は部屋に入ってくるだけで私を良い気分にさせてくれます。彼女の目は光の中で輝き、色が変わります。彼女の笑顔はキルトのように暖かいです。彼女の長い茶色の髪には灰色の縞模様がいくつか混ざっていますが、私は彼女が年をとったとは決して思いません。彼女が私を見ると、私の悪いところは一切なく、良いところばかりを見ているようです。彼女が声を荒げたり、誰かに対して不親切な言葉を言ったりしたのを聞いたことはありません。私やゲイブも含めてです。

「ああ、パーシー」彼女は私をきつく抱きしめた。「信じられないよ。クリスマスから成長したね！」

彼女の赤、白、青のスイート オン アメリカの制服は、チョコレート、甘草、そしてグラント セントラルのキャンディー ショップで彼女が売っていた他のすべてのもののような、世界で最高のものの香りがしました。彼女は私が帰宅するときにいつもそうしていたように、「無料サンプル」の入った大きな袋を私に持ってきました。

私たちはベッドの端に一緒に座りました。私がブルーベリーの酸っぱい糸を攻撃している間、彼女は私の髪に手を這わせ、私が手紙に書いていないことをすべて知りたいと要求しました。彼女は私が退学になったことについては何も言いませんでした。彼女はそんなことは気にしていないようだった。でも、私は大丈夫でしたか？

彼女の小さな息子は大丈夫でしたか？

私は彼女に、彼女が私を窒息させている、解雇するなどのことを言いましたが、密かに、私は彼女に会えて本当に本当に嬉しかったです。

ゲイブは別の部屋から「ねえ、サリー——豆のディップはどう？」と叫びました。

私は歯を食いしばりました。

私の母は世界で一番素敵な女性です。彼女は億万長者と結婚すべきではなかったゲイブのようなバカもいる。

彼女のために、私はヤンシーアカデミーでの最後の日々について明るい印象を与えるように努めました。私は彼女に、退学についてはそれほど落ち込んでいないと言いました。今回はほぼ一年中続けました。新しい友達もできました。ラテン語はかなり上手にできました。そして正直に言うと、喧嘩は校長が言うほどひどいものではなかった。ヤンシーアカデミーが好きでした。本当にそうでした。今年はとても良い結果を残せた、と私はほとんど自分自身を納得させました。グローバーとブルナー氏のことを考えて、息が詰まり始めました。ナンシー・ボボフィットでさえ、突然それほど悪くなくなったように見えました。

美術館に行くまでは...

"何？"母が尋ねました。彼女の目は私の良心を引っ張り、秘密を引き出そうとしました。

「何か怖いことがありましたか？」

「いいえ、お母さん。」

嘘をつくのは気分が悪かった。ドッズ夫人と毛糸を持った3人の老婦人のことを彼女に話したかったのですが、それは愚かに聞こえるだろうと思いました。

彼女は唇をすぼめた。彼女は私が遠慮していることを知っていましたが、私を押しつけませんでした。

「あなたにサプライズがあります」と彼女は言いました。「私たちはビーチに行きます。」

目が大きくなりました。「モントーク？」

「3泊、同じキャビンでした。」

"いつ？"

彼女は微笑んだ。「着替えたらすぐに。」

信じられませんでした。ゲイブがお金が足りないと言っていたので、母と私は過去2回の夏はモントークに行っていないでした。

ゲイブが戸口に現れてうなり声を上げた、「ピンディップ、サリー？私の声が聞こえなかったの？」

私は彼を殴りたかったが、母と目が合ったので、母が私に取引を持ちかけているのだと理解した。「しばらくゲイブに優しくしなさい」というものだった。彼女がモントークに向けて出発する準備が整うまで。そうすればここから出られるでしょう。

「私は向かっていたのよ、ハニー」と彼女はゲイブに語った。「私たちはちょうど旅行について話していたところです。」

ゲイブの目は小さくなった。「旅行？本気で考えていたということですか？」

「やっぱり」と私はつぶやいた。「彼は私たちを手放しません。」

「もちろん、そうするでしょう」と母はきっぱりと言いました。「あなたの義父はお金のことを心配しているだけです。」

それだけです。それに、」と彼女は付け加えた、「ガブリエルは豆のディップで満足する必要はありません。週末を通して十分な量の7層のディップを彼に作ってあげます。グアカモーレ。サワークリーム。お仕事。」

ゲイブは少し柔らかくなった。「それで、この旅費は…洋服の予算から出ているんですね？」

「はい、ハニー」と母は言いました。

「そして、行き帰り以外に私の車をどこにも連れて行ってはくれません。」

「私たちは細心の注意を払います。」

ゲイブは二重あごを掻いた。「おそらく、あなたがその7層のディップを急いでくれたら…そしておそらく、その子供が私のポーカーゲームを中断したことを謝ってくれるかもしれません。」

もしかしら、あなたの柔らかいところを蹴ってやればいいのかも说不定、と私は思った。そして一週間ソプラノを歌わせます。

しかし、母の目は彼を怒らせてはいけないと私に警告していました。

なぜ彼女はこの男に我慢したのですか？叫びたかった。なぜ彼女は彼の考えを気にしたのでしょうか？

「ごめんなさい」と私はつぶやいた。「あなたの非常に重要なポーカーゲームを中断してしまい、本当に申し訳ありません。」

今すぐ元に戻ってください。」

ゲイブの目が細められた。彼の小さな脳はおそらく私の発言の皮肉を探ろうとしていたのでしょうか。

「そうだ、何でもいいよ」と彼は決心した。

彼は自分のゲームに戻った。

「ありがとう、パーシー」と母は言いました。「モントークに着いたら、もっと詳しく話しましょう…

言い忘れたことは何でもいいよ？」

一瞬、彼女の瞳に不安が見えたような気がした——それは、私がグローバーに見ていたのと同じ恐怖だった。

バスに乗っている間、母も空気に奇妙な寒さを感じたかのようにでした。

しかしその後、彼女の笑顔が戻ってきたので、私はきっと私が間違っていたのだと思いました。彼女は私の髪をフリルにして、ゲイブの7層ディップを作りに行きました。

1時間後、出発の準備が整いました。

ゲイブは、私が母のバッグを車まで運ぶのを見守るのに十分な時間、ポーカーゲームから休憩を取りました。彼は週末中、彼女の料理、そしてもっと重要なことに、78年製カマロを失ったことに不満を抱き、うめき声を上げ続けた。

「この車には傷一つつきませんよ、頭脳派よ、私が最後の荷物を積み込むときに彼は私に警告した。「小さな傷ひとつないよ。」

まるで私が運転するみたいに。私は12歳でした。しかし、ゲイブにとってそれは問題ではありませんでした。もしカモメが自分の塗装作業にうんこをしたなら、彼は私を責める方法を見つけるでしょう。

彼がアパートに向かってよろよろと戻っていくのを見て、私はとても腹が立ち、説明できないことをしてしまいました。ゲイブが戸口に到着したとき、私はグローバーがテレビで見たことのある手のジェスチャーをしました。

バス、悪を追い払うようなジェスチャー、爪のある手を私の心臓に当て、それからゲイブに向かって押し出すような動き。網戸が勢よく閉まり、彼のお尻を殴られ、彼は吹き飛ばされた

まるで大砲で撃たれたかのように階段を飛び上がった。もしかしたらただの風のせいかもしれないし、あるいはヒンジに異常な事故が起きたかもしれないが、それを知るほど長く滞在しなかった。

私はカマ口に乗り、母に「乗って」と言いました。

私たちのレンタルキャビンは、ロングアイランドの先端から遠く離れた南海岸にありました。それは、色あせたカーテンが付いた小さなパステルカラーの箱で、半分砂丘に沈んでいました。シーツの中にはいつも砂があり、キャビネットの中にはクモがいて、ほとんどの場合、海は泳ぐには寒すぎました。

私はその場所が大好きでした。

私は赤ん坊の頃からそこに行っていました。母はさらに長く行っていました。彼女は正確には言いませんでしたが、私はなぜビーチが彼女にとって特別なのかを知っていました。そこは彼女が私と出会った場所だった

お父さん。

私たちがモントークに近づくにつれて、彼女は長年の心配と努力の末、若返ったように見えました

彼女の顔から消えていく。彼女の目は海の色に変わりました。

私たちは日没時に到着し、キャビンの窓をすべて開け、いつものように掃除をしました。私たちはビーチを歩き、カモメにブルーコーンチップを与え、母が職場から持ってきてくれたブルージェリービーンズ、青い塩水タフィー、その他すべての無料サンプルをむしゃむしゃ食べました。

青い食べ物について説明する必要があると思います。

ほら、ゲイブはかつて母にそんなことはないと言っていたんだ。彼らはこの喧嘩をしましたが、当時は本当に小さなことのように思えました。でもそれ以来、母はわざわざ青いものを食べるようになりました。彼女は青い誕生日ケーキを焼きました。彼女はブルーベリースムージーを混ぜました。彼女はブルーコーンのトルティーヤチップスを購入し、店から青いキャンディーを持ち帰りました。これは、自分自身をミセス・ウリアーノと呼ぶ旧姓のジャクソンを維持することと併せて、彼女がゲイブに完全には騙されていないことの証拠となった。彼女も私と同じように反抗的な性格を持っていました。

暗くなったら、私たちは火を起こしました。ホットドッグとマシュマロを焼きました。母は私に、両親が飛行機事故で亡くなる前の、子供の頃の話をしてくれました。彼女は、駄菓子屋を辞めるのに十分なお金があったら、いつか書きたいと思っていた本について私に話してくれました。

結局、私は勇気を出して、モントークに来るたびにいつも頭の中にあっただこと、つまり父について尋ねました。母の目はすっかり曇ってしまいました。彼女はいつも同じことを私に言うだろうと思っていましたが、私はそれらを聞いていて飽きませんでした。

「彼は優しかったよ、パーシー」と彼女は言った。「背が高く、ハンサムで、力強い。でも、優しい。あなたには彼の魅力がある」  
黒い髪、そして緑の目。」

お母さんはキャンディーの袋から青いジェリービーンズを取り出しました。「パーシー、彼にあなたに会えたらいいのに。彼はとても誇りに思うでしょう。」

どうして彼女がそんなことを言えるのだろうかと思議に思いました。私の何がそんなに素晴らしかったのでしょうか？成績表が D+ の失読症で多動な少年は、6 年間で 6 回目の退学になった。

「私は何歳でしたか？」私は尋ねた。「つまり...彼が去ったとき？」

彼女は炎を見つめた。「彼が私と一緒にいたのは一夏だけです、パーシー。今ここにいます」  
ビーチ。この小屋。」

「でも...彼は私を赤ん坊の頃から知っていました。」

「いいえ、ハニー。彼は私が赤ちゃんを妊娠していることを知っていましたが、あなたに会うことはありませんでした。あなたが生まれる前に去らなければならなかったのです。」

私はそれを、私が覚えているように見えるという事実と一致させようとして...私の父についてのことを。温かみのある輝き。笑い。

私は彼が私を赤ん坊の頃から知っているはずだと思っていました。母はそれをはっきりと言ったことはありませんでしたが、それでも私はそう言いました。それは本当だろうと感じた。今、彼は私を一度も見ることがなかったと言われるとは...

私は父に対して怒りを感じました。愚かだったのかもしれないが、私は彼があ航海に出かけたこと、母と結婚する勇気がなかったことを恨んだ。彼は私たちの元を去り、今私たちはスメルリー・ゲイブとくっついていました。

「また私を送り出すつもりですか？」私は彼女に尋ねました。「別の寄宿学校へ？」

彼女は火の中からマシュマロを取り出した。

「分かりません、ハニー。」彼女の声は重かった。「『私をそばにいたくないか ... 何かをしなればいけないと思います。』

ら？』と思う」その言葉が出た瞬間に後悔した。

母の目には涙があふれていました。彼女は私の手を取り、ぎゅっと握りしめた。「ああ、パーシー、いいえ。私は——私は」

そうしなければなりません、ハニー。あなた自身の利益のために、あなたを送り出さなければなりません。」

彼女の言葉を聞いて、私はブルナー氏の言葉を思い出した——「辞めるのが最善だ」という言葉

ヤンシー。

「私は普通じゃないから」と私は言いました。

「あなたはそれが悪いことであるかのようにそれを言います、パーシー。しかしあなたは自分がどれほど重要であるか気づいていません。私はヤンシーアカデミーは十分に遠いだろうと思った。やっと安全になれると思ったのに」

「何から安全なの？」

彼女は私の目と目が合った、そして、洪水のように思い出が私に戻ってきた。

私に起こったことはありましたが、そのうちのいくつかは忘れようとしていました。

3年生のとき、黒いトレンチコートを着た男が校庭で私をストーカーしていました。教師たちが警察に通報すると脅すと、彼はうなり声を上げながら立ち去ったが、つばの広い帽子の下には頭の真ん中に片目しかないということを私が話しても誰も信じなかった。

その前の、本当に初期の記憶。私は幼稚園に通っていたのですが、先生が誤って私を昼寝させたベビーベッドにヘビが滑り込んでしまいました。母が私を迎えに来たとき、私が幼児の肉厚な手で何とか絞め殺し、ぐったりとした鱗状のロープで遊んでいるのを見つけて叫びました。

どの学校でも、何か不気味なことが起こり、何か危険なことが起こり、私は強制されました移動すること。

果物屋の老婦人たちのこと、美術館のドッズ夫人のこと、数学の先生を剣で粉々にしたという奇妙な幻覚のことを母に話さなければいけないと思った。

しかし、私は彼女にそれを伝えることができませんでした。このニュースでモントークへの旅が終わってしまうような奇妙な予感がしたが、そんなことは望んでいなかった。

「私はあなたをできるだけ近くに置こうとしました」と母は言いました。「彼らは、それは間違いだと言いました。でも、パーシー、他の選択肢は一つしかありません。それは、あなたのお父さんがあなたを送りたかった場所です。そして、私はただ...私はそれをするに耐えられません。」

「父は私に特別な学校に行くことを望んでいたのですか？」

「学校じゃないよ」と彼女は静かに言った。「サマーキャンプです。」

頭がクラクラしてきました。私の誕生を見届けるほど長く滞在していなかった父が、なぜ母にサマーキャンプのことを話すのでしょうか？それがそんなに重要だったら、なぜ彼女はそうしなかったのでしょうか

以前にそれについて言及したことがありますか？

「ごめんなさい、パーシー」私の目を見て彼女は言いました。「でも、それについては話せない。私は——私は」  
あなたをその場所へ送ることができませんでした。それはあなたに永久の別れを告げることを意味するかもしれません。」

「ずっと？でも、夏合宿だけなら……」

彼女は火のほうを向いた、そして私は彼女の表情から、これ以上尋ねたらどうなるだろうと分かった。

質問すると彼女は泣き始めてしまうだろう。

その夜、私は鮮明な夢を見ました。

浜辺では嵐が吹いており、白馬とイヌワシという二頭の美しい動物が波打ち際で殺し合いをしようとしていた。鷲は急降下し、その巨大な爪で馬の銃口を切り裂いた。馬は立ち上がり、鷲の翼を蹴りました。彼らが戦っていると、地面が鳴り響き、怪物のような声が地底のどこかで笑い、動物たちにもっと激しく戦うよう促した。

私は彼らの殺し合いを止めなければならないと分かっていたながら彼らに向かって走った。しかし、私はスローモーションで走っていた。もう手遅れになることはわかっていました。ワシが飛び込み、そのくちばしが馬の大きな目に狙いを定めているのを見て、私は叫びました。

私はハッと目が覚めました。

外は本当に嵐で、木々が折れ、家が吹き飛ばされるような嵐でした。

浜辺には馬も鷲もおらず、ただ稲光が偽りの昼光を作り、高さ20フィートの波が大砲のように砂丘を打ちつけていた。

次の雷鳴で母は目が覚めました。彼女は起き上がり、目を見開いて「ハリケーン」と言った。

それはおかしいと分かっていました。ロングアイランドでは、これほど夏の初めにハリケーンが発生することはありません。しかし海は忘れてしまったようだった。風の轟音の向こうで、遠くで怒鳴り声が聞こえました。髪が逆立つほどの、怒りに満ちた苦痛に満ちた音が聞こえました。

それから、砂を打つ木槌のような、はるかに近い騒音。絶望的な声——誰かが私たちの船室のドアを叩きながら叫びました。

母はネグリジェを着てベッドから飛び起き、鍵を開けました。

グローバーさんは土砂降りの雨を背景に、戸口に顔装されて立っていた。しかし、彼はそうではありませんでした...彼は正確にはグローバーではありませんでした。

「一晩中探していたんだ」と彼は息を呑んだ。「何を考えていたのですか？」

母は恐怖の表情で私を見つめました。グローバーが怖かったのではなく、なぜ彼が来たのかということに対してでした。

「パーシー」と彼女は雨の中間こえるように叫びました。「学校で何があったの？私に何を言わなかったの？」

私はグローバーを見つめながら凍りつきました。何が見えているのか理解できませんでした。

「オー・ゼウ・カイ・アロイ・テオイ！」彼は叫んだ。「私のすぐ後ろですよ！彼女に言いませんでしたか？」

私はあまりにもショックだったので、彼が古代ギリシャ語で悪態をついたばかりで、私は彼のことを完全に理解していたことに気づきませんでした。私はショックのあまり、グローバーがどうやって真夜中に一人でここに来たのか不思議でした。グローバーはズボンを履いていなかったため、足があるべき場所に...

足はこうあるべきです...

母は私を厳しい目で見て、これまでに使ったことのない口調でこう言いました。「パーシー。教えて」  
今！"

私は果物屋の老婦人たち、ドッズ夫人、そして母について何か口ごもりながら話した。

彼女の顔は稲妻の光で死ぬほど青ざめ、私を見つめた。

彼女はハンドバッグを掴み、レインジャケットを私に放り投げ、「車に行きなさい。二人とも行きなさい！」と言いました。

グローバーはカマロに立候補しましたが、正確には彼は立候補していませんでした。彼は毛むくじらの後肢を震わせながら小走りをしていましたが、突然、足の筋肉疾患についての彼の話が私に理解できました。彼がなぜあれほど早く走れるのに、歩くときは足を引きずりながら歩けるのかが分かりました。

なぜなら、彼の足があるべき場所に足がなかったからです。ひづめが割れていました。

---

#### 4 母が私に闘牛を教えてください

私たちは暗い田舎道を夜通し走りました。風がカマロに叩きつけられた。雨がフロントガラスを打ち付けた。母がどうやって物が見えるのか分かりませんが、アクセルを踏み続けていました。

稲光が走るたびに、後部座席で隣に座っているグローバーを見て、自分が気が狂ったのではないかと、それとも毛むくじらのカーペットのようなズボンをはいているのではないかと考えました。でも、いいえ、その匂いは幼稚園の遠足でふれあい動物園に行ったときの思い出の匂いでした。羊毛のようなラノリンのような匂いでした。濡れたヒエの匂い。

私が言うことしか考えられなかったのは、「それで、あなたと私のお母さんは...お互いを知っているのですか？」

後ろに車はいなかったにもかかわらず、グレイバーの目はバックミラーに飛んだ。"ない

「つまり、私たちは直接会ったことがないんです。でも彼女は私が見ていることを知っていました。」

"私を見て？"

「君を監視していた。君が無事だったことを確認していた。でも、君の友達であるふりをしていたわけではない」と彼は言った。

急いで付け加えた。"私はあなたの友達です。"

「ウルン……あなたはいったい何者なんですか？」

「それは今は関係ないよ。」

「関係ない？ 私の親友は、上から下はロバです——」

グローバーは鋭い喉のような「ブラハハハ！」と声を上げた。

以前にも彼がその音を出すのを聞いたことがありましたが、それは神経質な笑いだとばかり思っていました。今私はそれはむしろイライラした叫び声であることに気づきました。

"ヤギ！"彼は泣いた。

"何？"

「私は腰から下がヤギです。」

「あなたは今、関係ないと言いました。」

「まあ、ははは！ そんな侮辱の為にあなたを踏みつけてしまうサテュロスがいるのです！」

「おっと。待ってください。サテュロス。つまり…ブルナーさんの神話のことですか？」

「パーシー、あの果物屋の老婦人たちは神話だったんですか？ドッズ夫人も神話だったんですか？」

「ということは、ドッズ夫人がいたということを確認するんですね！」

"もちろん。"

"それでなんで."

「知識が少なければ少ないほど、引き寄せられるモンスターは減ります」とグローバー氏は言うが、それは当然のことだろう。「私たちは人間の目にミストをかぶせました。優しい人が幻覚だと思ってほしかったのですが、だめでした。あなたは自分が何者であるか気づき始めました。」

「私は誰だ——ちょっと待って、どういう意味？」

奇妙なうめき声が再び私たちの後ろのどこか、前より近くで上がりました。私たちを追いかけてきたものは何であれ、まだ私たちの痕跡を残していました。

「パーシー」と母は言いました。「説明することが多すぎて時間が足りないのです。あなたを安全な場所に連れて行かなければなりません。」

「何から安全なの？誰が私を追いかけているの？」

「ああ、誰も大したことないよ」とグローバーは言ったが、明らかにロバのコメントにまだイライラしていた。"ただ死者の王とその最も血に飢えた手下数名。"

「グローバー！」

「ごめんなさい、ジャクソンさん。もっと早く運転してもらえませんか？」

何が起きているのかを頭の中で理解しようとしたが、それはできませんでした。これが夢ではないことはわかっていました。私には想像力がありませんでした。こんな奇妙なことは夢にも思いつきませんでした。

私の母は左に大きく曲がりました。私たちは狭い道にそれて、薄暗くなった農家や木々が生い茂った丘を駆け抜け、白いピケットフェンスに「自分でイチゴを選んでください」の看板が掲げられていました。

"私達はどこに行くの？"私は尋ねた。

「さっき話したサマーキャンプのこと。」母の声はきつかった。彼女は私のために努力していました。怖がらないように。「お父さんがあなたを送りたかった場所。」

「あなたが私に行ってほしくなかった場所。」

「お願い、あなた」母は懇願しました。「これでも十分難しいです。理解するように努めてください。あなたは危険にさらされています。」

「糸を切るおばあさんがいるから」

「あの人は老婦人ではありませんでした」とグローバー氏は語った。「それらは運命だった。それが何を意味するか知っていますか？彼らがあなたの前に現れたという事実。彼らはあなたがそうしようとしているときのみそれを行います…誰かが死にそうとき。」

「おっと、『あなた』って言ったね」

「いいえ、そうではありません。『誰か』と言いました。」

「あなたは『あなた』という意味でした。私の場合と同じように。」

「私が言いたかったのは、あなたを『誰か』のようなものとした。あなたではありません、あなたです。」

「みんな！」私の母は言いました。

彼女はハンドルを右に大きく引いた、そして私は彼女が避けようとしてそれた人影を垣間見た



――闇のはためくような形が今、嵐の中で私たちの背後に消え去った。

"何だって？"私は尋ねた。

「もうすぐそこだよ」私の質問を無視して母は言った。「あと1マイル。お願いします。お願いします。」

お願いします。"

そこがどこにあるのかは分かりませんが、私たちは車の中で前かがみになり、私たちが到着することを期待し、望んでいたことに気づきました。

外には雨と暗闇だけが残り、ロングアイランドの先端にあるような何もない田園地帯です。私はドッズ夫人のこと、そして彼女がとがった歯と革のような翼を持つものになった瞬間のことを考えました。遅発性ショックで手足がしびれてしまいました。彼女は本当に

人間ではなかった。彼女は私を殺すつもりだった。

それから私はブルナー氏のことを考えました...そして彼が私に投げた剣のことを考えました。グローバーにそのことを尋ねる前に、首の後ろの毛が逆立ってしまいました。まばゆいばかりの閃光と、顎がガタガタするドーン!という音が鳴り響き、私たちの車は爆発しました。

まるで押しつぶされ、揚げられ、ホースで流されているような、無重力を感じたのを覚えています。同時。

私は運転席の背もたれから額を剥がして「おお」と言った。

「パーシー！」私の母は叫びました。

"私は大丈夫ですよ...。"

私は眩暈を振り払おうとした。私は死んでいなかった。車は実際には爆発していませんでした。私たちは溝にそれてしまいました。運転席側のドアが泥にはまってしまいました。屋根が卵の殻のように割れて雨が降り注いでいた。

稲妻。それが唯一の説明でした。私たちは道路から吹き飛ばされてしまいました。後部座席の私の隣には、動かない大きな塊がありました。「グローバー！」

彼は倒れ込み、口の横から血が滴り落ちた。私は彼の毛むくじゃらの腰を振りながら、「ダメだ！」と思いました。たとえあなたが半分ヒエの動物だったとしても、あなたは私の親友ですから、死んでほしくないのです！

それから彼は「食べ物だ」とうめき声を上げました、そして私は希望があることを知りました。

「パーシー」と母は言いました。「私たちは…しなければなりません。」彼女の声は震えていました。

私は振り返った。稲光が走ったとき、泥が飛び散った後部フロントガラス越しに、路肩で私たちに向かってよろめきながら走ってくる人影が見えました。それを見たとき、私の肌はゾクゾクしました。それはフットボール選手のような大男の黒いシルエットだった。頭から毛布をかぶっているようだった。彼の上半身はかさばって毛羽立っていた。彼の高く上げられた手は角があるように見えました。

一生懸命飲み込んだ。"誰が-"

「パーシー」と母はひどく真剣に言った。"車から降りろ。"

母は運転席側のドアに身を投げました。泥の中に閉じ込められてしまいました。私も試してみました。行き詰まった。私は屋根の穴を必死で見上げました。出口だったかもしれないが、端は焼けるように焼け、煙を上げていた。

「助手席側から出てください！」母が私に言いました。「パーシー、走らなきゃ。あの大きな木が見える？」

"何？"

また稲妻が光り、屋根の喫煙穴から彼女の言った木が見えました。

一番近い丘の頂上にある、ホワイトハウスのクリスマスツリーほどの大きさの巨大な松。

「そこが敷地境界線だよ」と母は言いました。「あの丘を越えれば大きな農家が見えるだろう」

谷の奥にある。走って、振り返らないでください。助けを求めて叫びます。ドアに着くまで止まらないでください。」

「お母さん、あなたも来ますよ。」

彼女の顔は青白く、目は海を見たときと同じように悲しかった。

"いいえ！"私は叫びました。「あなたも一緒に来ます。グローバーを運ぶのを手伝ってください。」

"食べ物！"グローバーは少し大ききうめき声を上げた。

頭に毛布をかぶった男は、プーと鼻を鳴らしながら私たちに向かってやって来た。彼に近づくにつれて、私は彼が頭から毛布をかぶっているはずがないことに気づきました。なぜなら彼の手、肉厚な巨大な手、が体の横で揺れていたからです。毛布はありませんでした。つまり、彼の頭であるには大きすぎる、かさばるふわふわした塊が彼の頭だったということです。そして角のように見えた点は……

「彼は私たちを望んでいないのよ」と母は私に言いました。「彼はあなたを望んでいます。それに、私は敷地境界線を越えることはできません。」

"しかし..."

「時間がありません、パーシー。行ってください。」

それで、私は怒ったのです——母に対して、ヤギのグローバーに対して、そして角のあるものに対して怒ったのです。

雄牛のように、ゆっくりと意図的に私たちに向かってよろめきます。

私はグローバーをよじ登り、雨の中ドアを押し開けました。「一緒に行きますよ、来てください」

さあ、お母さん。」

"先ほども言いました-"

「お母さん 私はあなたを離れるつもりはありません。グローバーを手伝ってください。」

私は彼女の答えを待ちませんでした。私はグローバーを車から引きずりながら外へ飛び出した。彼がいた驚くほど軽かったですが、もし母が助けに来てくれなかったら、彼を遠くまで運ぶことはできなかったでしょう。

私たちは一緒にグローバーの腕を肩に掛け、腰の高さまである濡れた草の中をよろめきながら坂道を登り始めました。

振り返ってみると、私は初めてその怪物をはっきりと見た。彼の身長は7フィートで、軽やかで、腕と脚は雑誌『マッスルマン』の表紙のようなもので、上腕二頭筋と上腕三頭筋、その他の「頭筋」の束が膨らみ、静脈の水かきのある皮膚の下に野球ボールのように詰め込まれていた。彼は下着（つまり、真っ白なフルーツ・オブ・ザ・ルームズ）を除いて服を着ていませんでしたが、上半身がとても怖かったことを除けば、それは面白く見えたでしょう。茶色の粗い髪はへそあたりから始まり、肩に達するにつれて太くなりました。

彼の首は筋肉と毛皮の塊で、巨大な頭へと続いていた。その頭には私の腕ほどの長さの鼻、輝く真鍮の輪が付いた鼻水のような鼻孔、残酷な黒い目、そして角——尖った白と黒の巨大な角があった。電動鉛筆削りでは得られないものです。

怪物を認識しました、わかりました。彼はブルナー氏が私たちに語った最初の物語の一つに登場していた。

しかし、彼は本物であるはずがありません。

私は瞬きして目から雨を消しました。「それは——」

「パーシパエの息子よ」と母は言いました。「彼らがどれほどあなたを殺したいと思っているか知っていればよかったのに。」

「でも彼はミンだ——」

「彼の名前は言わないでください」と彼女は警告した。「名前には力がある。」

松の木はまだ遠すぎた、少なくとも100ヤードは坂を上ったところにあった。

私はもう一度後ろを振り返った。

牛飼いは私たちの車の上にかがみ込み、窓を覗いていました、あるいは正確には見ていませんでした。もっと

鼻をすすり、鼻をすするような。私たちはたった50フィートしか離れていなかったため、なぜ彼がわざわざそんなことをしたのか分かりませんでした。

"食べ物？"グローバーはうめき声を上げた。

「シーッ」と私は彼に言いました。「お母さん、彼は何をしているの？私たちを見ないの？」

「彼の視力と聴力はひどいものです」と彼女は言った。「彼は匂いを頼りに行動します。でも、すぐに私たちがどこにいるのかを理解するでしょう。」

まるで合図したかのように、牛飼いは怒りの声を上げた。彼は壊れた屋根のそばでゲイブのカマロを拾い上げ、シャーシを軋み、うめき声を上げた。彼は車を頭上に持ち上げて道路に投げ捨てた。濡れたアスファルトに衝突し、火花の雨の中で約800メートル滑り、停止した。ガソリンタンクが爆発した。

かすり傷じゃないよ、ゲイブが言っていたのを思い出した。

おっと。

「パーシー」と母は言いました。「彼は私たちを見つけると突撃してきます。最後の瞬間まで待ってから、邪魔にならないところから、真横に飛び降りてください。彼は突撃するとうまく方向を変えることができません。わかりますか？」

「どうやってこんなことを知っているの？」

「長い間、襲撃のことを心配していました。こうなることは予想しておくべきでした。私は利己的でした。

あなたを私の近くに置いておいてください。」

「私を近くに置いておきますか？でも——」

再び怒りの叫び声が上がリ、牛飼いは坂道を駆け上がり始めました。

彼は私たちの匂いを嗅いでいた。

松の木まではあと数ヤードしかなかったが、丘はますます急になり、滑りやすくなった。

グローバーは少しも軽くなっていなかった。

牛飼いが迫ってきました。あと数秒で私たちの上に乗ってくるでしょう。

母は疲れていただろうが、グローバーを背負ってくれた。「行きなさい、パーシー！離れて！」

私が言ったことを覚えておいてください。」

私は別れたくないのですが、彼女の言うことが正しいと感じました。これが私たちにとって唯一のチャンスだったので。私は左にダッシュして振り向くと、その生き物が私に迫ってくるのが見えました。彼の黒い瞳は憎悪で輝いていた。彼は腐った肉のような悪臭を放っていた。

彼は頭を下げて突進し、そのかみそりのような鋭い角が私の胸をまっすぐに狙いました。

お腹の中に恐怖が襲い、飛び出したいくなったが、それはうまくいかない。絶対に追い越せなかった

このこと。そこで私は踏ん張って、最後の瞬間に横に飛びつきました。

牛飼いは貨物列車のように突進して通り過ぎ、不満の声を上げて向きを変えたが、

今度は私ではなく、グローバーを草の上に寝かせていた母に向かって。

私たちは丘の頂上に到着しました。反対側には母の言った通りの溪谷が見え、農家の灯りが雨の中で黄色く輝いていました。しかし、それは800メートル離れたところがありました。私たちには決して成功しないでしょう。

牛飼いは地面を足でかきながらうなり声を上げた。彼は今いる私の母を見つめ続けました。

下り坂をゆっくりと後退し、道路の方に戻り、怪物をグローバーから遠ざけようと思いました。

「走れ、パーシー！彼女は私に言った。「これ以上は進めない。逃げろ！」

しかし、怪物が彼女に突撃してくるのを、私はただ恐怖で固まってそこに立っただけでした。彼女は私に言われた通りに回避しようとしたが、怪物は教訓を学んだのだ。逃げようとした彼女の手が飛び出し、首を掴んだ。彼女がもがいている間、彼は彼女を持ち上げ、空気を蹴ったり、殴ったりした。

"お母さん！"

彼女は私の目を捉え、なんとか最後の言葉を絞り出しました。「行きなさい！」

それから、怒りの咆哮を上げながら、怪物は母の首に拳を握り締め、母は私の目の前で溶けて光に溶け、まるでホログラムが投影されたかのように、きらめく金色の姿になった。まばゆいばかりの閃光、そして彼女はただ……消えてしまったのです。

"いいえ！"

怒りが私の恐怖に取って代わりました。新たに得た力が私の手足に燃え上がり、それはドッズ夫人に爪が生えたときと同じエネルギーの急増でした。

牛追いは、草の上に無力で横たわっているグローバーに詰め寄った。怪物は身をかがめたまるでグローバーを持ち上げて彼も解散させようとしているかのように、私の親友が鼻を鳴らしながら言いました。

それは許せませんでした。

私は赤いレインジャケットを脱ぎました。

"おい！"私は叫びながらジャケットを振りながら怪物の側に走った。「おい、バカ！牛ひき肉！"

「ラァァァァァァ！」怪物は私の方を向いて、肉厚な拳を振りました。

私にはアイデアがありました。愚かなアイデアですが、まったくアイデアがないよりはマシでした。私は大きな松の木に背を向け、牛飼いの前で赤いジャケットを振り、最後に邪魔にならないように飛び出そうと思った一瞬。

しかし、そのようなことは起こりませんでした。

牛飼いは突進する速度が速すぎて、私が避けようとしても腕を伸ばして私を捕まえようしました。

時間が遅くなりました。

足が緊張してしまいました。横にはジャンプできなかったので、真っ直ぐ上に飛び上がって、生き物の頭を踏み台にして、空中で回転し、首に着地します。

どうやってそんなことをしたのですか？それを理解する時間がありませんでした。1ミリ秒後、怪物の頭が木に激突し、その衝撃で歯が折れそうになりました。

牛飼いはよるめきながら私を揺さぶろうとしました。私は投げ飛ばされないように彼の角に腕を固定しました。雷と稲妻はまだ強く続いていました。雨が目に映った。

腐った肉の匂いが鼻孔を焼いた。

怪物は体を揺すり、ロデオの雄牛のように跳ねた。彼はただ後退して木に激突し、私をべしゃんこに叩きつけるべきだったのですが、私はこの物のギアが前進という1つだけであることに気づき始めていました。

その間、グローバーは草の中でうめき声を上げ始めた。私は彼に黙ってると叫びたかったが、振り回されて、口を開けたら自分の舌を噛みちぎってしまいそうだった。

"食べ物！"グローバーはうめき声を上げた。

牛飼いは彼に向かって車輪を動かし、再び地面を踏み、突撃の準備をしました。私は、彼がどのようにして私の母から命を搾り取り、一瞬の光の中に消え去らせたのかを考え、高オクタン価の燃料のように怒りが私を満たしました。私は一本の角を両手で掴み、力いっぱい後ろに引きました。怪物は緊張し、驚いたうめき声を上げ、そして——パチン！

牛飼いは叫び、私を空中に投げ飛ばしました。私は草むらに仰向けになって着地した。頭を岩にぶつけてしまいました。起き上がると視界はぼやけていましたが、手には角、ナイフほどの大きさのぼろぼろの骨の武器を持っていました。

怪物が突進してきた。

私は何も考えずに横に転がり、ひざまずいて立ち上がった。怪物が走り去っていく中、私は折れた角を彼の脇腹、毛皮で覆われた胸郭のすぐ下にまっすぐ打ち込んだ。

牛飼いは苦しみながら咆哮を上げた。彼は身をばたつかせ、胸をひっかき、それから崩壊し始めた——金色の光の中に放たれた母のようなものではなく、ドッズ夫人がばらばらになったのと同じように、風に吹き飛ばされて砕け散る砂のようだった。

怪物はいなくなった。

雨は止んでいました。嵐はまだ鳴り響いていたが、それは遠くでだけだった。家畜のような匂いがして、膝が震えていました。頭が割れるように感じました。私は弱っていて怖くて、母親が消えていくのを見たばかりで悲しみに震えていました。私は横になって泣きたかったのですが、私の助けを必要としているグローバーがいたので、なんとか彼を引きずり上げ、農家の明かりに向かってよめきながら谷の方へ降りていきました。私は泣きながら母を呼びましたが、私はグローバーにしがみついて、彼を手放すつもりはありませんでした。

最後に覚えているのは、木製のポーチで倒れ、頭上を旋回するシーリングファン、黄色のライトの周りを飛び回る蛾、見覚えのあるひげを生やした男性と、ブロンドの髪をカールさせたかわいい女の子の険しい顔を見あげたことです。お姫様の。二人とも私を見下ろし、女の子は「彼だよ。きっとそうだよ。」と言いました。

「黙って、アナベス」男は言った。「彼はまだ意識があります。中に入れてください。」

---

5 私は馬でピノクルをします

ヒエだらけの奇妙な夢を見ました。彼らのほとんどは私を殺そうとした。残りは食べ物が欲しかった。

何度か目が覚めたはずですが、聞いたことも見たことも意味がわからず、また気を失ってしまいました。柔らかいベッドに横たわり、バターを塗ったポップコーンのような味のものをスプーンで食べさせられたのを覚えているが、それはプリンだった。巻き毛のブロンドの髪の女の子が私の上に留まり、スプーンで私の顎についた滴りをこそぎ落としながらにやにや笑いました。

私の目が開いたのを見て、彼女は「夏至には何が起こるの？」と尋ねました。

私は何とか「えっ？」と声を上げた。

彼女は誰かに聞かれるのを恐れたかのように周りを見回した。「何が起きているのですか？何が盗まれたのですか？私たちには数週間しかありません！」

「ごめんなさい」と私はつぶやいた、「そうではない…」

誰かがドアをノックすると、女の子はすぐに私の口にプリンを頬張りました。

次に目が覚めたとき、女の子はいなくなっていました。

サーファーのようなハスキーな金髪の男が寝室の隅に立って私を見守っていた。

彼の頬、額、手の甲には、少なくとも十数個の青い目がありました。

…

ようやく完全に戻ってきたとき、私の周囲には、以前よりも素晴らしかったことを除いて、何もおかしいところはありませんでした。私は広大なベランダのデッキチェアに座り、牧草地越しに遠くにある緑の丘を眺めていました。風はイチゴのような香りがしました。足には毛布がかぶせられ、首の後ろには枕がありました。それはすべて素晴らしかったが、私の口はサソリが巣に使っているように感じた。舌は乾燥して不快で、歯の一本一本が痛かったです。

私の隣のテーブルには背の高い飲み物がありました。見た目は冷たいリンゴジュースのようで、緑色のストローと紙の日傘がマラスキーノチェリーに刺さっていました。

私の手はとても弱っていて、指を持った瞬間にガラスを落としそうになりました。

「気をつけて」と聞き覚えのある声が聞こえた。

グローバーさんはポーチの手すりにもたれかかり、一週間も眠っていない様子だった。彼は片腕の下に靴箱を抱えていました。彼はブルー ジーンズ、コンバースのハイトップ、そして「CAMP HALF-BLOOD」と書かれた明るいオレンジ色の T シャツを着ていました。ヤギ少年ではなく、ただのグローバーです。

それで悪夢を見たのかもしれない。もしかしたら母さんは大丈夫だったかもしれない。私たちはまだ休暇中だったので、私たちは何らかの理由でこの大きな家に立ち寄りました。そして…

「あなたは私の命を救ってくれました」とグローバーさんは言った。「私は……まあ、最低限できることは……」 丘に戻りました。あなたはこれが欲しいかもしないと思いました。」

彼はうやうやしく靴箱を私の膝の上に置きました。

中には白黒の牛の角が入っていて、根元は折れてギザギザになっていて、先端には乾いた血が飛び散っていた。それは悪夢ではなかった。

「ミノタウロスだ」と私は言った。

「うーん、パーシー、それはいい考えじゃないー」

「ギリシャ神話ではそう呼ばれているんですよね？」私は要求した。「ミノタウロス。半分人間、半分牛。」

グローバーは不快そうに体を動かした。「二日も外出してるけど、いくらくらいあるの？」  
覚えて？"

「お母さん。本当にそうなの…」

彼は下を向いた。

私は草原の向こうを見つめた。木々の木々が茂り、曲がりくねった小川があり、青空の下に何エーカーものイチゴが広がっていました。谷はなだらかな丘に囲まれており、私たちの真正面にある最も高い丘は、その上に大きな松の木がある丘でした。それさえ見えた

太陽の光の下で美しい。

母はいなくなっていました。世界全体が真っ黒で冷たくなるはずだ。何も美しく見えてはいけません。

「ごめんなさい」グローバーは鼻を鳴らした。「私は失敗者だ。私は——世界で最悪のサテュロスだ。」

彼はうめき声を上げ、足が脱げるほど強く踏み鳴らした。というか、コンパースのハイトップが脱げてしまいました。の

内側は蹄の形の穴を除いて発泡スチロールで満たされていました。

「ああ、スティクス！」彼はつぶやいた。

晴れた空に雷が鳴り響きました。

彼が蹄を義足に戻すのに苦労しているとき、私は「これで解決だ」と思いました。

グローバーはサテュロスだった。彼の茶色の巻き毛を剃ったら、彼の頭に小さな角が生えてくるだろうと私は賭けるつもりでした。しかし、私はあまりにも惨めだったので、サテュロスやミノタウロスの存在すら気にすることができませんでした。つまり、母は本当に虚無の中に押し込まれ、黄色い光の中に溶けてしまったということだ。

私は孤独であった。孤児。私は一緒に暮らさなければなりません...臭いゲイブ?いいえ、そんなことは決して起こりません。最初は路上で暮らすつもりだった。17歳のふりをして軍隊に入隊するつもりだった。何かしたいと思います。

グローバーはまだ鼻をすすっていた。かわいそうな子供——かわいそうなヤギでも、サテュロスでも何でも——は、殴られることを予期していたかのように見えた。

私は「それはあなたのせいではありませんでした」と言いました。

「そうだ、そうだった。私があなたを守るはずだったんだ」

「お母さんが私を守ってくれるように頼んだの？」

「いいえ、でも、それが私の仕事です。私は飼育員です。少なくとも...私はそうでした。」

「でも、どうして……私は突然めまいを感じ、視界が泳ぎました。」

「無理をしないでください」とグローバー氏は言う。「ここ。」彼は私がグラスを持ち、ストローを口に当てるのを手伝ってくれました。

リンゴジュースを期待していたので、その味にひるみました。全然そんなことなかったですよ。チョコチップクッキーでした。液体クッキー。しかも、ただのクッキーではありません。母が手作りの青いチョコレートチップクッキーです。バターがたっぷり入っていて、チップはまだ溶けています。飲むと体が温かくなり、元気が湧いてきました。私の悲しみは消えませんでした。まるで母が私の頬を手でこすり、私が幼い頃によくしていたようにクッキーをくれて、すべて大丈夫と言ってくれたような気がしました。

気が付くとグラスの水を切っていました。私はそれを見つめました、確かに温かい飲み物を飲んだばかりですが、氷も溶けていなかった。

"良かったです?"グローバーは尋ねた。

私はうなずいた。

「どんな味でしたか?」とても切ない声だったので、私は罪悪感を感じました。

「ごめんなさい」と私は言いました。「味見させてあげるべきだった。」

彼の目は大きく見開かれました。「いいえ、そういう意味ではありません。ただ...疑問に思っただけです。」

「チョコチップクッキー」と私は言った。「お母さんのです。手作りです。」

彼はため息をつきました。「それで、気分はどうですか?」

「ナンシー・ボボフィットを100ヤード投げることができるように。」

「それはいいですね」と彼は言いました。「それはよかった。これ以上飲むリスクはないと思うよ」

もの。"

"どういう意味ですか？"

彼はまるでダイナマイトであるかのように、用心深く私から空のグラスを取り上げ、テーブルの上に戻しました。

「さあ、シロンとDさんが待っていますよ」

ポーチは農家の周りをぐるりと囲っていました。

そこまで歩こうとすると足がふらふらしてしまいました。グローバーはミノタウロスの角を運ぶと申し出たが、私はそれを我慢した。私はそのお土産の代金を苦労して払いました。それを手放すつもりはなかった。

家の反対側に来たとき、私は息を呑んだ。

私たちはロングアイランドの北岸にいたに違いありません。なぜなら、家のこちら側では、溪谷が水面までずっと続いており、水面は約1マイル先で輝いていました。こことこの間で、私は目に映るものすべてを処理することができませんでした。この風景には、野外パビリオン、円形劇場、円形競技場など、古代ギリシャ建築のように見える建物が点在していましたが、それらはすべて真新しく見え、白い大理石の柱が太陽の光で輝いていました。近くの砂場では、十数人の高校生とサテュロスがバレーボールをしていました。カヌーが小さな湖を滑走していきました。グローバーのような明るいオレンジ色のTシャツを着た子供たちが、森の中に佇む小屋群の周りで追いかけてこしていた。アーチェリー場で的を射る者もいた。他の人たちは馬に乗って森の小道を下っていましたが、私が幻覚を見ていない限り、彼らの馬の中には翼のある馬もいました。

ポーチの端で、二人の男がカードテーブルに向かい合って座っていた。私にポップコーン味のプリンをスプーンで食べさせてくれたブロンドの髪の女の子が、彼らの隣のベランダの柵にもたれかかっていた。

私の向かいにいた男性は小柄でしたが、がっしりしていました。彼は赤い鼻、大きな涙目、そして紫に近いほど黒い巻き毛をしていました。彼は天使の赤ちゃんを描いた絵のように見えました。それを何と呼びますか、大騒ぎですか？いいえ、天使たち。それでおしまい。彼はトレーラーパークで中年になった天使のように見えた。彼はトラ柄のアロハシャツを着て、ゲイブのポーカーパーティーにぴったりだっただろうが、この男なら私の継父さえもギャンブルで勝てそうな気がした。

「あれはミスターDだ」とグローバーが私につぶやいた。「彼はキャンプの責任者です。礼儀正しくしてください。その女の子、それはアナベス・チェイスです。彼女は単なるキャンパーですが、他の誰よりも長くここにいます。そして、あなたはすでにカイロンを知っています...」

彼は私に背を向けていた男を指さした。

まず、彼が車椅子に座っていることに気づきました。そこで私はツイードジャケットに気づきました。

薄くなった茶色の髪、もじゃもじゃのひげ。

「ブルナーさん！」私は泣いた。

ラテン語の先生は振り返って私に微笑みました。彼の目にはいたずらっぽく輝きがあった。授業中にポップクイズを引いて、すべての選択式の答えをBにしてしまうことがありました。

「ああ、よかった、パーシー」と彼は言った。「これでピノクルは4つになりました。」

彼は私にDさんの右側の椅子を勧めました。Dさんは血走った目で私を見つめ、大きなため息をつきました。「ああ、言わなければいけないと思います。ようこそ、キャンプ・ハーブブラッドへ。そこです。さあ、あなたに会えて嬉しいとは期待しないでください。」

「ああ、ありがとう。」私は彼から少し離れました。なぜなら、私がゲイブとの生活から学んだことが一つあるとすれば、それは大人が幸せなジュースを飲んでいるときを見分ける方法だったからです。



Dさんが酒に詳しくないとしたら、私はサテュロスだった。

「アナベス？」ブルナー氏は金髪の少女に声をかけた。

彼女が名乗り出て、ブルナー氏が私たちを紹介してくれました。「この若い女性があなたを看護して健康に戻してくれました。パーシー。アナベス、愛しい人、パーシーの寝台を見に行ってください。今のところ彼をキャビン11に入れておきます。」

アナベスは「もちろんです、カイロン」と言いました。

彼女はおそらく私と同い年で、おそらく数インチ背が高く、はるかに運動能力が高いように見えました。深い日焼けと巻き毛のブロンドの髪を持つ彼女は、目がイメージを台無しにしていた点を除けば、私が思っていた典型的なカリフォルニアの女の子とほぼ同じでした。それらは嵐の雲のような驚くべき灰色でした。きれいだけど威圧的でもあり、まるで戦いで私を倒す最善の方法を分析しているかのようだった。

彼女は私の手の中にあるミノタウロスの角をちらっと見て、そしてまた私を見つめました。彼女がそうなるだろうと想像した  
言う、「あなたはミノタウロスを殺しました！」または、うわー、あなたはとても素晴らしいです！とかそのようなもの。

代わりに彼女は「寝ているとよだれが出るのよ」と言いました。

それから彼女はブロンドの髪を後ろになびかせながら芝生を駆け下りた。

「それで」と私は話題を変えたくて言った。「ブルナーさん、あなたはここで働いているんですか？」

「ブルナー氏ではありません」と元々――ミスター・ブルナーは言った。ブルナー氏は語った。「申し訳ありませんが、それは偽名でした。ケイロンと呼んでいただいても構いません。」

"わかった。"完全に混乱して、私は監督を見た。「そしてDさん ...それはの略ですか？  
何か？」

Dさんはカードをシャッフルするのをやめた。彼は私が大声でげっぷをしたばかりのような目で私を見た。「若者、  
名前は強力なものです。理由もなく勝手に使ってはいけませんよ。」

「ああ、そうです。ごめんなさい。」

「言わなければなりません、パーシー」シャイロン＝ブルナーが口を割って言った、「あなたが生きているのに会えてうれしいです。久しぶりです」

潜在的なキャンパーに自宅電話をしたからです。時間を無駄にしたとは思いたくないです。」

「往診？」

「ヤンシーアカデミーの私の学年です。あなたたちを指導するためです。ほとんどの学校にはサテュロスがいて、もちろん見張りをしています。  
でも、グローバーはあなたに会うとすぐに私に警告しました。彼はあなたが特別な存在であると感じたので、私は州北部に来ることに決めました。」私  
はもう一人のラテン語教師に、ああ、休暇をとるように説得しました。  
不在。"

学年の初めのことを思い出してみました。遠い昔のことなのですが、ヤンシーでの最初の週には別のラテン語の先生がいたという曖昧な記憶  
がありました。その後、何の説明もなく、彼は姿を消し、ブルナー氏が授業を受けていました。

「私に教えるためだけにヤンシーに来たんですか？」私は尋ねた。

カイロンはうなずいた。「正直に言って、最初はあなたのことをよくわかりませんでした。私たちはあなたのお母様に連絡を取り、あなたがキャン  
プ・ハーフブラッドに向けて準備ができていない場合に備えてあなたを見守っていることを伝えました。しかし、あなたにはまだ学ぶべきことがたくさんあり  
ました。それにもかかわらず、あなたは生きてここまで来た、それがいつも最初の試練だ。」

「グローバー、」D氏がいらいらしながら言った、「遊んでいるのか、遊んでいないのか？」

"かしこまりました！"グローバーは4番目の椅子に座るとき震えていたが、なぜそうすべきなのかは私には分からなかった。

虎柄のアロハシャツを着たずんぐりした小男がとても怖い。

「ピノクルの遊び方を知っていますか？」Dさんは私を怪訝そうに見つめた。

「残念ながらそうではありません。」と私は言いました。

「残念ながらそうではありません、先生」と彼は言った。

「先生、私は繰り返した。私はキャンプ所長のことがどんどん好きになっていきました。

「そうですね」と彼は私に言いました、「それは剣闘士の戦いやバックマンと並んで、最も偉大な戦いの一つです」

人間によって発明されたゲーム。私はすべての文明化された若者がルールを知っていることを期待します。」

「この少年は学ぶことができると確信しています」とカイロンさんは語った。

「お願いします」と私は言いました、「ここは何ですか？私はここで何をしていますか？ブランさん、カイロン、なぜそんなことをするのですか？」

私に教えるためだけにヤンシーアカデミーに行くの？」

D氏は鼻を鳴らした。「私も同じ質問をしました。」

キャンプ所長がカードを配った。グローバーは、誰かが自分の山に着地するたびにひるみました。

ケイロンは、ラテン語の授業でいつもしていたように、同情的に私に微笑みかけ、まるで私の平均が何であれ、私が彼のスター生徒であることを私に知らせているかのようでした。彼は私にその権利があると期待していた

答え。

「パーシー」と彼は言った。「お母さんは何も言わなかったの？」

「彼女はこう言った…私は海を見渡す彼女の悲しそうな目を思い出しました。「彼女は、父が望んでいたのに、私をここに送るのが怖かったと私に言いました。一度ここに来たら、おそらく離れることはできないだろうと言っていました。彼女は私を近くに置いておきたかったのです。」

「典型的ですね」とD氏は言った。「そうやって彼らはいつも殺されるんだ。若者よ、あなたは命令するのか、それともない？」

"何？"私は尋ねた。

彼はピノクルで入札する方法をせっかちに説明したので、私もそうしました。

「残念ながら、語るべきことが多すぎるんです」とシャロンさんは語った。「残念ながら、私たちの通常のオリエンテーションフィルムはそうではありません十分であってください。」

「オリエンテーションフィルム？」私は尋ねた。

「いいえ」とケイロンは決めた。「まあ、パーシー。君の友人のグローバーがサテュロスであることは知っているだろう。君がミノタウロスを殺したということは——彼は靴箱の角を指さした——知っているだろう。これも小さな偉業ではない、坊や。君が知らないかもしれないのは、「あなたの人生には大きな力が働いているということ。あなた方がギリシャの神々と呼ぶ力である神々は、とても生き生きとしているのです。」

私はテーブルの周りにいる他の人たちを見つめました。

私は誰かが「違う！」と叫ぶのを待っていました。しかし、私が受け取ったのは、D氏が「ああ、王室の結婚だ」と叫んだことだけでした。

騙す！トリックだ！」と彼はポイントを計算しながら笑いました。

「Dさん、」グローバーは恐る恐る尋ねた、「もし食べないなら、ダイエットコーラをもらえますか？」  
できる？」

「え？ああ、大丈夫」

グローバーさんは空のアルミ缶から巨大な破片を取り出し、悲しげに噛みついた。

「待ってください私はケイロンに言った。「あなたは、神というものが存在すると知っているのですね。」

「さて、さあ」とケイロンは言った。「神——大文字のG、神。それは全く別の問題だ。我々は」

形而上学的なものは扱わないでください。」

「形而上学的？でも、あなたが話していたのは——」

「ああ、神々、つまり自然の力と人間の努力を制御する偉大な存在、つまりオリンポスの不滅の神々のことです。それはもっと小さな問題です。」

「もっと小さい？」

「はい、そうですね。ラテン語の授業で話し合った神々のことです。」

「ゼウス」と私は言った。「ヘラ。アポロ。彼らのことです。」

そしてまた、雲のない日に遠くの雷鳴が聞こえました。

「若者よ」D氏は言った、「私だったら、そんな名前を気軽にばらまくつもりはありませんが、

もし私があなただったら。”

「しかし、それらは物語です」と私は言いました。「それらは――稲妻や季節などを説明するための神話だ。

それは科学が存在する前に人々が信じていたものです。」

“科学！”D氏は嘲笑した。「そして、教えてください、ペルセウス・ジャクソン――誰にも言ったことのない私の本名を彼が言われたとき、私はたじろぎました――「今から二千年後、人々はあなたの『科学』についてどう思うでしょうか？」Dさんは続けた。「うーん？彼らはそれを原始的な無言ジャンボと呼ぶでしょう。それがそうです。ああ、私は定命の者が大好きです。彼らは視点の感覚をまったく持っていません。彼らは自分たちがとても遠くまで来たと思っています。

そして、それはありますか、カイロン？この少年を見て、教えてください。」

私はD氏のことをあまり好きではありませんでしたが、彼が私を死すべき者と呼んだのには、まるでそうではないかのような何かがありました。グローバーがなぜ律儀にカードを気にし、炭酸飲料の缶を噛み、口を閉じていたのかを示唆するには、私の喉にしこりを感じるのに十分でした。

「パーシー」とカイロンは言った、「信じるか信じないかはあなたが決めるかもしれませんが、実際のところ、不滅というのは不死を意味します。一瞬でも、決して死なないということ想像できますか？決して消えないでしょうか？ずっとそのままの状態が存在するということ想像できますか？」

私は頭から、それはかなり良い取引のように聞こえると答えようとしたが、カイロンの声の調子に私はためらいました。

「つまり、人々があなたを信じているかどうかということですよ」と私は言いました。

「その通りだ」カイロンも同意した。「もしあなたが神だったら、稲妻を説明するための神話、古い物語と呼ばれることをどう思いますか？ペルセウス・ジャクソン、いつか人々はあなたを神話と呼ぶでしょう、小さな男の子がどのようにして雷に落ちるかを説明するために作られただけだと私が言ったらどうしますか？母親を亡くしたことで？」

心臓がドキドキしました。彼は何らかの理由で私を怒らせようとしていたが、私は怒らせるつもりはなかった。彼は、「それは嫌だ。でも、私は神を信じていない。」と言いました。

「ああ、そのほうがいいよ」とD氏がつぶやいた。「彼らの誰かがあなたを焼却する前に。」

グローバーさんは「お願いします、先生。彼は母親を亡くしたばかりです。ショックを受けています。」と言いました。

「これも幸運なことだ」とD氏はトランプをしながらつぶやいた。「残念なことに、私はこれに限定されています。信じもしない少年たちと働くなんて、惨めな仕事だ」

彼が手を振ると、まるで太陽光が曲がったかのように、テーブルの上にゴブレットが現れました。瞬間、空気をガラスに織り込みます。ゴブレットには赤ワインが満たされていました。

私は顎を落としたが、カイロンはほとんど顔を上げなかった。

「ミスターD、あなたの制限ですよ」と彼は警告した。

D氏はワインを見て驚いたふりをした。

「親愛なる私へ。」彼は空を見て「昔の習慣だ！ごめんなさい！」と叫びました。

さらに雷が鳴る。

D氏が再び手を振ると、ワイングラスは新鮮なダイエット コークの缶に変わりました。彼は残念そうにため息をつき、ソーダの上部を空けて、カードゲームに戻りました。

シロンは私にウインクした。「ミスターDは少し前に父親を怒らせてしまい、木の妖精に夢中になった立ち入り禁止を宣言されていた人たちだ。」

「森の精だ」と私は繰り返した、まるで宇宙から来たかのようにダイエット・コークの缶を見つめた。

「はい」とD氏は告白した。「父は私を罰するのが大好きです。初めての禁酒法。恐ろしいです！」

本当に恐ろしい10年だ！二度目は――まあ、彼女は本当にきれいだったので、離れることができなかった――二度目は、彼が私をここに送ってくれた。ハーフブラッドヒル。あなたのようなガキのためのサマーキャンプ。'

より良い影響を与えることができる」と彼は私に言いました。「若者たちを壊すのではなく、彼らと一緒に働きましょう。」はあ。まったく不公平だ。」

Dさんの声は6歳くらいで、口をとがらせた子供のようにした。

「そして...私は口ごもりながら言った、「あなたのお父さんは...」

「不滅の者たちよ、カイロン」ミスターDは言った。「あなたがこの少年に基礎を教えたと思いました。私の父はもちろんゼウスです。」

ギリシャ神話のDの名前を調べてみました。ワイン。虎の皮。すべてがここで機能しているように見えるサテュロス。グローバーの身がすくむ様子は、まるでD氏が自分の主人であるかのようにだった。

「あなたはディオニュソスです」と私は言いました。「ワインの神様」。

Dさんは目を丸くした。「最近、グローバー、子供たちは何と言いますか？子供たちはこう言いますか？『まあ、そうですか！？』

「はい、はい、Dさん」

「それでは、そうですね！パーシー・ジャクソン。もしかして、私がアフロディーテだとも思っただけでしょうか？」

「あなたは神です。」

「はい、子供よ。」

「神様だよ、あなた」

彼は振り向いて私を真正面から見ました、そして私は彼の目に一種の紫がかかった炎を見た、それはこの泣き言を言う、ふくよかな小さな男が彼の本当の性質のほんの少しだけ私に見せているだけであることを示唆していました。私は、ブドウの蔓が不信者を窒息死させている光景、戦いの欲望に狂った酔っぱらった戦士たち、手を足ひれに変えて叫ぶ船員たち、顔がイルカの鼻のように伸びている光景を見ました。私が彼を追い詰めたら、Dさんは私にもっとひどいものを見せるだろうと私は知っていました。彼は私の脳に病気を植え付け、私をゴム室で拘束衣を着たまま一生過ごすことになるでしょう。

「私を試してみませんか、坊や？」彼は静かに言いました。

「いいえ、いいえ、先生。」

火は少し消えました。彼はカードゲームに戻った。「私は勝つと信じています。」

「そうではありません、ミスターD」とカイロンは言った。彼はストレートを決めて得点を重ね、「勝負は私にある」と語った。

D氏は車椅子からすぐにカイロンを蒸発させるつもりだったと思いましたが、まるでラテン語教師に殴られることに慣れているかのように、鼻からため息をついただけでした。彼は立ち上がった、そしてグローバーバラも。

「疲れた」とDさんは言いました。「今夜の合唱の前に昼寝をしようと思います。でもその前に、グローバー、この任務におけるあなたの完璧とは言えないパフォーマンスについてももう一度話さなければなりません。」

グローバーの顔には汗が玉状になった。「はい、はい、先生。」

Dさんは私の方を向いた。「キャビン11、パーシー・ジャクソン。マナーには気を付けてね。」

彼は農家になだれ込み、グローバーも惨めに後を追った。

「グローバーは大丈夫だろうか？」シロンに聞いてみた。

カイロンは少し困ったような顔をしながらも頷いた。「ディオニュソス爺さんは、本当に怒っているわけではない。ただ自分の仕事が嫌いなだけだ。彼は……ああ、座礁してしまっただろう、そう言うだろう、そしてオリンポスに戻るまでと一世紀も待つことに耐えられないのだ。」

「オリンポス山」と私は言った。「本当にあそこに宮殿があるって言うの？」

「さて、ギリシャにはオリンポス山があります。そして神々の本拠地、彼らの力の集結点があり、かつては確かにオリンポス山にありました。古い慣習に敬意を表して、今でもオリンポス山と呼ばれています。でも宮殿は動きます、パーシー、まさに神々が動くのです。」

「ギリシャの神々がここにいるということですか？ アメリカのようなものですか？」

「そうですね、確かに。神々は西洋の心とともに動いています。」

「何？」

「さあ、パーシー。あなたが「西洋文明」と呼ぶもの。それは単なる抽象的な概念だと思いますか？ いいえ、それは生きた力です。何千年もの間明るく燃え続けている集合意識です。神々はその一部です。彼らとその源であると言ええるかもしれません、少なくとも、「それらは非常に強く結びついているので、西洋文明がすべて消滅しない限り、消えることはありえないでしょう。火事はギリシャで始まりました。その後、あなたもよく知っているように、あるいは、あなたが私のコースを通過したので知っていると思いますが、」

「そして彼らは死んだ。」

「死んだ？ いいえ、西洋は死んだのか？ 神々は単にドイツに、フランスに、スペインに、しばらくの間移動しただけだ。炎が最も明るいところにはどこにでも、神々はそのにいた。彼らはイギリスで数世紀を過ごした。必要なのはすべてだ。やるべきことは建築物を見ることだ。人々は神々のことを忘れていない。過去 3000 年間、彼らが統治してきたあらゆる場所で、絵画や彫像、最も重要な建物に神を見ることができ。そしてそうだ、パーシー、もちろん、彼らは今あなたの米国にいます。あなたのシンボル、ゼウスの鷲を見てください。ロックフェラーセンターのプロメテウスの像、ワシントンの政府庁舎のギリシャ風のファサードを見てください。オリンピック選手が集まるアメリカの都市を見つけることはできません。好むと好まざるにかかわらず、多くの人はローマをそれほど好きではありませんでしたが、アメリカは今やその炎の中心です。それは西側の偉大な力です。オリンパスはここにいます、そして私たちはここにいます。」

それはあまりにも多すぎた、特に私がカイロンの私たちに含まれているように見えたという事実は、あたかも私であるかのようどこかのクラブの一員だった。

「ケイロン、あなたは誰ですか？ 誰…私は誰ですか？」

カイロンは微笑んだ。彼は車椅子から立ち上がろうとするかのように体重を移動しましたが、私はそれは不可能だと分かっていた。彼は腰から下が麻痺していました。

"あなたは誰ですか？"彼はこう考えた。「それは、私たち皆が答えたい質問ですよ？ でも今は、キャビン 11 の寝台を用意しましょう。新しい友達に会えるでしょう。そして、明日はレッスンの時間がたっぷりあります。それに、今夜はキャンプファイヤーでスモアを楽しみましょう、そして私は単純にチョコレートが大好きです。」

そして彼は車椅子から立ち上がった。しかし、彼のやり方には何か奇妙な点があった。毛布が足から落ちましたが、足は動きませんでした。彼のウエストはどんどん長くなり、ベルトの上まで上がっていました。最初、彼はとても長い白いベルベットの下着を着ているのだと思いましたが、男性よりも背が高く椅子から立ち上がり続けるうちに、そのベルベットの下着は下着ではないことに気づきました。それは動物の前面、粗い白い毛皮の下にある筋肉と腱でした。そしてその

車椅子は椅子ではなかった。それはある種のコンテナ、車輪のついた巨大な箱だった。それは魔法だったに違いない。なぜなら、それに彼のすべてを入れることは不可能だからだ。長くてこぶ状の膝をした脚が出てきて、磨かれた巨大なひづめがついていました。それからもう一つの前足、そして後肢、そして箱は空で、偽の人間の足が数本取り付けられた金属製の殻だけでした。

私は車椅子から飛び降りたばかりの馬、巨大な白い種牡馬を見つめました。しかし、その首があるべき場所には、私のラテン語の先生の上半身が馬に滑らかに移植されていました。

トランク。

「ホットしたわ」とケンタウロスは言いました。「長い間そこに閉じ込められていたので、球節が落ちてしまった眠っている。さあ、パーシー・ジャクソン。他のキャンパーに会いましょう。」

---

## 6 バスルームの至高の支配者になる

ラテン語の先生が馬だったという事実を乗り越えると、私は先生の後ろを歩かないように気をつけましたが、楽しいツアーになりました。私はメイシーズ感謝祭のパレードで何度かうんちすくいのパトロールをしたことがありますが、申し訳ありませんが、カイロンの前部を信頼するのと同じように後部を信頼していませんでした。

私たちはバレーボールのピットを通り過ぎました。キャンプ参加者の何人かが互いに小突いていた。一人が指摘したのは、持っていたミノタウロスの角。別の人は「あれは彼だ」と言いました。

キャンパーのほとんどは私より年上でした。彼らのサテュロスの友人たちはグローバーよりも大きく、全員がオレンジ色のCAMP HALF-BLOOD Tシャツを着て、むき出しの毛むくじゃらの後肢を覆うものを何も着ずに走り回っていた。私は普段は恥ずかしがり屋ではありませんでしたが、彼らが私を見つめる様子が不快でした。彼らは私がフリップか何かをすることを期待しているように感じました。

農家を振り返ってみました。それは私が思っていたよりずっと大きくて、4階建てで、空色に白の縁取りが施されており、まるで高級な海辺のリゾートのようだった。上部にある真鍮のワシ風見鶏をチェックしていたとき、何かが目に留まりました。それは、屋根裏部屋の切妻の一番上の窓に映る影でした。

ほんの一瞬、何かがカーテンを動かし、私は監視されているというはっきりとした印象を受けました。

「そこには何があるの？」シロンに聞いてみた。

彼は私が指さした方を見て、笑顔が消えました。「屋根裏部屋だけよ。」

「あそこに誰か住んでるの？」

「いいえ」と彼は最終的に言った。「生き物は一匹もいないよ。」

私は彼が誠実であると感じました。しかし、何かがそのカーテンを動かしたとも確信していました。

「一緒に来てよ、パーシー」シャイロンは、その陽気な口調が少し強引になったように言った。「見どころがたくさんあります。」

私たちはイチゴ畑を歩きました。そこではキャンパーたちがイチゴの実を摘んでいました。

サテュロスは葦管で曲を演奏しました。

カイロンは、キャンプではニューヨークのレストランやマウントに輸出するための素晴らしい作物を育てていたと語った。オリンパス。「それが私たちの経費を賄っているのです」と彼は説明した。「そしてイチゴにはほとんど手間がかかりません。」

彼によると、D氏は結実する植物にこのような影響を及ぼし、彼がいると植物は狂ってしまうのだという。これはワイン用ブドウに最適でしたが、D氏はワイン用ブドウの栽培を制限されていたため、代わりにイチゴを栽培しました。

私はサテュロスがパイプを演奏するのを見ました。彼の音楽は、火事から逃げる難民のように、イチゴ畑からあらゆる方向に虫の列を作りました。グローバーなら音楽でそんな魔法がかけられるのではないかと思った。まだ農家の中にいて、Dさんに噛み抜かれているのだろうか。

「グローバーならそれほど問題には巻き込まれないでしょうね？」シロンに聞いてみた。「つまり……彼は優れた守護者だったんだ。本当に」

カイロンはため息をついた。彼はツイードのジャケットを脱ぎ捨て、鞍のように馬の背中に掛けた。

「グローバーには大きな夢がある、パーシー。おそらく妥当以上に大きな夢を持っている。目標を達成するには、まずキーパーとして成功し、新しいキャンピングカーを見つけて、謎の丘に安全に連れて行くことで大きな勇気を示さなければならない。」

「でも彼はそれをやったんだ！」

「私もあなたに同意するかもしれませんが」とシャロンは言った。「しかし、それは私が判断する立場ではありません。ディオニュソスとクローヴン長老評議会が決定しなければなりません。彼らはこの任務が成功だとは考えていないのではないかと心配しています。」

結局のところ、グローバーはニューヨークであなたを失いました。それから、あなたのお母さんの不幸な...ああ...運命があります。そして、あなたが敷地境界線を超えてグローバーを引きずり込んだとき、彼は意識を失っていたという事実。これがグローバー氏の勇気を示しているかどうか評議会は疑問を呈するかもしれない。」

抗議したかった。起こったことはどれもグローバーのせいではありません。私も本当に本当に罪悪感を感じました。もし私がバス停でグローバーに伝票を渡さなかったら、彼はトラブルに巻き込まれなかったかもしれない。

「彼には二度目のチャンスがあるでしょう？」

カイロンは顔をしかめた。「残念ですが、あれはグローバーにとって二度目のチャンスでした、パーシー。五年前に一度目のことが起こった後、評議会も彼に次のチャンスを与えることに熱心ではありませんでした。オリンパスは知っています、私は彼に、もう一度挑戦する前にもっと待つようアドバイスしました。彼はそうです。年齢の割にまだ小さい...」

"彼は何歳ですか？"

「ああ、二十八歳ね。」

「えっ！しかも6年生？」

「サテュロスは人間の半分の速さで成長します、パーシー。グローバーはこの6年間中学生と同等でした。」

「それはひどいですね。」

「そうですね」とカイロンも同意した。「いずれにせよ、グローバーはサテュロスの基準から見ても遅咲きで、森の魔術に関してはまだまだあまり熟練していません。悲しいかな、彼は自分の夢を追い求めることに熱心でした。おそらく今は別のキャリアを見つけるでしょう...」

「それは不公平だ」と私は言いました。「最初に何が起こったのですか？本当にそんなにひどかったのですか？」

カイロンはすぐに目をそらした。「一緒に進みましょう？」

しかし、私にはその話題をやめさせる準備ができていませんでした。ケイロンが死という言葉を用意しているかのように母の運命について話したとき、私の心に何かが起こりました。の



アイデアの始まり、小さな希望に満ちた火が私の心の中に形成され始めました。

「カイロン」と私は言った。「もし神々とオリンポスとそのすべてが本物なら…」

「はい、子供？」

「ということは、冥界も実在するということですか？」

カイロンの表情が暗くなった。

「はい、子供よ。彼は慎重に言葉を選んでいるかのように立ち止まった。「霊が行く場所があるのですが、それを自分の中から消し死後。しかし、今のところは...もっと分かるまで。。。 てほしいと思います」

心。"

「『もっと分かるまで』ってどういう意味ですか？」

「さあ、パーシー。森を見に行きましょう。」

近づくにつれ、森がいかに広大であるかが分かりました。そこは谷の少なくとも4分の1を占めており、木々が非常に高く茂っており、ネイティブアメリカンの時代以来、誰もそこに入っていなかったことが想像できるほどでした。

シャロンは、「運試しをしたいなら森には物資がたくさんあるが、武装して行きなさい。」と言いました。

「何をストックしていますか？私は尋ねた。「何を武装してる？」

「わかるでしょう。旗をキャプチャーするのは金曜日の夜です。自分の剣と盾は持っていますか？」

「私の——？」

「いいえ」とカイロンは言った。「そうは思わないと思います。サイズ5で十分だと思います。後で武器庫に行ってみます。」

武器庫のあるサマーキャンプとはどんなものだったのか聞きたかったが、他に考えることが多すぎたのでツアーは続行した。私たちはアーチェリー場、カヌーができる湖、厩舎（カイロンはあまり好きではないようでした）、やり投げ場、合唱の円形競技場、そしてカイロンが剣と槍の戦いを行ったと言った闘技場を見ました。

「剣と槍の戦い？私は尋ねた。

「客室内での課題などすべて」と彼は説明した。「致命的ではありません。通常は。ああ、はい、それから、食堂。」

カイロンは、見下ろす丘の上にあるギリシャ風の白い柱で囲まれた屋外パビリオンを指さした。

海。石造りのピクニックテーブルが十数個ありました。屋根はありません。壁はありません。

「雨が降ったらどうしますか？私は尋ねた。

カイロンは私が少しおかしくなったかのように私を見た。「まだ食べなければなりませんね？私はその話題をやめることにしました。」

最後にキャビンを見せてもらいました。そのうちの12人は湖のほとりの森の中に佇んでいた。それらはU字型に配置され、基部に2つ、両側に5つずつ並べられていました。そしてそれらは間違いなく、私が今まで見た中で最も奇妙な建物群でした。

それぞれのドアの上に大きな真鍮製の数字（左側がオッズ、右側が偶数）が付いているという事実を除けば、それらはまったく似ていませんでした。ナンバーナインには小さな工場のような煙突がありました。4番目の家の壁にはトマトの蔓があり、屋根は本物の草で作られていました。セブンは純金でできていて、太陽の光を受けて見ることも不可能なほど輝いていました。彼らは皆、ギリシャの彫像、噴水、花壇、そしてバスケットボールのフープがいくつか点在する、サッカー場ほどの広さの共有地に面していました（私のスピードのほうが多かったです）。

野原の中央には石を並べた巨大な焚き火台がありました。暖かい午後だったにもかかわらず、囲炉裏はくすぶっていた。9歳くらいの女の子が棒で炭をつつきながら火の番をしていた。

野原の先頭にある1番と2番の2つの小屋は、正面に重い柱を備えた大きな白い大理石の箱のような、彼と彼女の霊廟のように見えました。キャビン1は12キャビンの中で最も大きく、最もかさばりました。磨かれた青銅のドアはホログラムのようにきらめき、さまざまな角度から見ると稲妻がドアを横切るように見えました。キャビン2は、ザクロや花で飾られた細い柱があり、どういふわけかより優雅でした。壁には孔雀の絵が彫られていました。

「ゼウスとヘラ？」推測しました。

「そのとおりです」とカイロンは言った。

「彼らの船室は空っぽのようだ。」

「いくつかのキャビンはそうです。それは本当です。1つや2つのキャビンに泊まる人はいません。」

わかった。つまり、各小屋にはマスコットのような異なる神様がいました。12人のための12のキャビンオリンピック選手。しかし、なぜ一部が空になるのでしょうか？

私は左側の最初のキャビン、第3キャビンの前で立ち止まりました。

キャビン1のように高くて力強いものではありませんでしたが、長く低く、しっかりしていました。外壁は、貝殻やサンゴの破片がちりばめられた粗い灰色の石でできており、まるで海底の底からまっすぐに切り出したかのようでした。私が開いた戸口の中を覗いてみると、ケイロンはこう言いました。

そんなことはしないでしょ！」

彼が私を引き戻す前に、私はモントークの海岸を吹く風のような、室内の塩辛い香りを感じました。内壁はアワビのように輝いていました。シルクのシーツが敷かれた空の二段ベッドが6つありました。しかし、そこには誰も眠った形跡はありませんでした。その場所はとても悲しくて寂しかったので、カイロンが私の肩に手を置いて、「パーシー、ついて来て」と言ってくれたときは嬉しかったです。

他のキャビンのほとんどはキャンピングカーで混雑していました。

5番目は真っ赤で、まるでバケツと拳で色を塗り重ねたかのような、実にひどい塗装でした。屋根には有刺鉄線が張り巡らされていました。出入り口にはイノシシの頭の剥製がぶら下がっており、その目は私を追っているようだった。中では、ロックミュージックが鳴り響く中、女の子も男の子も意地悪そうな子供たちが腕相撲をしたり言い争ったりしているのが見えました。一番騒がしかったのは、おそらく13歳か14歳くらいの女の子でした。彼女は迷彩柄のジャケットの下にサイズXXXLのCAMP HALF-BLOOD Tシャツを着ていました。彼女は私に焦点を当て、邪悪な嘲笑を与えました。彼女は私にナンシー・ポポフィットを思い出させましたが、キャンピングカーの女の子ははるかに大きくてタフな見た目、髪は長くてひも状で、赤ではなく茶色でした。

私はカイロンのひづめを避けながら歩き続けました。「私たちは他のケンタウロスを見たことがありません。」私は観察しました。

「いいえ」とケイロンは悲しそうに言った。「残念ながら、私の親族は野蛮で野蛮な民族です。あなたもそうかもしれません。自然の中で、あるいは大きなスポーツイベントで遭遇することもあります。しかし、ここでは何も見えません。」

「名前はケイロンって言ってたけど、ホントに……」

彼は私に微笑みかけた。「物語に出てくるケイロン？ヘラクレスとかの調教師？はい、パーシー、そうだよ。」

「でも、死んだほうがいいんじゃないの？」

ケイロンはまるでその質問に興味をそそられたかのように、立ち止まった。「正直、どうあるべきかは分からない。本当のことを言うと、私は死ぬことはできない。ほら、ずっと前に神々が私の願いを叶えてくれたんだ。私は大好きな仕事を続けることができた。私は英雄の教師になれるかもしれない。」

私は教師になることを三千年間考えていました。それは私のトップ10には入らなかっただろう  
欲しいもののリスト。

「飽きることはないですか？」

「いや、いや」と彼は言った。「ひどく憂鬱になることもあるが、決して退屈ではない。」

「なぜ憂鬱になるのですか？」

カイロンは再び難聴になったようだ。

「ああ、見てください」と彼は言いました。「アナベスが私たちを待っています。」

\*\*\*

ビッグハウスで会った金髪の女の子が左側の最後の小屋の前で本を読んでいた。  
11番。

私たちが彼女のところに着くと、彼女は私がどれだけよだれを垂らしたかについてまだ考えているかのように、私を批判的に見ました。

彼女が何を読んでいるのかを見ようとしたが、タイトルが分からなかった。私のディスレクシアが悪化しているのだと思いました。その後、タイトルが英語ではないことに気づきました。その文字は私にはギリシャ語に見えました。つまり、文字通りギリシャ語です。建築の本に載っているような寺院や彫像の写真、さまざまな種類の柱がありました。

「アナベス」シャロンは言った、「正午にアーチェリーのマスタークラスがあるのですが、パーシーをここから連れて行ってくれませんか？」

"かしこまりました。"

「キャビン11です」とシャロンは戸口の方を身振りで示しながら私に言った。「お寛ぎ下さい。」

すべてのキャビンのうち 11 キャビンが、古いことに重点を置いて、通常の古いサマーキャンプのキャビンに最もよく似ていました。敷居は磨耗し、茶色の塗装が剥がれていました。戸口の上には、医師のシンボルの 1 つである、二匹の蛇が巻きついた翼のある棒がありました。彼らは何をしたの  
あれを呼べ... ?カドゥケウス。

中には二段ベッドの数をはるかに上回る男女で賑わっていた。床には寝袋が敷き詰められていました。赤十字が避難所を開設した  
体育館のようだった。

ケイロンは入りませんでした。ドアが低すぎて彼には入りませんでした。しかしキャンプ参加者たちは彼を見て全員が  
立ち上がってうやうやしくお辞儀をした。

「それでは」とケイロンは言った。「頑張っってね、パーシー。夕食でお会いしましょう。」

彼はアーチェリー場に向かって疾走した。

私は玄関に立って子供たちを見ていました。彼らはもう頭を下げていませんでした。彼らは見つめていました  
私に向かって、私のサイズを測ります。このルーティンは知っていました。私は十分な学校でそれを経験しました。

"良い?"アナベスが促した。"続ける。"

だから当然のことながら、私は玄関に入るときにつまずいて、自分自身を完全に馬鹿にしまいました。いくつかありました  
キャンピングカーたちからは笑い声が上がったが、誰も何も言わなかった。

アナベスは「パーシー・ジャクソン、キャビン11に会う。」

「定期か未定？」誰かが尋ねた。

私は何と言えいいのか分かりませんでした。アナベスは「未定」と言いました。

誰もがうめきました。

他の人より少し年上の男性が前に出てきました。「さあ、さあ、キャンパーの皆さん。それがそれです」

私たちはそのためにここにいます。ようこそ、パーシー。あそこ、その床にその場所を置いてもいいよ。」

その男は19歳くらいで、とてもクールに見えました。彼は背が高く、筋肉質で、短く刈り込まれた砂っぽい髪と人懐っこい笑顔を浮かべていた。彼はオレンジ色のタンクトップ、カットオフ、サンダル、そして5つの異なる色の粘土ビーズが付いた革のネックレスを着ていました。彼の外見で唯一不安だったのは、右目のすぐ下から顎にかけて、まるで老人のような太い白い傷跡だった。

ナイフ斬り。

「これはルークです」とアナベスが言いました、そして彼女の声はどういうわけか違って聞こえました。私はちらっとこちらを見たが、彼女は顔を赤らめていたと断言できた。彼女は私が見ているのを見て、再び表情を硬くしました。「今のところ彼はあなたのカウンセラーです。」

"今のところ？"私は尋ねた。

「迷っているんですね」ルークは辛抱強く説明した。「彼らはあなたをどのキャビンに入れればよいか分からないので、あなたはここにいます。キャビンイレブンはすべての初心者、すべての訪問者を受け入れます。当然、私たちはそうするでしょう。私たちの後援者であるヘルメスは旅行者の神です。」

私は彼らが私にくれた床の小さな部分を見た。そこには自分のものであることを示すものは何もありませんでした。荷物も、衣服も、寝袋もありませんでした。まさにミノタウロスの角。やめておこうかと思ったが、ヘルメスは盗賊の神でもあることを思い出した。

私はキャンプ参加者の顔を見回しましたが、不機嫌で疑い深い人もいれば、愚かな笑みを浮かべている人もいました。まるで私のポケットを探る機会を待っているかのように私を見つめている人もいます。

「どれくらいここにいますか？」私は尋ねた。

「いい質問だね」ルークは言った。「決心するまでは。」

"それはどのくらいかかりますか？"

キャンパーたちはみんな笑った。

「さあ」アナベスは私に言った。「バレーボールコートをご案内します。」

「もう見たよ。」

"来て。"彼女は私の手首を掴んで外に引きずり出しました。小屋の子供たちの声が聞こえた

11人が私の後ろで笑っている。

私たちが数フィート離れたとき、アナベスは言いました、「ジャクソン、あなたはそれよりもっとうまくやらなければなりません。」

"何？"

彼女は目を丸くし、小声でつぶやいた、「あなたがその人だと思っていたなんて信じられない」

1つ。"

"あなたの問題は何ですか？"今、私は怒っていました。「私が知っているのは、私が雄牛を殺したということだけです——」

「そんなこと言わないでよ！」アナベスが私に言いました。「このキャンプに何人の子供たちがあなたのチャンスがあればよかったと願っているか知っていますか？」

「殺されるには？」

「ミノタウロスと戦うためです！ 私たちは何のために訓練すると思いますか？」

私は首を振った。「ほら、もし私が戦ったのが本当にミノタウロスだったとしたら、

物語…」

"はい。"

「じゃあ、一つしかないよ。」

"はい。"

「そして、彼は何十億年も前に亡くなりましたよね？テセウスは彼を迷宮で殺しました。それで…」

「モンスターは死なない、パーシー。殺されることもある。でも、彼らは死なない。」

「ああ、ありがとう。これで解決しました。」

「あなたや私のように、彼らには魂がありません。しばらくの間、運が良ければ一生にわたってそれらを払拭することができます。しかし、それらは根源的な力です。カイロンはそれらを元型と呼んでいます。」

結局、彼らは再結成するんだよ。」

私はドッズ夫人のことを考えました。「つまり、私が誤って剣で人を殺したとしたら—」

「毛皮は… つまり、数学の先生です。それは正しい。彼女はまだそこにいる。あなたは彼女をととても怒らせてしまったのです。」

「ドッズ夫人のことをどうやって知りましたか？」

「あなたは寝言を言います。」

「彼女を何かと呼ぶところでしたね。フューリー？彼らはハデスの拷問者ですよ？」

アナベスは、地面が開いて飲み込まれるのを予期していたかのように、緊張した面持ちで地面を見つめた。

「ここでも、彼らの名前を呼んではいけません。どうしても彼らのことを話さなければならないときは、私たちは彼らを親切な人たちと呼んでいます。」

「ほら、雷鳴を起こさずに何か言えることはある？」自分でも愚痴っぽく聞こえましたが、その時は気にしませんでした。「そもそも、なぜ私はキャンピング11に泊まらなければならないのですか？なぜみんながこんなに混んでいるのですか？あそこには空の寝台がたくさんあります。」

私が最初のいくつかの小屋を指さすと、アナベスは青ざめました。「キャンピングを選ぶだけではなく、パーシー。それはあなたの両親が誰であるかによって異なります。それとも……あなたの親です。」

彼女は私を見つめて、私がそれを受け取るのを待っていました。

「私のお母さんはサリー・ジャクソンです」と私は言いました。「彼女はグランドセントラル駅のキャンディーショップで働いています。」

少なくとも、彼女はかつてはそうでした。」

「パーシー、あなたのお母さんのことは残念です。でも、私が言いたいのはそういうことではありません。私はあなたのもう一人の親、あなたのお父さんのことを言っているのです。」

「彼は死んだ。私は彼のことを全く知らなかった。」

アナベスはため息をついた。明らかに、彼女は以前に他の子供たちとこのような会話をしたことがありました。「あなたのお父さんは死んではいません、パーシー」

「どうしてそんなことが言えるのですか？あなたは彼のことを知っていますか？」

「いいえ、もちろんそうではありません。」

「では、どうやって言えば—」

「私はあなたのことを知っているからです。あなたが私たちの一員でなければ、ここにはいないでしょう。」

「あなたは私のことを何も知りませんね。」

"いいえ？"彼女は眉を上げた。「きっと学校から学校へと転々としていたんでしょうね。きっとそうだったでしょうね」

彼らの多くから追い出されました。」

"どうやって-"

「ディスレクシアと診断されました。おそらくADHDでもあるでしょう。」

私は恥ずかしさを飲み込もうとしました。「それと何の関係があるの？」

「総合すると、それはほぼ確実な兆候です。読んでいると文字がページから浮き上がりますよね？」

それはあなたの心が古代ギリシャに組み込まれているからです。そして、ADHDは衝動的で、教室でじっと座ってられません。それが戦場での反射神経だ。実際の戦闘では、彼らはあなたを生かし続けるでしょう。注意力の問題に関しては、それはあなたが見すぎているからです、パーシー、少なすぎるではありません。あなたの感覚は普通の人間よりも優れています。もちろん、先生はあなたに薬を投与することを望んでいます。そのほとんどはモンスターです。彼らはあなたに彼らのありのままの姿を見てほしくないのです。」

「どうやら...あなたも同じことを経験したようですね？」

「ここにいるほとんどの子供たちはそうしました。もしあなたが私たちのようでなかったら、ミノタウロスから生き残ることはできなかったでしょう。ましてやアンブロシアやネクターなどは。」

「アンブロシアとネクター」

「私たちがあなたを元気にするためにあなたに与えていた食べ物と飲み物。そんなものは普通の子供なら死んでいたでしょう。それはあなたの血を火に変え、あなたの骨を砂に変え、あなたは死んでいたでしょう。顔。」  
それ。あなたは半純血なのよ。」

半純血。

質問が多すぎてどこから始めればよいのかわかりませんでした。

するとハスキーな声が「まあ！新人だ！」と叫びました。

私は見渡しました。醜い赤い小屋から来た大きな女の子が、私たちに向かって歩いてきました。彼女は3つ持っていました。彼女の後ろにいる他の女の子たちは皆、大きくて醜くて意地悪で彼女に似ていて、全員迷彩柄のジャケットを着ています。

「クラリス」アナベスはため息をついた。「槍か何かを磨きに行きませんか？」

「そうですね、プリンセスさん」と大きな女の子は言いました。「それでは金曜日の夜に説明させていただきます。」

「エレ・エス・コラス！」とアナベスが言いましたが、これはどういわけがギリシャ語で「に行きなさい」を意味するものだど理解しました。

カラス！しかし、それは思ったよりも悪い呪いであると感じました。「あなたにはチャンスがありません。」

「あなたを粉碎してあげます」とクラリスは言ったが、目がピクピクと動いた。おそらく彼女はできるかどうか自信がなかったのでしょう。脅しを最後までやり遂げる。彼女は私の方を向いた。「この小さな野郎は誰ですか？」

「パーシー・ジャクソン、アレスの娘、クラリスに会いましょう」とアナベスは言った。

私は瞬きました。「……軍神とか？」

クラリスは嘲笑した。「それで何か問題があるんですか？」

「いいえ、私は気を取り直して言いました。「悪臭の原因はこれで説明できます。」

クラリスはうなり声を上げた。「新人の入社式がありましたよ、プリシー」

「パーシー」

「何でもいいよ。さあ、見せてあげるよ。」

「クラリス——」アナベスは言おうとした。

「やめてください、賢いお嬢さん。」

アナベスは苦しそうな顔をしていましたが、彼女はそれを避けていました、そして私は彼女の助けを本当に望んでいませんでした。私は

新しい子。私は自分自身の代表者を獲得しなければなりませんでした。

私はアナベスにミノタウロスの角を渡し、戦う準備を整えましたが、気が付くとクラリスに首を掴まれ、コンクリートブロックの建物に向かって引きずり込まれていたのはすぐに分かりました。

バスルームだった。

蹴ったりパンチしたりしていました。私はこれまで何度も喧嘩をしてきたが、この大きな女の子クラリスは鉄のような手を持っていた。彼女は私を女子トイレに引きずり込みました。片側にトイレが並んでいた

そしてもう一方にはシャワー室の列が続いています。どこにでもある公衆トイレと同じような匂いがして、私はクラリスに髪をむしり取られながら思う限り、この場所が神のものなら、もっと高級なジョンを買う余裕があるはずだ、と思った。

クラリスの友達みんな笑っていて、私はこれまで戦ってきた強さを見つけようとしていた。

ミノタウロス、でもそこにはいなかった。

「まるで彼は『ビッグ・スリー』のような人だね」クラリスは私をトイレの一つに押しながら言った。

「そうだね。ミノタウロスはおそらく笑い転げただろう、とても愚かそうな顔をしていたんだ。」

彼女の友達は笑いました。

アナベスは隅に立って、指の間から見守っていました。

クラリスは私を膝の上にかがめて、私の頭を便器に向かって押し始めました。それは錆びたパイプのような、そしてまあ、トイレに入るような臭いでした。私は頭を上げ続けるために力を入れました。私はその汚水を眺めながら、これについては触れないでおこうと思いました。私はしません。

それから何かが起こりました。みぞおちが引っ張られるのを感じました。配管が鳴り響き、パイプが震える音が聞こえました。クラリスが私の髪を掴んでいた力が緩んだ。トイレから水が勢いよく流れ出て、私の頭上で真っ直ぐに弧を描き、次に気づいた時には、私はバスルームのタイルの上に大の字になり、後ろでクラリスが叫び声を上げていました。

ちょうどトイレから水が再び吹き出た瞬間、私が振り向くと、クラリスの顔に直撃し、彼女をお尻に押し付けるほどの強さでした。水は消防ホースからの水しぶきのように彼女の上に留まり、彼女をシャワー室に押し倒した。

彼女はあえぎながらもがき、友人たちが彼女に向かってやって来た。しかしその後、他のトイレも爆発し、さらに6つのトイレの水流がそれらを吹き飛ばしました。シャワーも異常をきたし、バスルームから出てきた迷彩服の女の子たちにすべての設備が一斉にスプレーをかけ、流されるゴミのように彼女たちを回転させた。

彼らがドアから出るとすぐに、私は腸の圧迫感が和らぎ、水が止まったのを感じました。

始まったときと同じようにすぐに。

バスルーム全体が水浸しになりました。アナベスは救われなかった。彼女は濡れになっていましたが、ドアの外に押し出されることはありませんでした。彼女はまったく同じ場所に立って、ショックを受けて私を見つめていました。

下を見ると、部屋全体で唯一乾いた場所に座っていることに気づきました。ありました

私の周りの乾いた床の輪。服には水一滴もつきませんでした。何も無い。

私は足が震えながら立ち上がった。

アナベスは「どうやって…」と言いました。

"わからない。"

私たちはドアまで歩いて行きました。外では、クラリスとその友達が泥の中に大の字になっていて、他のキャンパーたちが集まって眺めていた。クラリスの髪は顔全体で平らになっていた。彼女の迷彩ジャケットはびしょ濡れで、下水のような臭いがした。彼女は私に絶望的な憎しみの表情を向けました。「あなたは死んだ、新しい少年。あなたは完全に死んでいる。」

放っておけばよかったのかもしれないが、「またトイレの水でうがいをしたいのね」と言いました。

クラリス ?口を閉じて。"

彼女の友人たちは彼女を引き留めなければなりません。彼らは彼女を第5キャビンに向かって引きずり、一方、他のキャンピンはキャンパーたちは彼女のバタバタする足を避けて道を作った。

アナベスは私を見つめた。彼女が単に気分が悪くなったのか、それとも彼女に水を飲ませた私に怒ったのか、私にはわかりませんでした。

"何？"私は要求した。「何を考えているの？」

「私は、あなたを旗取りのチームに加えてほしいと考えています。」と彼女は言った。



---

7 私の夕食は煙に包まれて消えてしまう

トイレ事件の噂はすぐに広まった。どこに行っても、キャンパーたちは私を指差し、トイレの水について何かつぶやきました。あるいは、まだびしょ濡れのアナベスをただ見つめていたのかもしれない。

彼女はさらにいくつかの場所を私に見せてくれました：金属工場（子供たちが自分の剣を鍛造していた場所）、美術工芸品の部屋（サテュロスがヤギ人間の巨大な大理石の像をサンドブラストしていた場所）、そして実際にクライミングウォールでした。向かい合った2つの壁で構成されており、激しく揺れ、岩が落ち、溶岩が噴き出し、十分に早く頂上に到達しないとぶつかり合います。

最後に私たちはカヌーができる湖に戻り、そこから小道がキャビンに戻りました。

「トレーニングしなければならないことがある」とアナベスはきっぱり言った。「夕食は7時半です。指示に従ってください。」  
キャビンから食堂へ。」

「アナベス、トイレのことはごめんなさい。」

"何でも。"

「それは私のせいではありませんでした。」

彼女は私を懐疑的な目で見ましたが、私はそれが私のせいだと気づきました。浴室の備品から水を噴き出させてしまいました。やり方が分かりませんでした。しかし、トイレは私に反応しました。私は配管と一体になっていました。

「オラクルと話す必要がある」とアナベスは言った。

"誰が？"

「誰ではありません。何です。神託者です。カイロンに聞いてみます。」

私は誰かが一度だけはっきりと答えてくれることを願いながら、湖を見つめた。

誰も底から私を振り返ってくれるとは思っていなかったで、約20フィート下の栈橋の付け根にあぐらをかいて座っている2人の10代の女の子に気づいたとき、私の心臓は高鳴りました。彼らはブルー ジーンズときらめく緑色の T シャツを着ており、雑魚が入り込むたびに茶色の髪が肩のあたりでふわりと揺れていました。彼らはまるで私が遠い昔に別れた友人であるかのように、笑顔で手を振りました。

他に何をすればいいのかわかりませんでした。私は手を振り返した。

「彼らを奨励しないでください」とアナベスは警告した。「ナイアドはひどい浮気者だ。」

「ナイアド」と私は完全に圧倒されながら繰り返した。「それはそれです。もう家に帰りたいのです。」

アナベスは眉をひそめた。「分からないの、パーシー？あなたは家にいます。ここが地球上の唯一の安全な場所です」

私たちのような子供たちのための地球。」

「つまり、精神障害のある子供たちのことですか？」

「人間ではないということです。とにかく、完全に人間ではありません。半分は人間です。」  
「半分人間で半分何？」

"私はあなたが知っていると思います。"

認めたくなかったが、認めてしまうのが怖かった。私は手足にチクチクする感覚を感じました。母が父のことを話しているときに時々感じる感覚でした。

「神様」と私は言いました。「半神」。

アナベスはうなずいた。「あなたのお父さんは死んではいません、パーシー。彼はオリンピック選手の一人です。」

"それはクレイジーです。"

「そうですか？昔話の中で神々がした最も一般的なことは何ですか？彼らは人間と恋に落ち、子供を産んで走り回っていました。過去数千年の間に彼らの習慣が変わったと思いますか？」

「しかし、それらはただの——私はまた神話を口にしようになった。その時、私はカイロンの次の警告を思い出しました。

2000年も経てば、私は神話だと思われるかもしれない。「でも、もしここにいる子供たちが全員半神だったら——」

「半神たちよ」アナベスは言った。「それが正式な用語です。または半純血です。」

「それで、あなたのお父さんは誰ですか？」

彼女は棧橋の手すりを握り締めた。デリケートな話題に踏み入ってしまったような気がしました。

「私の父はウェストポイント大学の教授です」と彼女は言った。「私はとても小さい頃から彼に会っていませんでした。

彼はアメリカの歴史を教えています。」

「彼は人間です。」

「何ですか？人間の女性に魅力を感じるのは男性の神に違いないと思いますか？それはどれほど性的差別的ですか？」

「それで、あなたのお母さんは誰ですか？」

「キャビン6」

"意味？"

アナベスは背筋を伸ばした。「アテナ。知恵と戦いの女神。」

さて、私は思いました。なぜだめですか？

「それで私の父は？」

「未定です。前にも言ったように、誰も知りません。」とアナベスは言った。

「母を除いて。母は知っていました。」

「そうじゃないかもしれない、パーシー。神はいつも自分の正体を明らかにするとは限らない。」

「私の父もそうだったでしょう。彼は彼女を愛していました。」

アナベスは私に慎重な表情を浮かべた。彼女は私のバブルを破裂させたくなかった。"多分あなたは正しいです。

たぶん彼はサインを送るでしょう。それが確実に知る唯一の方法です。あなたの父親は、あなたを自分の息子であると主張するサインをあなたに送らなければなりません。しばしばそれは起こります。

「そうでない場合もあるということですか？」

アナベスは手のひらをレールに沿って走らせた。「神々は忙しいです。彼らにはたくさんの子供がいて、彼らはいつもそうとは限りません...まあ、時々彼らは私たちのことを気にしません、パーシー。彼らは私たちを無視します。」

私はエルメスの船室で見た何人かの子供たちのことを思い出しました。まるで来ることのない電話を待っているかのように、不機嫌で落ち込んでいるような十代の若者たちでした。私はヤンシーアカデミーでそのような子供たちを知っていました。彼らはお金持ちの両親によって寄宿学校に足を引きずり込まれましたが、時間がありませんでした。

彼らに対処してください。しかし、神はもっと良く行動するべきです。

「だから、ここで行き詰まってしまったんだ」と私は言った。「それで？一生？」

「それは状況によるよ」とアナベスは言った。「キャンパーの中には夏の間だけ滞在する人もいます。もしあなたがアフロディーテやデメテルの子供なら、あなたはおそらく本当の強大な力ではありません。モンスターはあなたを無視するかもしれませんが、それであなたは数か月の夏の訓練を乗り越えて暮らすことができます」一年の残りは定命の世界です。しかし、私たちの中には、そこから出るのが危険すぎる人もいます。私たちは一年中生きています。定命の世界では、私たちはモンスターを引き寄せます。彼らは私たちを感知し、私たちに挑戦しに来ます。そのうち、私たちが問題を起すのに十分な年齢になるまで、つまり10歳か11歳くらいになるまで、彼らは私たちを無視するでしょうが、それ以降は、ほとんどの半神はここにやって来るか、殺されるかのどちらかです。」

「それで、ここには魔物が入っていけないのですか？」

アナベスは首を振った。「意図的に森の中で、あるいは特別に飼育されている場合を除き、そうではありません」内部の誰かによって呼び出されました。」

「なぜ誰もがモンスターを召喚したいのですか？」

「喧嘩の練習。悪ふざけ。」

「悪ふざけ？」

「重要なのは、定命の者や怪物の侵入を防ぐために国境が封鎖されているということだ。外からは、人間たちが谷を覗いてみると、何も珍しいものはなく、ただイチゴ畑があるだけだった。」

「それで…あなたは年中さんですか？」

アナベスはうなずいた。彼女はTシャツの襟の下から、異なる色の粘土ビーズが5つ付いた革製のネックレスを取り出しました。それはルークのものと同様でしたが、アナベスのものもカレッジリングのような大きな金の指輪がぶら下がっていた点が異なりました。

「私は7歳の時からここにいます」と彼女は言いました。「毎年8月、サマーセッションの最終日に、もう1年生き延びると勲章が与えられます。私はほとんどのカウンセラーよりも長くここにいますし、彼らは全員大学生です。」

「なぜそんなに若くして来たのですか？」

彼女はネックレスの指輪をひねった。「大きなお世話。」

"おお。"私は不快な沈黙の中で一分間そこに立っていました。"それで ...

ここから歩いて出て行けばいいのに

したければ今すぐ？」

「それは自殺だろうが、ミスターDがカイロンの許可があれば自殺できる。だが彼らはそうはしないだろう」

...を除いて、夏期セッションが終了するまで許可を与えてください。」

"ない限り？"

「あなたにはクエストが与えられました。しかし、それはめったに起こりません。最後に...」

彼女の声は小さくなった。彼女の口調から、前회가うまくいかなかったことが分かりました。

「病室に戻って、あなたが私にそんなものを食べさせてくれたとき——」と私は言った。

「アンブロンシア。」

「ええ。夏至について何か質問されましたね。」

アナベスの肩が緊張した。「それで、何か知っていますか？」

「そうですね...いいえ。母校に戻って、グローバーとカイロンがそれについて話しているのを耳にしました。グローバーは夏至について言及しました。彼は、私たちにはあまり時間がないようなことを言いました。」

締め切り。それはどういう意味でしたか？」

彼女は拳を握り締めた。「知りたかったのですが、カイロンとサテュロスのことは知っていますが、私には教えてくれません。オリンパスで何かがおかしいのです。かなり重大な問題です。最後にそこにいたときは、すべてがとても普通に見えました。」

「オリンパスに行ったことはありますか？」

「私たち年中人間の中には、ルークとクラリスと私、そしてその他数名がいますが、冬至の時期に野外旅行に行きました。そのとき、神々は年に一度の大会議を開きます。」

「でも…どうやってそこへ来たの？」

「もちろん、ロングアイランド鉄道です。ペン駅で降ります。エンパイアステートビルディング、特別エレベーターで 600 階まで行きます。」彼女は私がそれをすでに知っているに違いないと確信しているかのように私を見つめました。「あなたはニューヨーカーですよ？」

"はい。"私の知る限り、エンパイアステートには 102 階しかありませんでした。構築中ですが、それについては指摘しないことにしました。

「私たちが訪れた直後に、」とアナベスは続けた、「まるで神々が戦いを始めたかのように天候がおかしくなりました。それ以来、何度かサテュロスの会話を耳にしました。私が理解できるのは、何か重要なものが盗まれたということだけです。」夏至までに返さないと大変なことになるよ君が来たときは期待してただけけど…

つまり、アテナはアレスを除いて、誰とでも仲良くなれるのです。そしてもちろん、彼女はポセイドンとのライバル関係を持っています。でも、それはさておき、一緒に仕事ができると思ったんです。あなたなら何か知っているかもしれないと思ったのよ。」

私は首を振った。彼女を助けられたらよかったのですが、お腹がすいて疲れていて、精神的に負担がかかりすぎて、それ以上質問することはできませんでした。

「クエストを受けないといけないんだ」アナベスは独り言のようにつぶやいた。「私は若すぎません。もし彼らがそうしてくれたら」問題を教えてください…」

近くからパーベキューの煙の匂いが漂ってきました。アナベスは私のお腹のうなり声を聞いたに違いありません。彼女は私に、続けて、後で捕まえるからと言った。私は彼女を棧橋に残し、まるで戦闘計画を描くかのように彼女の指でレールをなぞった。

キャビン11に戻ると、みんなが話したり、はしゃいだりして夕食を待っていました。多くのキャンパーが似たような特徴を持っていることに初めて気づきました。鋭い鼻、上向きの眉、いたずらっぽい笑顔などです。彼らは教師たちから問題児として釘付けにされるような子供たちだった。

ありがたいことに、私が床の上の自分の場所に歩いて行き、ミノタウロスの角を持って倒れ込んだとき、誰も私にあまり注意を払いませんでした。

カウンセラーのルークがやって来た。彼はエルメス家にも似ていた。右頬の傷跡は傷ついていたが、笑顔は健在だった。

「寝袋を見つけたよ」と彼は言った。「そしてここで、キャンプ用品店から洗面用具を盗みました。」

彼が盗みの部分について冗談を言っているのかどうかはわかりませんでした。

私は「ありがとう」と言いました。

"問題ありません。"ルークは私の隣に座り、壁に背中を押しつけました。「初日は大変ですか？」

「私はここに属していない」と私は言いました。「私は神すら信じていません。」

「そうだね」と彼は言った。「それが私たち全員の始まりです。一度彼らを信じ始めたら？ それは信じられませんもっと簡単に。」

ルークはとても気さくな男に見えたので、彼の声の苦みには私は驚きました。  
彼は何でも扱えるように見えた。

「それで、あなたのお父さんはエルメスですか？」私は尋ねた。

彼は尻ポケットから飛び出し刃を取り出した、そして一瞬、私は彼がそうするだろうと思った  
腹が立ったけど、彼はサンダル底についた泥をこすり落としただけだった。「そうだね、エルメス」

「翼足の使者野郎」

「それは彼です。メッセンジャー。薬。旅行者、商人、泥棒。道路を利用する人なら誰でも。だからあなたはここに来て、キャンピングレブンの  
もてなしを楽しんでいます。エルメスはスポンサーを選びません。」

ルークは私を無名者と呼ぶつもりはなかったと思いました。彼はただ頭の中でたくさんのことを考えていました。

「お父さんに会ったことはありますか？私は尋ねた。

"一度。"

彼が私に言いたければ言うてくれるだろうと思って待っていました。どうやら、そうではなかったらしい。その話は彼が傷を負った経緯と  
関係があるのではないかと思った。

ルークは顔を上げて笑顔を浮かべた。「心配しないで、パーシー。このキャンパーたちは、彼らだよ」  
ほとんどが良い人たち。結局のところ、私たちは大家族ですよ？私たちはお互いを大事にしています。」

彼は私がどれほど途方に暮れているかを理解していたようで、私はそのことに感謝しました。なぜなら、彼のような年上の男性は、たと  
えカウンセラーだったとしても、私のようなかっこ悪い中学生を避けるべきだったからです。

しかし、ルークは私を船室に迎え入れてくれました。彼は私に洗面用具をいくつか盗んでくれました。それは、一日中私にくれた中で一番  
嬉しいことでした。

私は彼に最後の大きな質問、午後中ずっと私を悩ませていた質問を尋ねることにしました。

「アレス出身のクラリスは、私が『ビッグ 3』の候補者であると冗談を言っていました。それからアナベスは…二度、私が『その人』かもしれ  
ないと言いました。」彼女はオラクルと話すべきだと言いました。それは一体何のことでしょうか？」

ルークはナイフを折りたたんだ。「私は予言が嫌いです。」

"どういう意味ですか？"

彼の顔は傷跡の周りでびくびく動いた。「言っておきますが、私は他のみんなにめちゃくちゃなことをしてしまいました。ここ二年間、  
ヘスペリデスの園への旅がうまくいかなくなって以来、カイロンはそれ以上の探求を許可しませんでした。アナベスは外の世界に出たくてたま  
らなかったのです。彼女は「ケイロンはあまりにもせがむので、ついに自分の運命はすでに知っている」と彼女に言いました。彼は神託から予言  
を受けていたのです。彼は彼女にすべてを話そうとはしませんでした。アナベスはまだ探求に向かう運命ではないと言いました。彼女はこう  
言いました。特別な人がキャンプに来るまで待たなければならなかった。」

「特別な人？」

「心配しないで、坊や」とルークは言った。「アナベスは、すべての新しいキャンパーが次のようなことをすることを考えたいと考えています。  
ここからやって来るのは、彼女が待ち望んでいた前兆だ。さて、夕食の時間ですよ。」

そう言った瞬間、遠くでクラクションが鳴り響いた。なんとなく、法螺貝だと分かったのですが、  
今まで聞いたこともなかったのに。

ルークは「イレブン、落ちろ！」と叫んだ。

小屋全体、私たち約20名は共有地の庭に整列しました。年功序列に並んでいたのが、当然私が最後でした。他のキャンピングからもキャンパ  
ーが来ていましたが、最後尾の3つの空のキャンピングと、昼間は普通に見えた第8キャンピングを除いて、日が落ちるにつれて銀色に輝き始めていま  
した。

私たちは丘を登って食堂パビリオンまで行進しました。サテュロスも草原から加わった。ナイアドはカヌーで湖から現れた。他にも何人  
かの女の子が森から出てきました。私が森からと言ったのは、森からそのまま出てきたという意味です。9歳か10歳くらいの女の子が溶けて  
いくのを見た

カエデの木の脇から飛び越えて丘を登っていきます。

全部でおそらく百人のキャンプ参加者、数十人のサテュロス、そして十数人のさまざまな木のニンフとナイアドがいました。

パビリオンでは大理石の柱の周りで松明が燃え上がりました。浴槽ほどの大きさの青銅の火鉢で中央の火が燃え上がりました。各キャンピングには、紫色のトリミングが施された白い布で覆われた専用のテーブルがありました。テーブルのうち4つは空でしたが、キャンピング11のテーブルは超満員でした。お尻が半分ぶら下がった状態でベンチの端につまなればなりませんでした。

私は、グローバーがミスターD、数人のサテュロス、そしてミスターDにそっくりな太った金髪の少年たちと一緒に12番目のテーブルに座っているのを見ました。シロンは片側に立っていて、ピクニックテーブルは小さすぎましたケンタウルスの場合。

アナベスは灰色の目をした真剣そうな運動神経のいい子供たちと一緒に6番テーブルに座っていたそしてハニーブロンドの髪。

クラリスはアレスのテーブルで私の後ろに座りました。彼女は友達のスグそばで笑い、げっぷをしていたので、どうやらホースで水をかけられたのを乗り越えたようだ。

最後に、カイロンがひづめをパビリオンの大理石の床に打ち付けたので、全員が倒れました。

静けさ。彼はグラスを上げた。「神々に！」

他の皆もグラスを上げた。「神々に！」

木の妖精たちは、ブドウ、リンゴ、イチゴ、チーズ、焼きたてのパン、そしてそう、バーベキューなどの食べ物の大皿を持って前に出てきました。私のグラスは空でしたが、ルークは「話しかけてください。何でもいいですよ、もちろんノンアルコールで」と言いました。

私は「チェリーコーク」と言いました。

グラスにはキラキラと輝くキャラメル液が満たされています。

それから私はアイデアを思いつきました。「ブルーチェリーコーク」。

ソーダは激しいコバルトの色合いに変わりました。

私は慎重に一口飲みました。完璧。

私は母に乾杯しました。

彼女はいなくなった、と私は自分に言い聞かせました。とにかく、永久ではありません。彼女はアンダーワールドにいます。で、もし

そこは本当の場所、そしていつか...

「どうぞ、パーシー」ルークはそう言って、燻製プリズケットの大皿を私に手渡しました。

私がお皿に盛り付けて、大食いしようとしたとき、みんなが立ち上がり、パビリオンの中央の火に向かって皿を運んでいるのに気づきました。デザートか何かを食べに行くのだろうかと思った。

「さあ」とルークは私に言った。

近づいてみると、みんなが食事の一部を取り、それを部屋に落としているのが見えました。

火、最も熱したイチゴ、最もジューシーな牛肉のスライス、最も温かくバターたっぷりのロールパン。

ルークが私の耳元でつぶやいた、「神々への燔祭。神々はその匂いが好きだ。」

"まさか。"

彼の視線は、これを軽視しないようにと私に警告しましたが、不死で全能の存在がなぜ食べ物が燃える匂いを好むのか疑問に思わずにはいられませんでした。

ルークは火に近づき、頭を下げ、太った赤ブドウの房を投げ入れました。「エルメス」

次は私でした。

神の名前が何と言うのか知りたかったです。

最後に、私は無言の訴えをしました。あなたが誰であっても、教えてください。お願いします。

私は胸肉の大きなスライスを炎の中にこすり落としました。

煙の匂いを嗅いだとき、私は吐き気を催さなかった。

食べ物が焦げたような匂いはしませんでした。ホットチョコレートと焼きたてのブラウニー、グリルで焼いたハンバーガーと野の花、そしてその他何百ものおいしいものの香りがした。神々があの煙で生きていけるのではないかと信じてしまうほどでした。

みんなが席に戻って食事を終えたとき、カイロンがドスンと音を立てた。

私たちの注意を引くために再びひづめを鳴らしました。

Dさんは大きなため息をつきながら立ち上がった。「そうだね、ガキども全員に挨拶したほうがいいと思うよ。まあ、こんにちは。私たちの活動ディレクターのシロンが、次の旗奪取は金曜日だと言っている。現在、キャビン5が栄冠を掴んでいる。」

アレスのテーブルから醜い歓声が上がった。

「個人的には」とD氏は続けた、「あまり気にすることはなかったけど、おめでとうございます。それから、今日は新しいキャンピングカーが来たことも伝えておかなければなりません。ピーター・ジョンソンです。」

カイロンが何かをつぶやいた。

「えーっと、パーシー・ジャクソン」とD氏が訂正した。「その通りです。万歳、そしてそれ以外はすべて。さあ、愚かなキャンプファイヤーに向かって走ってください。続けてください。」

誰もが歓声を上げた。私たちは皆、円形劇場に向かい、そこでアポロの船室が合唱を先導しました。私たちは神々についてのキャンプソングを歌い、スモアを食べ、冗談を言いましたが、面白いことに、もう誰も私を見つめているとは感じませんでした。家にいるような気がした。

夕方遅く、キャンプファイヤーの火の粉が星空へと舞い上がったとき、法螺貝の音が再び鳴り響き、私たちは全員列をなして小屋に戻りました。借りていた寝袋に倒れ込むまで、自分がどれほど疲れていたかわかりませんでした。

私の指はミノタウロスの角に巻きつきました。母のことを考えましたが、私は良いことを考えていました。母の笑顔、私が子供の頃に読んでくれた就寝時の物語、トコジラミに噛ませないよう母が私に教えてくれたこと。

目を閉じるとすぐに眠ってしまいました。

それがキャンプ半血の初日でした。

新しい家をどれだけ短期間で楽しめるか知っていたらよかったと思います。

---

## 8 旗を掴む

次の数日間、私はほぼ普通に感じられるルーチンに落ち着きました。



サテュロス、ニンフ、ケンタウロスからレッスンを受けていました。

毎朝、アナベスから古代ギリシャ語を聞き、神や女神について現在形で話しましたが、それはちょっと奇妙でした。私の失読症についてアナベスが正しかったことがわかりました。古代ギリシャ語は私にとって読むのがそれほど難しくありませんでした。少なくとも英語より難しいことはありません。

数朝経つと、あまり頭が痛むことなく、ホメロスの数行をつまずくように読み進めることができました。

残りの日は、自分の得意なことを探しながら、ローテーションで野外活動をしていました。

ケイロンは私にアーチェリーを教えようとしたが、私が弓矢の扱いが下手であることがすぐにわかった。流れ矢を尻尾から外さなければならなかったときでも、彼は文句を言わなかった。

徒競走？それもダメだ。木の精のインストラクターたちは私を置き去りにしました。彼らは私に、心配しないでくださいと言った。彼らは何世紀にもわたって、恋に悩む神々から逃げる練習をしてきたのです。それでも、木よりも遅いのは少し屈辱的でした。

そしてレスリング？忘れて。私がマットに上がるたびに、クラリスは私を粉碎しました。

「それがどこから来たのか、もっとあるよ、パンク」と彼女は私の耳元でつぶやいた。

私が本当に得意だったのはカヌーだけで、それは英雄的なスキルのようなものではありませんでした。人々はミノタウロスを倒した子供から見ることを期待していました。

先輩キャンプ参加者やカウンセラーが私を監視し、父が誰なのか判断しようとしていることはわかっていたのですが、彼らはそれを簡単に楽しんでいませんでした。私はアレスの子供たちほど強くはなく、アポロの子供たちほどアーチェリーが上手ではありませんでした。私にはヘパイストスのような金属加工の技術も、神が禁じているのですが、蔓植物に関するディオニュソスのような技術もありませんでした。ルークは、私がヘルメスの子、一種の何でも屋で何の達人でもないのではないかと言いました。しかし、彼はただ私の気分を良くさせようとしていただけだと感じました。彼も私をどう評価していいのかわかりませんでした。

それでも私はキャンプが好きでした。私はビーチにかかる朝の霧にも、午後の熱いイチゴ畑の匂いにも、そして夜の森の中でモンスターが出す奇妙な音にも慣れました。私はキャビンイレブンと一緒に夕食を食べ、食事の一部を火の中にかき集めて、本当の父親とのつながりを感じようとしていました。何も来ませんでした。いつも抱いていたあの温かい気持ち、まるで彼の笑顔の記憶のような。私は母のことをあまり考えないようにしていたが、もし神や怪物が現実存在するならば、もしこのような魔法のようなことが可能ならば、母を救い、連れ戻す方法はきっとあるはずだ、と考え続けた。

ルークの苦々しい気持ちと、彼が父親のヘルメスにどのように憤慨しているかを理解し始めました。そうですね、もしかしら神様には重要な用事があったのかもしれませんが。でも、たまに鳴ったり、雷が鳴ったりすることはなかったでしょうか？ディオニュソスなら、ダイエット コークをどこからともなく出現させることができるかもしれません。なぜ私の父は、誰でも電話を出現させることができなかったのでしょうか？

ハーブブラッドキャンプに到着してから3日後の木曜日の午後、私は初めての剣術のレッスンを受けました。キャビン11の全員が大きな円形のアリーナに集まりました。

私たちのインストラクターになります。

私たちはギリシャの甲冑を着たわらを詰めたダミー人形を使って、基本的な刺し傷から始めました。大丈夫だったと思います。少なくとも、私は何をすべきか理解していましたし、反射神経も良かったです。

問題は、私の手にぴたりと合う刃が見つからなかったことです。彼らもそうだったか

重かったり、軽すぎたり、長すぎたり。ルークは私を治すために最善を尽くしましたが、練習用のブレードはどれも私には効果がないようだということに同意しました。

ペアでの決闘に移りました。ルークは、これが私のものだから、彼が私のパートナーになると発表しました初めて。

「頑張ってるね」とキャンパーの一人が私に言った。「ルークは過去三百年で最高の剣士だ。」

「もしかしたら彼は私に気楽に接してくれるかもしれない」と私は言った。

キャンピングカーは鼻を鳴らした。

ルークは私に突き、受け流し、シールドブロックという困難な方法を見せてくれました。スワイプするたびに、私はさらにポロポロになり、あざができました。「気をつけろ、パーシー」と彼は言い、刃先で私の肋骨を殴りました。「いえ、そこまでではないですよ！」なんと！「突進！」なんと！「さあ、戻って！」なんと！

彼が休憩を告げる頃には、私は汗びっしょりになっていた。みんなドリンククーラーに群がりました。

ルークは氷水を頭にかぶせましたが、とても良いアイデアのように思えたので、私も同じことをしました。

すぐに気分が良くなりました。私の腕に力が戻ってきました。剣はそれほど違和感はありませんでした。

「はい、みんなで輪になって！」ルークは命令した。「パーシーがよろしければ、少しあげたいのですが」デモ。"

すごい、と思いました。みんなでパーシーが殴られるのを見てみましょう。

エルメスの人たちが集まってきました。彼らは笑顔を抑えていた。私は彼らが以前にも私の靴に入ったことがあると思い、ルークが私をサンドバッグとしてどのように利用するかを見るのが待ちきれませんでした。彼は武装解除のテクニックを実演するつもりだと皆に話した。それは、自分の剣の平部分で敵の刃をねじり、武器を落とさざるを得なくなる方法である。

「これは難しい」と彼は強調した。「私はこの技を自分に対して使われたことがあります。今はパーシーを笑わないでください。ほとんどの剣士はこの技術を習得するために何年も努力しなければなりません。」

彼はスローモーションで私に動きを見せてくれました。案の定、剣が私の体からカチャカチャと音を立てて飛び出した手。

私が武器を回収した後、「今はリアルタイムだ」と彼は言った。「どちらかが成功するまでスパーリングを続けます。準備はいいですか、パーシー？」

私がうなずくと、ルークが追いかけてきた。どういふわけか、私は彼が剣の柄で撃たれないようにしました。私の感覚は開かれました。彼の攻撃が来るのが見えた。私は反論した。私は前に出て、自分の突きを試みました。ルークは簡単にそれを逸らしたが、彼の顔が変わったのが見えた。彼の目は細められ、さらに強い力で私を圧迫し始めました。

剣は私の手の中で重くなった。バランスが正しくありませんでした。それはただの問題だと分かっていたルークが私を倒す数秒前に、私は思った、一体何だ？

武装解除作戦を試してみた。

私の刃がルークの根元に当たり、私は身をひねり、全体重を下向きに押し上げた。

カラン。

ルークの剣が石に当たってカタカタと音を立てた。私の刃の先端は彼の無防備なところまであと1インチのところにあった胸。

他のキャンパーたちは沈黙していた。

私は剣を下ろした。「あの、ごめんなさい。」

しばらくの間、ルークは啞然として何も言えなかった。

"ごめん?"彼の傷だらけの顔は笑みを浮かべた。「神様にかけて、パーシー、なぜごめんなさい?もう一度見せてください!」

したくなかった。一瞬の躁的エネルギーの爆発が私を完全に見放した。でもルークと主張した。

今回はコンテストはありませんでした。私たちの剣がつながった瞬間、ルークが私の柄を打ち、私の武器が床を横滑りさせました。

長い沈黙の後、聴衆の誰かが「ビギナーズラック?」と言いました。

ルークは額の汗を拭いた。彼は全く新しい興味をもって私を評価しました。

「そうかもしれない」と彼は言った。「しかし、パーシーがバランスの取れた剣で何ができるだろうか...」

金曜日の午後、私はグローバーと一緒に湖のほとりに座って、クライミングウォールでの臨死体験から休んでいました。グローバーはシロイワヤギのように頂上まで駆け上がったが、危うく溶岩に飲み込まれそうになった。私のシャツには喫煙穴がありました。前腕の毛が焼け落ちていました。

私たちは棧橋に座って、ナイアドたちが水中で籠を編むのを眺めていました。

勇気を出してグローバー氏にD氏との会話がどうなったのか尋ねてみた。

彼の顔は病的なほど黄色くなった。

「いいよ」と彼は言った。「ただ素晴らしい。」

「それで、あなたのキャリアはまだ順調ですか?」

彼は緊張した面持ちで私をちらっと見た。「カイロン、探索者のライセンスが欲しいって言ったよね?」

"うーん、ダメ。"探索者のライセンスが何なのか全く知りませんでした。質問する時期ではないようでした。「彼は、あなたには大きな計画があるとしました。ご存知の通り、キーパーの任務を完了するには単位が必要だと言いました。それで、わかりましたか?」

グローバーはナイアドたちを見下ろした。「ミスターDは判断を保留した。私はまだ失敗も成功もしていない、だから私たちの運命はまだつながっている、と彼は言った。もしあなたがクエストを受けて、私があなたを守るために同行し、そして私たち2人が生きて戻ってきたなら、おそらく彼は仕事が完了したと考えるだろう。」

気分が高揚しました。「まあ、それほど悪くないですね?」

「まあ、ははは!彼は私を厩舎の掃除当番に異動させたほうがよかったかもしれない。あなたがクエストを受ける可能性は…そして、たとえ受け取ったとしても、なぜ私を連れて欲しいのですか?」

「もちろん、一緒にいてほしいです!」

グローバーは不機嫌そうに水面を見つめた。「かご編み……便利なスキルがあるといいですね」

彼にはたくさんの才能があると私は彼を安心させようとしたが、それは彼をさらに惨めに見せるだけだった。

私たちはしばらくカヌーと剣術について話し、それからさまざまな神の良い点と悪い点について議論しました。最後に、私は彼に4つの空室について尋ねました。

「8番、銀の番はアルテミスのものだ」と彼は言った。「彼女は永遠に乙女でいると誓ったのです。だから、もちろん子供はいません。小屋は、ご存知の通り、名誉あるものです。もし子供がいなかったら、彼女は怒っていただろう。」

「ああ、わかった。でも、残りの三人、最後の人たち。あれがビッグスリーなの?」

グローバーは緊張した。私たちはデリケートな話題に近づいていました。「いいえ。そのうちの1つ、2番目がヘラのもんです」と彼は言った。「それもまた名誉なことだ。彼女は結婚の女神だから、当然定命の者たちと関係を持ち歩かなくてはならない。それが彼女の夫の仕事だ。私たちがビッグと言ったとき、

三人とは、力強い三人の兄弟、クロノスの息子たちを意味します。」

「ゼウス、ポセイドン、ハデス」

「そうです。ご存知の通り、ティターンズとの大いなる戦いの末、彼らは世界を征服しました。

お父さんとくじ引きをして、誰が何をもらうかを決めました。」

「ゼウスは空を手に入れた」と私は思い出した。「海はポセイドン、冥界はハデス」。

"うん。"

「しかし、ハデスにはここに小屋がありません。」

「いいえ、彼はオリンポスに王位を持っていません。彼は冥界で自分のことをしているようなものです。もし彼がここに小屋を持っていたら…」グローバーは震えた。「まあ、それは楽しくないでしょうね。それは置いておきましょう。」

「しかし、ゼウスとポセイドン、神話ではどちらも何十億もの子供がいました。なぜ彼らの小屋は空なのですか？」

グローバーは不快そうにひづめを動かしました。「約60年前、第二次世界大戦後、ビッグスリーはこれ以上英雄を生み出さないことに同意した。彼らの子供たちはあまりにも強力すぎた。彼らは人類の出来事にあまりにも大きな影響を与え、あまりにも多くの大虐殺を引き起こしていた。第二次世界大戦ご存知のとおり、それは基本的に一方の側でゼウスとポセイドンの息子たちと、もう一方の側でハデスの息子たちとの間の戦いでした。勝った側、ゼウスとポセイドンは、ハデスに彼らとの誓いを立てさせました。「定命の者とはもう関係ない」女性たちよ。彼らは皆、ステュクス川で誓ったのです。」

雷鳴が轟いた。

私は「それがあなたができる最も真剣な誓いです」と言いました。

グローバーはうなずいた。

「そして兄弟たちは約束を守りました。子供はいないのですか？」

グローバーの顔は暗くなった。「17年前、ゼウスが馬車から落ちました。80年代の大きなふわふわの髪型をしたテレビのスターがいたのですが、彼は我慢できなかったのです。子供が生まれたとき、タリアという名前の小さな女の子が生まれました。...そう、ステュクス川です」「ゼウスは約束を真剣に考えている。ゼウス自身は不死身なので楽だったが、娘に恐ろしい運命をもたらした」

「しかし、それは不公平です。」それは女の子のせいではありませんでした。」

グローバーは躊躇した。「パーシー、ビッグスリーの子供たちは他の混血よりも強力な力を持っています。彼らは強いオーラ、怪物を引き付ける香りを持っています。ハデスは女の子のことを知ったとき、ゼウスが誓いを破ることをあまり嬉しくありませんでした。ハデスはそうさせました」タリアを苦しめるタルタロスの最悪の怪物。彼女が12歳のとき、サテュロスが彼女の番人に任命されましたが、彼にできることは何もありませんでした。彼は、彼女が友達になった他の数人の混血たちとともに彼女をここへ護送しようとしていました。彼らはもう少しして着きました。あの丘の頂上までずっと着きました。」

彼は谷の向こう側、私がミノタウロスと戦った松の木を指さした。「親切な者たち三人が、ヘルハウンドの大群とともに彼らを追っていた。タリアがサテュロスに、怪物たちを阻止している間、残りの二匹の混血を安全な場所に連れて行くように言ったとき、彼らは制圧されそうになった。

彼女は傷つき、疲れていて、狩られる動物のように生きたくなかった。サテュロスは彼女から離れたくなかったが、彼女の考えを変えることはできず、他の人々たちを守らなければならなかった。こうしてタリアはその丘の頂上で一人で最後の抵抗を試みた。彼女が死ぬと、ゼウスは彼女を哀れみました。彼は彼女をあの松の木に変えました。彼女の精神は今でも谷の境界を守るのに役立っています。だからこそ、この丘は「謎の丘」と呼ばれているのです。

私は遠くの松を見つめた。

その話を聞いて私は空虚な気持ちになり、罪悪感も感じました。私と同じ年齢の女の子が友達を救うために自分を犠牲にしました。彼女は怪物の大軍勢と対峙していた。それに加えて、ミノタウロスに対する私の勝利は大したことではないようでした。もし私が別の行動をしていたら、母を救えただろうかと思いました。

「グローバー」と私は言った、「英雄たちは本当に冥界へ旅に出たのだろうか？」

「時々ね」と彼は言った。「オルフェウス。ヘラクレス。フーディーニ。」

「それで、彼らは誰かを死者の中から生き返らせたことがありますか？」

「いいえ、決して。オルフェウスが近づいてきました…。パーシー、あなたは真剣に考えていません。」

「いいえ」と私は嘘をつきました。「ちょっと疑問に思ったんですが…サテュロスは常に半神の護衛を任されるんですか？」

グローバーは用心深く私を観察した。私はアンダーワールドのアイデアを本当にやめたということを彼に説得していませんでした。

「いつもではありません。私たちは多くの学校に潜入します。私たちは偉大な英雄の資質を持つ混血を嗅ぎつけようとしています。ビッグスリーの子供のような非常に強いオーラを持つ人を見つけたら、私たちは警告します」シャロン。彼らは本当に大きな問題を引き起こす可能性があるため、彼は彼らを監視しようとしている。」

「そして、あなたは私を見つけてくれました。シャロンは、私が何か特別な存在かもしれないと思ったと言いました。」

グローバーはまるで私が彼を置にはめたかのような顔をした。「私はしませんでした…ああ、聞いてください、そんなふうに考えないでください。もしあなたが——ご存知のように——あなたがクエストを許可されることは決してないでしょうし、私がライセンスを取得することも決してないでしょう。あなたはおそらく、」

彼は私よりも自分自身を安心させているのだと思いました。

その夜の夕食後は、いつもよりもずっと興奮していました。

ついに、フラッグをキャプチャーする時が来ました。

お皿が片づけられると法螺貝の音が鳴り響き、私たちは皆テーブルに着きました。

アナベスさんと兄弟2人が絹の旗を持ってパビリオンに駆け込むと、キャンプ参加者らは叫び声を上げ、歓声を上げた。それは長さ約10フィートで、輝く灰色で、オリーブの木の上にメンフクロウの絵が描かれていました。クラリスとその仲間たちは、パビリオンの反対側から、同じ大きさだが派手な赤に血のついた槍と猪の頭が描かれた別の旗を持って走ってきた。

私はルークの方を向いて、物音をかき分けて叫びました、「あれは旗ですか？」

"うん。"

「アレスとアテナは常にチームを率いていますか？」

「いつもではありません」と彼は言った。「でもよくあるよ。」

「それで、別の船室がそれを捕らえたら、どうしますか？旗を塗り直すのですか？」

彼はニヤリと笑った。「わかるだろう。まずはそれを手に入れなければならない。」

「私たちはどちらの側にいますか？」

彼はまるで私が知らないことを知っているかのような、ずるい視線を私に向けました。彼の顔の傷は、たいまつ光の下で彼をほとんど悪人のように見せました。「私たちはアテナと一時的な同盟を結びました。今夜、私たちはアレスから旗を受け取ります。そしてあなたは協力するつもりです。」

出場チームが発表されました。アテナはアポロンとヘルメスという二大小屋と同盟を結んでいた。どうやら、サポートを得るために、シャワーの時間、家事のスケジュール、アクティビティに最適な時間枠などの特権が交換されていたようです。

アレスはディオニュソス、デメテル、アフロディーテなど他の全員と同盟を結んだ。

ヘバリストス。私が見た限りでは、ディオニュソスの子供たちは実際に優れた運動選手だったが、そのうちの2人だけだった。デメテルの子供たちは、自然のスキルやアウトドアのことに関しては優位に立っていましたが、あまり積極的ではありませんでした。アフロディーテの息子や娘については、あまり心配していませんでした。彼らはほとんどすべてのアクティビティを欠席し、湖に映る自分の姿を確認したり、髪を整えたり、噂話をしたりしていました。

ヘバリストスの子供たちはあまり可愛くなく、たったの4人でしたが、金属工場で一日中働いていたため、大きくてがっしりしていました。それらは問題になるかもしれません。もちろん、それでアレスの小屋から去ったのは、ロングアイランドでも地球上のどこでも、最も大きく、最も醜く、最も卑劣な十数人の子供たちでした。

カイロンは大理石に蹄を打ち付けた。

「英雄たちよ！」彼は発表した。「ルールは知っているでしょう。小川が境界線です。森全体が公正なゲームです。すべての魔法のアイテムが許可されています。旗は目立つように表示されなければならず、警備員は2名以下でなければなりません。囚人は武装解除することはできませんが、武装解除することはできません」

彼が両手を広げると、テーブルは突然ヘルメットや青銅などの道具で覆われた。

剣、槍、金属でコーティングされた牛皮の盾。

「おっと」と私は言いました。「本当にこれを使っていいのですか？」

ルークは私気が狂ったかのように私を見た。「友達に串刺しにされたくなければ、キャンプ5。ここに、ケイロンはこれらが当てはまると考えました。あなたは国境警備に参加することになります。」

私のシールドはNBAのバックボードほどの大きさで、真ん中に大きなカドゥケウスがありました。その重さは約100万ポンドでした。スノーボードは問題なくできたかもしれないが、誰も私が速く走ることを本気で期待していないことを願っていた。私のヘルメットは、アテナ側のすべてのヘルメットと同様に、上部に青い馬の毛の羽毛が付いていました。アレスとその仲間たちは赤い羽根を持っていました。

アナベスは「青チーム、前へ！」と叫んだ。

私たちは歓声を上げて剣を振り、彼女を追って南の森への道を下って行きました。の

赤いチームは北に向かって出発する私たちに向かって罵声を叫びました。

装備につまずくことなく、なんとかアナベスに追いつくことができました。"おい。"

彼女は行進を続けた。

「それで、計画は何ですか？私を尋ねた。「何か魔法のアイテムを貸してもらえませんか？」

まるで私が何かを盗んだのではないかと心配したかのように、彼女の手がポケットに向かって流れました。

「クラリスの槍を見てください」と彼女は言った。「そんなものに触れられたくないでしょう。そうでなければ、心配しないで。アレスからバナーを受け取ります。ルークはあなたに仕事を与えましたか？」

「国境警備、それが何を意味するにせよ。」

「簡単だよ。小川のそばに立って、赤を遠ざけなさい。あとは私に任せなさい。アテナにはいつも計画がある。」

彼女は私を塵の中に置き去りにして、先へ進みました。

「分かった。私はつぶやいた。「私をあなたのチームに加えてくれてよかった。」

暖かくてベタベタした夜だった。森は暗く、ホテルが見えたり消えたりしていました。

アナベスは、いくつかの岩の上をゴロゴロ流れる小さな小川の隣に私を配置し、それから彼女と残りのチームは木々の中に散り散りになりました。

大きな青い羽根のヘルメットと巨大な盾を持ってそこに一人で立っていると、私は自分が馬鹿になったように感じました。青銅の剣は、私がこれまで試したすべての剣と同様に、バランスが間違っているように見えました。革

グリップがボウリングの球のように私の手に引っ張られました。

誰かが実際に私を攻撃する方法はありませんよね？つまり、オリンパスには責任問題があったはずですよね？

遠くで法螺貝の音が鳴り響きました。森の中でヒューヒューと叫び声、金属のカチャカチャという音、子供たちの喧嘩が聞こえました。アポロからの青い羽をした同盟者が鹿のように私の横を駆け抜け、小川を飛び越えて敵地に消えていった。

すごい、と思いました。いつものように、楽しいことがすべて恋しくなるよ。

そのとき、どこか近くで、背筋がぞっとする音、低い犬のうなり声が聞こえました。

私は本能的に盾を上げた。何かが私を追いかけいているような気がしました。

すると、うなり声が止まりました。存在感が遠ざかっていくのを感じた。

小川の反対側では、下草が爆発した。五人のアレスの戦士が叫びながらやって来た  
暗闇から叫ぶ声。

「クリーム・ザ・パンク！」クラリスは叫んだ。

彼女の醜い豚の目はヘルメットの隙間からギラギラと光っていた。彼女は長さ5フィートの槍を振り回し、そのとげのある金属の先端が赤い光で点滅した。彼女の兄弟は標準発行の青銅の剣しか持っていませんでしたが、それでも私は気分が良くなりませんでした。

彼らは川を渡って突進した。助けが見えませんでした。走ることができました。あるいは擁護することもできる  
アレスの小屋の半分に対して私自身。

私は最初の子供のブランコをなんとか回避できましたが、彼らはミノタウロスほど愚かではありませんでした。

彼らは私を取り囲み、クラリスが槍で私を突き刺しました。盾が狙いを逸らしたが、体中にビリビリとした痛みを感じた。髪が逆立ってしまいました。盾の腕がしびれ、空気が燃えた。

電気。彼女の愚かな槍は電気を帯びていた。私は後ずさりしてしまいました。

別のアレスの男が剣の尻で私の胸を殴り、私は土に打ちつけました。

彼らは私をゼリーに蹴り込むこともできましたが、彼らは笑うのに忙しすぎました。

「髪を切ってあげて」とクラリスは言った。「彼の髪を掴んでください。」

なんとか立ち上がることができました。私は剣を振り上げましたが、クラリスは槍で剣を払いのけました。

火花が散るほどに。今では両腕がしびれているように感じました。

「ああ、すごいね」クラリスは言った。「この人が怖い。本当に怖い。」

「旗はそっちです」と私は彼女に言いました。怒っているように聞こえたかったが、そうではなかったのが怖かった。

「そうだよ」と彼女の兄弟の一人が言った。「でも、ほら、私たちは国旗なんて気にしてない。私たちが気にしているのは男のことだ」

私たちのキャビンを愚かに見せたのは誰ですか。」

「あなたは私の助けなしでそれをします」と私は彼らに言いました。おそらくそれは賢明な発言ではなかったでしょう。

そのうちの2人が私に向かって来ました。私は小川に向かって後退し、盾を上げようとしたのですが、クラリスは速すぎました。彼女の槍が私の肋骨に真っ直ぐ刺りました。鎧を着た胸当てをしていなかったら、シシケバブされていたでしょう。そのまま、電気の先端が私の口から歯を落とす寸前でした。彼女の同乗者の一人が私の腕に剣を切りつけ、かなりの傷跡を残しました。

サイズカット。

自分の血を見るときめまいがして、温かくもあり、同時に冷たくもなりました。

「怪我はしないよ」と私はなんとか言えた。

「おっと」と男は言った。「デザートの特権を失ったようだ。

彼は私を小川に押し込み、私は水しぶきとともに着地しました。彼らは皆笑った。彼らが面白がり終わったら、私はすぐに死ぬだろうと思いました。しかしその後、何かが起こりました。その水は私の感覚を目覚めさせ、まるで母が作ったダブルエスプレッソジェリービーンズを一袋飲んだかのように感じました。

クラリスと彼女の同乗者たちは私を迎えに小川に入ってきましたが、私は立って彼らを迎えました。何をすべきかはわかっていました。私は最初の男の頭に向かって剣の平部分を振り、彼のヘルメットをきれいに叩き落としました。私が彼を強く殴ったので、彼が水の中でくしゃくしゃになったとき、彼の目が震えているのが見えました。

醜い二号と醜い三号が私に向かってやって来ました。私は盾で一人の顔を殴り、剣を使ってもう一人の馬の毛の羽毛を切り落としました。二人ともすぐにバックアップしてくれました。アグリー ナンバー 4 はあまり攻撃する気には見えませんでした。クラリスは槍の先端をエネルギーでパチパチと音を立てて攻撃し続けました。彼女が突き出すとすぐに、私は盾の端と剣の間に柄を挟み込み、小枝のように折ってしまいました。

「ああ！」彼女は叫んだ。「馬鹿野郎！死の呼吸の虫め！」

おそらく彼女はもっとひどいことを言っただろうが、私は剣の尻で彼女の目の間を殴った。そして彼女をよろよろと小川から後ろ向きに送り出しました。

それから叫び声と高揚した叫び声が聞こえ、ルークが赤チームの旗を高く掲げて境界線に向かって急いでいるのが見えました。彼の側面にはヘルメス兵数名が退却を援護し、その後ろにはアポロ数名がヘパイストスの子供たちと戦っていた。アレスの人々が立ち上がると、クラリスは呆然と悪口を吐いた。

"トリック!"彼女は叫びました。「それはトリックでした。」

彼らはよろめきながらルークを追ったが、もう遅かった。ルークが味方の陣地に駆け込むと、全員が小川に集まった。私たちの側は大歓声に包まれました。赤い旗が輝いて銀色に変わった。イノシシと槍は、キャビンイレブンのシンボルである巨大なカドゥケウスに置き換えられました。青チームの全員がルークを抱き上げ、肩に担いで運び始めました。カイロンは森から駈歩して法螺貝を吹き鳴らした。

試合は終わった。我々は勝ったのだ。

私が祝賀会に参加しようとしていたとき、小川で私のすぐ隣にいたアナベスの声が「悪くないよ、英雄よ」と言った。

見ましたが、彼女はいませんでした。

「一体どこでそんな戦い方を覚えたの？」彼女は尋ねた。空気がきらめき、そして彼女はヤンキースの野球帽をまるで頭から外したかのようにかぶった姿で現れた。

私は自分自身が怒っているのを感じました。彼女が見えなくなってしまったという事実にも、私は動揺しませんでした。「あなたが私を仕組んだのよ」と私は言いました。「あなたが私をここに置いたのは、クラリスが私を追いかけてくると知っていたからで、その間にルークを側面に回らせたのです。あなたはすべてを理解していたのです。」

アナベスは肩をすくめた。「言ったでしょう。アテナにはいつも、いつも計画があります。」

「私を粉碎する計画です。」

「全速力で来ました。飛び込むつもりだったのですが…」と彼女は肩をすくめた。「助けは必要ありませんでした。」

すると彼女は私の腕の傷に気づきました。「どうやったの？」

「剣を切った」私は言った。「どう思いますか？」

「いいえ、剣で切られたんです。見てください」



血は消えていました。大きな切り傷があった場所には長く白い傷があり、それさえも薄れつつあった。見ていると、それは小さな傷となって消えていきました。

「わかりません」と私は言いました。

アナベスは一生懸命考えていました。歯車が回転するのがほとんど見えませんでした。彼女は私のことを見下ろした。そしてクラリスの折れた槍を目掛けて、「水から上がって、パーシー」と言いました。

"何-"

"やるだけ。"

小川から出てくると、すぐに骨が疲れたように感じました。腕がまたしびれ始めました。

私のアドレナリンラッシュは私から離れました。私は転びそうになったが、アナベスが支えてくれた。

「ああ、スティクス」と彼女は悪態をついた。「これは良くない。望んでいなかった... ゼウスだと思ってたけど……」

私が彼女の意味を尋ねる前に、また犬のうなり声が聞こえましたが、それよりはるかに近くでした。

前に。森を切り裂く遠吠え。

キャンプ参加者の声援は一瞬で消えた。カイロンは古代ギリシャ語で何か叫んだ、そして私はそれを言った

「準備ができて！私の弓！」と私が完全に理解していたことに後になって初めて気づきました。

アナベスは剣を抜いた。

私たちのすぐ上の岩の上に、溶岩のように赤い目と短剣のような牙を持った、サイほどの大きさの黒い猟犬がいました。

それは私をまっすぐに見つめていました。

「パーシー、逃げろ！」と叫んだアナベス以外は誰も動かなかった。

彼女は私の前に進もうとしましたが、猟犬は速すぎました。それは歯のある巨大な影で彼女を飛び越え、私が後ずさりしてそのかみそりのような鋭い爪が鎧を引き裂くのを感じたとき、それが私に当たったとき、40枚の紙が1枚ずつ引き裂かれるような、叩きつけるような音が連鎖的に聞こえました。次々に。猟犬の首から矢の束が生えた。怪物は私の足元に倒れて死んだ。

奇跡的に、私はまだ生きていました。引き裂かれた鎧の残骸の下を覗きたくなかった。胸が温かく湿っているように感じられ、ひどい傷を負っていることがわかりました。あと一秒あれば、怪物は私を100ポンドのデリカテッセンの肉に変えていただろう。

カイロンは手に弓を持ち、険しい顔で私たちの隣に小走りやって来た。

「不滅の者たちよ！」アナベスは言いました。「あれは懲罰の野からやって来たヘルハウンドだ。奴らはしないでください...彼らはそうするべきではありません...」

「誰かがそれを召喚したんだ」とカイロンは言った。「キャンプ内に誰かがいる。」

ルークがやって来たが、手に持っていた旗は忘れられ、栄光の瞬間は過ぎ去った。

クラリスは「全部パーシーのせいだ！パーシーが召喚したんだ！」と叫んだ。

「静かにしなさい、子供」シャロンは彼女に言いました。

私たちは、ヘルハウンドの体が影に溶けて、消えるまで地面に浸透するのを眺めました。

「あなたは怪我をしています」とアナベスは私に言いました。「急いで、パーシー、水に入ってください。」

"私は大丈夫ですよ。"

「いいえ、そうではありません」と彼女は言いました。「カイロン、これを見てください。」

議論するにはあまりにも疲れていた。私は小川に戻りました、キャンプ全員が私の周りに集まりました。

すぐに気分が良くなりました。胸の傷が塞がるのを感じた。キャンパーの中には

息を呑んだ。

「ほら、私――なぜだかわからないけど」と私は謝ろうとした。"ごめんなさい...."

しかし、彼らは私の傷が治るのを見ていませんでした。彼らは私の頭の上にある何かを見つけていました。

「パーシー」とアナベスは指差しながら言った。「えーっと…」

私が見上げたときには、標識はすでに薄れていましたが、まだ緑色の光のホログラムが回転して輝いているのが見えました。先端が三つある槍：トライデント。

「あなたのお父さん」アナベスがつぶやいた。「これは本当に良くないことです。」

「それは決まっています」とカイロンは宣言した。

私の周囲ではキャンピングカーがひざまずき始め、アレスのキャビンも含めて、幸せそうには見えなかったがそれについて。

"私の父？"私は完全に当惑して尋ねました。

「ポセイドン」カイロンは言った。「アースシェイカー、ストームプリンガー、馬の父、万歳、ペルセウス、海神の子、ジャクソン。」

---

## 9 クエストを提供されました

翌朝、カイロンは私を第3キャビンに移動させました。

誰も共有する必要はありませんでした。ミノタウロスの角、替えの服一式、洗面用具バッグなど、すべての持ち物を入れるのに十分なスペースがありました。私は自分の夕食のテーブルに座り、自分の行動をすべて自分で決め、気が向いたときにいつでも「消灯」を宣言し、他の誰の意見も聞かなくなりました。

そして私は本当に惨めでした。

私が受け入れられていると感じ始め、キャビン11に家があり、私は普通の子供であるかもしれないと感じ始めたとき、あるいは、混血であるときと同じくらい普通であるかもしれないと感じ始めたとき、私は次のように分離されました。もし私が珍しい病気を患っていた。

誰もヘルハウンドについて言及しませんでした。皆が私の陰でヘルハウンドについて話しているように感じました。その攻撃は皆を怖がらせた。それは2つのメッセージを送りました。1つは、私が海の神の息子であるということです。そして2つ目は、怪物は私を殺すために手段を選ばないということです。常に安全だと考えられていたキャンプに侵入することさえあり得る。

他のキャンパーたちはできるだけ私から遠ざかっていた。キャンビンイレブンは、私が森の中でアレスの人々にやったことの後、緊張のあまり私と一緒に剣のクラスを受けることができなかったので、ルークとのレッスンは一対一になった。彼はこれまで以上に私を強く押し、その過程で私に打撲傷を負わせることを恐れませんでした。

私たちが剣や燃えるたいまつを使って作業している間、彼は「できる限りの訓練が必要になるだろう」と約束した。「さて、あのマムシの斬首攻撃をもう一度やってみよう。あと50本」

の繰り返し。」

アナベスは朝も私にギリシャ語を教えてくださいましたが、気が散ったようでした。私が言うたびに何か、まるで私が彼女の目の間を突いたかのように、彼女は私をしかめました。

レッスンの後、彼女は独り言を言いながら立ち去った。「クエスト…ポセイドン？…汚い」腐った…計画を立てなければ…」

クラリスですら距離を置いていたが、その毒々しい表情からは魔法の槍を折った私を殺そうとしているのは明らかだった。彼女がただ叫ぶか殴るか何かをしてくれたらよかったのと思いました。無視されるくらいなら毎日喧嘩したほうがマシです。

キャンプの誰かが私を恨んでいるのはわかっていた。ある夜、私が小屋に入ると、メトロのページが開かれていて、戸口の中に落ちていた新聞、ニューヨーク・デイリー・ニュースのコピーを見つけたからである。怒りが高まるほど言葉がページ上を飛び交うようになったため、その記事を読むのにほぼ1時間かかりました。

### 少年と母親はその後も行方不明

#### 異常な自動車事故

アイリーン・スマイス著

サリー・ジャクソンと息子のパーシーは、謎の失踪から1週間経った今も行方不明だ。家族が所有していた大火傷した78年型カマロが先週土曜日、ロングアイランド北部の道路で屋根がはがれ、前車軸が折れた状態で発見された。車は横転し、数百フィート滑ってから爆発した。

母と息子は週末休暇でモントークへ出かけたが、不可解な状況で急いで出発した。車の中と事故現場付近で小さな血痕が発見されたが、他に行方不明のジャクソン夫妻の痕跡はなかった。農村部の住民は、事故当時、何も異常を感じなかったと報告した。

ジャクソンさんの夫ゲイブ・ウリアーノさんは、義理の息子パーシー・ジャクソンさんが問題児で、数々の寄宿学校から追い出され、過去に暴力的な傾向を示していたと主張している。

警察は息子パーシーが母親失踪事件の容疑者であるかどうかについては明らかにしていないが、犯罪行為の可能性は排除していない。以下はサリー・ジャクソンとパーシーの最近の写真です。

警察は、情報をお持ちの方は下記の無料犯罪防止ホットラインに電話するよう呼びかけています。

電話番号は黒いマーカーで囲まれていました。

私はその紙を丸めて捨て、誰もいない船室の真ん中にある二段ベッドに倒れ込みました。

「電気が消えた」私は惨めに自分に言い聞かせた。

その夜、私はこれまでで最悪の夢を見ました。

私は嵐の中、海岸に沿って走っていました。今度は私の後ろに街がありました。ニューヨークではありません。スプロールの様子は異なっていて、建物がより離れて広がり、ヤシの木や低い丘が遠くに見えました。

波を100ヤードほど下ったところで、二人の男が争っていた。彼らはテレビのレスラーのように見え、筋肉質で、ひげと長い髪を持っていました。二人とも、片方は青、もう片方は緑でトリミングされた、流れるようなギリシャ風チュニックを着ていました。彼らは組み合ったり、格闘したり、蹴ったり、頭突きをしたりし、そのたびに稲妻が光り、空が暗くなり、風が吹いた。

私は彼らを止めなければなりませんでした。理由は分かりませんでした。しかし、一生懸命走れば走るほど風に吹き飛ばされて、結局その場で走っていて、かかとが無駄に砂に食い込んでしまいました。

嵐の轟音の向こうで、青いローブを着た者が緑のローブを着た者に向かって「返せ！」と叫んでいるのが聞こえました。返して！まるでおもちゃの取り合いをする幼稚園児のようだ。

波はさらに大きくなり、ビーチに打ち寄せ、塩をかけられました。

私は「やめて！」と叫びました。争いをやめろ！

地面が揺れた。笑い声が地の底のどこかから聞こえてきて、とても深く、それは私の血を氷に変えました。

降りて来い、小さな英雄よ、その声はうなずいた。降りてくる！

砂は私の真下で割れ、地球の中心までまっすぐに裂け目が開きました。私の足が滑って、闇が私を飲み込んだ。

目が覚めた、確かに落ちていた。

私はまだ第3キャビンのベッドにいた。体は朝だと告げていたのに、外は真っ暗で、丘の上では雷が鳴り響いていました。嵐が吹き荒れていた。そんなことは夢にも思わなかった。

ドアを閉める音が聞こえ、ひづめが敷居をノックする音が聞こえました。

"お入りください？"

グローバーさんは心配そうに中を小走りに入った。「Dさんがあなたに会いたがっています。」

"なぜ？"

「彼は人を殺したいと思っています...つまり、彼に話させたほうがいいでしょう。」

私は緊張しながら服を着て後を追ったが、間違いなく大変な事態に陥っていた。

何日もの間、私はビッグハウスへの召喚を半分期待していました。子供を産むべきではなかった三大神の一人であるポセイダンの息子であると宣言された今、私は生きているだけで罪だと思いました。おそらく他の神々は、私が存在したことを罰する最善の方法を議論していたでしょう、そして今やミスターDは彼らの評決を下す準備ができていました。

ロングアイランド湾の上空は、まるで沸騰した墨汁のように見えた。かすんだ雨のカーテン私たちの方向に来ていました。私はグローバーに傘が必要かどうか尋ねました。

「いいえ」と彼は言った。「私たちが望んでいない限り、ここでは雨が降ることはありません。」

私は嵐を指差した。「それで、それは一体何ですか？」

彼は不安そうに空を眺めた。「それは私たちの周囲を通過するでしょう。悪天候はいつもそうなのです。」

彼が正しかったことが分かりました。私がここにいた一週間は一度も曇ったことがありませんでした。私が見たいいくつかの雨雲は、ちょうど谷の端の周りを迂回していました。

しかし、今回の嵐は大きかったです。

バレーボールピットでは、アポロの船室の子供たちがサテュロスと朝のゲームをしていました。ディオニュソスの双子はイチゴ畑を歩き回り、植物を成長させていました。

みんな普段通りの仕事をしていましたが、緊張した様子でした。彼らは目を離さなかった嵐。

グローバーと私はビッグハウスの正面玄関まで歩きました。ディオニュソスはピノクルに座っていた

彼は私の初日と同じように、タイガーストライブのアロハシャツを着てダイエットコークを飲みながらテーブルに着いた。シャロンは偽の車椅子に乗ってテーブルの向かい側に座っていた。彼らは目に見えない敵、つまり空中に浮かぶ2組のカードと対戦していました。

「まあ、まあ」とDさんは顔を上げずに言った。「私たちの小さな有名人よ。」  
待っていた。

「もっと近づいて」とDさんは言いました。「そして、私が年をとったからといって、定命の者よ、あなたにひれ伏すことを期待しないでください。」  
フジツボ・ピアードはあなたの父親です。」

雲の向こうに稲妻の網が走った。雷が家の窓を震わせました。

「なんとか、なんとか、なんとか」ディオニュソスは言った。

カイロンはピンクルカードに興味があるふりをしました。グローバーはひづめを鳴らしながら手ずりに縮こまっていた前後にクロッピング。

「もし私の思いどおりにできれば」とディオニュソスは言った、「私はあなたの分子を炎上させてやる。灰を掃き掃除すれば、多大な苦労はなくなるだろう。しかしケイロンは、それが私の使命に反すると感じているようだ。この呪われたキャンプ：君たちを危険から守るためだ。」

「自然発火は一種の危害です、ミスターD」とカイロンは言いました。

「ナンセンス」とディオニュソスは言った。「少年は何も感じないだろう。それでも、私は拘束することに同意した」  
私自身、代わりにあなたをイルカに変えて、父親の元に送り返そうと考えています。」

「ミスターD—」シャロンは警告した。

「ああ、分かった」ディオニュソスは折れた。「もう一つ選択肢があります。しかし、それは致命的な愚かさです。」

ディオニュソスが立ち上がり、目に見えないプレイヤーのカードがテーブルに落ちました。「緊急会議のためオリンパスへ行ってきました。戻ったときに少年がまだここにいるなら、彼を大西洋バンドゥンに変えてやります。わかりますか？ それからベルセウス・ジャクソン、もしあなたが少しでも賢いなら、あなたはそれが、シロンがあなたがしなければならぬと感じていることよりも、はるかに賢明な選択であることがわかるでしょう。」

ディオニュソスがトランプを手に取り、ひねると、それはプラスチックの長方形になりました。クレジット  
カード？いいえ、セキュリティパスです。

彼は指を鳴らした。

空気が彼の周りで折り畳まれて曲がっているように見えた。彼はホログラムになり、風になり、そして消え、搾りたてのブドウの香りだけが残りました。

カイロンは私に微笑みましたが、疲れていて緊張しているように見えました。「座ってください、パーシー、お願いします。それからグローバーも。」  
そうしました。

シャロンはテーブルの上にカードを置きましたが、彼はそれを使うことができませんでした。

「教えてよ、パーシー」と彼は言った。「ヘルハウンドについてどう思いましたか？」

名前を聞いただけでゾクゾクしてしまいました。

ケイロンはおそらく私に、「へー、そんなことは何でもない」と言いたかったのでしょう。私は朝食にヘルハウンドを食べます。しかし、私嘘をつく気がしなかった。

「怖かったよ」と私は言った。「あなたが撃っていないかったら、私は死んでいたでしょう。」

「パーシー、もっとひどい目に遭うことになるだろう。終わる前にもっとひどいことになるよ。」

「終わった…何で？」

「もちろん、あなたのクエストです。受けていただけますか？」

私はグローバーをちらっと見た。彼は指を組んでいた。

「ええと、先生」と私は言いました、「それが何なのかまだ教えてくださいませませんでした。」

カイロンは顔をしかめた。「そうですね、難しいのは細かい部分です。」

雷が谷にとどろきました。嵐の雲は今や浜辺の端まで達していた。

見渡す限り、空と海が沸騰していました。

「ポセイドンとゼウス」と私は言った。「彼らは大切なものを巡って争っているんです…盗まれたものですよね？」

シャロンとグローバーは顔を見合わせた。

シャロンは車椅子で前に座りました。「どうやってそれを知ったのですか？」

顔が熱く感じました。大きな口を開けなければよかった。「クリスマス以来、空と海が戦っているような奇妙な天気が続いています。それからアナベスに話しかけると、彼女は盗難について何かを聞いたそうです。そして…私もこのような夢を見ていました。」

「分かっていたよ」とグローバー氏は語った。

「黙ってろ、サテュロス」ケイロンは命じた。

「しかし、それは彼の探求なのです！」グローバーさんの目は興奮で輝いていた。「それは違うくない！」

「オラクルだけが判断できる。」ケイロンは剛毛のひげを撫でた。「それにもかかわらず、パーシー、あなたの言うことは正しい。あなたのお父さんとゼウスは、ここ数世紀で最悪の喧嘩をしている。彼らは盗まれた貴重なものをめぐって争っている。正確に言うと、稲妻だ。」

私は緊張して笑いました。「何？」

「これを軽く考えないでください」とカイロン氏は警告した。「私が話しているのは、小学2年生の劇で見るようなアルミ箔で覆われたジグザグのことではありません。両端が神レベルのキャップで覆われた、高品質の天の青銅でできた長さ2フィートの円筒のことです。』爆発物。」

"おお。"

「ゼウスのマスターボルトよ」ケイロンは興奮しながら言った。「彼の力の象徴であり、他のすべての稲妻のパターンとなっている。ティターンズとの戦争のためにサイクロプスによって作られた最初の武器、エトナ山の頂上を切り裂き、クロノスを玉座から投げ落としたボルト、マスターボルト、これには致命的な水爆を爆竹のように見せるのに十分なパワーが詰まっている。」

「それで、なくなったの？」

「盗まれたよ」とカイロンは言った。

"誰によって？"

「誰によって」とカイロンは訂正した。一度教師になったら、ずっと教師です。「あなたによって。」

口が開いてしまいました。

「少なくとも」——カイロンが手をかざした——「それがゼウスの考えだ。冬至の日、神々の最後の会議で、ゼウスとポセイドンは口論になった。よくあるナンセンス：『母なるレアはいつもあなたが一番好きだった』『航空災害は海難よりも壮絶である』など。

その後、ゼウスは自分のマスターボルトが行方不明であることに気付き、目と鼻の先にある玉座の間から持ち去られました。彼はすぐにポセイドンを非難した。さて、神は他の神の権力の象徴を直接奪うことはできません。これは最も古い神の法律によって禁止されています。しかしゼウスは、あなたの父親が人間の英雄を説得してそれを手に入れたと信じています。」

「しかし、私はしませんでした—」

「忍耐して聞いてください、子よ」とカイロンは言いました。「ゼウスが疑うには十分な理由がある。キュクロプスの鍛冶場は海の下にあり、そのためポセイドンは彼の製作者たちに何らかの影響を与えている」

兄の稲妻。ゼウスは、ポセイドンがマスターポルトを奪い、ゼウスを王座から引きずり下ろすために利用できる違法コピーの兵器庫を秘密裏にサイクロプスに建造させていると信じている。ゼウスが確信していなかった唯一のことは、どの英雄ポセイドンがポルトを盗んだかということでした。

今、ポセイドンはあなたを自分の息子であると公然と主張しています。あなたは冬休みの間ニューヨークにいました。オリンパスに簡単に忍び込むことができました。ゼウスは泥棒を見つけたと信じています。」

「でもオリンパスにすら行ったことないんだよ！ゼウスは頭がおかしいんだよ！」

カイロンとグローバーは緊張した面持ちで空を眺めた。グローバーが約束していたように、私たちの周りでは雲が切れているようには見えませんでした。彼らは私たちの谷の上をまっすぐに転がり、棺の蓋のように私たちを閉じ込めました。

「え、パーシー…？」グローバー氏は語った。「私たちは空の主を表現するのにワードを使いません。」

「おそらく偏執的なのでしょう」とカイロンは示唆した。「それからまた、ポセイドンは以前にゼウスの座を奪おうとしたことがあります。それはあなたの最終試験の質問38だったと思います…彼は、まるで私が質問38を覚えていることを実際に期待しているかのように私を見つめました。」

神の武器を盗んだとして私を非難する人がいるでしょうか？一片も盗めなかった逮捕されずにゲイブのポーカーパーティーからビザを食べた。カイロンは答えを待っていました。

「金の網について何か？」推測しました。「ポセイドンとヘラ、そして他のいくつかの神々…彼らは、ゼウスを閉じ込めて、より良い統治者になると約束するまで外に出さない、みたいな？」

「そのとおりです」とカイロンは言った。「そしてゼウスはそれ以来、一度もポセイドンを信用していません。もちろん、ポセイドンはマスターポルトを盗んだことを否定しています。彼はその告発にひどく腹を立てました。二人は何か月も言い争いを続け、戦争をちらつかせてきました。そして今、あなたもやって来ました——」ことわざにある最後の藁。」

「でも、私はただの子供です！」

「パーシー」グローバーが口を挟んだ、「あなたがゼウスで、兄が自分を転覆させようと企んでいるとすでに思っていたとしたら、兄は突然、第二次世界大戦後に交わした神聖な誓いを破ったことを認めた、自分は新たな人間の父親となったということだあなたに対する武器として使われるかもしれない英雄……それはあなたのトーガにひねりを加えないだろうか？」

「しかし、私は何もしませんでした。ポセイドン、私の父、彼は実際にはこのマスターポルトを盗んだわけではありませんね？」

カイロンはため息をついた。「思慮深い観察者のほとんどは、窃盗はポセイドンのスタイルではないことに同意するでしょう。しかし、海神はプライドが高く、ゼウスにそれを説得しようとはしません。ゼウスはポセイドンに夏至までにポルトを返すよう要求した。それは今から10日後の6月21日です。ポセイドンは同日までに泥棒呼ばわりされたことへの謝罪を求めている。私は外交が成功し、ヘラかデメテルかヘステアが二人の兄弟の気持ちを理解させることを望んでいた。しかし、あなたの到着はゼウスの怒りを引き起こしました。今ではどちらの神も引き下がることはありません。誰かが介入しない限り、マスターポルトが夏至前に見つかってゼウスに返されない限り、戦争が起こるだろう。それで、本格的な戦争がどのようなものになるか知っていますか、パーシー？」

"悪い？"推測しました。

「世界が混乱に陥っていることを想像してみてください。自然は自らと戦争状態にあります。オリンピック選手たちはゼウスとポセイドンのどちらの側につくかを選択することを迫られています。破壊、大虐殺、何百万人もの死者が出ています。西洋文明は、トロイア戦争が水風船のように見えるほど大きな戦場と化しました。戦い。」

「まずい」と私は繰り返した。

「そして、あなた、パーシー・ジャクソンは、ゼウスの怒りを最初に感じることになるでしょう。」

雨が降り始めた。バレーボール選手たちは試合を止めて、呆然と沈黙して空を見つめた。

私はこの嵐を謎の丘にもたらしたのだ。ゼウスは私のせいで陣営全体を罰していました。私は激怒しました。

「だから、あのバカなポルトを探さないといけななんだ」と私は言った。「そしてゼウスに返してください。」

「ポセイドンの息子にゼウスの財産を返還してもらうこと以上に良い和平案はないでしょうか？」とカイロンは言った。

「ポセイドンがそれを持っていないとしたら、それはどこにありますか？」

「私は知っていると思っています。」カイロンの表情は険しかった。「何年も前に私が抱いた予言の一部です...まあ、いくつかのセリフは今では私には理解できます。しかし、私がこれ以上言う前に、あなたは正式に探求を始めなければなりません。あなたは神託者の助言を求めなければなりません。」

「なぜ事前にポルトの位置を教えてくださいませんか？」

「もし私がそうしたら、あなたはその挑戦を受け入れるのが怖くなるからです。」

私は飲み込んだ。"正当な理由。"

「それでは同意しますか？」

私がグローバーを見ると、彼は励ますようにうなずいた。

彼にとっては簡単だ。ゼウスが殺そうとしたのは私だった。

「わかりました」と私は言いました。「イルカにされるよりはいいよ。」

「それなら、オラクルに相談する時が来ました」とカイロンは言った。「二階に行ってください、パーシー・ジャクソン、屋根裏。あなたが戻ってきたら、まだ正気だと仮定して、もっと話をしましょう。」

4階ほど上がったところで、階段は緑の落とし戸の下で終わりました。

紐を引っ張ってしまいました。ドアが勢いよく下がり、木の梯子がカタカタと音を立てて所定の位置に固定された。

上からの暖かい空気は、カビや腐った木のような臭いがしました...生物の授業で思い出した臭いです。爬虫類。ヘビの匂い。

息を止めて登りました。

屋根裏部屋にはギリシャの英雄のガラクタがいっぱいでした。鎧のスタンドはクモの巣に覆われていました。かつては輝いていた盾は錆で穴が開いた。古い革製の汽船のトランクには、「ITHAKA」「CIRCE'S ISLE」「LAND OF THE AMAZONS」と書かれたステッカーが貼られていた。長いテーブルの1つには、切り取られた毛むくじゃらの爪、巨大な黄色い目、その他モンスターのさまざまな部分など、漬物が入ったガラス瓶が積み上げられていました。壁に飾られた埃っぽいトロフィーは巨大なヘビの頭のように見えたが、角とサメの歯が生えていました。銘板には「HYDRA HEAD #1、ニューヨーク州ウッドストック、1969」と書かれていました。

窓際には、木製の三脚椅子に座った、最も恐ろしい遺品、ミイラがありました。布に包まれたようなものではなく、人間の女性の体が縮んで抜け殻になった。彼女は絞り染めのサンドレス、たくさんのビーズのネックレス、長い黒髪にヘッドバンドを着けていました。彼女の顔の皮膚は頭蓋骨の上で薄くて革のようで、目はガラスのように白く切れ長で、あたかも本物の目が大理石に置き換えられているかのようでした。彼女はずっと前に死んでいた。

彼女を見て背筋が寒くなった。それは彼女が椅子に座り、口を開ける前のことでした。緑色の霧がミイラの口から流れ出し、床に太い蔓でどぐろを巻き、2万匹のヘビのようにシューシュー音を立てた。落とし戸に行こうとしてつまずいてしまい、



しかし、ボタンと閉まりました。私の頭の中で、片方の耳に滑り込み、私の脳に巻き付く声が聞こえました。私はデルフィの霊であり、強力なニシキヘビを殺したフィーバス・アポロの予言の語り手です。近づいて、探して、尋ねてください。

私は言いたかった、「いいえ、ありがとう、ドアが間違っていました。ただトイレを探しているだけです。」しかし、私は自分に深呼吸を強制しました。

ミイラは生きていませんでした。彼女は何か別のもの、つまり今緑の霧の中で私の周りに渦巻いている力のある種のある種の恐ろしい容器でした。しかし、その存在は、私の悪魔の数学教師ドッズ夫人やミノタウロスのような邪悪なものとは感じませんでした。それは、高速道路の果物屋の外で糸を編んでいるのを見た、古代の、力強い、そして間違いなく人間ではない、3つの運命のように感じました。でも、私を殺すことに特に興味はありません。

私は勇気を出して「私の運命とは何ですか？」と尋ねました。

霧はさらに濃く渦巻き、私の目の前と、モンスターの部分の漬物瓶が入ったテーブルの周りに集まりました。突然、4人の男がテーブルの周りに座ってトランプをしていました。

彼らの顔はより鮮明になりました。それはスメルリー・ゲイブとその仲間たちだった。

このポーカーパーティーが現実のものであるはずがないことはわかっていたが、私の拳は握り締められました。それは幻想だった、作られた霧の中から。

ゲイブは私の方を向き、神託のようなかすれた声で言いました。「あなたは西へ行き、向きを変えた神と対峙しなければなりません。」

右にいる彼の友人は顔を上げて同じ声で言いました「盗まれたものはあなたが見つけるでしょう、そして無事に戻ってくるのを見てください。」

左側の男はポーカーチップを2枚投げ入れて、こう言いました。「あなたを友達と呼ぶ人には裏切られるでしょう。」

最後に、私たちの建築スーパーであるエディが最悪のセリフを言いました。「そして、あなたは救えないでしょう」結局何が一番大事なのか。

数字が溶け始めました。最初はびっくりして何も言えなかったが、霧が遠ざかり、巨大な緑色の蛇となつてとぐろを巻き、ミイラの口の中に滑り込んでいくと、私は叫んだ。保存する？"

ミイラの口の中にミストヘビの尻尾が消えた。彼女は壁にもたれかかりました。彼女の口は、まるで百年も開かれていなかったかのように、きつく閉じた。屋根裏部屋は再び静まり返り、見捨てられ、思い出の品でいっぱいの部屋だけが残っていました。

私もクモの巣ができるまでここに立っていても何も学べないと感じました。

オラクルとの謁見は終わりました。

"良い？"シロンが私に尋ねた。

私はピノクルテーブルの椅子に腰を下ろした。「彼女は盗まれたものを私が取り戻すとやった。」

グローバーさんは前に座り、ダイエット・コークの缶の残りを興奮して噛みしめた。「それは素晴らしいことです！」

「オラクルは正確に何と言ったのですか？」カイロンが押した。「これは重要。」

爬虫類の声で私の耳はまだチクチクしていました。「彼女は……私が西に行つて向かいましようと言いました」転じた神。盗まれたものを取り戻し、無事に戻ってくるのを確認します。」

「分かっていたよ」とグローバー氏は語った。

シロンは満足していないようだった。「他に何か？」

彼には言いたくなかった。

どの友人が私を裏切るでしょうか？そんなに多くはありませんでした。

そして最後の行は、最も重要なものを保存できなかったことになるでしょう。どのようなオラクルが送信されるか

クエスト中の私に言ってください、ああ、ところで、あなたは失敗するでしょう

どうしてそんなことを告白できるでしょうか？

「いいえ」と私は言いました。「それくらいです。」

彼は私の顔を研究しました。「わかりました、パーシー。でも、これだけは知っておいてください。神託の言葉にはしばしば二重の意味があります。あまり深く考えないでください。真実は、出来事が起こるまで必ずしも明らかではありません。」

彼は私が何か悪いことを我慢していることを知っていて、私を陥れようとしていたように感じました

気分が良くなった。

「分かった」と私は話題を変えたくて言った。「それで、どこに行けばいいですか？西の神様は誰ですか？」

「ああ、考えてみてよ、パーシー」シャロンは言った。「ゼウスとポセイドンが戦争でお互いを弱めたら、どちらが得をするでしょうか？」

「他に引き継ぎたい人はいますか？」推測しました。

「はい、そのとおりです。恨みを抱いている人、世界が大昔に分裂して以来自分の境遇に不満を抱いている人、その王国が何百万もの死者を出して強大になるだろう人。

もう子供を産まないという誓いを兄弟に強いたために兄弟を憎んでいる人物であり、その誓いは二人とも破られています。」

私は夢のこと、地下から聞こえてくる邪悪な声について考えました。「ハデス。」

カイロンはうなずいた。「ロード・オブ・ザ・デッドが唯一の可能性だ。」

グローバーの口からはアルミニウムの破片が流れ出た。「おい、待て。な、なに？」

「パーシーを追ってフューリーがやって来た」とシャロンは彼に思い出させた。「彼女は青年が死ぬまで見守った」

彼の身元を確信した後、彼を殺そうとしました。フューリーはただ一人の主、ハデスに従う。」

「はい、でも——でもハデスはすべての英雄を憎んでいます」とグローバーは抗議した。「特に彼が気づいた場合にはパーシーはポセイドンの息子です…」

「ヘルハウンドが森に入ってきました」とカイロンは続けた。「それらは懲罰の場からのみ呼び出すことができ、キャンプ内の誰かによって呼び出される必要がありました。ハデスはここにスパイがいるに違いありません。彼はポセイドンが自分の汚名を晴らすためにパーシーを利用しようとしているのではないかと疑っているに違いありません。ハデスはとても気に入っているでしょう、彼がクエストを引き受ける前に、この若い混血を殺すために。」

「すごい」と私はつぶやいた。「それは私を殺そうとしている二大神です」

「しかし、探求は…」グローバーは飲み込んだ。「つまり、マスターボルトはこんなところにあるのではないか？」  
メイン？この時期のメイン州はとってもいいですよ。」

「ハデスはマスターボルトを盗むために手下を送り込んだ」とカイロンは主張した。「彼はそれを冥界に隠しました。ゼウスがポセイドンを責めることをよく知っていたからです。死者の王の動機や、なぜこの時期に戦争を始めることを選んだのか、私は完全に理解しているつもりはありませんが、一つだけ確かなことはあります。パーシー」アンダーワールドに行き、マスターボルトを見つけて真実を明らかにしなければなりません。」

私のお腹の中で奇妙な火が燃え上がりました。最も奇妙なのは、それは恐怖ではなかったということです。それは期待でした。復讐の願望。ハデスはこれまでにフューリー、ミノタウロス、ヘルハウンドを使って三度私を殺そうとした。母が一瞬の光の中に消えたのは彼のせいだった。

今、彼は私と父に、私たちが犯していない窃盗の罪を着せようとしていたのです。

私は彼を受け入れる準備ができていました。

それに、もし母が冥界にいたら……。

おいおい、まだ正気だった私の脳の小さな部分がそう言った。あなたは子供です。ハデスは神です。

グローバーは震えていた。彼はピノクルカードをポテトチップスのように食べ始めた。

可哀そうな男は、それが何であれ、探索者のライセンスを取得できるように、私と一緒にクエストを完了する必要がありましたが、特にオラクルが私にこう言ったとき、どうやって彼にこのクエストを依頼できますか？

失敗する運命だったのか？これは自殺だった。

「ほら、それがハデスだとわかっているなら、どうして他の神々に言えないの？ゼウスか、それとも」と私はカイロンに言った。

ポセイドンが冥界に行って首を打ち砕くかもしれない。」

「疑うことと知ることは同じではない」とカイロン氏は語った。「それに、たとえ他の神々がハデスを疑っていたとしても——そしてポセイドンもそうしていると思いますが——彼らは自分たちでポルトを回収することはできませんでした。神々は招待されない限り、互いの領域を越えることはできません。これも古代のルールです。一方、英雄は」

「私が利用されているって言うんですか？」

「私が言っているのは、ポセイドンが今あなたを狙っているのは偶然ではないということです。これは非常に危険な賭けですが、彼は絶望的な状況にある。彼にはあなたが必要なのです。」

父は私を必要としている。

万華鏡の中のガラス片のように、感情が私の中で転がりました。憤りを感じるべきか、感謝を感じるべきか、それとも喜んでいいのか、それとも怒るべきなのかわかりませんでした。ポセイドンは12年間私を無視していました。今、突然彼は私を必要としたのです。

私はカイロンを見た。「あなたは私がポセイドンの息子であることをずっと知っていましたね？」

「疑念はありました。先ほども言いましたが…オラクルとも話しました。」

彼が自分の予言について私に言っていないことがたくさんあるような気がしましたが、私はそう決心しました。

今はそれを心配することはできませんでした。結局のところ、私も情報を隠していました。

「それでは、はっきりさせましょう」と私は言いました。「私は冥界に行って死者の王と対峙することになっている。」

「確認してください」とカイロンは言った。

「宇宙で最も強力な武器を見つけてください。」

"チェック。"

「そして10日後の夏至までにオリンパスに戻してください。」

「その通りです。」

私はハートのエースを飲み干したグローバーを見た。

「メイン州はこの時期とても素敵だと言いましたか？」彼は弱々しく尋ねた。

「行かなくてもいいよ」と私は彼に言いました。「あなたにはそんなことは聞けません。」

「ああ…」彼はひづめを動かしました。「いえ…それはサテュロスと地下の場所だけです…そうですね…」

彼は深呼吸してから立ち上がり、Tシャツについた細断されたカードやアルミの破片を払い落としした。「あなたは私の命を救ってくれました、パーシー。もし落ち込んでいたら。」

… もしあなたが本気で私を連れて行きたいと思っているなら、私はあなたを許しません

とても英雄的なことだとは思っていませんでしたが、泣きたくなるほど安心しました。グローバーは

数か月以上付き合っていた唯一の友人。サテュロスが死者の力に対して何が出来るかは分かりませんが、彼が私と一緒にいてくれると思うと気が楽になりました。

「ずっと、Gマン。」私はカイロンの方を向いた。「それで、どこに行きましょうか？神託がちょうど行くように言ったのです」西。」

「冥界への入り口はいつも西にある。それはまるで、時代から時代へと移っていく。オリンパス。もちろん今はアメリカにいるよ。」

"どこ？"

ケイロンは驚いた顔をした。「それは明らかだと思いました。アンダーワールドはロサンゼルスにある。」

「ああ」と私は言いました。「当然だ。だから飛行機に乗るだけだ——」

"いいえ！"グローバーは金切り声を上げた。「パーシー、何を考えているの？人生で飛行機に乗ったことがありますか？」

私は恥ずかしくて首を振った。母は私を飛行機でどこにも連れて行ったことがありませんでした。彼女はいつも私たちにはお金がないと言っていました。しかも彼女の両親は飛行機事故で亡くなっていた。

「パーシー、考えてみて」とシャロンが言った。「あなたは海の神の息子です。あなたの父親の最も激しいライバルは空の主ゼウスです。あなたの母親はあなたを飛行機に乗せるよりも賢明でした。あなたはゼウスの領域に入らねばなりません。あなたは二度と生きて降りてくることはできませんでしょう。」

頭上で稲妻がパチパチと鳴った。雷鳴が轟いた。

「分かった。私は嵐を見ないことに決めて言った。「それでは、陸路で旅行に行きます。」

「その通りです」とカイロンは言った。「同行者は2人です。グローバーは1人です。もう1人は、彼女の助けを受け入れていただければ、彼女はすでに志願しました。」

「へー」と私は驚いたふりをして言った。「探求に志願するほど愚かな人が他にいるだろうか」このような？"

カイロンの後ろでは空気がきらめいていた。

アナベスが姿を現し、ヤンキースのキャップを後ろポケットに押し込んだ。

「私は長い間クエストを待っていました、海藻の脳」と彼女は言いました。「アテナはポセイドンのファンではありませんが、あなたが世界を救うつもりなら、私はあなたを台無しにしないようにするのに最適な人物です。」

「あなた自身がそう言うなら」と私は言いました。「何か計画があると思うよ、賢いお嬢さん？」

彼女の頬は色づいた。「私の助けが必要ですか？」

実を言うと、私はそうでした。できる限りの助けが必要でした。

「トリオだよ」と私は言った。「それはうまくいきます。」

「素晴らしいよ」とカイロンは言った。「今日の午後、バスターミナルまでお送りします」マンハッタン。その後は、あなたは独り立ちです。」

稲妻が光りました。降るはずのない草原に雨が降り注いだ。激しい天気。

「時間を無駄にすることはできません」とシャロンは言った。「皆さんも荷物をまとめたほうがいいと思います。」

---

## 10 完璧に良いバスを台無しにしまった

梱包するのにそれほど時間はかかりませんでした。私はミノタウロスの角を船室に置いていくことにしたので、残ったのはグローバーが見つけてくれたバックパックに詰める余分な着替えと歯ブラシだけでした。

キャンプ店は私に死すべきお金で100ドルと金のドラクマ20枚を貸してくれました。

これらのコインはガールスカウトのクッキーと同じくらい大きく、片面にはさまざまなギリシャの神々、もう片面にはエンパイアステートビルが刻印されていました。古代の定命のドラクマは銀であったが、オリンピック選手は純金以下を決して使用しなかった、とカイロンは語った。シャロン氏は、このコインは、それが何を意味するにせよ、非死生的な取引に役立つかもしれないと語った。彼はアナベスと私にそれぞれ、花蜜の入った水筒と、アンブロシアの四角形が入ったジップロックの袋を渡しました。これは、私たちが重傷を負った場合の緊急時にのみ使用するものでした。それは神の食べ物だった、とカイロンは思い出させてくれた。それは私たちの怪我をほとんど治してくれるでしょうが、定命の者にとっては致命的でした。多すぎると、半純血は非常に高熱になります。過剰摂取は文字通り火傷してしまいます。

アナベスは魔法のヤンキースキャップを持ってきていて、それは母親からの12歳の誕生日プレゼントだったそうです。彼女は、退屈したときに読むために古代ギリシャ語で書かれた有名な古典建築に関する本と、長い青銅のナイフをシャツの袖に隠していました。初めて金属探知機を通過したとき、ナイフで逮捕されると確信していました。

グローバーは人間として過ごすために偽の足とズボンを履いていた。彼は緑のラスタ風の帽子をかぶっていたが、それは雨が降ると巻き毛がペしゃんこになってしまい、角の先だけが見えてしまうからだ。彼の明るいオレンジ色のバックパックには金属くずと軽食のリンゴがいっぱい入っていました。彼のポケットには、父ヤギが彼のために彫ってくれたリードパイプのセットが入っていたが、彼は2曲しか知らなかった。モーツァルトのピアノ協奏曲第2番。12とヒラリー・ダフの「ソー・イエスタデイ」はどちらもリードパイプではかなりひどい音でした。

私たちは他のキャンパーに手を振り、別れを告げ、イチゴ畑、海、ビッグハウスを最後に見てから、ハーフブラッドヒルを登り、かつてゼウスの娘タリアだった高い松の木まで歩きました。

シロンは車椅子に乗って私たちを待っていました。彼の隣には、私が病室で療養していた時に見たサーファーの男が立っていた。グローバー氏によると、その男は収容所の警備責任者だったという。

彼は体中に目があったので決して驚かないと思われます。しかし、今日、彼は運転手の制服を着ていたため、手、顔、首に余計な痕跡しか見えませんでした。

「こちらはアルガスです」とカイロンは私に言いました。「彼は君を街へ追いやってくれるだろう、それで、まあ、様子を見守っていてね。」

私たちの後ろから足音が聞こえました。

ルークはバスケットボールシューズを持って丘を駆け上がってきました。

"おい!"彼は喘ぎました。「捕まえられてよかった。」

アナベスは、ルークがそばにいたときと同じように顔を赤らめた。

「幸運を祈りたかっただけです」とルークは私に言いました。「そして私は考えました...ええと、おそらくあなたは使うことができますこれら。」

彼は私にスニーカーを手渡しましたが、それはごく普通に見えました。匂いも普通に感じました。

ルークは「マイア！」と言いました。

かかとから白い鳥の羽が生えてきてびっくりして、かかとを落としてしまいました。その靴翼が折りたたまれて消えるまで、地面で羽ばたきました。

"素晴らしい！"グローバー氏は語った。

ルークは微笑んだ。「それらは、私が探求をしていたときによく役に立ちました。父からの贈り物です。もちろん、私は最近あまり使わないね……」と悲しそうな表情になった。

何を言えばいいのか分かりませんでした。ルークが別れを告げに来たのはとてもクールだった。ここ数日、私が注目を集めすぎて彼が怒るのではないかと心配していました。しかし、ここで彼は私に魔法の贈り物をくれました...それは私をアナベスと同じくらい赤面させました。

「やあ、おい」と私は言った。「ありがとう。」

「聞いて、パーシー…」ルークは不快そうな顔をした。「あなたにはたくさんの希望がかかっています。だからただ...私の代わりにモンスターを殺してくれ、いい？」

私たちは握手をしました。ルークはグローバーの角の間で頭を撫で、それから別れのハグをした。気を失いそうなアナベス。

ルークがいなくなった後、私は彼女に「過呼吸になってるよ」と言いました。

"ないです。"

「あなたの代わりに彼に旗を取らせたいですね？」

「ああ...なぜ私はあなたと一緒にどこにでも行きたいのですか、パーシー？」

彼女は丘の反対側を踏みしめると、白いSUVが車の路肩で待っていた。

道路。アーガスも車のキーをジャラジャラ鳴らしながら追いかけた。

フライングシューズを手にとったとき、突然嫌な予感がした。私はカイロンを見た。「これは使えないんですね？」

彼は頭を振った。「ルークは良いつもりだったんだ、パーシー。でも、君のために空へ飛んでくれたんだ。」...それは賢明ではないでしょう

私はうなずき、がっかりしましたが、そこでアイデアを思いつきました。「ねえ、グローバー。魔法のアイテムが欲しいの？」

彼の目は輝いた。「自分？」

すぐに私たちは彼の偽りにスニーカーの紐を結び、世界初の空飛ぶヤギ少年は発射の準備が整いました。

「マイア！」彼は叫びました。

彼は無事に地面に降りましたが、その後横に倒れてしまい、バックバックが草の上を引きずってしまいました。翼のついた靴は小さなブロンコのように上下に跳ね続けた。

「練習しなさい」シャロンが彼の後を呼んだ。「練習するしかないよ！」

「ああああ！」グローバーは取り憑かれた芝刈り機のように丘を横向きに飛び降り、バンに向かっていった。

私が後を追う前に、カイロンが私の腕を捕まえた。「もっとよく訓練しておけばよかった、パーシー」  
言った。「もっと時間があればなあ。ヘラクレスもジェイソンも、みんなもっと訓練を受けたんだよ。」

「大丈夫です。ただ願うだけです——」

ガキみたいに聞こえそうになったので、自分で止めました。私は父がクエストに役立つ素敵な魔法のアイテム、ルークの空飛ぶ靴やアナベスの見えない帽子と同じくらい優れたものをくれたらよかったのにと感じていました。

「私は何を考えているのですか？」シロンは叫んだ。「これなしではあなたを逃がすことはできません。」

彼はコートポケットからペンを取り出して私に渡しました。普通の使い捨ての

ボールペン、黒インク、取り外し可能なキャップ。おそらく30セントかかりました。

「やあ」と私は言った。「ありがとう。」

「パーシー、それはあなたのお父さんからの贈り物です。あなたが私が待っていた人であるとは知らずに、何年もそれを保管していました。しかし、予言は今私に明確です。あなたはその人です。」

私はメトロポリタン美術館への遠足を思い出しました。そのとき、私は夫人を蒸発させました。

ドズ。カイロンが私に投げたペンは剣に変わりました。これはもしかして…？

キャップを外すと、ペンは手に持つと長く重くなりました。0.5秒以内に、私は両刃の刃、革で巻かれたグリップ、そして金の鍔が鍔で留められた平らな柄を備えた、きらめく青銅の剣を手にした。それは私の手に実際にバランスがとれたと感じられた最初の武器でした。

「この剣には長くて悲劇的な歴史があるので、私たちが立ち入る必要はありません」とカイロンは私に語った。「その名はアナクルスモス。」

「『Riptide』」と私は翻訳し、古代ギリシャ語がとても簡単に来たことに驚きました。

「緊急時のみに使用してください。そしてモンスターに対してのみ使用してください。ヒーローは危害を加えるべきではありません」とカイロンは言った。もちろん、絶対に必要な場合を除いて定命の者には攻撃を加えないが、いかなる場合でもこの剣は彼らに害を及ぼすことはない。」

私はその恐ろしく鋭い刃を見つけた。「定命の者には危害を及ぼさないとどういう意味ですか？ どうやってできないでしょうか？」

「剣は天の青銅である。キュクロプスによって鍛造され、エトナ山の中心部で鍛えられ、レーテ川で冷やされた。それは怪物にとっても、冥界のあらゆる生き物にとっても致命的である。ただし、彼らが先にあなたを殺さない限り。しかし、その刃は」

「知ってよかった。」

「それでは、ペンの話をおさらいしてください。」

ペンのキャップを剣先に当てると、リップタイドは瞬時に縮んでボールペンに戻った。私  
学校でペンをなくすことで有名だったから、少し緊張しながらそれをポケットに押し込んだ。

「それはできません」とカイロンは言った。

「何ができないの？」

「ペンを失くさない」と彼は言った。「これには魔法がかかっています。いつでもポケットの中に戻ってきます。試してみてください。」

私は用心していましたが、ペンを丘の下にできる限り遠くまで投げ、それが丘の中に消えていくのを見ました。  
草。

「少し時間がかかるかも知れませんが」とカイロンさんは私に言いました。「さあ、ポケットを確認してください。」

案の定、ペンはそこにありました。

「わかりました、それはとてもクールですね」と私は認めた。「でも、私が剣を抜いているところを定命の者が見たらどうする？」

カイロンは微笑んだ。「霧は強力なものだよ、パーシー」

"霧？"

「はい、『イリアス』を読んでください。その内容への言及がたくさんあります。神聖なときも、怪物的なときも、

元素が定命の世界と混ざり合うと、霧が発生し、人間の視界が見えなくなります。

半純血のあなたは物事をありのままに見るでしょうが、人間は物事をまったく異なる解釈をします。本当に、人間が物事を自分の考えに当てはめようとするのは驚くべきことです。

現実のバージョン。」

私はリップタイドをポケットに戻しました。

初めて、このクエストが現実のものであると感じました。実は私はハーフブラッドヒルを去ろうとしていました。私は大人の監視もなく、予備の計画もなく、携帯電話すら持たずに西に向かっていました。（カイロンは、携帯電話は怪物に追跡可能だと言いました。もし私たちが携帯電話を使ったら、それは照明弾を飛ばすよりも悪いことになるでしょう。）私には怪物と戦い、死者の国に到達するための剣より強い武器がありませんでした。

「カイロン…私は言った。「神々が不死であると言うのは…つまり、彼らの前にも時代があったということですよね？」

「実際には、彼らより4時代前です。タイタンの時代は第4紀であり、時には黄金時代とも呼ばれますが、これは間違いなく誤った呼び名です。西洋文明とゼウスの支配の時代であるこの時代は、第5紀です。」

「では、神々の前ではどんな感じだったのでしょうか？」

カイロンは唇をすぼめた。「私ですらそのことを覚えているほど年齢は高くありませんが、定命の者にとっては暗闇と野蛮の時代だったという事は知っています。タイタンの王クロノスは、人類が罪もなく、一切の知識を持たずに生きていたため、自分の治世を黄金時代と呼びました」。しかし、それは単なるプロパガンダでした。タイタンの王は、前菜が安っぽい娯楽源として以外、あなた方の種族のことなど気にしていませんでした。あなた方の種族が始まったのは、ゼウス卿の治世初期、善良なタイタンであるプロメテウスが人類に火をもたらした時だけでした。」

「でも、神々は今死ぬことはできないでしょう？ つまり、西洋文明が生きている限り、彼らは死ぬのです」  
生きている。だから……たとえ失敗したとしても、すべてが台無しになるほどひどいことは起こらないはずだよな？」

シロンは物憂げな笑みを私に向けた。「西洋の時代がいつまで続くかは誰にもわかりません、パーシー。神々は不滅です、そうです。しかし、タイタンもまた不滅でした。彼らは今も存在し、さまざまな牢獄に閉じ込められ、終わりのない苦痛と罰に耐えることを強いられています。力は落ちていますが、まだとても生きています。神々がそのような破滅を経験することがないように、あるいは私たちが過去の暗闇と混乱に戻ることがないように、運命が禁じますように。私たちにできることは、運命に従うことだけです、子よ。」

「私たちの運命…それが何であるかを知っているとして。」

「リラックスしてください」とカイロンは私に言いました。「頭をすっきりさせてください。そして、あなたが阻止しようとしているかもしれないことを忘れないでください。」

人類史上最大の戦争。」

「リラックスしてください」と私は言いました。「とてもリラックスしています。」

丘の下に着いたところで振り返ってみた。かつてゼウスの娘タリアがあった松の木の下で、カイロンは今、完全な騎馬姿で立ち、弓を高く掲げて敬礼していた。典型的なケンタウロスによる、典型的なサマーキャンプのお見送りです。

\*\*\*

アルガスは私たちを田舎からロングアイランド西部まで車で連れて行ってくれました。アナベスとグローバーがまるで普通の相乗り客であるかのように私の隣に座って、再び高速道路に乗っているのは奇妙な気分でした。謎の丘で2週間過ごした後、現実の世界は幻想のように思えました。気がつくと、私はすべてのマクドナルド、両親の車の後部座席に乗っているすべての子供たち、すべての看板やショッピングモールを見つめていました。

「ここまでは順調だよ」と私はアナベスに言いました。「10マイルでも怪物は一匹もいない。」



彼女は私にイライラした表情をした。「そんなこと言うのは縁起が悪いよ、ワカメ脳」

「もう一度思い出させてください、なぜあなたは私をそんなに嫌うのですか？」

「私はあなたのことを嫌いでありません。」

「私を騙したかもしれない。」

彼女は透明の帽子を畳んだ。「ほら…私たちは仲良くするはずがないのよ？私たちの両親はライバルなのよ。」

"なぜ？"

彼女はため息をついた。「理由はいくつありますか？あるとき、母がガールフレンドと一緒にアテナの神殿でポセイドンを捕まえました。これは非常に失礼なことです。またあるとき、アテナとポセイドンはアテネ市の守護神になるために競い合いました。あなたのお父さんは愚かな塩水を作成しました」

きっとオリーブが好きなんでしょうね。

「ああ、忘れてください。」

「もし彼女がピザを発明していたら、それは私にも理解できました。」

「忘れてって言ったのに！」

前の席でアーガスは微笑んだ。彼は何も言いませんでしたが、彼の背中には青い目が一つありました。首が私にウィンクした。

クイーンズでは渋滞で速度が落ちました。マンハッタンに到着する頃には日没になり、雨が降り始めた。

アーガスは、母とゲイブのアパートからそう遠くない、アッパー・イースト・サイドのグレイハウンド駅で私たちを降ろしてくれました。郵便受けに私の写真が書かれた湿ったチラシがテープで貼られていました。この少年を見た？

アナベスとグローバーが気づく前に、私はそれを破りました。

アルガスは私たちの荷物を降ろし、バスのチケットを確実に受け取ってから車で立ち去りました。

彼は手の甲を開いて、駐車場から出てくる私たちを見ていた。

私は以前住んでいたアパートからどれほど近いかを考えました。普通の日なら、母は今頃お菓子屋から帰ってくるでしょう。スメルリー・ゲイブはおそらく今そこにおいて、ポーカーをしていて、彼女を見逃していませんでした。

グローバーはバックパックを背負った。彼は私が見ている方向を通りを見下ろしました。

「なぜ彼女が彼と結婚したのか知りたいですか、パーシー？」

私は彼を見つめた。「私の心か何かを読んでいたのですか？」

「あなたの感情だけでいいのよ。」彼は肩をすくめた。「サテュロスならそれができると言うのを忘れていたと思います。あなたはお母さんと継父のことを考えていましたよね？」

私はうなずき、グローバーが他に何を言い忘れたのだろうかと思いました。

「あなたのお母さんはあなたのためにゲイブと結婚したのよ」とグローバーは私に言った。「あなたは彼のことを『臭い』と呼んでいます、あなたにはまったくわかりません。この男はこのオーラを持っています…。うん。ここからでも彼の匂いを嗅ぐことができます。あなたから彼の痕跡を嗅ぐことができます、そしてあなたは長い間彼の近くにいませんでした一週間。」

「ありがとう」と私は言いました。「一番近いシャワーはどこですか？」

「感謝すべきだよ、パーシー。君の継父は、どんな半神の存在も覆い隠すことができるほど、忌まわしい人間の匂いがするんだ。彼のカマロの車内の匂いを嗅いだ瞬間、私はわかった。ゲイブは

何年もあなたの香りをカバーします。毎年夏に彼と一緒に住んでいなかったら、おそらくずっと前に怪物に見つかっていたでしょう。あなたのお母さんはあなたを守るために彼と一緒にいました。彼女は賢い女性でした。彼女は、あの男に我慢するほどあなたを愛しているに違いありません—もしそれがあなたに何かを感じさせるならより良い。”

そうではありませんでしたが、私はそれを見せないよう自分に強制しました。また会えるだろう、そう思った。彼女はいなくなっていない。

グローバーさんは、私の感情が入り混じった状態のままでも読み取れるのだろうかと思った。彼とアナベスが一緒にいてくれて嬉しかったが、彼らに対して正直に接していなかったことに罪悪感を感じた。私はこのクレイジーなクエストにイエスと答えた本当の理由を彼らに話していませんでした。

実のところ、私はゼウスの稲妻を取り戻すことや、世界を救うこと、さらには父親を窮地から助けることさえ気にしていませんでした。考えれば考えるほど、一度も訪ねて来なかった、母親を助けなかった、ひどい養育費小切手さえ送ってくれなかったポセイドンに憤りを感じました。彼は仕事を終わらせる必要があるから私を要求しただけだった。

私が心配していたのは母のことだけでした。ハデスは彼女を不当に奪った、そしてハデスは与えるつもりだった彼女の背中。

あなたを友人と呼ぶ人に裏切られるだろう、と神託が私の心の中でささやきました。あなた結局、最も重要なものを救うことができなくなります。

黙ってる、私が言ったんだ。

雨は降り続けた。

私たちはバスを待っている間落ち着かず、グローバーのリングを1つ使ってハッキーサックをすることにしました。アナベスは信じられないほどだった。彼女はリングを膝、肘、肩などにぶつけて跳ね返すことができました。私自身はそれほど悪くはありませんでした。

私がリングをグローバーに向かって投げ、リングが彼の口に近づきすぎたときにゲームが終了しました。で巨大ヤギに一口噛まれただけで、ハッキーサックは芯も茎もすべて消えてしまいました。

グローバーは顔を赤らめた。彼は謝ろうとしたが、アナベスと私は忙しくて口を割らなかつた。

やっとバスが来ました。私たちが搭乗の列に並んでいると、グローバーは匂いを嗅ぎながら周囲を見回し始めました。

彼のお気に入りの学食の珍味、エンチラーダの匂いを嗅いだような空気。

"それは何ですか？"私は尋ねた。

「分かりません」と彼は緊張した面持ちで言った。「もしかしたら何もないかもしれない。」

しかし、何もなければいいと言うことができました。私も肩越しに見始めました。

ようやくバスに乗り込み、最後部で一緒に席を見つけたときはホッとしました。

私たちはバックパックを収納しました。アナベスはヤンキースのキャップを緊張しながら太ももに叩きつけ続けた。

最後の乗客が乗り込むと、アナベスは私の膝に手を握りました。「パーシー」

ちょうどおばあさんがバスに乗ってきたところでした。彼女は、しわくちゃのベルベットのドレス、レースの手袋、顔に影を作る形のないオレンジ色のニット帽をかぶり、ペイズリー柄の大きな財布を持っていました。彼女が首をかきつけたとき、彼女の黒い瞳がキラキラと輝き、私の心臓は高鳴りました。

それはドッズ夫人でした。年をとって、より枯れていましたが、間違いなく同じ邪悪な顔です。

私は席に身をかがめてしまいました。

彼女の後ろからさらに二人の老婦人がやって来た。一人は緑の帽子をかぶり、もう一人は紫の帽子をかぶっていた。それ以外は、彼らはドッズ夫人とまったく同じに見えました - 同じ節くれだつた手、ペイズリー柄のハンドバッグ、しわの寄ったベルベットのドレス。

三つ子の悪魔のおばあちゃん。

彼らは最前列、運転手のすぐ後ろに座っていました。通路で二人は足を交差させた。それは十分カジュアルだったが、誰も立ち去らないという明確なメッセージを送っていた。

バスは駅を出発し、私たちはマンハッタンの滑らかな通りを抜けました。「彼女は長く死んだままではなかった」と私は声が震えないようにしながら言った。「一生消せるって言ったのかと思ったよ」

「運が良ければって言ったのに」アナベスは言った。「あなたは明らかにそうではありません。」

「三人ともだ」グローバーは泣き叫んだ。「不滅の者たちよ！」

「大丈夫だよ」アナベスは明らかに真剣に考えながら言った。「フューリーズ 最悪の三大怪獣」アンダーワールドから。問題ない。問題ない。私たちは窓からこっそり外へ出ていきます。」

「開かないんだよ」とグローバーはうめいた。

「裏口ですか？」彼女は提案した。

1つもありませんでした。あつたとしても役に立たなかったでしょう。その時まで、私たちは9番街、リンカーントンネル方面。

「目撃者がいると彼らは私たちが攻撃しないでしょ」と私は言いました。「そうなるでしょうか？」

「定命の者は良い目を持っていない」とアナベスは私に思い出させた。「彼らの脳は霧を通して見たものしか処理できません。」

「三人の老婦人が私たちを殺すのを見るでしょうね？」

彼女はそれについて考えました。「何とも言えません。でも定命の者に助けを求めることはできません。屋上に非常口があるかもしれません...?」

リンカーントンネルに差し掛かると、バスは通路の走行灯以外は真っ暗になりました。雨の音もなく、不気味なほど静かだった。

ドッズ夫人は起き上がりました。まるでリハーサルしたかのような平坦な声で、彼女はバス全体にこう告げた。「トイレを使わなければなりません。」

「私もそうよ」と二番目の妹が言いました。

「私もそうよ」と三番目の妹が言いました。

彼らは皆、通路を下り始めました。

「分かった」とアナベスは言った。「パーシー、私の帽子を取ってください。」

"何?"

「彼らが望んでいるのはあなたです。姿を消して通路を上ってください。彼らにあなたの前を通ってもらいましょう。おそらくあなたは前に出て逃げられるよ。」

「でも、君たちは——」

「彼らが私たちに気づかない可能性は十分にあります」とアナベスさんは語った。「あなたはビッグ3の一人の息子です。あなたの匂いは強烈かもしれません。」

「あなたから離れることはできません。」

「私たちのことは心配しないでください」とグローバー氏は言った。「行く！」

手が震えました。卑怯者のような気がしましたが、ヤンキースのキャップをとってかぶりました。

下を見ると、もう私の体はありませんでした。

私は通路を這い始めました。なんとか10列席まで上がって、空いた席に座り込んだ。フューリーたちが通り過ぎたとき。

ドッズ夫人は立ち止まり、鼻を鳴らし、私をまっすぐに見つめました。心臓がドキドキしていました。

どうやら彼女は何も見ていなかったようだ。彼女と姉妹たちは続けました。

私は自由でした。バスの前まで着きました。もうすぐリンカーン・トンネルを通過するところだった。

非常停止ボタンを押そうとしたとき、後列から恐ろしい叫び声が聞こえました。

おばあさんたちはもうおばあさんではありませんでした。彼らの顔はまだ同じだった——これ以上醜くなることはないと思う——が、体はしぼんで、コウモリの翼とガーゴイルの爪のような手と足を備えた革のような茶色のババアの体になっていた。彼らのハンドバッグは燃えるような鞭と化していました。

フューリーたちはグローバーとアナベスを取り囲み、鞭を打ち、シューシューと叫びました。「ここはどこだ？どこ？」

バスに乗っていた他の人たちは座席にうずくまって叫び声を上げていた。彼らは何かを見ました、わかりました。

"彼はここにいない！"アナベスは叫んだ。"彼は行ってしまった！"

フューリーズは鞭を振り上げた。

アナベスは青銅のナイフを抜いた。グローバーはスナック袋から缶を取り出して準備したそれを投げる。

次に私がしたことはあまりにも衝動的で危険だったので、ADHD の典型的な子供と呼ばれるべきでした今年の。

バスの運転手は、バックミラーで何が起きているかを見ようとして、気が散っていました。

まだ姿が見えないので、私は彼からハンドルをつかみ、左にぐいと動かししました。右に投げ出されると皆が叫び声を上げ、私が望んでいたのは3機のフューリーが窓にぶつかる音だった。

"おい！"運転手は叫んだ。「おい——おっと！」

私たちはハンドルを争った。バスはトンネルの側面に衝突し、金属を粉砕し、私たちの1マイル後ろで火花を散らします。

私たちはリンカーン・トンネルを抜け出して、暴風雨の中、人々と怪物の中に戻りました。

バスの周りに放り投げられ、車はポーリングのピンのように脇に追いやられた。

なんとか運転手は出口を見つけた。私たちはハイウェイを飛び出し、6個の信号をくぐり抜け、最終的にはニューヨークから川を渡ったところにも何もないというのが信じられないほど、ニュージャージー州の田舎道を猛スピードで走り抜けました。左側には森があり、右側にはハドソン川があり、運転手は川の方向に進路を変えているように見えました。

もう一つの素晴らしいアイデアは、非常ブレーキを踏んだことです。

バスはうめき声を上げ、濡れたアスファルトの上で一回転し、木々に激突した。非常灯が点灯しました。ドアが勢いよく開いた。バスの運転手は最初にバスから降り、乗客たちは叫び声を上げながら彼の後を追った。私は運転席に乗り込み、彼らを追い越しました。

フューリーズはバランスを取り戻した。彼女が手を振っている間、彼らはアナベスに鞭を打ちました。ナイフを突きつけ、古代ギリシャ語で叫び、彼らに後ずさるよう指示した。グローバーはブリキ缶を投げた。

私は開いた玄関を見た。自由に行くことができましたが、友達と離れることはできませんでした。を脱ぎました見えないキャップ。"おい！"

フューリーたちは振り返り、私に黄色い牙を剥き出しにした。そして突然、出口が素晴らしいアイデアのように思えた。ドッズ先生はいつも授業中と同じように通路を闊歩し、私の F 数学のテストをしようとしていた。彼女が鞭を振るうたびに、赤い炎がトゲのある革に沿って踊った。

彼女の二人の醜い妹が彼女の両側の座席の上に飛び乗って、這って私の方に近づいてきた巨大な厄いなトカゲのように。

「ペルセウス・ジャクソン」とドッズ夫人は、明らかにどこか遠くから来たようなアクセントで言った。

ジョージアより南。「あなたは神々を怒らせた。あなたは死ぬだろう。」

「私は数学教師としてのあなたのほうが好きだった」と私は彼女に言いました。

彼女はうなり声を上げた。

アナベスとグローバーは慎重にフューリーズの背後に上がり、隙を狙った。

私はポケットからボールペンを取り出し、キャップを外した。リップタイドは、きらめく両刃の剣。

フューリーズは躊躇した。

ドッズ夫人は以前にもリップタイドの刃を感じたことがあった。彼女は明らかにそれをもう一度見るのが好きではありませんでした。

「今すぐ提出してください」と彼女は声を上げた。「そうすればあなたは永遠の苦しみに苦しむことはないでしょう。」

「頑張ってね、私は彼女に言いました。」

「パーシー、気をつけて！」アナベスは泣きました。

両側のフューリーが突進する間、ドッズ夫人は私の剣の手に鞭を打ちつけた。

私に。

私の手は溶けた鉛に包まれているように感じましたが、なんとかリップタイドを落とさずに済みました。私はフューリーの左側を柄で突き刺し、彼女を後ろに倒れさせて座席に座らせた。私は向きを変えて右側のフューリーをスライスした。刃が彼女の首につながつた瞬間、彼女は叫び声をあげて爆発して粉塵となった。アナベスはドッズ夫人をレスラーのホールドに捕まえて後ろに引っ張り、グローバーは鞭を彼女の手から引きはがした。

「うわー！彼は叫んだ。「うわー！熱い！熱い！」

私が柄を叩きつけたフューリーが再び私に向かって来て、鉤爪を構えたが、私がリップタイドを振りかざすと、彼女はピニャータのように割れた。

ドッズ夫人はアナベスを背中から降ろそうとしていました。彼女は蹴ったり、爪を立てたり、シューシューと噛みついたが、グローバーが自分の鞭でドッズ夫人の足を縛り付ける間、アナベスは持ちこたえた。最後に二人とも彼女を後ろ向きに通路に突き落とした。ドッズ夫人は立ち上がりようとしたが、コウモリの羽を羽ばたかせる余裕がなく、倒れ続けました。

「ゼウスがあなたを滅ぼすでしょう！」彼女は約束した。「ハデスがあなたの魂を奪うだろう！」

「ブラッカス・メアス・ベシミニ！私は叫びました。」

ラテン語がどこから来たのかわかりませんでした。「私のパンツを食べなさい！」という意味だったと思います。

雷がバスを揺さぶった。首の後ろの髪が上がりました。

"出て行け！"アナベスは私に怒鳴った。"今！"励ましなど必要ありませんでした。

私たちが急いで外へ出ると、他の乗客たちが放心状態で歩き回ったり、運転手と口論したり、「死ぬぞ！」と叫びながら輪になって走り回ったりしていた。私が剣を要約する前に、カメラを持ったアロハシャツを着た観光客が私の写真を撮りました。

「私たちのバッグ！」グローバーは気づいた。「私たちは、私たちを残してー」

ドーン！

乗客が避難した際にバスの窓が爆発した。稲妻が巨大なものを切り裂いた

屋根にはクレーターがあったが、中から怒号が聞こえ、ドッズ夫人がまだ死んでいないことがわかった。

"走る！"アナベスは言いました。「彼女が援軍を呼んでいる！私たちはここから出なければなりません！」

雨が降りしきる中、私たちは森の中に突っ込みました。後ろのバスは燃えていましたが、何もありませんでした。しかし、その先は暗闇。

---

## 11 ガーデン ノーム エンポリウムを訪問します

物事がうまくいかなかったときに誰かを責めることができるので、ギリシャの神々がそこにいることを知るのには、ある意味、うれしいことです。たとえば、モンスターのババアに襲われ、雷で爆破されたバスから立ち去るときに、その上に雨が降っていたら、ほとんどの人はそれは本当に不運だと思いかもしれません。あなたが半純血の人間であれば、神の力が本当にあなたの一日を台無しにしようとしていることがわかります。

そこで私たちは、アナベスとグローバーと私で、ニュージャージー州の川岸に沿った森の中を歩いていました。ニューヨーク市の輝きが後ろで夜空を黄色く染め、ハドソン川の匂いが鼻に残りました。

グローバーは震えて叫び、大きなヤギの目は切れ長の瞳になり、恐怖に満ちていた。

「親切な三人です。三人同時に。」

私自身かなりショックを受けていました。バスの窓が爆発する音は今でも耳に残っています。しかしアナベスは私たちを引っ張り続け、「さあ、速くに行けば行くほど良いのです。」と言いました。

「私たちのお金はすべてそこに戻ってきました」と私は彼女に思い出させました。「私たちの食べ物も衣服もすべてです。」

「そうですね、もしあなたが戦いに参加することを決めていなかったら——」

「私に何をさせたかったの？殺させて？」

「パーシー、あなたは私を守る必要はありませんでした。私なら大丈夫だったのに。」

グローバー氏は「サンドイッチ用のパンのようにスライスされているが、まあまあだ」と付け加えた。

「黙れ、ヤギ坊や」アナベスは言った。

グローバーは悲しげに叫んだ。「ブリキ缶…完璧に良いブリキ缶の袋です。」

私たちはどろどろの地面をバタバタと横切り、酸っぱい洗濯物のような匂いがする厄介なねじれた木々を抜きました。

数分後、アナベスが私の隣の列に並びました。「ほら、私は…」彼女の声は震えた。「私

また来てくれてありがとう、いい？それは本当に勇気のあることでした。」

「私たちはチームですよ？」

彼女はあと数歩黙っていた。「ただ、もしあなたが死んだら……それがあなたにとって本当にひどいことであるという事実は別として、それは探求が終わったことを意味するでしょう。これが私が現実の世界を見る唯一のチャンスかもしれません。」

雷雨はようやく止まりました。街の輝きは私たちの後ろで消え、私たちはほぼ完全に残されました。暗闇。アナベスの金髪の輝き以外には何も見えませんでした。

「7歳の時からキャンプ・ハーブブラッドから出たことがないの？」私は彼女に尋ねました。

「いいえ…ほんの短い遠足だけです。お父さんは——」

「歴史の教授です。」

「ええ。家に住むのはうまくいきませんでした。つまり、キャンプ謎の場所が私の家です。彼女は今、誰かが止めようとするのではないかと心配しているかのように、言葉を急いでいた。「キャンプではトレーニングにトレーニングを重ねる。それはそれで素晴らしいことだけど、現実の世界にはモンスターがいる。そこで自分が上手いのか下手なのかを学んだ。」

もっとよく知らなかったら、彼女の声に疑いの声が聞こえたと言言できたでしょう。

「君はそのナイフの扱いが上手だね」と私は言った。

"あなたはそう思う?"

「フューリーにおんぶしてくれる人なら誰でもいいよ」

よく見えなかったけど、もしかしたら笑ったかもしれないと思った。

「あのね」と彼女は言った、「言ったほうがいいかも…バスの中で何か面白いことがあったよ…」

彼女が言いたかったことはすべて、拷問されるフクロウの音のような、甲高いトゥーツーツーツーという音によって中断されました。

「おい、うちのリードパイプはまだ動くよ！」グローバーは叫んだ。「もし『ファインド・パス』の歌を覚えていたら、この森から抜け出せるかもしれない！」

彼はいくつかの音を膨らませたが、それでもその曲は怪しげにヒラリー・ダフのように聞こえた。

道を見つける代わりに、すぐに木に激突し、頭にいい大きさのこぶができました。

私が持っていなかった超能力のリストに加えてください :赤外線視覚。

さらに1マイルほど進むと、つまずいて悪態をつき、概して惨めな気分になった後、前方に光が見え始めました。ネオンサインの色です。食べ物の匂いがした。揚げ物、脂っこい、素晴らしい食べ物。私は、ハーブブラッドヒルに到着して以来、不健康なものを何も食べていないことに気づきました。そこでは、ブドウ、パン、チーズ、そしてニンフが調理した余分な赤身のバーベキューを食べて暮らしていました。この少年にはダブルチーズバーガーが必要でした。

私たちは木々の間に人気のない二車線の道路が見えるまで歩き続けました。反対側には、閉鎖されたガソリンスタンド、1990年代の映画のぼろぼろの看板、そしてネオンの光と良い匂いの源である営業中の店が1つありました。

私が期待していたようなファーストフード店ではありませんでした。そこは、芝生のフラミンゴや木製のインディアン、セメントのハイイログマなどを販売する、道端にある奇妙な骨董品店の1つでした。本館は長く低い倉庫で、周囲を何エーカーもの彫像に囲まれていました。門上のネオンサインは私には読めませんでした。私の失読症にとって通常の英語よりもさらに悪いものがあるとすれば、それは赤い筆記体のネオン英語です。

私にとって、それは次のように見えました :アトニコ・メス・グデラン・ゴメン・メブロイム。

「それは一体何を言っているのですか?」私は尋ねた。

「分かりません」とアナベスは言った。

彼女は読書がとても好きだったので、私は彼女が失読症であることを忘れていました。

グローバーは「エムおばさんのガーデン・ノーム・エンポリウム」と訳した。

宣伝どおり、入り口の横には、醜いひげを生やした小さなラントのセメント製ガーデンノームが二人いて、まるで写真を撮られようとしているかのように、微笑んで手を振っていた。

ハンバーガーの匂いを追って道を渡った。

「おい…」グローバーは警告した。

「家の明かりがついているよ」とアナベスは言った。「もしかしたら開いているかもしれない。」

「スナックバーよ」私は物欲しそうに言った。

「スナックバーよ」と彼女は同意した。

「二人とも頭おかしいの？」グローバー氏は語った。「ここは変だよ」

私たちは彼を無視しました。

正面の敷地には彫像が林立していた。セメントの動物、セメントの子供、さらにはセメントのサテュロスまでパイプを演奏していたので、グローバーは気味悪がった。

「ブラハハハ！」彼は息を切らした。「フェルディナンドおじさんに似てるね！」

私たちは倉庫の入り口で立ち止まりました。

「ノックしないでください」とグローバーさんは懇願した。「怪物の匂いがする。」

「あなたの鼻はフューリーのせいで詰まっています」とアナベスは彼に言いました。「ハンバーガーの匂いしかししないよ。お腹空いてない？」

"肉！"彼は軽蔑的に言った。「私はベジタリアンです。」

「あなたはチーズエンチラーダとアルミ缶を食べますよ」と私は彼に思い出させました。

「あれは野菜です。さあ、出発しましょう。これらの彫像は...私を見えています。」

それからドアがぎしむ音を立てて開き、私たちの前に立ったのは背の高い中東系の女性でした。彼女は手以外すべてを覆う長い黒いガウンを着ており、頭は完全にベールで覆われていたので、少なくとも私は中東系の人だと思いました。彼女の目は黒いガーゼのカーテンの向こうで輝いていましたが、私が理解できたのはそれだけでした。コーヒー色の彼女の手は老けて見えるが、手入れが行き届いていて上品で、かつては美しい女性だったおばあちゃんを想像した。

彼女のアクセントもなんとなく中東っぽく聞こえました。彼女は言いました、「子供たち、外に出るには遅すぎます」

孤独に。ご両親はどこにいますか？

「彼らは...ええと...」アナベスは言い始めた。

「私たちは孤児です」と私は言いました。

「孤児？」女性は言いました。その言葉は彼女の口には異質に聞こえた。「しかし、親愛なる皆さん！確かにない！」

「私たちはキャラバンからはぐれてしまいました」と私は言いました。「私たちのサーカスキャラバンです。団長は、もし道に迷ったらガソリンスタンドで会いましょうって言いましたが、彼は忘れてしまったのかもしれませんが。あるいは、別のガソリンスタンドのことを言ったのかもしれませんが。とにかく、私たちは道に迷っています。その食べ物の匂いがするのですか？」

「ああ、皆さん」女性は言いました。「かわいそうな子供たち、入ってください。私はエムおばさんです。行きなさい。」

倉庫の後ろまでまっすぐ進んでください。ダイニングエリアもあります。」

私たちは彼女に感謝して中に入りました。

アナベスは私に「サーカスキャラバン？」とつぶやいた。

「常に戦略を持っていますよね？」

「頭の中が昆布でいっぱいだよ」

倉庫には、さまざまなポーズ、さまざまな服装、さまざまな表情をした人々の彫像がさらにたくさんありました。これらの彫像はどれも等身大なので、1つを置くにもかなり広い庭が必要になるだろうと思っていました。でも、主に食べ物のことを考えていました。

お腹が空いたからといって、そんな見知らぬ女の店に入っていき私をバカだと言ってくださいますが、私も時々衝動的なことをしてしまいます。それに、エムおばさんのハンバーガーの匂いを嗅いだことがないでしょう。の



アロマは歯医者椅子にある笑気ガスのようなもので、他のすべてを消し去ってしまいました。グローバーの神経質な泣き声や、彫像の目が私を追っているように見える様子、エムおばさんが私たちの後ろでドアに鍵をかけたという事実には、ほとんど気づきませんでした。

私が気にしていたのはダイニングエリアを見つけることだけでした。そして案の定、それは倉庫の奥にあり、グリル、ソーダファウンテン、プレッツェルヒーター、ナチョチーズディスペンサーを備えたファストフードカウンターがありました。欲しいものはすべて揃っており、さらにスチール製のピクニックテーブルがいくつか前にあります。

「座ってください」とエムおばさんは言いました。

「すごいね」と私は言いました。

「ええと」グローバーはしぶしぶ言いました。「お金がありません、奥さん。」

私が彼の肋骨を突き刺す前に、エムおばさんは言いました、「いいえ、いいえ、子供たち。お金がないのです。これは特別なケースですよ？これは私のご褒美です、こんなに優しい孤児たちへの。」

「ありがとうございます、奥様」アナベスは言いました。

エムおばさんはまるでアナベスが何か悪いことをしたかのように固まりましたが、その後、老婦人も同じようにすぐにリラックスしたので、私の気のせいだろうと思いました。

「大丈夫ですよ、アナベス」と彼女は言った。「君はとても美しい灰色の目をしているよ、坊や。」後ほど私たちは自己紹介もしたことがなかったのに、どうして彼女はアナベスの名前を知っていたのだろうか。

私たちのホステスはスナックカウンターの後ろに姿を消し、料理を始めました。私たちが気づかないうちに、彼女はプラスチックのトレイにダブルチーズバーガー、バナラシェイク、そしてXXLサイズのフライドポテトを山盛りにして持ってきてくれました。

ハンバーガーを半分食べたところで、息をすることを思い出した。

アナベスはシェイクをすすった。

グローバーはフライドポテトをつまみ、まるでそれを狙うかのようにトレイのワックスが塗られた紙のライナーを見つめた、しかし彼はまた緊張しすぎて食事もできないようだった。

「あのシューシュー音は何ですか？」彼は尋ねた。

耳を傾けましたが、何も聞こえませんでした。アナベスは首を振った。

「シューシュー音？」エムおばさんが尋ねました。「もしかしたら、揚げ物の油の音が聞こえるかもしれません。あなたは鋭い耳を持っています。

グローバーさん。」

「ビタミンを摂取しています。耳のために。」

「それは素晴らしいことだよ」と彼女は言った。「でも、リラックスしてください。」

エムおばさんは何も食べませんでした。彼女は料理をするときさえ、頭飾りを脱ぐことはなかったのですが、今では前に座り、指を組んで私たちが食事をしているのを眺めていました。顔が見えないのに見つめられるのは少し不安でしたが、ハンバーガーを食べた満足感と少し眠かったので、せめて世間話をするのが精一杯かと思いました。ホステス。

「それで、あなたはノームを売っているんですね」と私は興味があるように見せようと言いました。

「ああ、そうだね」とエムおばさんは言いました。「動物も、人も。庭に関するものなら何でも。カスタム」

命令。彫像はとても人気がありますね。」

「この道にはたくさんの用事があるんですか？」

「それほどではありません。高速道路が建設されて以来、ほとんどの車がこの道を通らなくなりました。私は得たすべての顧客を大切にしなければなりません。」

まるで誰かが私を見ているかのように、首がうずきました。振り向いたが、そこにはイースターバスケットを持った少女の像があっただけだった。細部は信じられないほど素晴らしく、ほとんどの作品よりもはるかに優れていました。

庭の彫像。しかし、彼女の顔には何かが変わった。彼女は驚いているかのように、あるいは恐怖さえ感じているように見えました。

「ああ」エムおばさんは悲しそうに言いました。「私の作品の中にはうまくいかないものもあります。

傷ついた。売れません。顔は修正するのが最も難しいです。いつも顔だよ。」

「これらの彫像は自分で作ったのですか？」私は尋ねた。

「ああ、そうだ。昔、私には商売を手伝ってくれる姉妹が二人いましたが、もう亡くなってしまい、エムおばさんは一人になりました。私には自分の彫像しかありません。だから私は彫像を作っているんです。わかるでしょう。彼らは、私の会社です。」彼女の声の悲しみはとて深く、とてもリアルに聞こえたので、私は彼女を同情せずにはいられませんでした。

アナベスは食べるのをやめた。彼女は前に座り、「姉妹が二人？」と言いました。

「ひどい話ですね」とエムおばさんは言った。「子供向けのものではありません、本当に。アナベス、ずっと昔、私が若かった頃、ある悪い女が私に嫉妬していました。私には…ボーイフレンドがいたのですが、この悪い女は私たちを破滅させようと決意していたのです」

彼女が何を言っているのか分かりませんが、彼女に申し訳ないと思いました。まぶたが重くなり続けて、いつぱいになって胃が私を眠くさせます。可哀想な老婦人。誰がそんなに優しい人を傷つけたいと思うでしょうか？

「パーシー？」アナベスは注意を引くために私を揺すっていました。「行ったほうがいいかもしれない。つまり、団長が待っているだろう」

彼女は緊張したように聞こえた。理由は分かりませんでした。グローバーは今、トレイからワックスペーパーを食べていました。でも、エムおばさんがそれを奇妙に思っても、何も言わなかった。

「とても美しい灰色の目ですね」とエムおばさんはアナベスにもう一度言いました。「そう、あのような灰色の瞳を見るのは久しぶりだ。」

彼女はアナベスの頬を撫でるかのように手を伸ばしたが、アナベスは突然立ち上がった。

「本当に行かなければなりません。」

"はい！"グローバーはワックスを塗った紙を飲み込み、立ち上がった。「団長が待ってるよ！そうだね！」

離れたくなかった。満腹感と満足感を感じました。エムおばさんはとても親切でした。彼女と一緒にいたかったしばらく。

「お願いです、皆さん」エムおばさんは懇願しました。「子供たちと一緒にいることはめったにありません。行く前に、少なくとも座ってポーズをとりませんか？」

「ポーズ？」アナベスは慎重に尋ねた。

「写真です。新しい彫像セットのモデルとして使用します。子供たちはとても人気がありますね。

みんな子供が大好きだよ。」

アナベスは足から足へ体重を移動しました。「無理だと思いますよ、奥様。さあ、パーシー」

「もちろんできます」と私は言いました。アナベスがあまりにも偉そうで、老婦人に対してとても失礼だったのでイライラしていました。誰が私たちに無料で食事を与えてくれたんだ。「それはただの写真です、アナベス。何の害がありますか？」

「はい、アナベス」女性は喉を鳴らしました。「無害。」

アナベスがそれを嫌がったのは分かったが、彼女はエムおばさんが私たちを前線から連れ戻すことを許可した扉を開けると彫像の庭へ。

エムおばさんは私たちを石造りのサテュロスの隣にある公園のベンチに案内してくれました。「さあ、」と彼女は言った。

正しい位置に配置してください。真ん中が若い女の子で、両側に若い紳士が二人いると思います。」

「写真を撮るには光が足りません」と私は言いました。

「ああ、もう十分よ」エムおばさんは言いました。「会えるだけで十分ですよ？」

「カメラはどこですか？」グローバーは尋ねた。

エムおばさんはそのショットを賞賛するかのようにならずに。「さて、顔が一番難しいんですが、できますか？」

笑ってください、皆さん？満面の笑み？」

グローバーは隣にいたセメントのサテュロスをちらりと見て、「確かにフェルディナンドおじさんに似ているね」とつぶやいた。

「グローバーさん」とエムおばさんがたしなめた、「こっちを見てください、あなた。」

彼女の手にはまだカメラがありませんでした。

「パーシー——」アナベスは言った。

アナベスの話を聞くよう本能が警告していましたが、私は眠い気持ちと戦っていました。

食べ物と老婦人の声から来る心地よい静けさ。

「ちょっとだけよ」とエムおばさんは言った。「あのね、この呪われた空間では君のことがよく見えないんだ  
パール....」

「パーシー、何かがおかしい」とアナベスは主張した。

"間違っている？"エムおばさんは、頭に巻き付けていたラップを外そうと手を伸ばしながら言った。「そんなことはないよ、あなた。私は  
今夜はとても気高いお付き合いがありますように。何が間違っているのでしょうか？」

「あれはフェルディナンドおじさんです！」グローバーは息を呑んだ。

「彼女から目を離して！」アナベスは叫んだ。彼女はヤンキースのキャップを頭にかぶり、  
消えた。彼女の見えない手がグローバーと私をベンチから押し落としました。

私は地面に座り、エムおばさんのサンダルを履いた足を眺めていました。

グローバーが一方の方向に、アナベスが別の方向に急いで走り去るのが聞こえました。でも、あまりにもぼーっとしていたので  
移動すること。

そのとき、頭上で奇妙にガラガラという音が聞こえました。私の目はエムおばさんの手へと上がりました。

節くれだちいぼだらけになり、爪代わりの鋭い青銅の爪が生えていた。

私はもっと上を見ようとしたが、私の左のどこかでアナベスが「だめ！だめ！」と叫んだ。

もっとガサガサー小さなへびの音が私の真上で、... おばさんのどこからか

エムの頭はそうだろう。

"走る！"グローバーは息を切らした。彼が「マイア！」と叫びながら砂利の上を疾走するのが聞こえました。空飛ぶスニーカーを蹴り出すために。

動けなかった。私はエムおばさんの節くれだつた爪を見つめ、意識がもうろうとするトランス状態と戦おうとした。

老婦人が私を中に入れてくれました。

「若くてハンサムな顔を壊すなんて、とても残念なことよ」と彼女はなだめるように私に言いました。「そばにいてください、パーシー。あなたがしなけ  
ればならないのは上を向くだけです。」

私は服従したいという衝動と闘いました。代わりに私は片側を見ると、人々が庭に置いたガラス球の1つ、つまり注視ボールが見えました。オレンジ  
色のガラスにエムおばさんの暗い姿が映った。彼女の頭飾りはなくなり、彼女の顔はきらめく青白い円として現れました。彼女の髪は蛇のようにうごめき、  
うごめいていた。

エムおばさん。

おばちゃん「M」

どうして私はそんなに愚かだったのでしょうか？

考えてみて、私は自分に言い聞かせました。神話の中でメドゥーサはどのようにして死んだのでしょうか？

しかし、私には考えられませんでした。神話の中で、私の同名であるペルセウスに襲われたとき、メドゥーサは眠っていたということを何かが教えてくれました。彼女はもう眠っていませんでした。彼女が望めば、今すぐにその爪を取り、私の顔を掻き開けることができるでしょう。

「灰色の目の人が私にこんなことをしたのよ、パーシー」とメドューサは言ったが、彼女は怪物のように聞こえなかった。彼女の声は、私を見上げて、貧しいおばあちゃんに同情するよう促しました。

「アナベスの母、呪われたアテナが私を美しい女性からこんな姿に変えてしまったのです。」

「彼女の言うことを聞くな！」アナベスの声が彫像のどこかで叫んだ。「走れ、パーシー！」

"沈黙！"メドゥーサは唸った。それから彼女の声は、心地よい喉を鳴らす音に戻りました。「なぜ私がこの少女を破壊しなければならないかわかりました、パーシー。彼女は私の敵の娘です。私は彼女の像を粉々に砕きます。

でも、親愛なるパーシー、あなたは苦しむ必要はありません。」

「いいえ」と私はつぶやいた。足を動かしてみました。

「本当に神々を助けたいのですか？」メドューサは尋ねた。「この愚かな探求で何があなたを待っているか理解していますか、パーシー？もしあなたが冥界に到達したら何が起るのでしょうか？オリンポスの駒になるのはやめてください、あなたは彫像になったほうが良いでしょう。痛みが少ないです。痛みが少ないです。」

「パーシー！」私の後ろで、200ポンドのハチドリが車に乗って飛ぶような、ブンブンという音が聞こえました。急降下。グローバーは「アヒル！」と叫んだ。

私が振り返ると、夜空に彼が翼のある靴をはためかせながら十二時から飛んできて、野球バットほどの大きさの木の枝を抱えたグローバーの姿があった。彼の目はきつく閉じられ、頭は左右にピクピクと動きました。彼は耳と鼻だけでナビゲートしていた。

"アヒル！"彼はまた叫びました。「彼女を捕まえるよ！」

それがついに私を行動へと駆り立てました。グローバーのことを知っていたので、彼はメドューサを懐かしんで私を釘付けにするだろうと確信していました。

私は片側に飛び込みました。

ガツガツ！

最初はグローバーが木を叩く音だと思った。するとメドゥーサは怒りの叫び声を上げた。

「哀れなサテュロスよ」と彼女は怒鳴った。「あなたを私のコレクションに加えます！」

「あれはフェルディナンド叔父さんのものだったんだ！」グローバーは叫び返した。

私は急いで立ち去り、彫像の中に隠れましたが、グローバーは別のパスを求めて急降下しました。

カーワツ！

「ああ！」メドゥーサは蛇の毛をシューシュー音を立てて唾を吐きながら叫んだ。

私のすぐ隣で、アナベスの声が「パーシー！」と言った。

あまりにも高くジャンプしたので、足がガーデンノームを飛び越えるところでした。「ちくしょう！そんなことしないで！」

アナベスはヤンキースの帽子を脱いで姿を現した。「彼女の首を切り落とさなければなりません。」

「何？頭がおかしいの？ここから出ましょう。」

「メドューサは脅威です。彼女は邪悪です。私なら自分で殺しますが…」アナベスは、難しい自白をしようとしているかのように、唾を飲み込んだ。「しかし、あなたはずっと良い武器を持っています。それに、私は彼女に決して近づきません。母親のせいで、彼女は私を切り刻んでしまうでしょう。あなたには、あなたにはチャンスがあります。」

「何？それはできない——」

「ほら、彼女がもっと罪のない人々を彫像に変えてほしいと思う？」

彼女は、彫像を愛する一組の男女が腕を組み合っていることを指さした。

怪物によって石に変えられた。

アナベスは近くの台座から緑色の注視ボールをつかみました。「磨かれた盾の方が良いでしょう。』彼女はこの球体を批判的に研究しました。「凸面により歪みが生じます。反射のサイズは1倍ずれているはずです。」

「英語を話せますか？」

"私は！"彼女は私にガラス玉を投げてくれました。「ガラスの中の彼女を見てください。決して彼女を直接見ないでください。」

「やあ、みんな！」グローバーは私たちの上のどこかで叫んだ。「彼女は意識を失っていると思います！」

「そうではないかもしれない」とグローバー氏は訂正した。彼は木の枝を持って別の峠に入った。

「急いで」アナベスは私に言った。「グローバーは素晴らしい鼻を持っていますが、最終的にはクラッシュするでしょう。」

私はペンを取り出してキャップを開けました。リップタイドの青銅の刃が私の手の中で伸びた。

私はメドゥーサの髪の毛がシューシューと唾を吐き出す音を追った。

私は視線をボールに向け続けたので、本物ではなくメドゥーサの反射だけを垣間見ることができました。そして、緑の色ガラスの中に彼女の姿が見えました。

グローバーは次の打席に立つところでしたが、今度は少し低めに飛びすぎました。メドゥーサは棒を掴んで彼をコースから外した。彼は空中で転がり、「うーん！」という痛みを伴う石のハイイログマの腕に激突した。

私が「おい！」と叫んだとき、メドゥーサは彼に突進しようとしていた。

私は剣とガラス玉を持って彼女の前に進みましたが、それは簡単ではありませんでした。彼女が請求したら、私はそうするだろう自分を守るのに苦労している。

しかし、彼女は私に近づくことを許可しました。20フィート、10フィート。

今では彼女の顔が映っているのが見えました。確かにそれほど醜いものではありませんでした。緑が渦巻く凝視ボールの歪みが原因で、見た目が悪化しているに違いありません。

「老婦人に危害を加えたりはしないよ、パーシー。」と彼女は声を上げた。「あなたがそうしないことはわかっています。」

ガラスに映る顔、焼けそうな瞳に魅了されて迷った

緑の色合いをまっすぐに通り抜けると、私の腕は力が抜けます。

セメントグリスリーから、グローバーはうめき声を上げました。「パーシー、彼女の言うことを聞くな！」

メドゥーサはくすくすと笑った。「遅すぎる。」

彼女は爪で私に向かって突進してきました。

私は剣で切り上げ、不快なシュロックの音が聞こえました！そして、シューシューという風が吹き出しました。

洞窟——怪物が崩壊する音。

私の足の横の地面に何かが落ちました。見ないようにするのに私の意志のすべてが必要でした。できました。暖かい滲みが靴下に染み込んでいくのを感じ、瀕死の小さな蛇の頭が私の靴紐を引っ張っているのを感じます。

「ああ、そうだね」とグローバーは言った。彼の目はまだしっかりと閉じられていましたが、おそらくゴボゴボと湯気を立てる音が聞こえたと思います。「メガヤック」

アナベスが私の隣にやって来て、空を見つめていました。彼女はメドゥーサの黒いバールをかぶっていた。彼女は「動かないで」と言った。

非常に注意深く、下を見ずに、彼女はひざまずいて怪物の頭を黒い布で覆い、それからそれを拾い上げました。まだ青汁が滴っていました。

"大丈夫ですか？"彼女は声を震わせながら私に尋ねた。

ダブルチーズバーガーを吐きそうになりましたが、「そうだ」と私は決心しました。「なぜそうしなかったのか...なぜ頭は蒸発しなかったのですか？」

「一度切断したら、それは戦利品になります」と彼女は言いました。「ミノタウロスの角と同じだ。でもヘッドを外さないでください。それはまだあなたを石化させる可能性があります。」

グローバーはグリズリーの像から降りながらうめき声を上げた。彼の額には大きな腫れ物があった。彼の緑のラスタ帽は小さなヤギの角の一つにぶら下がっており、彼の偽足はひづめからはぎ取られていました。魔法のスニーカーが彼の頭の周りをあてもなく飛び回っていた。

「レッドバロンだよ」と私は言った。「よくやった、おい。」彼は照れ笑いを浮かべた。「しかし、それは本当に楽しくありませんでした。そうですね、棒で彼女を殴る部分は楽しかったです。でも、コンクリートのクマに衝突するのは面白くありませんでした。」

彼は靴を空中からひったくった。私は剣を握り直した。三人でつまずいて倉庫に戻って。

私たちはスナックカウンターの後ろで古いビニール袋と二重に包まれたメドゥーサの頭を見つけました。私たちは夕食を食べたテーブルの上にそれを置き、その周りに座りましたが、あまりにも疲れていて話すこともできませんでした。

最後に私はこう言いました、「それでは、このモンスターのおかげでアテナに感謝することになるのですか？」

アナベスはイライラした表情を私に見せた。「あなたのお父さん、実は。覚えていないのですか？メドゥーサはポセイドンのガールフレンドでした。彼らは私の母の寺院で会うことに決めました。だからアテナは彼女を怪物に変えたのです。メドゥーサと彼女が寺院に入るのを手伝った二人の姉妹、彼らは」

顔が熱くなりました。「ああ、メドゥーサに会ったのは私のせいだ」

アナベスは背筋を伸ばした。私の声を下手に真似して、彼女はこう言いました。「『これはただの写真だよ、アナベス。何の害がありますか？』」

「忘れてください」と私は言いました。「あなたには無理だよ。」

「あなたは耐えられないよ。」

「あなたは——」

"おい！"グローバーが遮った。「あなたたち二人は私に偏頭痛を与えていますが、サテュロスは偏頭痛さえも治りません片頭痛。頭どうするの？」

私はその物を見つめた。一匹の小さなヘビがプラスチックの穴からぶら下がっていました。バッグの側面に印刷された言葉は次のとおりです。「私たちはあなたのビジネスを感謝しています！」

私はアナベスや彼女の母親に対してだけでなく、キャンプから出た初日に私たちを道から吹き飛ばし、2つの大きな戦いに巻き込まれたことに対して、この探求全体に対してすべての神々に対して怒っていました。このままでは、生きてLAに着くのは無理だろうし、ましてや夏至までに着くのは無理だろう。

メドゥーサは何と言ったのでしょうか？

オリンピック選手たちの手先になるなよ、親愛なる君。あなたは彫像になったほうが良いでしょう。

起きました。「私は戻ってきます。」

「パーシー」アナベスが私の後に呼びかけた。「あなたは何者ですか？」

倉庫の奥を探索して、メドゥーサのオフィスを見つけました。彼女の家計簿には

彼女の最近の6件の販売は、すべてハデスとペルセポネの庭を飾るために冥界に出荷されました。ある運送状によると、Underworldの請求先住所は DOA Recording でした。

カリフォルニア州ウエストハリウッドのスタジオ。私はお札を折りたたんでポケットに詰めました。

レジで私は20ドル、金のドラクマ数枚、そしてエルメス・オーバーナイト・エクスプレスの納品書をいくつか見つけました。それぞれにはコインを入れるための小さな革袋が付いていました。私は適切なサイズの箱を見つけるまで、オフィスの残りの部分を探し回りました。

私はピクニックテーブルに戻り、メドゥーサの頭を梱包し、配送伝票に記入しました。

神々

オリンポス山600階、

エンパイアステートビル

ニューヨーク州ニューヨーク州

ご多幸をお祈り申し上げます。

パーシー・ジャクソン

「彼らはそれを好まないだろう」とグローバー氏は警告した。「彼らはあなたが生意気だと思うでしょう。」

ポーチに黄金のドラクマを注ぎました。閉めた瞬間に「パチパチ」という音がしました。

レジ。パッケージがテーブルから浮き上がり、パチンと消えた！

「私は生意気だ」と私は言った。

私はアナベスを見て、あえて批判しようと思いました。

彼女はそうしませんでした。彼女は、私が神を攻撃する大きな才能を持っているという事実を諦めているようでした。

「さあ」と彼女はつぶやいた。「新しい計画が必要です。」

---

12 プードルからアドバイスをもらいました

その夜、私たちはとても惨めでした。

私たちは幹線道路から100ヤード離れた森の中で、明らかに地元の子供たちがパーティーに使っていた湿地帯の空き地でキャンプをしました。地面には平らになったソーダの缶やファストフードの包装紙が散乱していた。

私たちはエムおばさんから食料と毛布を持って行きましたが、濡れた服を乾かすために火をつける勇気はありませんでした。フューリーズとメドゥーサは、一日中十分な興奮を提供してくれました。私たちは他に何も引き寄せたくありませんでした。

私たちは交代で寝ることにしました。私は自ら志願して最初の監視を引き受けました。

アナベスは毛布の上で丸くなり、頭が地面に着くとすぐにいびきをかいていました。

グローバーは飛行靴で一番下の枝まで飛び、幹に背を向けて夜空を見つめた。

「さあ、寝てください」と私は彼に言いました。「困ったことがあったら起こしますよ。」

彼はうなずいたが、それでも目を閉じなかった。「それは悲しいことだよ、パーシー」

「どういことですか？ あなたがこの愚かなクエストに登録したという事実は？」

「いいえ、それは悲しいです。彼は地面に落ちているすべてのゴミを指さした。「そして空。あなたは星も見えない。彼らは空を汚してしまいました。今はサテュロスになるには恐ろしい時期だ。」

「ああ、そうですね。あなたは環境活動家だと思います。」

彼は私を睨みつけました。「人間だけがそうではないでしょう。あなた方の種は、あまりにも急速に世界を詰まらせています...ああ、気にしないでください。人間に説教しても無駄だ。このままではパンを見つけることはできないでしょう。」

「パム？クッキングスプレーみたいな？」

「パン！彼は憤慨して叫びました。「パン。偉大な神パン！私が欲しいものは何だと思う？」

探索者免許は？」

異様な風が空き地をざわめき、一時的にゴミや泥の悪臭を圧倒した。かつてこの森にあったかもしれないベリーや野の花、きれいな雨水の香りをもたらしました。突然、今まで知らなかったことが懐かしくなりました。

「搜索について教えてください」と私は言った。

グローバーは、まるで私ただだからかっているのではないかと心配しているかのように、慎重に私を見つめました。

「荒地の神は二千年前に姿を消しました」と彼は私に言いました。「エフェソス沖の船乗りは、岸から叫ぶ不思議な声を聞いた。『偉大な神パンが死んだことを伝えてください！』人間はその知らせを聞いて信じました。それ以来、彼らはパーンの王国を略奪しています。しかしサテュロスにとって、パーンは私たちの主であり主人でした。彼は私たちと地球の荒野を守ってくれました。私たちは彼の死を信じたくありません。「どの世代においても、最も勇敢なサテュロスたちはパンを見つけることに命を誓う。彼らは地球を探索し、あらゆる未開の場所を探索し、彼の隠れ場所を見つけて眠りから目覚めさせようと願っている。」

「そしてあなたは探索者になりたいのです。」

「それは私の人生の夢です」と彼は言いました。「私の父は探索者でした。そして私の叔父のフェルディナンドは...

あそこで見た銅像——」

「ああ、そうだね、ごめんなさい。」

グローバーは首を振った。「フェルディナンド叔父さんはリスクを知っていた。父もそうだった。でも、私は成功する。私はやる。生きて戻った最初の探索者になってください。」

「ちょっと待って——最初は？」

グローバーはポケットからリードパイプを取り出した。「探索者は誰も戻ってきませんでした。一度探索者が戻ってきたら、出れば、彼らは消えます。彼らが生きているところを二度と見られることはありません。」

「二千年に一度じゃないですか？」

"いいえ。"

「それで、あなたのお父さんは？彼に何が起こったのか分からないのですか？」

"なし。"

「それでも行きたいのね、私は驚いて言った。「つまり、あなたは本当に自分が見つけられると思っているんですねパン？」

「それを信じなければなりません、パーシー。探索者なら誰もそう思います。それが私たちを遠ざける唯一のことです」



人間が世界に対して行ってきたことを見ると絶望します。パンはまだ目覚めることができると信じなければなりません。」

私は空のオレンジ色のもやを見つめて、グローバーがどのようにして目標を追求できるのか理解しようとしてきました。

とても絶望的に思えた夢。それでまた、私はもっと良くなったでしょうか？

「どうやってアンダーワールドに行くの？」彼に聞いた。「つまり、神に対して我々にどのようなチャンスがあるでしょうか？」

「分かりません」と彼は認めた。「でも、メドゥーサの家に戻って、彼女のオフィスを捜索していたときは？

アナベスが私に言っていたのは――」

「ああ、忘れていました。アナベスは計画をすべて立てているでしょう。」

「彼女にそんなに厳しくしないで、パーシー。彼女は大変な人生を歩んできましたが、彼女は良い人です。結局のところ、彼女は許して……」と声が震えた。

"どういう意味ですか？"私は尋ねた。「何を許した？」

突然、グローバーはパイプで音を奏でることに非常に興味を持ったようでした。

「ちょっと待ってください」と私は言いました。「あなたの最初のキーパーの仕事は5年前でした。アナベスはキャンプに来て5年になります。彼女はそうではありませんでした... つまり、最初の課題がうまくいかなかったのですが――」

「それについては話すことはできません」とグローバーさんは言い、彼の下唇が震えていたので、もし私が彼を押ししたら泣き始めるだろうと示唆した。

「しかし、私が言ったように、メドゥーサの家に戻って、アナベスと私は、このクエストで何か奇妙なことが起きていることに同意しました。何かが見た目は異なります。」

「まあ、当然だ。私はハデスが奪ったサンダーボルトを盗んだことで非難されている。」

「それは私が言いたいことではありません」とグローバー氏は言った。「毛皮――親切な人たちは、ある意味、遠慮していた。ヤンシー・アカデミーのドゥズ夫人のように…なぜ彼女は、あなたを殺そうとするのに、そんなに長い間待ったの？ それからバスの中では、彼らはできる限り攻撃的ではなかった」あったよ。」

「私には彼らはかなり攻撃的に見えました。」

グローバーは首を振った。「彼らは私たちに向かって金切り声を上げていました。『ここはどこだ？どこだ？』」

「私のことを聞いているんです」と私は言った。

「もしかしたら…でもアナベスも私も、人のことを聞いているわけではないような気がしました。

彼らは「ここはどこですか？」と言いました。彼らは何かの物体について尋ねているようだった。」

「それは意味がありません。」

「わかっています。でも、このクエストに関して何か誤解をしていて、残り時間が9日しかないとしたら、マスターボルトを見つけるために.....彼は答えを期待しているかのように私を見つめました。私には答えがありませんでした。

私はメドゥーサが言ったことについて考えました。「私は神々に利用されていたのです。」私の前に待っていたのは石化よりもひどいものでした。「私はあなたと正直ではありませんでした」と1はグローバーに語った。「マスターボルトのことはどうでもいい。母を連れ戻すために冥界に行くことに同意したんだ」

グローバーはパイプで優しい音を吹きました。「それはわかっています、パーシー。でも、本当にそれだけが理由ですか？」

「私は父を助けるためにやっているわけではありません。父は私のことを気にしていません。私も父のことを気にしていません。」

グローバーは木の枝から見下ろした。「ほら、パーシー、私はアナベスほど賢くないし、あなたほど勇敢でもない。でも、感情を読むのは得意だよ。お父さんが生きてよかったね。お父さんが自分のことを主張してくれて、うれしいよ。」

「ええ？ そうですね、サテュロスの感情は人間の感情とは異なる動きをするのかもしれませんが。なぜなら、あなたはそうであるからです」

間違っている。彼が何を考えているかは気にしません。」

グローバーは足を枝の上に引き上げた。「分かった、パーシー。何でもいいよ。」

「それに、私は自慢できるようなことは何もしていないんです。私たちはニューヨークからほとんど出られず、お金も西へ行く道もなくここで立ち往生しています。」

グローバーはその問題について考えているかのように夜空を眺めた。「私はどうですか？初めて見る、ね？少し眠ってくださいね。」

私は抗議したかったが、彼は柔らかく優しいモーツァルトを弾き始めたので、私は目をそらした刺すような。数小節のピアノ協奏曲のあと。12.私は眠っていました。

夢の中で、私は暗い洞窟の中にぼっかり空いた穴の前に立っていました。灰色の霧の生き物が私の周りでかき混ぜ、ぼろぼろの煙をささやきましたが、それはどういうわけか死者の霊であることがわかりました。

彼らは私の服を引っ張って、私を引き戻そうとしましたが、私は前に歩いて行かざるを得ませんでした。まさに溝の端。

下を見るとめまいがした。

穴はとても広くて真っ黒だったので、きっと底なしだろうと思いました。それでも私は持っていました。何か根深淵から、巨大で邪悪な何か立ち上がろうとしているような感覚。

小さな英雄、楽しそうな声が闇の彼方に響いた。あまりにも弱すぎて、あまりにも若すぎますが、おそらくあなたはそうするでしょう。

その声は古く、冷たくて重く感じられました。それは鉛のシートのように私の周りに巻きつきました。

彼らはあなたを誤解させました、少年、とそれは言いました。私と物々交換してください。あなたが欲しいものをあげます。

きらめくイメージが虚空の上に浮かんでいました。金のシャワーに溶けた瞬間に凍りついた私の母です。彼女の顔は、まるでミノタウロスがまだ彼女の首を絞めているかのように、苦痛で歪んでいた。彼女の目は私をまっすぐに見つめ、「行きなさい！」と懇願しました。

私は叫ぼうとしたが、声が出なかった。

冷たい笑い声が裂け目から響き渡った。

目に見えない力が私を前に引っ張ってくれました。しっかり立っていないと、穴に引きずり込まれてしまいます。

起き上がるのを手伝ってよ、坊や。声はさらに空腹になった。ポルトを持ってきてください。裏切りの神々に一撃を加えよ！

死者の霊が私の周りでささやきました、「ノー！」起きろ！

母のイメージは薄れ始めました。穴の中の物体は目に見えない支配力を強めた自分。

あれは私を引き込むことに興味がなかったのです。自分自身を引き離すために私を利用していたのです。

よかった、とつぶやいた。良い。

起きろ！死者はささやいた。起きろ！

誰かが私を揺さぶっていました。

目を開けると、外は日光でした。

「まあ、ゾンビは生きているよ」とアナベスは言った。

夢の中で震えていました。まだ私の周囲に亀裂の怪物の支配を感じていた

胸。「私はどのくらい眠っていましたか？」

「朝食を作るには十分な時間だ。」アナベスは私にナチヨ味のコーンの袋を投げってくれた

アンティ・エムのスナックバーのチップス。「そしてグローバーは探索に出かけました。ほら、彼は友達を見つけました。」

目の焦点が合わなくなりました。

グローバーは毛布の上にあぐらをかいて座っていて、膝には何か毛羽立ったもの、汚れた、不自然なピンク色のぬいぐるみ。

いいえ、ぬいぐるみではありませんでした。ピンクのブードルでした。

ブードルは不審そうに私に向かって鳴きました。グローバー氏は「いいえ、そうではありません」と言いました。

私は瞬きました。「あなたは……あれと話しているのですか？」

ブードルがうなり声を上げた。

「これは、私たちの西への切符だ。彼に親切にしてください。」とグローバーは警告した。

「動物と話せるんですか？」

グローバー氏は質問を無視した。「パーシー、グラジオリに会いましょう。グラジオリ、パーシー。」

私はアナベスを見つめた、彼らが私に対して言ったこの悪ふざけに彼女は激怒するだろうと思った、しかし彼女はひどく真剣な表情をしていた。

「ピンクのブードルに挨拶するわけじゃないよ」と私は言った。"忘れて。"

「パーシー」とアナベスは言った。「私はブードルにこんにちはと言った。あなたはブードルにこんにちはと言った。」

ブードルがうなり声を上げた。

私はブードルに挨拶しました。

グローバーは、森の中でグラジオリに会い、会話を始めたと言明した。このブードルは、地元の裕福な家族から逃亡しており、家族は彼の返還に200ドルの報奨金を出していた。グラジオリさんは本当は家族の元に戻りたくなかったが、グローバーを助けるためなら喜んで帰りたいかった。

「グラジオリはどうして報酬のことを知っているのですか？」私は尋ねた。

「彼は標識を読んだ」とグローバー氏は語った。「当然です。」

「もちろん」と私は言いました。「バカな私。」

「それで、私たちはグラジオリを頼るのです」とアナベスは最高の戦略の声で説明した。「私たちはお金を得るし、私たちはロサンゼルス行きのチケットを買います。単純。」

私は自分の夢について考えました。死者たちのささやき声、溝の中のもの、そして黄金に溶けてきらめく母の顔について考えました。西洋ではすべてが私を待っているかもしれない。

「別のバスじゃないよ、私は用心深く言った。

「いいえ」アナベスも同意した。

彼女は下り坂、昨夜は暗闇で見えなかった線路の方を指さした。

「そこへ800mのところにあるアムトラックの駅があります。グラジオリによれば、西行きの電車は正午に出発するそうです。」

私たちはアムトラックの列車に二日間乗り、丘を抜け川を越え、琥珀色の穀物波を越えて西へ向かいました。

私たちは一度も攻撃されませんでした、私はリラックスしませんでした。私たちはショーケースの中で上から、あるいは下から見られながら歩き回っているように感じました。何か適切な機会を待っているのではないかと感じました。

私の名前と写真がいくつかの東海岸の新聞の一面に飛び散ったため、私は目立たないように努めました。トレントン・レジスター・ニュースには、私がグレイハウンド・バスから降りたときに観光客が撮った写真が掲載されました。私の目には野生の表情がありました。私の剣は手の中で金属的にぼやけていました。野球のバットかラクロスのスティックだったかもしれない。

写真のキャプションにはこう書かれていた。

2週間前のロングアイランドでの母親の失踪事件で指名手配されている12歳のパーシー・ジャクソン君が、数人の高齢の女性乗客を巻き込んだバスから逃走する姿がここに映されている。ジャクソンさんが現場から逃走した直後、バスはニュージャージー州東部の道端で爆発した。目撃者の証言に基づいて、警察は少年が10代の共犯者2人と一緒に旅行していた可能性があると考えている。彼の継父であるゲイブ・ウリアーノは、彼の捕獲につながる情報に対して賞金を提供すると申し出た。

「心配しないで」アナベスは私に言いました。「致命的な警察は私たちを決して見つけることができませんでした。」でも彼女は声を出さなかった確かに。

その日の残りの時間は、電車の全長を歩き回ったり（じっと座っているのが本当に大変だったので）、窓の外を眺めたりして過ごしました。

ある時、私はケンタウロスの家族が昼食を求めて弓を構えて麦畑を疾走しているのを見つけた。ポニーに乗った小学2年生ほどの大きさのケンタウロスの少年が私の目に留まり、手を振った。客車の周りを見回したが、誰も気づいていなかった。大人ライダーたちは皆、ノートパソコンや雑誌に顔を埋めていた。

またあるとき、夕方近くに、森の中を何か巨大なものが動いているのが見えました。アメリカではライオンは野生では生息していないこと、そしてこの個体はハンマーほどの大きさだったことを除けば、それはライオンだと断言できたでしょう。その毛皮は夕方の光を受けて金色に輝いた。それからそれは木々の間を飛び越えて消えていきました。

ブードルのグラジオラを返してくれた報奨金は、デンバーまでのチケットを購入するのに十分な額しかありませんでした。私たちは寝台車に乗ることができなかった、座席で居眠りしました。首が凝ってしまいました。アナベスがすぐ隣に座っていたので、寝ている間によだれを垂らさないようにしました。

グローバーはいびきをかいて息を吐き続け、私を起こしました。一度、彼は自分の偽物と足を引きずりながら歩き回った足が落ちた。アナベスと私は、他の乗客が気づく前にそれを貼り直さなければなりません。

「それで」と、グローバーのスニーカーの調整を終えた後、アナベスが私に尋ねた。「誰があなたの助けを必要としていますか？」

"どういう意味ですか？"

「さっき寝ていたとき、あなたはこうつぶやいた、『私は助けてくれない』。誰の夢を見ていたのについて？」

私は何も言いたくなかった。穴から聞こえる邪悪な声の夢を見るのはこれで二度目だった。でも、とても気になったので、ついに彼女に言いました。

アナベスは長い間沈黙していました。「それはハデスとは思えません。彼はいつもイベントに登場します」

黒い玉座、そして彼は決して笑わない。」

「彼は私の母に取引を持ちかけました。他に誰がそんなことをできるでしょうか？」

「おそらく...彼が『冥界から立ち上がるのを手伝ってくれ』という意味だったのなら。彼がオリンピアンとの戦争を望んでいるのなら。しかし、彼がすでにマスターボルトを持っているなら、どうして彼にマスターボルトを持ってくるように頼むのですか？」

私は首を振って、答えが知りたいと思いました。グローバーが私に言ったことについて考えました。

バスに乗っていたフューリーたちは何かを探しているようだった。

どこですか？どこ？

おそらくグローバーは私の感情を察知したのでしょう。彼は寝ながら鼻を鳴らし、何かをつぶやいた

野菜を見て頭を向けた。

アナベスは角を覆うように帽子を調整し直した。「パーシー、ハデスと物々交換はできない。知ってるよね？彼は欺瞞的で、無情で、貪欲だ。今回は彼の優しい者たちがそれほど攻撃的でなかったとしても、私は気にしない——」

"この時？"私は尋ねた。「つまり、以前にも彼らに会ったことがあるということですか？」

彼女の手がネックレスに忍び寄った。彼女は、粘土で作った夏の終わりの証の一つである、松の木の絵が描かれた、艶をかけられた白いビーズを指で触った。「言っておきますが、私は死者の王に対して何の愛も持っていません。お母さんのために取引をしようという誘惑に駆られることはありません。」

「もしそれがあなたのお父さんだったらどうしますか？」

「それは簡単だよ」と彼女は言った。「私なら彼を腐らせるに任せるだろう。」

「本気じゃないの？」

アナベスの灰色の瞳が私を見つめた。彼女はキャンプの森の中でヘルハウンドに対して剣を抜いた瞬間と同じ表情を浮かべていた。「パーシー、父は私が生まれたときから私を恨んでいました。」と彼女は言った。「彼は決して赤ん坊を望んでいませんでした。私を引き取ったとき、仕事が忙しすぎるので私を連れ帰ってオリンパスで育ててほしいとアテナに頼みました。彼女はそれを快く思いませんでした。英雄は人によって育てられなければならない」と彼女は彼に言いました。「彼らの死すべき親です。」

「しかし、どうやって... つまり、あなたは病院で生まれたわけではないのですね...」

「私は西風のゼファーによってオリンポスから運ばれてきた、黄金のゆりかごに乗って、父の玄関口に現れました。父はそれを奇跡として覚えていると思いますよね？デジタル写真が何かを撮るかもしれませんが...」 「しかし、彼はいつも私の到着について、それが今まで自分に起こった最も不便なことであるかのように話していました。私が5歳のとき、彼は結婚し、アテナのことを完全に忘れていました。彼には「普通の」宿命の妻がいて、2人の「普通の」妻がいました。「死すべき子供たちよ、そして私が存在しないふりをしようとしたのです。」

私は電車の窓の外を見つめた。眠っている街の明かりが流れていきました。アナベスの気分を良くさせたかったのですが、どうすればいいのかわかりませんでした。

「私の母は本当にひどい男と結婚しました」と私は彼女に言いました。「グローバーさんは、私を守るためにそうしたと言いました。」

人間の家族の匂いの中に私を隠してください。もししたらお父さんもそう思っていたのかもしれない。」

アナベスはネックレスを眺めながら心配し続けた。彼女はビーズがぶら下がっている金色のカレッジリングをつまんでいました。その指輪は彼女の父親のものに違いない、と私は思いました。もしそうなら、なぜ彼女がそれを着たのか疑問に思いました。彼女は彼をとてもし嫌っていた。

「彼は私のことなど気にしていません」と彼女は言った。「彼の妻、つまり私の継母は、私を変人のように扱いました。彼女は私を子供たちと遊ばせてくれませんでした。私の父も彼女についてきました。何かあるたびに、

危険な出来事が起きたとき、つまり、怪物が出るようなことがあったとき、彼らは二人とも「よくも私たちの家族を危険にさらすな」と憤慨した目で私を見つめました。ついにヒントをつかみました。私は望まれていなかったのです。私は逃げた。"

「あなたは何歳でしたか？」

「キャンプを始めたときと同じ年齢。7歳」。

「しかし...あなた一人では、ハーフブラッドヒルまでたどり着くことができなかつたでしょう。」

「一人ではありません、いいえ。アテナは私を見守り、助けに導いてくれました。とにかく、短い間ではありましたが、私の世話をしてくれる予期せぬ友人が何人かできました。」

何が起こったのか聞きたかったが、アナベスは悲しい思い出に耽っているようだった。そこで私はグローバーのいびきの音を聞きながら、オハイオ州の暗い野原が駆け抜けていく車窓を眺めた。

夏至の8日前である6月13日、列車での2日目の終わりに向かって、私たちはいくつかの黄金色の丘を通過し、ミシシッピ川を越えてセントルイスに入りました。アナベスは首を伸ばしてゲートウェイ・アーチを見ましたが、私にはそれが街に突き刺さった巨大なショッピングバッグのハンドルのように見えました。

「そうしたいのです」と彼女はため息をついた。

"何？"私は尋ねた。

「そのようなものを作りましょう。パルテノン神殿を見たことはありますか、パーシー？」

「写真の中だけです。」

「いつか、私はそれを直接見るつもりです。私は史上最大の神々の記念碑を建てるつもりです。千年続くものです。」

私は笑った。「あなた？建築家ですか？」

なぜか分かりませんが、面白いと思いました。アナベスが一日中静かに座って絵を描こうとしているというアイデアだけです。

彼女の頬は赤くなった。「はい、建築家です。アテナは子供たちに、ただ壊すだけでなく、何かを生み出すことを期待しています。例えるなら、ある地震の神のように。」

私は下でミシシッピ川の茶色い水が激しく揺れるのを眺めました。

「ごめんなさい」アナベスは言った。「それは意地悪だった。」

「少し一緒にやってみませんか？」私は懇願しました。「つまり、アテナとポセイドンはかつてなかったのですか？」

協力しますか？」

アナベスはそれについて考えなければなりませんでした。「たぶん...戦車です」彼女はためらいながら言った。「母が発明しましたが、ポセイドンは波頭から馬を作りました。それで完成させるには二人で協力しなければなりませんでした。」

「それなら私たちも協力しましょうね？」

私たちは馬に乗って街に入り、アナベスはアーチがホテルの後ろに消えていくのを見守りました。

「たぶん」と彼女はついに言った。

私たちはダウンタウンのアムトラックの駅に到着しました。インターホンでは、デンバーに向けて出発するまでに3時間の乗り継ぎがあると告げました。

グローバーは伸びをした。まだ完全に目覚める前に、彼は「食べ物」と言いました。

「さあ、ヤギ少年」アナベスは言った。「観光。」

"観光？"

「ゲートウェイ・アーチです」と彼女は言った。「これが頂上まで行ける唯一のチャンスかもしれない。来るのか来ないのか？」

グローバーと私は顔を見合わせた。

断りたかったが、もしアナベスが行くなら、彼女を一人で行かせるわけにはいかないと思った。

グローバーは肩をすくめた。「モンスターのいないスナックがあれば」

アーチは鉄道駅から約1マイルの距離にありました。遅い時間だったので、入場するための列はそれほど長くありませんでした。私たちは地下博物館を通り抜け、1800年代の有蓋貨車やその他のジャンクを眺めました。それほどスリリングではありませんでしたが、アナベスはアーチがどのように建てられたかについて興味深い事実を話し続け、グローバーは私にジェリービーンズを渡し続けたので、私は大丈夫でした。

それでも、私は並んでいる他の人たちを見回し続けました。「何か匂いがありますか？ 私はつぶやいた。

グローバーさんへ。

彼は匂いを嗅ぐのに十分な長さでジェリービーンズの袋から鼻を取り出した。「地下だよ」と彼は言った。不快なほどに。「地下の空気はいつも怪物のような匂いがする。おそらく何の意味もない。」

しかし、何かがおかしいと感じました。私たちはここにいるべきではないような気がしました。

「みんな」と私は言った。「神々の力の象徴を知っていますか？」

アナベスは建設に使用される建設機械について本を読んでいる途中でした

しかし彼女はアーチを見回した。「うん？」

「それで、ハデさん——」

グローバーは咳払いをした。「私たちは公共の場所にいます。つまり、階下の私たちの友人のことでですか？」

「そうですね」と私は言いました。「私たちの友達が階下にあります。彼はアナベスのような帽子を持っていませんか？」

「闇の兜のことですね」アナベスは言った。「そう、それは彼の力の象徴だ。私は見た」

冬至の評議会会議中に彼の席の隣に置いてありました。」

「彼はそこにいましたか？ 私は尋ねた。

彼女はうなずいた。「彼がオリンパスを訪れることを許されるのは、一年で最も暗い日だけだ。

しかし、私の聞いたことが本当なら、彼の兜は私の透明帽子よりもはるかに強力です...」

「それによって彼は闇になれるのです」とグローバー氏は認めた。「彼は影に溶けたり、壁を通り抜けたりすることができます。彼は触れることも、見ることも、聞くこともできません。そして、彼はあなたを狂わせたり心臓を止めたりするほどの強烈な恐怖を放射することができます。なぜすべての理性的な生き物が恐怖を感じるのだと思いますか？ 暗い？」

「しかし...彼が今ここにいない、私たちを監視しているとどうやってわかるのでしょうか？ 私は尋ねた。

アナベスとグローバーは顔を見合わせた。

「そんなことはない」とグローバー氏は言った。

「ありがとう、おかげで気分がかなり良くなりました」と私は言いました。「フルージェリービーンズは残ってますか？」

私たちがアーチの頂上まで乗ろうとしている小さな小さなエレベーターがごを見たとき、私は自分のピクピクした神経をほぼ克服し、自分が問題に陥っていることを知りました。私は狭い場所が嫌いです。彼らは私を作る  
ナッツ。

私たちは、この大柄で太った女性と、ラインストーン的首輪をした犬のチワワを連れて、靴べらをされて車に乗り込みました。警備員は誰もそれについて何も言わなかったので、おそらくその犬は盲導犬チワワだろうと思いました。

私たちはアーチの内側に登り始めました。カーブに入るエレベーターに乗ったことはありませんでした。

私のお腹はあまり満足していませんでした。

「両親はいないの？」太った女性が私たちに尋ねました。

彼女は玉のような目をしていました。コーヒーの汚れがついた尖った歯。垂れ下がったデニムの帽子と、非常に膨らんだデニムのドレスを着た彼女は、ブルージーンズの飛行船のように見えました。

「彼らは下にいます」とアナベスは彼女に言いました。「高所が怖い。」

「ああ、かわいそうな人たちよ。」

チワワがうなり声を上げた。女性は「さあ、さあ、ソニー。お行儀よくしなさい。」と言いました。犬はビーズ状になっていた目はその持ち主に似ていて、知的で悪意に満ちています。

私は「ソニー。それが彼の名前ですか？」と言いました。

「いいえ」と女性は私に言いました。

それがすべてを解決したかのように、彼女は微笑んだ。

アーチの頂上にある展望台は、カーペットが敷かれたブリキ缶を思い出させました。小さな窓が並んでいて、一方からは街を、もう一方からは川を眺めていました。眺めはまあまあでしたが、狭い空間以外に好きなものがあるとすれば、それは上空 600 フィートの狭い空間です。かなり早く出発する準備ができていました。

アナベスは、構造上のサポートについて、そして窓をどのように大きくして、シースルーの床をデザインしたのだろうかと話続けました。彼女はおそらく何時間もそこに留まることができたかもしれませんが、私にとって幸運なことに、パークレンジャーは展望台が数分で閉鎖されると発表しました

分。

私はグローバーとアナベスを出口に向かって誘導し、エレベーターに乗せました。

中にはすでに他に2人の観光客がいることに気づき、自分も中に乗り込みました。私の入る余地はない。

パークレンジャーは「次の車です、先生」と言った。

「出ましょう」とアナベスは言った。「私たちはあなたと一緒に待ちます。」

でも、それではみんなが混乱してしまい、さらに時間がかかることになるので、私はこう言いました。「まあ、大丈夫です。では、下の方で会いましょう。」

グローバーとアナベスは二人とも緊張しているようでしたが、エレベーターのドアをスライドさせて閉めました。彼らの車はランプの下に消えた。

今、展望台に残っているのは、両親と小さな男の子である私だけでした。

パークレンジャーとチワワを連れて来た太った女性。

私は太った女性に不安そうに微笑んだ。彼女は微笑みを返し、二股に分かれた舌を歯の間でちらつかせた。

ちょっと待って。

二股舌？

本当に見たのかどうか判断する前に、彼女のチワワが飛び降りて鳴き始めました。

私に。

「さあ、さあ、ソニー」と女性は言いました。「楽しい時間だと思いませんか？ ここには素敵な人々が揃っています。」

「わんわん！」と小さな男の子は言いました。「見て、ワンちゃん！」

彼の両親は彼を引き戻した。

チワワは私に歯をむき出しにし、黒い唇から泡を滴らせました。

「まあ、息子よ。太った女性はため息をつきました。「もしあなたが主張するなら。」



お腹の中に氷がでぎ始めました。「ウルン、あのチワワを息子って呼んだの？」

「キメラ、可愛い人」太った女性が訂正した。「チワワじゃないよ。間違いやすいよ。」

彼女はデニムの袖をまくると、腕の皮膚が鱗状で緑色になっているのが見えた。

彼女が笑ったとき、彼女の歯が牙であることがわかりました。彼女の瞳は爬虫類のように横に切れ長でした。

チワワの吠え声は大きくなり、吠えるたびに大きくなっていきました。まずはドーベルマンくらい大きさに、それからライオンへ。吠え声は轟音となった。

小さな男の子は叫びました。両親は彼を出口の方へ引き戻し、そのままパークレンジャーの元へ引き戻したが、彼は麻痺して立ち尽くし、怪物をじっと見つめていた。

キメラは背が屋根にこすれるほど背が高くなっていった。血のこびりついたたてがみのあるライオンの頭、巨大なヤギの体とひづめ、そして尻尾には蛇があり、毛むくじらの背中からは長さ10フィートのダイヤモンドバックが生えていました。ラインストーンの犬用首輪はまだ首にぶら下がっており、プレートサイズのドッグタグは読みやすくなりました。キメラ—狂暴、火を吐く、

有毒です—発見した場合は、Tartarus に電話してください—内線。954。

剣の蓋も外していないことに気づきました。手がしびれてしまいました。私はから10フィート離れていました。キメラの血まみれの口、そして私が動くときにその生き物が突進するだろうと私は知っていました。

蛇女は笑い声だったかもしれないシューシューという音を立てた。「光栄に思います、パーシー・ジャクソン。ゼウス卿は私が自分の同族の一人で英雄を試すことをめったに許可しません。なぜなら私は怪物の母、恐ろしいエキドナだからです！」

私は彼女を見つめた。「あれはアリクイの一種ではないか？」としか言えなかった。

彼女は吠え、爬虫類のような顔を怒りで茶色と緑色に変えた。「人がそんなことを言うのは大嫌いだ！オーストラリアは大嫌いだ！あのばかばかしい動物に私の名前を付けるなんて。そのために、パーシー・ジャクソン、私の息子があなたを滅ぼしてやる！」

キメラはライオンの歯をぎしぎしと鳴らしながら突進した。私はなんとか脇に飛び跳ねて噛みつきを避けました。

私は結局、家族とパークレンジャーの隣にいたのですが、彼らは今、皆がこじ開けようとして叫び声をあげていました。非常口のドアを開けてください。

彼らを傷つけるわけにはいかなかった。私は剣のキャップを外し、デッキの反対側に走って、「やあ、チワワ！」と叫びました。キメラは私が思っていたよりも早く回転しました。

私が剣を振るう間もなく、剣は世界最大のバーベキュー場のような悪臭を放ちながら口を開き、私に向かって真っ直ぐに火柱を発射しました。

私は爆発の中を潜りました。カーペットは燃え上がりました。暑さはとても強く、危うく危うく、眉毛を焼き落とした。

さっきまで私が立っていた場所には、アーチの側面にボロボロの穴があり、溶けた金属がエッジの周りで蒸気を上げています。

すごい、と思いました。私たちはちょうど国定記念物を爆破したところです。

リップタイドは今や私の手の中で輝く青銅の刃となり、キメラが向きを変えたとき、私はその首を斬りつけた。

それは私の致命的なミスでした。刃は犬の首輪から飛び散り、無害でした。私は体勢を立て直そうとしましたが、燃えるようなライオンの口から身を守るのが心配で、蛇の尾が激しく跳ね回ってふくらはぎに牙を突き刺すまで、蛇の尾のことをすっかり忘れていました。

足全体が燃えていました。キメラの口にリップタイドを突き刺そうとしたが、蛇の尻尾が

足首に巻きつき、バランスを崩し、刃が手から飛び出し、アーチの穴から回転してミシシッピ川に向かって落ちました。

なんとか立ち上がったが、負けたと悟った。私は武器を持たなかった。致命的な毒が胸まで上がってくるのを感じました。ケイロンがアナクルスモスは必ず戻ってくると言っていたのを思い出したが、ポケットの中にペンがなかった。もしかしたら、遠くに落ちてしまったのかもしれない。ペン形式のときのみ戻ったのかもしれない。知らなかったし、それがわかるほど長くは生きられなかった

それはアウトです。

私は壁の穴に後ずさりした。キメラはうなり声を上げながら、その体から煙を巻き上げながら前進した。唇。蛇女エキドナがくすくすと笑った。「彼らは以前のようにヒーローを作らないのね、息子？」

怪物はうなり声を上げた。殴られた今、急いで仕留めようとは思わなかった。

私はパークレンジャーとその家族をちらっと見た。小さな男の子は父親の足の後ろに隠れていました。私はこの人たちを守らなければなりません。ただ死ぬことはできませんでした。考えようとしたが、全身が熱くなった。頭がめまいを感じました。剣を持っていなかった。私は火を噴く巨大な怪物とその母親と対峙していました。そして怖かったです。

他に行くところがなかったので、穴の端まで足を踏み入れました。ずっとずっと下で、川が輝いていました。

私が死んだら怪物は消えてしまうのでしょうか？彼らは人間を放っておくのでしょうか？

「もしあなたがポセイドンの息子なら、」とエキドナは声を上げた。「あなたは水を怖がらないでしょう。ジャンプ、パーシー・ジャクソン。水があなたに害を及ぼさないことを見せてください。ジャンプして剣を取り戻してください。あなたの血統を証明してください。」

そうだね、そう思った。数階から水に飛び込むという話をどこかで読んだことがある。固いアスファルトの上に飛び込むようなものでした。ここからは衝撃で飛び散ります。

キメラの口は赤く光り、さらなる爆発に向けて熱くなっていた。

「あなたには信仰がないのよ」とエキドナは私に言いました。「あなたは神を信じていません。私はあなたを責めることはできません、小さな子」腰抜け。今すぐ死んだほうがいいよ。神々は不誠実です。毒はあなたの心の中にあります。」

彼女は正しかった。私は死にそうだった。自分の呼吸が遅くなるのを感じた。誰も私を救えなかった、神さえも。

私は後ずさりして水面を見下ろした。父の温かい笑顔を思い出した。私が赤ちゃんの時、彼は私を見たに違いありません。私がゆりかごにいた頃に彼は私を訪ねてきたに違いありません。

私は、ポセイドンが私を息子だと主張したとき、旗を占領した夜、私の頭上に現れた渦巻く緑のトライデントを思い出しました。

しかし、ここは海ではなかった。ここはアメリカの中心部であるミシシッピ州でした。海はなかった。この神様。

「死ね、不誠実な者よ」エキドナが声を荒げ、キメラは私の顔に向かって火柱を送りました。

「父よ、助けてください」と私は祈りました。

私は向きを変えて飛び跳ねた。服が燃え上がり、毒が血管を駆け巡り、私は川に向かって急降下しました。

#### 14 私は有名な逃亡者になる

下りの途中で、自分の死すべき運命を受け入れ、死を前にして笑ったなど、深い啓示を受けたことをぜひお伝えしたいと思えます。

真実？私の唯一の考えは、あああああああ！

川はトラックのようなスピードで私に向かって突進してきました。風が私の肺から息を引き裂いた。

尖塔や高層ビルや橋が私の視界に入ったり消えたりしました。

そして、フラーブーン！

泡のホワイトアウト。私は暗闇の中に沈んでいき、間違いなく自分が埋め込まれてしまうところだった。100フィートの泥の中で永遠に失われた。

しかし、水の衝撃は無傷でした。私はゆっくりと落ちていき、泡が指の間から滴り落ちてきました。音もなく川底に落ち着きました。義父ほどの大きさのナマズが暗闇の中によろよろと逃げていった。ビール瓶、古い靴、ビニール袋など、泥と不快なゴミの雲が私の周りに渦を巻いていました。

その時点で、私はいくつかのことに気づきました。まず、私はバンケーキのように平らになっていなかったということです。パーベキユーはしていませんでした。もはやキメラの毒が血管の中で沸騰しているのを感じることさえできなかった。生きてた、よかった。

2番目の気づき：私は濡れていませんでした。つまり、水の冷たさを感じることができました。服についた火がどこで消えたかがわかりました。しかし、自分のシャツを触ってみると、完全に乾いているように感じました。

私は流れてくるゴミを見て、古いライターをひったくりました。

まさか、と思いました。

私はライターを点火した。火花が散りました。小さな炎がその底に現れました。

ミシシッピ州。

濡れたハンバーガーの包み紙を流れから掴むと、すぐに紙は乾いてしまいました。問題なく点灯しました。手を離すとすぐに炎が消えました。包装紙はぬるぬるした雑巾に戻りました。奇妙な。

しかし、最も奇妙な考えが私に浮かんだのは最後だけでした：私は息をしていました。私は水中にいた、そして私は正常に呼吸していた。

私は太ももまで泥に浸かりながら立ち上がった。足がガクガクしてしまいました。手が震えました。私は死んだはずだった。私がそうでなかったという事実は...まあ、奇跡のように思えました。私は女性の声、母親に少し似た声を想像しました。「パーシー、何と言いますか？」

「ええと...ありがとう。」水中では、レコーディングのときと同じように、はるかに年長の子供のように聞こえました。

"父さんありがとう。"

応答なし。川の下流に漂う暗いゴミ、巨大なナマズが滑空するだけ、遙か上空の水面に夕焼けの閃光が浮かび上がり、すべてがバタースコッチの色に変わります。

なぜポセイドンが私を救ってくれたのでしょうか？考えれば考えるほど恥ずかしくなってきました。それで、私はこれまでに何度か幸運に恵まれました。キメラのようなものに対して、私には決して勝ち目はありませんでした。

アーチにいた哀れな人々はおそらく乾杯したでしょう。私は彼らを守ることができませんでした。私は英雄ではありませんでした。おそらく私はナマズと一緒にここにいて、底の餌台に加わったほうがいいかもしれません。

ふんふんふん。川船の外輪が私の頭上で旋回して、泥を巻き上げました。

私の目の前5フィートも離れたところに、私の剣があり、その輝く青銅の柄が突き出ていました。泥。

またあの女の声が聞こえた、「パーシー、剣を取れ。」あなたのお父さんはあなたを信じています。今度は、その声が頭の中のないことに気づきました。想像していませんでした。彼女の言葉はどこからでも聞こえてきて、イルカのソナーのように水中に波紋を広げたようでした。

"どこにいるの？"私は大声で呼んだ。

そして暗闇の中で、私は彼女を見た——水色の女性、流れの中の幽霊が、剣の真上に浮かんでいた。彼女は長くうねった髪をしており、ほとんど見えない彼女の目は私と同じ緑色でした。

喉にしこりができました。私は「お母さん？」と言いました。

いいえ、子供よ、ただのメッセンジャーですが、あなたの母親の運命はあなたが信じているほど絶望的ではありません。行くサンタモニカのビーチへ。

"何？"

それはお父様の遺言です。冥界に降りる前にサンタさんのところに行かなければなりません。モニカ。お願いします、パーシー、長居はできません。この川は私がいるには汚すぎる。

「でも…」とにかく、この女性が私の母親か、母親の幻影であると私は確信していました。「誰が——どうやって——」

聞きたいことが多すぎて、言葉が喉に詰まりました。

私はここにはいられない、勇敢な方、と女性は言いました。彼女は手を差し伸べた、そして私は今のブラシが私のものを感じた愛撫するような顔。サンタモニカに行かなきゃ！そして、パーシー、贈り物を信用しないでください...

彼女の声は消えた。

「プレゼント？私は尋ねた。「どんなプレゼント？ちょっと待って！」

彼女はもう一度話そうとしましたが、音は消えました。彼女のイメージは溶けてしまいました。もしそれが私の母だったら、私はまた母を失ったことになります。

溺れそうになった。唯一の問題は、私は溺れることに免疫があったということです。

あなたのお父さんはあなたを信じています、と彼女は言いました。

彼女は私を勇敢とも呼んでいました...彼女がナマズと話しているのだから。

私はリップタイドに向かって歩き、柄をつかみました。キメラはまだ上において、卑劣で太った母親と一緒に私を仕留めようとして待っているかもしれません。少なくとも、誰がアーチに穴を開けたのかを突き止めようとして、死すべき警察が到着するだろう。もし彼らが私を見つけたら、いくつか質問されるでしょう。

私は剣に蓋をし、ボールペンをポケットに突っ込んだ。「ありがとう、お父さん」私は暗い水に向かってもう一度言いました。

それから私は泥の中を蹴り上げて水面に向かって泳ぎました。

私は水上マクドナルドの隣に上陸しました。

1 ブロック離れたセントルイスでは、すべての緊急車両がアーチを取り囲んでいました。警察のヘリコプターが上空を旋回した。見物人の群衆は、ニューヨークのタイムズスクエアを思い出させた大晦日。

小さな女の子が「ママ！あの男の子は川から出てきました。」と言いました。

「それはよかったね」と母親は首をかしげて救急車を見守りながら言った。

「でも彼はドライだよ！」

「それはいいですね、あなた。」

あるニュースレディがカメラに向かって話していた。「おそらくテロ攻撃ではないといわれていますが、まだ捜査の初期段階です。ご覧のとおり、被害は非常に深刻です。私たちは一部を解明しようと努めています。生存者の中でアーチから誰かが落ちたという目撃情報について尋問するためだ。」

生存者。私は安心感が湧き上がってくるのを感じました。おそらくパークレンジャーとその家族は無事に脱出できたのでしょう。私アナベスとグローバーが無事であることを祈りました。

私は警察の列の中で何が起きているのかを確認するために、群衆をかき分けようとしてしました。「……思春期の

少年だよ」と別の記者が言っていた。「チャンネル5は、監視カメラに思春期の少年が展望台で暴れ回り、どういうわけかこの異常な爆発を引き起こしているのを映していることを知りました。ジョン、信じがたいですが、それが私たちが聞いていることです。繰り返しになりますが、死者は確認されていません...」

私は頭を下げたまま後ずさりしました。警察の周囲をかなり遠回りしなければならなかった。制服を着た警官や報道記者がいたところ

アナベスとグローバーを見つける望みを失いそうになったとき、聞き覚えのある声が聞こえた。

「ペルシー！」

私が振り向くと、グローバーのクマの抱擁、またはヤギの抱擁にタックルされました。彼は言った、「私たちはあなたが去ったと思っていました

ハデスへは大変な道を！」

アナベスは彼の後ろに立って、怒っているように見せようとしていたが、彼女も私を見ると安心したようだった。

「5分も放っておけないよ！どうしたの？」

「なんだか落ちてしまいました。」

「パーシー！630フィート？」

私たちの後ろで警官が「ギャングウェイ！」と叫びました。群衆が別れると、数人の救急隊員が慌てて出てきて、女性を担架に乗せて転がした。私は彼女が展望台にいた小さな男の子の母親だとすぐに気づきました。彼女はこう言っていました、「そしてこの巨大な犬、この巨大な火を吐くチワワが——」

「わかりました、奥様。救急隊員は言いました。「落ち着いてください。ご家族は大丈夫です。薬が効き始めています。」

「私は狂っていません！この少年が穴から飛び出すと、怪物は消えました。」それから彼女は見た自分。「あそこだ！あの子だ！」

私は急いで向きを変え、アナベスとグローバーを追いかけました。私たちは人混みの中に消えていきました。

"どうしたの？"アナベスは要求した。「彼女は番組でチワワについて話していましたか？

エレベーター？"

私はカメラ、エキドナ、私の高飛び込み行為、そして水中の女性のメッセージの一部始終を彼らに話しました。

「おっと」グローバーが言った。「あなたをサンタモニカまで連れて行かなければなりません！お父さんからの呼び出しを無視することはできません。」

アナベスが返答する前に、ニュース休憩中の別のレポーターとすれ違ったが、彼が「パーシー・ジャクソン。その通りだ、ダン。チャンネル12は、この爆発を引き起こした可能性のある少年がその説明に当てはまることを知った」と言ったとき、私は思わず固まりそうになった。「3日前にニュージャージー州で起きた重大なバス事故で当局から指名手配されている若い男の写真。そして少年は西へ旅行中だと思われる。自宅で視聴している人のために、これがパーシー・ジャクソンの写真だ」

私たちはニュースバンの周りを避けて路地に滑り込みました。

「まず第一に」と私はグローバーに言った。「私たちは町から出なければなりません！」

なんとか見つからずにアムトラックの駅に戻りました。私たちはデンバーに向けて出発する直前に電車に乗りました。夕闇が迫る中、電車は西へ走り、背後のセントルイスのスカイラインには警察の灯りがまだ点滅していた。

---

## 15 神様はチーズバーガーを買う

翌日、夏至の7日前である6月14日の午後、私たちの列車はデンバーに到着しました。私たちはカンザス州のどこかの食堂車で前夜以来食事をしていませんでした。私たちは『謎の丘』以来シャワーを浴びていなかったもので、それは当然だと思っていました。

「ケイロンに連絡を取ってみましょう」とアナベスは言った。「川の精霊との会話について彼に話したいのですが。」

「電話は使えないんですよね？」

「私は電話のことを話しているわけではありません。」

私たちはダウンタウンを30分ほど歩き回りましたが、アナベスが何を探しているのかは分かりませんでした。空気は乾燥していて暑く、セントルイスの湿気の後には変な感じでした。

どこを向いてもロッキー山脈が、街に押し寄せそうな高波のように私を見つめているように見えました。

ついに空の日曜大工洗車場を見つけました。私たちはパトカーに目を光らせながら、通りから一番離れた屋台の方へ向きを変えました。私たちは車を持たずに洗車場でたむろしていた3人の若者でした。ドーナツを買う価値のある警官なら、我々が悪事を働いていると考えるだろう。

「私たちは一体何をしているのでしょうか？」グローバーがスプレーガンを取り出しながら、私は尋ねた。

「75セントだよ」と彼はぼやいた。「あと4分の2しかないよ。アナベス？」

「私を見ないで」と彼女は言った。「食堂車が私を全滅させた。」

私は最後の小銭を使い果たし、グローバーを1/4追い抜き、残りは2ニッケルとメドゥーサの場所からドラクマが1つ。

「すばらしい」とグローバー氏は言った。「もちろんスプレーボトルを使ってもできますが、接続はあまり良くないし、ポンピングするのに腕が疲れてしまいます。」

"あなたは何について話しているのですか?"

彼は自宅で食事をし、ノブをFINE MISTに設定した。「やってるよ。」

「インスタントメッセージ?」

「アイリスからのメッセージだ」とアナベスが訂正した。「虹の女神アイリスは、人々へのメッセージを伝えています。神々。あなたが尋ね方を知っていて、彼女がそれほど忙しくないなら、彼女は半純血の人々に対しても同じことをしてくれるでしょう。」

「スプレーガンで女神を召喚するんですか?」

グローバー氏がノズルを空中に向けると、水が厚い白い霧となってシューシューと噴射した。「あなたがいない限り、虹を作る簡単な方法を知っています。」

案の定、午後遅くの光が蒸気を透過し、色が変化しました。

アナベスは手のひらを私に差し出しました。「ドラクマさん、お願いします。」

私はそれを渡しました。

彼女はコインを頭上に掲げた。「女神よ、私たちの供物をお受け取りください。」

彼女はドラクマを虹に投げ込みました。それは金色の輝きの中に消えた。

アナベスは「謎の丘」をリクエストした。

しばらくの間、何も起こりませんでした。

それから私は霧の中からイチゴ畑と遠くのロングアイランド湾を眺めていました。私たちは大きな家のポーチにいるようでした。手すりのところに私たちに背を向けて立っていたのは、ショートパンツとオレンジ色のタンクトップを着た砂っぽい髪の男だった。彼は青銅の剣を持っており、草原にある何かをじっと見つめているようでした。

「ルーク!」私は電話した。

彼は目を丸くして振り返った。彼はスクリーン越しに私の3フィート前に立っていたと断言できる霧の中で、虹の中に現れた彼の一部しか見えませんでした。

「パーシー!」彼の傷だらけの顔は笑みを浮かべた。「あれもアナベスですか? 神様に感謝します! 皆さんは大丈夫ですか?」

「私たちは…うーん…大丈夫です」アナベスは口ごもった。彼女は汚れたTシャツを狂ったように正していました。彼女の顔についた抜け毛をとかして取ろうとしている。「私たちは考えました—カイロン—つまり—」

「彼は小屋にいます。」ルークの笑顔が消えた。「キャンピングカーに関してはいくつかの問題を抱えている。聞いて、大丈夫ですか? グローバーさんは大丈夫ですか?」

「私はここにいるよ」とグローバーさんは電話した。彼はノズルを片側に持ち出し、ルークの視界に入りました。「どんな問題があるの?」

ちょうどそのとき、大きなリンカーン・コンチネンタルが、ステレオを最大限のヒップホップに変えて洗車場に入ってきました。車が次の失速室に滑り込むと、サブウーファーからの低音が非常に振動し、歩道を震わせた。

「カイロンはそうしなければならなかった—あの音は何だ?」ルークは叫んだ。

「私が何とかします。」アナベスは視界から消える口実ができてとても安心した様子で叫び返した。「グローバー、さあ!

"何?"グローバー氏は語った。"しかし-"

「パーシーにノズルを渡して、さあ!」彼女は注文した。

グローバーはデルフィの神託よりも女の子の方が理解するのが難しいとつぶやいた。

それから彼は私にスプレーガンを渡し、アナベスを追った。

ホースを再調整して、虹を出し続けながらルークの姿が見えるようにしました。

「ケイロンは喧嘩をやめなければならなかった」とルークが音楽に合わせて私に叫んだ。「ここでは事態はかなり緊迫している、パーシー。ゼウスについての噂が漏れた——ポセイドンの対立だ。どうやってかはまだ分からない——おそらくヘルハウンドを呼び出したのと同じ最低野郎だろう。今、キャンプ参加者たちは味方をし始めている。状況はまるでゼウスのような形になっている」トロイア戦争が再び始まる。アフロディーテ、アレス、アポロンは多かれ少なかれポセイドンを支援している。アテナはゼウスを支援している。」

クラリスの小屋が何かあっても父の味方になってくれると思うと身震いした。次の屋台では、アナベスと何人かの男性が言い争っているのが聞こえました。その後、音楽の音量が急激に下がりました。

「それで、あなたのステータスは何ですか？」ルークが私に尋ねた。「ケイロンはあなたがなくて残念に思うでしょう。」

私は彼に自分の夢も含めてほとんどすべてを話しました。彼に会えることでも気分が良くて、ほんの数分でもキャンプに戻ったような気がして、スプレー機のブザーが鳴るまでどれだけ話していたか気づかなかったし、自分にはスプレーが1つしかないことに気づいた断水まであと1分。

「そこに居られたらよかったのに」とルークは私に言いました。「ここからはあまり力になれないのですが、残念ですが聞いてください... マスターボルトを奪ったのはハデスに違いありません。彼は冬にオリンパスにいました」

夏至。私は野外旅行の付き添いをしていて、彼に会いました。」

「しかしケイロンは、神々はお互いの魔法のアイテムを直接奪うことはできないと言った。」

「それは本当だ」ルークは困ったように言った。「それでも...ハデスは闇の舵を握っています。他の誰かがどうやって玉座の間に忍び込み、マスターボルトを盗むことができますか？あなたは透明にならなければなりません。」

ルークが自分の言ったことに気づいたようになるまで、私たちは二人とも黙っていた。

「ああ、おい」と彼は抗議した。「アナベスのことを言ったわけではありません。彼女と私は昔からの知り合いです。彼女は決して... つまり、彼女は私にとって妹のようなものです。」

アナベスはその描写を好むだろうかと思いました。私たちの隣の屋台では、音楽が完全に止まりました。男が恐怖のあまり叫び声を上げ、車のドアがバタンと閉まり、リンカーンが洗車機から飛び出した。

「それが何だったのか、行ってみたほうがいいよ」とルークは言った。「聞いてください、飛行靴を履いているのですか？飛行靴があなたに何か良いことをしてくれたと知れば、気分が良くなります。」

「あ……あ、そうだ！私は罪深い嘘つきのように思われないように努めました。「はい、役に立ちました。」

"本当に？"彼はニヤリと笑った。「それらはすべてフィットしますか？」

水が止まりました。霧が蒸発し始めました。

「まあ、デンバーでは気をつけてね」ルークは声を小さくしながら呼びかけた。「そして今度は良くなるとグローバーに伝えてください！そうすれば誰も松の木に変えられないだろう——」

しかし霧は消え去り、ルークの姿は消え去った。濡れた空の車の中で私は一人だった

ウォッシュストール。

アナベスとグローバーは角を曲がって笑いながらやって来たが、私の顔を見て立ち止まった。

アナベスの笑みが消えた。「どうしたの、パーシー？ルークは何と言った？」

「それほどでもないよ」と私は嘘をついたが、お腹はビッグスリーの小屋のように空っぽだった。「さあ、探してみましよう夕食を。」



数分後、私たちは輝くクロムのダイナーのブースに座っていました。私たちの周りでは、家族連れがハンバーガーを食べたり、モルトやソーダを飲んだりしていました。

ようやくウェイトレスがやって来ました。彼女は懐疑的に眉を上げた。"良い？"

私は「夕食を注文したいのですが」と言いました。

「子供たちにはそれを買うお金があるの？」

グローバーの下唇が震えた。彼が血を流し始めるのではないかと、もっと悪いことに、それを食べ始めるのではないかと心配しました。

リノリウム。アナベスは空腹で気を失いそうになった。

私がウェイトレスのためにすすり泣きの話を考えようとしていたとき、建物全体が轟音を立てて揺れた。

子象ほどの大きさのバイクが縁石に停まった。

食堂での会話はすべて止まった。バイクのヘッドライトが赤く光った。ガソリンタンクには炎が描かれており、散弾銃のホルスターが両側にリベットで固定されており、散弾銃が装備されていました。シートは革製でしたが、見た目は...そうですね、白人の人間の皮膚のような革でした。

バイクに乗った男はプロレスラーをママのために走らせただろう。彼は赤いマッスルシャツと黒いジーンズを着て、黒い革製のダスターを着て、太ももに狩猟用ナイフを縛り付けていた。

彼は赤いラップアラウンドシェードを身につけており、私がこれまで見た中で最も残忍で残忍な顔をしていた——おそらくハンサムだが邪悪な——油まみれの黒いクルーカットと、何度も戦いで傷跡が残った頬をしていた。不思議なことに、彼の顔をどこかで見たことがあるような気がした。

彼がダイナーに入ると、熱く乾いた風がその場を吹き抜けた。まるで催眠術にかかったかのように全員が立ち上がったが、バイカーが否定的に手を振り、全員は再び座った。

全員が会話に戻りました。ウェイトレスは、まるで誰かが彼女の脳の巻き戻しボタンを押したかのように瞬きました。彼女は再び私たちに尋ねました、「あなた方の子供たちはそれを買うお金があるのですか？」

バイカーは「それは私の責任だ」と言いました。彼は私たちのブースに滑り込みましたが、そこは彼にとっては小さすぎました。

窓にアナベスが群がっていた。

彼はぽっかりと自分を見つめていたウェイトレスを見上げて、「まだここにいるの？」と言いました。

彼が彼女を指差すと、彼女は固まった。彼女はぐるぐる回されたかのように向きを変え、そして行進したキッチンに戻って。

バイカーは私を見た。赤いシェードの後ろで彼の目は見えませんが、悪い感情が私の胃の中で沸騰し始めました。怒り、憤り、苦悩。壁にぶつかりたかった。誰かに喧嘩を売りたいかった。この男は自分を誰だと思っていたか？

彼は私に意地悪な笑みを浮かべた。「それで、あなたは海藻爺さんの子供なんですね？」

驚いたり怖がったりするはずだったのに、代わりに義父を見ているような気がして、

ゲイブ。この男の首をもぎ取りたかった。「それは何ですか？」

アナベスの目は私に警告を發しました。「パーシー、これは——」

バイカーが手を挙げた。

「まあまあ」と彼は言った。「多少の態度は気にしません。誰が上司なのか覚えていれば。あなたは」

私が誰なのか知っていますか、いとこ？」

それから、なぜこの男に見覚えがあるのかが気になりました。彼は、キャンプ半血の子供たち、つまり第5キャビンの子供たちと同じように、悪意のある嘲笑をしていました。

「あなたはクラリスのお父さんですよ」と私は言いました。「戦争の神、アレス。」

アレスにはっきりと笑い、シェードを脱いだ。彼の目があるべき場所には、小さな核爆発で輝く空のソケットと火だけがありました。「そうだよ、バンク。君が壊れたと聞いたよ」

クラリスの槍。」

「彼女はそれを求めています。」

「たぶん。それはいいことだよ。私は子供たちの喧嘩には反対しないよ、わかる？ 私がここにいるのは——あなたが街にいると聞いたんだ。ちょっとした提案があるのよ。」

ウェイトレスは、チーズバーガー、フライドポテト、オニオンリング、チョコレートシェイクなどの食べ物を山盛りのトレイに抱えて戻ってきました。

アレスは彼女に金のドラクマを数枚手渡した。

彼女は緊張しながらコインを見つめた。「しかし、これらはそうではありません…」

アレスは巨大なナイフを取り出し、爪を磨き始めた。「問題、恋人？」

ウェイトレスは唾を飲み込み、金を持って立ち去った。

「そんなことはできません」と私はアレスに言った。「ナイフで人を脅すだけではいけない。」

アレスは笑った。「冗談ですか？私はこの国が好きです。スパルタ以来最高の場所です。バンク、武器を持っていないのですか？そうすべきです。そこには危険な世界があります。そこで私の提案に行き着くのです。私にお願いがあるのです。」

「神様に何かしてあげられるでしょうか？」

「神には自分でする時間がないことがある。それは大したことではない。私はここの放棄されたウォーターパークに盾を置いてきた。ガールフレンドとちょっとしたデートをしていたところだった。私たちは邪魔された。私は立ち去った。私の盾が後ろにあります。取ってきてほしいのです。」

「戻って自分で取りに来たらどうですか？」

彼の眼窩の炎は少し熱く輝いた。

「君をプレーリードッグにして、僕のハーレーで轢いてはどうだ？だってそんな気分じゃないんだ。神が君に自分を証明する機会を与えているんだ、パーシー・ジャクソン。君は自分が卑怯者であることを証明してみせるか？」彼は前かがみになった。「あるいは、お父さんが守ってくれるように、川に飛び込むときだけ喧嘩するのかもしれませんが。」

私はこの男を殴りたかったが、どういうわけか彼がそれを待っていることがわかった。アレスの力は私の怒りを引き起こしています。私が攻撃したら彼は喜ぶだろう。私は彼に満足を与えたくなかった。

「私たちは興味がありません」と私は言いました。「もうクエストが終わったんだ。」

アレスの燃えるような瞳のせいで、私は見たくないもの、つまり戦場の血と煙と死体を見てしまった。「あなたの探求についてはすべて知っています、バンク。そのアイテムが最初に盗まれたとき、ゼウスはそれを探するためにアポロン、アテナ、アルテミス、そして当然のことながら私を全力で送り出しました。もし私があんな強力な武器を嗅ぎ分けることができなかつたら…」彼はまるでマスターボルトのことを考えるだけでお腹が空いたかのように唇をなめた。

「そうですね…私がそれを見つけれなかつたら、あなたには希望がありません。それでも、私はあなたに疑いの利益を与えようとしています。あなたのお父さんと私ははるか昔に遡ります。結局のところ、私はその人です。古い死体の息についての私の疑惑を彼に話しました。」

「ハデスがボルトを盗んだと彼に言いましたか？」

「そうですね。誰かを陥れて戦争を始めるというもの。この本の中で最も古いトリック。私はすぐにそれを理解しました。」

ある意味、あなたのささやかな探求に対して私は感謝することになったのです。」

「ありがとう」と私はつぶやいた。

「ねえ、私は寛大な男です。ちょっとした仕事をするだけで、途中であなたを手伝います。私が手配します」

あなたとあなたの友達のために西に乗ってください。」

「私たちは自分たちだけでうまくやっています。」

「そうだね。お金もない。車輪もない。何に直面しているのか見当もつかない。助けてくれるかもしれない。」

知っておくべきことを教えます。お母さんのことか。」

"私のお母さん？"

彼はニヤリと笑った。「それが気になりました。ウォーターパークはデランシーを西に1マイル離れたところにあります。そんなことはできません」  
それを逃す。トンネル・オブ・ラブの乗り物を探してください。」

「デートの邪魔になったのは何ですか？私は尋ねた。「何か怖いことがありますか？」

アレスは歯をむき出したが、私は以前クラリスに対して彼の脅迫的な表情を見たことがあった。まるで緊張しているかのように、それは何か嘘のようだった。

「他のオリンピック選手ではなく、バンクの私に出会えて幸運だった。彼らはそんなものではない」  
私のように無礼を許します。終わったらまたここで会いましょう。私を失望させないでください。」

その後、私は気を失ったか、トランス状態に陥ったに違いありません。なぜなら、再び目を開けると、アレスがいなくなっていたからです。この会話は夢だったのか  
と思ったかもしれないが、アナベスとグローバーの表情はそうではないことを物語っていた。

「良くないよ」とグローバー氏は言った。「アレスはあなたを探しました、パーシー。これは良くありません。」

私は窓の外を見つめました。バイクは消えていました。

アレスは本当に私の母について何か知っていたのでしょうか、それともただ私と遊んでいたのでしょうか？彼がいなくなった今、私の怒りはすべて消え去りました。  
アレスは人の感情をいじるのが大好きなのだろう、と気づきました。それが彼の力だった——情熱をひどくかき立て、思考能力を曇らせたのだ。

「おそらく何かのトリックだろう」と私は言った。「アレスのことは忘れてください。さあ、行きましょう。」

「それはできません」とアナベスは言った。「ほら、私は誰よりもアレスが嫌いだけど、あなたはアレスのことを無視しないわね」

深刻な不運を望まない限り、神よ。彼はあなたをげっ歯類に変えるなんて冗談ではありませんでした。」

私はチーズバーガーを見下ろしましたが、突然あまり美味しそうに見えなくなりました。「なぜ彼は

私たちが必要ですか？」

「もしかしたら、それは頭脳を必要とする問題なのかもしれない」とアナベスさんは言う。「アレスには強さがある。彼が持っているのはそれだけだ。たとえ強  
さであっても、時には知恵に屈しなければならぬ。」

「しかし、このウォーターパーク…彼はほとんど怯えているようでした。何が軍神をそのように逃げさせるのでしょうか？」

アナベスとグローバーは緊張した面持ちでお互いを見つめた。

アナベスは「残念ですが、調べてみないといいけませんね」と言いました。

ウォーターパークを見つけた時には、太陽は山の向こうに沈んでいました。看板から判断すると、かつてはWATERLANDと呼ばれていたが、今は一部の文字が潰れて  
WATERLANDとなっている。

正門には南京錠がかけられ、その上には有刺鉄線が張られていました。内部では、巨大な乾いたウォーターライダーとチューブやパイプがいたるところで丸ま  
って、空のプールにつながっていました。古いチケットや広告がアスファルトの上を飛び回っていた。夜が近づく、その場所は悲しく不気味に見えました。

「アレスがガールフレンドをここにデートに連れてくるとしたら」と私は有刺鉄線を見つめながら言った、「そんなことはしたくない」  
彼女がどんな顔をしているか見てみましょう。」

「パーシー」とアナベスが警告した。「もっと敬意を持ちなさい。」

「なんで？アレスが嫌いだと思ってたのに」

「彼は今でも神です。それに彼のガールフレンドはとても気難しい人です。」

「彼女の容姿を侮辱したくないでしょう」とグローバー氏は付け加えた。

「誰だ？ エキドナ？」

「いいえ、アフロディーテ」グローバーは少し夢見心地で言った。「愛の女神。」

「彼女は誰かと結婚しているのだと思った」と私は言った。「ヘファイストス」

「何が言いたいのですか？」彼は尋ねた。

"おお。"突然、話題を変える必要があると感じました。「それで、どうやって入るの？」

「マイア！」グローバーの靴から羽が生えた。

彼はフェンスを飛び越え、空中で意図せず宙返りをし、つまずいて反対側の着地に着地した。彼はまるですべてを計画していたかのように、ジーンズの埃を払った。「皆さん、来ますか？」

アナベスと私は、有刺鉄線を押しながら昔ながらの道を登らなければなりませんでした。

頂上を這うようにして別のことをしました。

アトラクションをチェックしながら公園を歩いていると、影が長くなりました。そこには「Ankle Biter Island」、「Head Over Wedgie」、「Dude, Where's My Swimsuit?」でした。

私たちが捕まえに来るモンスターはいませんでした。わずかな音も立てませんでした。

営業しているお土産屋さんを見つけました。棚にはまだ商品が並んでいます: 雪地球儀、鉛筆、ポストカード、ラックなど

「服だよ」アナベスは言った。「新鮮な服。」

「そうだね」と私は言った。「でも、そんなことはできない——」

"私を見て。"

彼女はラックの列全体をひたたくって、更衣室に消えました。数分後、彼女はウォーターランドの花柄のショートパンツ、ウォーターランドの大きな赤いTシャツ、そして記念のウォーターランドのサーフシューズを履いて登場した。彼女の肩にはウォーターランドのバックパックが掛けられており、明らかにもっとたくさんのグッズが詰め込まれていた。

「なんてことだ」グローバーは肩をすくめた。やがて、三人とも着飾って歩くようになった  
廃止されたテーマパークの広告。

私たちは愛のトンネルを探し続けました。公園全体が息をひそめているような気がした。「それで、アレスとアフロディーテは、暗くなつていくのを避けるために私は言いました。「彼らは何かをしているのですか？」

「それは昔の噂話だよ、パーシー」とアナベスは私に言った。「三千年前の噂話」

「アフロディーテの夫は？」

「まあ、ご存知でしょう」と彼女は言った。「ヘパイストス。鍛冶屋。彼は赤ん坊の時にゼウスによってオリンポス山から投げ落とされ、足が不自由だった。だから彼は必ずしもハンサムというわけではない。手先も器用だが、アフロディーテは頭脳や才能には興味がないんだよ。？」

「彼女はバイカーが好きです。」

"何でも。"

「ヘファイストスは知っていますか？」

「ああ、確かに」アナベスは言った。「彼は一度彼らを一緒に捕まえました。つまり、文字通り彼らを金の網で捕まえ、すべての神々を招いて彼らを笑わせました。ヘファイストスはいつも彼らを当惑させようとしています。だから彼らは屋外で会います。道の場所、例えば...」

彼女は立ち止まり、まっすぐ前を見つめた。「そのように」

私たちの前にはスケートボードには最高だったであろう空のプールがありました。それはでした  
直径は少なくとも50ヤードあり、お椀のような形をしています。

縁の周りには、十数体のキューピッドの銅像が翼を広げ、弓を射る準備をして警備に立っていました。私たちの反対側にトンネルが開いており、  
おそらくプールが満水になったときに水が流れ込んだのだろう。その上の看板には、「スリル・ライド・オ・ラブ :これはあなたのものではありません」と  
書かれていました

両親の愛のトンネル!

グローバーは端に向かって忍び寄った。「皆さん、見てください。」

プールの底に取り残されたのは、上に天蓋があり、小さなハートが全面に描かれたピンクと白の二人乗りボートでした。左側の席には、青銅の磨  
かれた円形のアレスの盾が、薄れゆく光の中で輝いていた。

「これは簡単すぎます」と私は言いました。「それでは、そこに歩いて行き、それを手に入れるだけですか？」

アナベスは一番近いキューピッド像の根元に沿って指をなぞった。

「ここにはギリシャ文字が彫られています」と彼女は言いました。「イータ。どうだろう…」

「グローバー、何か怪物の匂いがする？」と私は言った。

彼は風の匂いを嗅いだ。「何もない。」

「何も——例えば、アーチの中ではエキドナの匂いはしなかった、それとも本当に何もなかったの？」

グローバーさんは傷ついたようだった。「あそこは地下だと言いましたね。」

「わかりました、ごめんなさい。私は深呼吸をしました。「私はそこに行きます。」

「一緒にいきます。」グローバーはあまり熱心には聞こえなかったが、私は彼がそうしようとしていたように感じた  
セントルイスで起こったことを埋め合わせてください。

「いいえ」と私は彼に言いました。「君には空飛ぶ靴で常にトップになってほしい。君はレッドバロンだ。  
フライングエース、覚えていますか？何か問題が起こった場合に備えて、あなたを頼りにします。」

グローバーは少し胸を張った。「もちろんです。でも、何が問題になるのでしょうか？」

「分かりません。ただの感覚です。アナベス、一緒に来て——」

"冗談ですか？"彼女は私をまるで月から落ちてきたかのように見ました。彼女の頬は  
真っ赤。

「今何が問題になっているの？私は要求した。」

「私、一緒に…『愛のスリル・ライド』に行きましょう？それはなんて恥ずかしいことでしょう？もし  
誰かが私を見た？」

「誰があなたに会いに行きますか？」しかし、私の顔も今では熱くなっていました。すべてを複雑にするのは女の子に任せてください。「いい  
よ」と私は彼女に言いました。「自分でやります。」しかし、私がプールサイドを下り始めると、彼女は私を追ってきて、男の子はいつも物事をめちゃ  
くちやにすることについてつぶやきました。

私たちはボートに着きました。盾は一つの座席に立てかけられ、その隣には女性のシルクのスカーフが置かれていました。私はここでアレスとア  
フロディーテ、遊園地にある遊園地にある乗り物で出会った二人の神々を想像してみました。なぜ？それから私は、上からは見えなかった何かに気づ  
きました。それは、プールの縁の周りにずっと鏡があり、この場所に面していました。どの方向を見ても私たちは自分自身を見ることができました。それ  
は間違いありません。アレスとアフロディーテがお互いにじゃれ合っている間、彼らは自分たちの好きな人たち、つまり自分自身を見つめることが  
できました。

私はスカーフを拾いました。それはピンク色に輝き、バラか月桂樹のような香りがなんとも言えないものでした。何か良いことがある。私は少し  
夢見心地で微笑み、スカーフを頬にこすりつけようとしたとき、アナベスがスカーフを私の手から引きちぎり、ポケットに押し込みました。「ああ、そ  
うじゃないよ。」

その愛の魔法からは離れてください。」

"何?"

「シールドを手に入れてください、海藻脳、そしてここから出ましょう。」

盾に触れた瞬間、私たちは危機に陥っていると悟った。ダッシュボードに接続していたものを手で突き破ってしまいました。クモの巣だ、と思っ  
たが、手のひらの上でその糸を見てみると、それはほとんど目に見えないほど細い金属のフィラメントのようなものであることがわかった。トリップ  
ワイヤーです。

「待って」アナベスは言った。

"遅すぎる。"

「ボートの側面に別のギリシャ文字、別のイータがあります。これは罠です。」

まるでプール全体が回転しているかのように、何百万もの歯車が擦れ合うような騒音が私たちの周りで湧き起こった。

1つの巨大なマシンに。

グローバーは「みんな！」と叫んだ。

縁の上では、キューピッドの像が弓を引いて射撃姿勢をとっていました。私が避難を提案する前に彼らは発砲しましたが、私たちに向かっては  
発砲しませんでした。彼らはプールの縁を越えて互いに発砲した。

絹のようなケーブルが矢から引き出され、プールの上で弧を描き、着地した場所に固定され、巨大な金色の星印を形成しました。次に、小さな金属糸  
が主鎖の間で魔法のように織り込まれ、網を作り始めました。

「出て行かなければなりません」と私は言いました。

「当然だ！」アナベスは言いました。

私はシールドを掴んで走りましたが、プールの斜面を登るのは下りほど簡単ではありませんでした。

"来て!"グローバーは叫んだ。

彼は私たちのためにネットの一部を開こうとしていたが、彼が触れたところはどこであっても、金色に輝いた。

糸が彼の手に巻きつき始めた。

キューピッドの頭がパカッと開きました。ビデオカメラが出てきました。プールの周りにスポットライトが上がり、イルミネーションで私たちの  
目がくろみ、拡声器の音が響き渡った。「1分以内にオリンパスまで生きろ…59秒、58秒…」

「ヘパリストス！」アナベスは叫びました。「私は本当に愚かです。」エタはHだよ』彼は自分を捕まえるためにこの罠を作りました  
アレスの妻。これから私たちはオリンパスに生中継され、まったくの愚か者に見えることになるだろう！」

私たちがもうすぐ縁に着くところで、鏡の列がハッチのように開き、何千もの鏡が開いた。

小さな金属のようなものが流れ出てきました。

アナベスは叫びました。

それは巻き上げられた不気味な這い虫の軍隊だった。青銅の歯車の体、ひよろ長い足、小さなハサミ口が、カタカタとうなりを上げる金属の波  
に乗って私たちに向かって小走りで来た。

「蜘蛛だ！」アナベスは言いました。「スプ、スプ、ああああ！」

こんな彼女を今まで見たことがありませんでした。彼女は恐怖のあまり後ろ向きに倒れ、ほとんど圧倒されそうになった  
私が彼女を引き上げてボートに向かって引き戻す前に、スパイダーロボットを動かしました。

それらは今、縁の周りから出てきて、何百万ものものがプールの中心に向かって溢れ、私たちを完全に取り囲んでいます。私は、彼らはおそらく  
殺すようにプログラムされているのではなく、ただ私たちを囲い込み、噛みつき、私たちを愚かに見せるだけだと自分に言い聞かせました。やはり、こ  
れは罠でした

神々を意味する。そして私たちは神ではありませんでした。

アナベスと私はボートに乗りました。クモが群がって乗り込んできたので、私はクモを蹴り飛ばし始めました。私はアナベスに助けを求めて叫びましたが、彼女は麻痺しており、叫ぶこと以上のことはできませんでした。

「30、29」と拡声器が呼んだ。

クモは金属の糸を吐き出し、私たちを縛り付けようとしてきました。糸は最初は簡単に切れてしまいましたが、糸の数が多すぎて、クモが次々とやって来ました。私はアナベスの脚から片方を蹴り飛ばし、そのハサミで私の新しいサーフシューズの塊が取れました。

グローバーさんはフライングスニーカーを履いてプールの上をホバリングし、ネットを緩めようとしたが、ネットはびくともなかった。

考えてみて、と私は自分に言い聞かせました。考える。

愛のトンネルの入り口はネットの下にありました。それを出口として使用することもできましたが、100万匹のロボットスパイダーがブロックします。

「15、14」と拡声器が呼びかけた。

水だ、と私は思った。乗り物の水はどこから来ますか？

それから私はそれらを見ました。鏡の後ろにある巨大な水道管、そこからクモが来ていました。

そしてネットの上、キューピッドの一人の隣には、管制官のステーションに違いのないガラス窓のブースがある。

「グローバー！ 私は叫びました。「あのブースに入ってください！『オン』のスイッチを見つけてください！」

"しかし-"

"やれ！"それは途方もない希望だったが、それが唯一のチャンスだった。クモが船首の上にいる今のボートの。アナベスは頭から叫び声を上げていました。私たちをそこから連れ出さなければなりませんでした。

グローバー氏は今、管制官のブースにいて、ボタンを叩き続けていた。

「五、四――」

グローバーは絶望的に私を見上げ、手を上げた。彼はすべてのボタンを押したが、それでも何も起こらなかったと私に知らせていました。

私は目を閉じて、波、激流、ミシシッピ川について考えました。私は感じました

おなじみの私の腸の引っ張り。私はデンバーまで海を引きずっているところを想像してみました。

「ツー、ワン、ゼロ！」

パイプから水が爆発した。それは咆哮を上げてプールに飛び込み、クモを一掃した。私がアナベスを隣の席に引き込み、シートベルトを締めたそのとき、高波が私たちのボートの上から打ち寄せ、クモを追い払い、私たちを完全に水浸しにしましたが、転覆はしませんでした。ボートは向きを変え、洪水の中で持ち上げられ、渦の周りをぐるぐると回転しました。

水にはショートしたクモがいっぱいいて、その中にはプールの水面に激突するものもいた。

コンクリートの壁が破裂するほどの力で。

スポットライトが私たちを照らしました。キューピッドカメラは回転しており、オリンパスまで生きていました。

しかし、私はボートを制御することだけに集中できました。私はそれを壁から遠ざけるために、流れに乗るようにしました。気のせいかもしれませんが、ボートは反応したように見えた。少なくとも、100万個にも割れることはなかった。私たちは最後にもう一度回転しましたが、水位は金属網にぶつかりそうなほど高くなりました。それからボートの機首がトンネルに向かって向きを変え、私たちは暗闇の中を突進していきました。

アナベスと私はしっかりと抱きつき、ボートがカールして角を抱き合い、ロミオとジュリエットやその他のバレンタインデー関連の写真の横を通り過ぎて45度急降下したとき、私たちは二人とも叫びました。

それから私たちはトンネルの外に出ました、ボートが発砲するにつれて夜気が私たちの髪を吹き抜けました  
出口に向かって真っ直ぐ。

もし乗り物が正常に作動していれば、私たちは黄金の愛の門の間のランプを下り、出口プールに安全に水しぶきを落とさせていただこう。しかし、問題がありました。愛の門は鎖でつながれていました。私たちの前でトンネルから流された2隻のボートがバリケードに積み上げられ、1隻は水没し、もう1隻は真っ二つにひび割れた。

「シートベルトを外してください」私はアナベスに叫びました。

"ばかじゃないの？"

「叩き殺されたくなければ。」アレスの盾を腕に縛り付けた。「我々はそれに飛びつく必要があるだろう。」私のアイデアは単純かつ非常に識でした。ボートが衝突すると、私たちはその力を踏み台のように使ってゲートを飛び越えました。自動車事故で30フィート、40フィート離れたところろに投げ出されて、そうやって生き残った人の話を聞いたことがあります。運が良ければ、プールに着地するでしょう。

アナベスは理解したようだった。門が近づくと彼女は私の手を握りました。

「的中しました」と私は言いました。

「いいえ、私の目標通りです！」

"何？"

「簡単な物理学！」彼女は叫んだ。「力と軌道角度の積—」

「分かった」と私は叫びました。「位置について！」

彼女はためらった…ためらった…そして叫んだ、「さあ！」

割れ目！

アナベスは正しかった。もし飛び降りるべきだと思ったときに飛び降りていたら、門に激突していただろう。彼女は私たちに最大限のリフトを与えてくれました。

残念ながら、それは私たちが必要とする量を少し超えていました。私たちのボートは玉突きに衝突し、私たちは空中に投げ出され、ゲートを越え、プールを越え、固いアスファルトに向かって落ちました。

後ろから何かが私を掴みました。

アナベスは「痛い！」と叫びました。

グローバー！

空中で、彼は私のシャツを掴み、アナベスの腕を掴んで、私たちを引っ張ろうとしていました。

不時着から脱出しましたが、アナベスと私には勢いがありました。

「重すぎるよ！」グローバー氏は語った。「下りますよ！」

私たちは地面に向かって螺旋を描き、グローバーは落下を遅らせるために最善を尽くしました。

私たちは写真ボードに激突し、観光客が人懐っこいクジラのヌーヌーのふりをして顔を突っ込む穴に、グローバーの頭が真っ直ぐ突っ込んでいきました。アナベスと私は地面に転がり、体を強打しましたが、生きていました。アレスの盾はまだ私の腕にありました。

息を整えると、アナベスと私はグローバーを写真ボードから引き上げ、私たちの命を救ってくれたことに感謝しました。恋のスリルライドを振り返ってみました。水は引いてきました。私たちのボートはゲートに衝突して粉々に砕かれていました。

100ヤード離れた入り口のプールでは、キューピッドたちがまだ撮影中だった。彫像には



彼らのカメラは私たちにまっすぐ向けられ、私たちの顔にスポットライトが当たるように旋回しました。

「ショーは終わりました！私は叫びました。"ありがとう、おやすみ！"

キューピッドたちは元の位置に戻りました。照明が消えた。スリル・ライド・オブ・ラブの出口プールに水が優しく滴るのを除いて、公園は再び静かで暗くなりました。オリンパスはコマーシャル休止期間に入ったのだろうか、それとも当社の評価は良かったのだろうか疑問に思った。

からかわれるのが大嫌いでした。騙されるのが嫌だった。そして、私にそのようなことをするのが好きないじめっ子を扱った経験も豊富でした。私は盾を腕に担ぎ上げ、友達の方を向いた。「アレスと少し話したいことがあります。」

---

## 16 シマウマに乗ってラスベガスへ行く

軍神は食堂の駐車場で私たちを待っていました。

「まあ、まあ」と彼は言った。「あなたは自分自身を殺したわけではありません。」

「それが異だと分かっていたでしょうね」と私は言った。

アレスは私に意地悪な笑みを浮かべた。「あの足の不自由な鍛冶屋は、金を手に入れたとき驚いたに違いない」  
愚かな子供たちのカップル。テレビで見ると元気そうでしたね。」

私は彼の盾を彼に突きつけた。「お前はバカだ」

アナベスとグローバーは息を呑んだ。

アレスは盾を掴み、ピザ生地のように空中で回転させた。形を変えて溶けて  
防弾チョッキ。彼はそれを背中に投げつけた。

「あそこにあるトラックが見えますか？」彼は通りの向かい側に停まっている18輪車を指さした。  
ダイナー。「これがあなたの乗車です。ラスベガスで1回停車して、LAまで直行します。」

この18輪車の後ろには標識が付いていましたが、それは黒地に白が反転して印刷されていたためしか読めませんでした。これは失読症にとって良い組み合わせでした。「KINDNESS INTERNATIONAL: HUMANE ZOO TRANSPORT」です。警告: 生きた野生動物。

私は「冗談だよ」と言いました。

アレスは指を鳴らした。トラックの後部ドアのラッチが外れた。「フリーライド・ウェスト、バンク。やめろ」  
文句を言う。そして、この仕事をするためのちょっとしたものをご紹介します。」

彼は青いナイロン製のバックパックをハンドルバーから下ろし、私に投げました。

中には私たち全員分の新鮮な服、現金20ドル、金色のドラクマが入ったポーチが入っていました。  
それとダブルスタッフオレオの袋。

私は言いました、「あなたのひどいことは望んでいませんー」

「ありがとう、アレス様」グローバーが言葉を遮り、私に最高の警戒警報のような視線を向けた。  
"どうもありがとう。"

私は歯を食いしばりました。神からの何かを拒否するのはおそらく致命的な侮辱だったが、私はアレスが触れたものを何も望まなかった。仕方なくバックバックを肩から掛けました。私の怒りの原因は軍神の存在であることはわかっていたのですが、それでも彼の鼻を殴りたくてうずうずしていました。彼は私がこれまでに直面したすべてのいじめっ子を思い出させました。ナンシー・ポポフィット、クラリス、スメル・ゲイブ、皮肉な教師、学校で私をバカ呼ばわりしたり、退学になったときに私を笑ったすべての野郎たちです。

食堂を振り返ると、もう客は数人しかいなかった。私たちに夕食を提供してくれたウェイトレスは、アレスが私たちを傷つけるのではないかと心配しているかのように、緊張しながら窓の外を眺めていました。

彼女はフライ料理人をキッチンから引きずり出して様子を見させた。彼女は彼に何か言いました。彼はうなずき、小さな使い捨てカメラを構えて私たちの写真を撮りました。

すごい、と思いました。明日また書類を作ります。

私は見出しを想像しました :11歳の無法者が無防備を殴るバイカー。

「もう一つ借りがあるんだよ、私は声を抑えようとしながらアレスに言った。"約束したでしょ母に関する情報です。」

「本当にニュースを扱えるの？彼はバイクをキックスタートさせた。「彼女は死んでいません。」

地面が私の真下で回転しているように見えました。"どういう意味ですか？"

「つまり、彼女は死ぬ前にミノタウロスから連れ去られたのです。彼女は黄金のシャワーに変えられたのでしょうか？それは変態です。死ではありません。彼女は保管されています。」

「わかった。なぜ？」

「戦争を勉強する必要がある、パンク。人質だ。誰かを支配するために誰かを連れて行くんだ。」

「誰も私をコントロールしていません。」

彼が笑いました。「ああ、そうだね？また会いましょう、坊や。」

私は拳を突き上げた。「アレス様、キュービッドの像から逃げるなんて、とても独りよがりですね。」

サングラスの奥で火が光った。髪に熱い風を感じた。「また会いましょう、パーシー・ジャクソン。次に喧嘩するときは気をつけてください。」

彼はハーレーのエンジンをふかし、轟音を立ててデランシー・ストリートを走り去った。

アナベスは「それは賢明ではなかった、パーシー」と言った。

"私は気にしない。"

「神を敵にしたいくないでしょう。特にその神はだめです。」

「やあ、みんな」グローバーは言った。「邪魔するのは嫌だけど……」

彼はダイナーの方を指さした。レジでは、最後の2人の客が小切手を支払っていました。2人の男性は同じ黒いつなぎ服を着ており、背中には、レジにあるものと同じ白いロゴが付いていました。

カインドネスインターナショナルのトラック。

「動物園特急に乗るなら、急ぐ必要がある」とグローバーさんは言った。

気に入らなかったのですが、これ以上の選択肢はありませんでした。それに、私はデンバーについてはもう十分見てきました。

私たちは通りを走って横切り、大きなリグの後ろに登り、後ろでドアを開めました。

まず最初に感じたのは匂いでした。それはまるで世界最大の子猫のトイレのようなものでした。

アナクルスモスのキャップを外すまで、トレーラーの中は真っ暗でした。その刃は、とても悲しい光景に淡い青銅の光を投げかけた。不潔な金属製の檻が並んでいるのは最も哀れな動物園の3つだった

シマウマ、アルビノの雄のライオン、そして名前が分からなかった奇妙なアンテロープなど、私が見たことのある動物たち。

誰かがライオンにカブの入った袋を投げつけたのですが、ライオンは明らかにそれを食べたくなかったのです。シマウマとアンテロープはそれぞれ、ハンバーガーの肉が入った発泡スチロールのトレイを手に入れていました。シマウマのたてがみには、まるで誰かが暇なときに唾を吐きかけたかのように、チューインガムが付着していた。アンテロープは、角の1つに「丘を越えて」と書かれた愚かな銀色の誕生日風船を結びつけていました。

どうやら、ライオンにちょっかいを出すほど近づきたい人は誰もいなかったようだが、かわいそうなライオンは、トレーラーの蒸し暑い熱で息を切らしながら、汚れた毛布の上を歩き回っていた。彼のピンク色の目の周りにはハエが飛び交い、肋骨が透けて見えていた

彼の白い毛皮。

「これが優しさなの？」グローバーは叫んだ。「人道的な動物園の輸送？」

おそらく彼はすぐに外に出て、葦管でトラック運転手を殴りつけただろうし、私も彼を助けただろうが、そのとき、トラックのエンジンが唸りを上げ、トレーラーが揺れ始めた。

そして私たちは座るか、倒れることを余儀なくされました。

私たちは部屋の隅でカビの生えた飼料袋の上に群がり、匂い、暑さ、ハエを無視しようとしていました。グローバーさんはヤギの鳴き声を上げながら動物たちに話しかけたが、彼らは悲しそうに彼を見つめるだけだった。アナベスは檻を壊してその場で解放することに賛成だったが、私はトラックが動かなくなるまではあまり効果がないと指摘した。それに、私たちはカブよりもライオンのほうがずっとよく見えるかもしれないと感じました。

私は水差しを見つけて彼らのボウルを補充し、アナクラスモスを使って不一致のものをドラッグしました。檻から食べ物を出します。私はライオンに肉を与え、シマウマとカモシカにカブを与えました。

アナベスがナイフを使って角から風船を切り落としている間、グローバーさんはアンテロープを落ち着かせた。彼女はシマウマのたてがみからもゴムを切り取りたいと考えていましたが、トラックがぶつかる可能性があるため、それは危険すぎると判断しました。私たちはグローバーと一緒に、午前中に動物たちをもっと助けると約束するように言い、それから夜に落ち着きました。

グローバーはカブの袋の上で丸くなった。アナベスはダブルスタッフオレオの袋を開け、中途半端に一つをかじりました。私はロサンゼルスまで半分だという事実で集中して自分を元気づけようとしていました。目的地まで半分です。ちょうど6月14日のことだった。夏至は21日までありませんでした。十分に時間内に到着することができました。

一方で、次に何が起こるのか全く分かりませんでした。神々は私を翻弄し続けました。少なくともヘパイストスにはそれについて正直に話す良識があった——彼はカメラを設置し、娯楽として私を宣伝していたのだ。しかし、カメラが回っていないときでも、私の探求は見られていると感じました。私は神々の楽しみの源でした。

「やあ」アナベスは言った、「ウォーターパークで慌てふためいてごめんね、パーシー」

"大丈夫。"

「それはただ…」彼女は震えた。「蜘蛛」。

「アラクネの物語のせいだ」と私は推測した。「彼女はあなたに挑戦したために蜘蛛に変えられました

お母さん、機織りコンテストに行くんだよね？」

アナベスはうなずいた。「それ以来、アラクネの子供たちはアテナの子供たちに復讐し続けています。私の1マイル以内にクモがいれば、私を見つけます。私は不気味な小さなものが嫌いです。

とにかく、あなたには借りがあります。」

「私たちはチームです、覚えていますか？ 私は言いました。「それに、グローバーは派手な飛行もしました。」

覆っているのかと思いきや、隅っこで「俺、すごかったよね」とつぶやいていた。

アナベスと私は笑いました。

彼女はオレオを1つ切り離し、半分を私に手渡しました。「アイリスのメッセージでは……ルークは本当に何も言っていなかったのですか？」

私はクッキーをむしゃむしゃ食べながら、どう答えるかを考えました。虹を介した会話が私を一晩中悩ませていました。「ルークは、あなたと彼はずっと昔に戻ると言いました。また、グローバーは今回は失敗しないともしました。松の木になる人は誰もいないでしょう。」

剣の刃の薄暗い青銅の光の中で、彼らの表情を読み取るのは困難でした。

グローバーは悲痛な叫び声を上げた。

「最初から本当のことを言えばよかった。彼の声は震えていた。「私がどれほど失敗者であるかを知っていれば、私を連れてほしくないだろうと思ったのです。」

「あなたはゼウスの娘タリアを救おうとしたサテュロスでした。」

彼は不機嫌そうにうなずいた。

「そして、タリアが友達になった他の二人の混血者たち、無事にキャンプにたどり着いた者たち……」私はアナベスを見た。「あれは君とルークだったね？」

彼女はオレオを食べずに置いた。「あなたが言ったように、パーシー、7歳の混血児は一人ではとても遠くまでたどり着けなかったでしょう。アテナは私を助けに導いてくれました。タリアは12歳、ルークは14歳でした。二人とも家から逃げ出したのです。彼らは喜んで私を連れて行ってくれました。

彼らは…訓練を受けていなくても、驚くべきモンスターファイターでした。私たちは何の計画も立てずにバージニアから北へ旅し、グローバーに見つかるまでの約2週間モンスターを撃退し続けました。」

「私はタリアをキャンプまで護衛するはずだったんだ」と彼は鼻を鳴らしながら言った。「タリアだけよ。ケイロンからは厳命があった、救助を遅らせるようなことはするな。ハデスが彼女を追っているのは分かっていたが、ルークとアナベスを放っておくわけにはいかなかった。私は思った…」  
3人全員を安全な場所に連れて行けると思った。親切な人たちが私たちに追いついたのは私のせいでした。私は凍った。キャンプに戻る途中で怖くなって、道を間違えてしまいました。もう少し早ければ…」

「やめて」アナベスは言った。「誰もあなたを責めません。タリアもあなたを責めませんでした。」

「彼女は私たちを救うために自らを犠牲にした。彼女の死は私のせいだった。」

クローヴン・エルダースの者はそう言った。」

「だって、他の二人の混血を残したくないから？」私は言いました。「不公平だ。」

「パーシーは正しい」とアナベスは言った。「グローバー、あなたがいなかったら、私は今日ここにいないでしょう。ルークもそうしません。評議会が何を言おうと、私たちは気にしません。」

グローバーは暗闇の中で鼻を鳴らし続けた。「これは私の運が良かっただけです。私はこれまでで最も下手なサテュロスですが、今世紀で最も強力な二人の混血、タリアとパーシー。」

「あなたは足が不自由ではありません」とアナベスは主張した。「あなたは私がこれまで会ったどのサテュロスよりも勇気があります。冥界に行く勇気のある人をもう一人挙げてください。パーシーはあなたがここに来てくれて本当に嬉しいに違いない今。」

彼女は私のすねを蹴りました。

「そうだね」と私は言ったが、たとえキックがなかったとしてもそうしていただろう。「あなたがタリアと私を見つけたのは幸運ではありません、グローバー。あなたはこれまでのサテュロスの中で最も大きな心を持っています。あなたは天性の探索者です。だからパンを見つけるのは君だ」

深い満足したため息が聞こえました。グローバーが何か言うのを待ったが、彼の呼吸は止まるばかりだったより重い。音がいびきに変わったとき、私は彼が寝てしまったことに気づきました。

「彼はどうやってそんなことをするのですか？」私は驚きました。

「分かりません」とアナベスは言った。「でも、あなたが彼に言ったのは本当に良かったです。」

"本気で言っているんだ。"

私たちは飼料袋をぶつけながら、数マイル黙って走りました。シマウマはむしゃむしゃ食べました。カブ。ライオンは唇に残った最後のハンバーガーの肉をなめ、希望を込めて私を見つめました。

アナベスは、深く戦略的なことを考えているかのように、ネックレスをこすった。

「あの松の木のピースだよ」と私は言った。「それは1年目からですか？」

彼女は見た。彼女は自分が何をしているのか理解していませんでした。

「ええ」と彼女は言った。「毎年8月、カウンセラーたちはその夏の最も重要なイベントを選び、その年のピースにそれを描きます。私はタリアの松の木、燃えているギリシャの三段櫓船、プロムドレスを着たケンタウロスを持っています。それは奇妙なことでした。夏...."

「それで、カレッジリングはあなたのお父さんのものですか？」

「それはあなたのものではありません——」彼女は自分自身を止めた。「はい、そうです。」

「言わなくてもいいよ。」

「いえ…大丈夫ですよ。彼女は震える息をついた。「2年前の夏、父がそれを手紙に折りたたんで私に送ってくれました。その指輪は、アテナからの彼の一番の形見のようなものでした。父は彼女なしではハーバード大学の博士課程を修了することはできなかっただろう……それは長かったです。」

「それはそれほど悪くないようです。」

「そう、そうですね…問題は、私が彼を信じたことです。私はその学年の間家に帰ろうとしましたが、継母は相変わらずでした。彼女は異常者と暮らすことで子供たちを危険にさらしたくありませんでした。」

モンスターが襲いかかってきました。私たちは議論しました。モンスターが襲いかかってきました。私たちは議論しました。冬休みすら過ごせなかった。私はケイロンに電話して、すぐにキャンプ・ハーフブラッドに戻ってきた。」

「もう一度お父さんと一緒に暮らしてみようと思う？」

彼女は私の目を合わせようとしませんでした。「お願いします。私は自分で引き起こした痛みには興味がありません。」

「諦めてはいけません」と私は彼女に言いました。「あなたは彼に手紙か何かを書くべきです。」

「アドバイスありがとう」と彼女は冷たく言った、「でも、誰を選ぶかは父が自分で決めたんだ」と一緒に暮らしたいのです。」

私たちはさらに数マイルの静寂を過ごしました。

「では、もし神々が戦ったら、トロイア戦争のときと同じように物事は進むのでしょうか？」と私は言いました。アテナ対ポセイドンですか？」

彼女はアレスがくれたリュックに頭を預け目を閉じた。「母さんが何をするか分かりません。ただ、私があなたの隣で戦うことだけは分かっています。」

"なぜ？"

「あなたは私の友達だから、海藻脳。これ以上愚かな質問はありますか？」

それに対する答えは思いつきませんでした。幸いなことに、その必要はありませんでした。アナベスは眠っていた。

グローバーがいびきをかき、アルビノのライオンが空腹で見つめていたので、私は彼女の例に従うのが困難でした。

と私に向かって言いましたが、結局私は目を閉じました。

...

私の悪夢は、これまでに何百万回も見ただけのものとして始まりました。拘束衣を着た状態で共通テストを受けさせられるというものでした。他の子供たちはみんな休み時間に出かけていて、先生は「さあ、パーシー」と言い続けました。バカじゃないですよ？鉛筆を手に取ります。

それから夢はいつものものから外れました。

隣の机に目をやると、やはり拘束衣を着た女の子が座っていた。彼女は私と同年で、手に負えないパンク風の黒髪、荒れた緑色の目の周りに濃い色のアイライナー、鼻にはそばかすがあった。どういうわけか、私は彼女が誰であるかを知っていました。彼女はゼウスの娘タリアでした。

彼女は拘束衣に抵抗し、イライラして私を睨みつけ、「まあ、海藻ね」と言いました。

脳？私たちのどちらかがここから出なければなりません。

彼女は正しい、と夢見ていた私は思いました。あの洞窟に戻ります。ハデスに私の心の一部を捧げるつもりです。

拘束衣は私から溶けていきました。教室の床から落ちてしまいました。先生の声は、大きな溝の奥から響く冷たく邪悪な声に変わりました。

パーシー・ジャクソン、と書いてありました。はい、交換はうまくいきました。

私は暗い洞窟に戻り、死者の霊が私の周りを漂っていました。穴の中では見えませんが、その怪物は話しかけていましたが、今回は私に話しかけていませんでした。その声のしびれるような力は、どこか別のところに向けられているようでした。

そして彼は何も疑っていないのでしょうか？それは尋ねた。

ほとんど見覚えのある別の声私の肩で答えた。何もありません、主よ。彼は他の人たちと同じように無知だ。

覗いてみましたが、誰もいませんでした。スピーカーは見えませんでした。

欺瞞に欺瞞を重ね、穴の中の物体は大声で考え込んだ。素晴らしい。

本当に、主よ、私の隣の声と言いました、あなたは曲がった者としてよく知られています。しかし、それは本当に必要だったのでしょうか？盗んだものを直接持ってくることもできたのに――

あなた？怪物は軽蔑して言いました。あなたはすでに自分の限界を示しています。私が介入しなかったら、あなたは私を完全に失望させていたでしょう。

しかし、主よ――平和

を、小さな僕よ。この6か月間は私たちに多くのものをもたらしました。ゼウスの怒りは増大しました。

ポセイドンは最も絶望的なカードを出しました。今度はそれを彼に対して使用しましょう。間もなく、あなたは望む報酬と復讐を得るでしょう。どちらの商品も私の手に届き次第……しかしお待ちください。彼はここにいます。

何？目に見えない使用人は突然緊張した声を出しました。あなたが彼を召喚したのですか、閣下？

いいえ、怪物たちの全力の注意が私に注がれ、私はその場で凍りつきました。

父親の血を吹き飛ばす――彼はあまりにも変わりやすく、予測不可能すぎる。少年は自らここへやって来た。

不可能！使用人は叫びました。

あなたのような弱者にとっては、おそらくその声は怒鳴りました。その後、冷たい電源が再びオンになりました。自分。それで…若い半純血の皆さん、あなたは自分の探求を夢見たいですか？それなら義務を負います。

場面が変わった。

私は黒い大理石の壁と青銅の床を持つ広大な玉座の間に立っていました。空っぽの、

恐ろしい王座は人間の骨を融合して作られました。壇の足元には、きらめく金色の光の中で凍りついた母が両手を広げて立っていた。

私は彼女に近づこうとしましたが、足が動きませんでした。私は彼女に手を伸ばしましたが、自分の手が骨まで枯れ果てていることに気づきました。ギリシャの甲冑を着たニヤリとした骸骨たちが私の周りに群がり、私を絹のロープで覆い、キメラの毒が煙る月桂樹を頭に巻きつけ、私の頭皮に焼き付いた。

邪悪な声が笑い始めた。万歳、征服の英雄よ！

私はハッと目覚めました。

グローバーは私の肩を揺すっていた。「トラックが止まっています」と彼は言った。「私たちは彼らが来ると思っています動物たちの様子をチェックしてください。」

"隠れる！"アナベスはシューッと音を立てた。

彼女は楽でした。彼女は魔法の帽子をかぶって姿を消しました。グローバーと私は飼料袋の後ろに潜らなければなりませんでした。私たちがカブのように見えることを願っていました。

トレーラーのドアがきしむ音を立てて開いた。太陽の光と熱が差し込んできた。

"男！"トラック運転手の一人が、醜い鼻の前で手を振りながら言った。「運べばよかった彼は中に入り、水差しから動物たちの皿に水を注ぎました。

「熱いね、大きな男の子？」彼はライオンに尋ねると、バケツの残りをライオンの顔に直接かけました。

ライオンは憤慨して吠えました。

「そう、そう、そう」男は言った。

私の隣で、カブの袋の下で、グローバーは緊張していた。平和を愛する草食動物のような彼は、まさに殺人的。

トラック運転手はカモシカに潰れたようなハッピーミールの袋を投げつけた。彼はシマウマに向かって笑いました。

「調子はどうだ、ストライプス？少なくともこの停留所で君を追い出すつもりだよ。君はマジックショーが好き？これは絶対気に入るよ。彼らは君を真っ二つに見られるだろうね！」

シマウマは恐怖で荒々しい目をして、まっすぐに私を見つめました。

音はありませんでしたが、昼のようにはっきりと、「主よ、私を解放してください」と言うのが聞こえました。お願いします。

私はびっくりして反応できませんでした。

トレーラーの側面で、ノック、ノック、ノックという大きな音が聞こえました。

一緒に乗っていたトラック運転手は「エディ、何が欲しいの？」と叫びました。

外の声——エディの声だったに違いない——が叫び返した、「モーリス？何て言ったの？」

「何のために叩いているのですか？」

ノック、ノック、ノック。

外ではエディが「何の衝撃だ？」と叫んだ。

うちの男のモーリスは目を丸くして外に戻り、エディをバカだと罵った。

次の瞬間、アナベスが私の隣に現れました。彼女はモーリスをトレーラーから追い出すために強打したに違いない。彼女は「この運送業が合法であるはずがない」と言いました。

「冗談じゃないよ」とグローバー氏は言った。彼は聞いているかのように立ち止まった。「ライオンは、こいつらは動物だと言っている」密輸業者よ！」

そう、シマウマの声が心の中で言った。

「彼らを解放しなければなりません！」グローバー氏は語った。彼とアナベスは二人とも私を見て、私の導きを待っていました。

シマウマの話は聞いたことがあります、ライオンの話は聞いていませんでした。なぜ？もしかしたら別の学習障害だったのかもしれませんが...

シマウマしか分かりませんでしたか？そこで私は馬だ、と思いました。アナベスはポセイドンが馬を作ったことについて何と言っていましたか？シマウマは馬に十分近かったでしょうか？だからこそ理解できたのでしょうか？

シマウマは言いました、「檻を開けてください、ご主人様」お願いします。その後は大丈夫です。

外ではエディとモーリスがまだ怒鳴り合っていたが、今にも彼らが中に入ってきて動物たちを苦しめることになるだろうと私は思っていた。私はリップタイドを掴み、シマウマの檻の鍵を切り落としました。

シマウマが飛び出した。それは私の方を向いてお辞儀をしました。ありがとう、主よ。

グローバーさんは両手を上げて、祝福するかのようにヤギ話でシマウマに何かを言いました。

モーリスが騒音を確認するために屋内に頭を突っ込んでいたそのとき、シマウマはモーリスを飛び越えて通りに飛び出しました。叫び声と叫び声があり、車のクラクションが鳴り響きました。私たちはトレーラーのドアに急いで向かい、シマウマがホテルやカジノ、ネオンサインが立ち並ぶ広い大通りを疾走するのを目にしました。ちょうどラスベガスでシマウマを放したところだった。

モーリスとエディはそれを追いかけて、数人の警官が「おい！」と叫びながら追いかけた。

それには許可が必要だ！」

「今が出発の良い時期だ」とアナベスは言った。

「他の動物が先だ」とグローバー氏は語った。

私は剣で錠前を切りました。グローバーさんは両手を上げ、シマウマのときと同じヤギの祝福を語った。

「頑張っってね」と私は動物たちに言いました。アンテロープとライオンは檻から飛び出し、一緒に街へ出て行きました。

観光客の中には悲鳴を上げる人もいた。おそらく、おそらくそうだと思う、ほとんどの人は後ずさりして写真を撮っただけです。カジノの1つによるある種のスタント。

「動物たちは大丈夫でしょうか？」グローバーさんに聞いてみた。「つまり、砂漠とそのすべてが——」

「心配しないでください」と彼は言いました。「私は彼らの上にサテュロスの聖域を置きました。」

"意味？"

「つまり、彼らは無事に野生に辿り着くということだ」と彼は言う。「彼らは水、食べ物、日陰など何でも見つけます

彼らは安全に住める場所を見つけるまで必要だ。」

「どうして私たちにそのような祝福を与えてくれないのですか？」私は尋ねた。

「それは野生動物にのみ効果があります。」

「つまり、影響を受けるのはパーシーだけだ」とアナベスは推論した。

"おい！"私は抗議した。

「冗談だよ」と彼女は言った。「さあ、この汚いトラックから降りましょう。」

午後、私たちはよろよろと砂漠に出ました。気温は111度で過ごしやすく、私たちは揚げ物の浮浪者のように見えたに違いありませんが、誰もが野生動物に興味を持っていて、私たちにあまり注意を払いませんでした。

モンテカルロとMGMを通り過ぎました。私たちはピラミッド、海賊船、像の前を通りました

リパティのかなり小さなレプリカでしたが、それでもホームシックになりました。

私たちが何を探しているのか分かりませんでした。ほんの少し暑さをしのぐための場所かもしれませんが



数分したら、サンドイッチとレモネードを見つけて、西へ向かうための新しい計画を立てましょう。

私たちは道を間違えたに違いありません。ロータス ホテル アンド カジノの前で行き止まりに陥ってしまったからです。入り口には巨大なネオンの花があり、花びらが光って点滅していました。誰も出入りしていませんでしたが、きらびやかなクロムのドアは開いており、花のような、おそらく蓮の花のような香りのエアコンからあふれ出ていました。匂いを嗅いだことがなかったので、

よく分かりませんでした。

ドアマンは私たちに微笑みかけた。「やあ、子供たち。疲れているようだね。入って座りたい？」

ここ一週間ほどで、私は疑いを持つようになった。誰でも怪物か神になるかもしれないと思った。あなたにはそれを伝えることができませんでした。でもこの人は普通の人でした。彼を一目見て、それが分かりました。それに、誰かが同情的だと聞いてとても安心したので、うなずいて、ぜひ入りたいと言いました。屋内で周りを見回して、グローバーが言いました。

ロビー全体が巨大なゲームルームになっていました。そして、私は安っぽい古いパックマン ゲームやスロット マシンについて話しているのではありません。ガラス張りのエレベーターの周りを蛇行する屋内ウォータースライダーがあり、少なくとも 40 階までまっすぐ上がりました。ある建物の側面にはクライミングウォールがあり、屋内バンジージャンプ用の橋もありました。作動するレーザー銃を備えた仮想現実スーツもありました。そして、それぞれがワイドスクリーンテレビほどの大きさの何百ものビデオゲーム。基本的に、この場所にはそれがありました。他にも何人かの子供たちが遊んでましたが、それほど多くはありませんでした。どのゲームも待つ必要はありません。

あちこちにウェイトレスやスナックバーがあり、想像できるあらゆる種類の食べ物を提供していました。

"おい！"ベルボーイが言いました。少なくとも私は彼がベルボーイだと思った。彼は白と黄色の蓮の模様のアロハシャツを着て、ショートパンツとビーチサンダルを履いていた。「ロータスカジノへようこそ。これがあなたのルームキーです。」

私は口ごもって「うーん、でも…」

「いや、いや」と彼は笑いながら言った。「請求書は処理しました。追加料金もチップもありません。そのまま最上階に上がって、織機 4001 を使用してください。何か必要な場合は、ホットタブ用の追加の泡や、射撃場のスキートターゲットなど、何かあれば、フロントデスクに電話してください。これがロータスキャッシュ カードです。レストラン、すべてのゲーム、乗り物でご利用いただけます。」

彼は私たち一人一人に緑色のプラスチックのクレジットカードを手渡しました。

何か間違いがあるに違いないことはわかっていました。明らかに彼は私たちを億万長者の子供だと思っていたようです。

でも、私はカードを手にとって、「ここにはいくらありますか？」と言いました。

彼の眉毛は絡み合っている。「どういう意味ですか？」

「つまり、いつ現金がなくなるのですか？」

彼が笑いました。「ああ、冗談ですよ。おい、それはいいですね。楽しんでください。」

私たちはエレベーターで二階に上がり、部屋をチェックアウトしました。それは 3 つの独立したベッドルームと、キャンディー、ソーダ、ポテトチップスを揃えたバーを備えたスイートでした。ルームサービスへのホットライン。ふわふわのタオルと羽根枕付きのウォーターベッド。衛星放送と高速インターネットを備えた大画面テレビ。バルコニーには専用のホットタブがあり、案の定、スキート射撃機と散弾銃があったので、ラスベガスのスカイライン上空にクレーバトを放ち、銃で撃つことができました。それがどうして合法的なのかわかりませんでしたが、とてもクールだと思いました。ストリップと砂漠の景色は素晴らしかったのですが、見る時間が見つかるかどうか疑問でした。

お部屋からの眺めはこんな感じ。

「ああ、よかった」アナベスは言った。「ここは…」

「甘いよ」とグローバーは言った。「絶対に甘いよ。」

クローゼットの中に服があったのですが、それが私にぴったりでした。これはちょっとと思って眉をひそめた奇妙な。

アレスのリュックをゴミ箱に捨てた。もうそんな必要はないでしょう。私たちが去ったとき、私はできました。ホテルの店舗で新しいものを充電してください。

1週間の汚い旅行の後でシャワーを浴びたのですが、とても気持ちよかったです。服を着替え、ポテトチップスを1袋食べ、コーラを3杯飲み、久しぶりに気分が良くなって出てきました。心の片隅で、何か小さな問題が私を悩ませ続けていました。夢か何かを見たことがあります...

友達と話す必要があります

ました。しかし、待ってもらえると確信していました。

私が寝室から出てくると、アナベスとグローバーもシャワーを浴びていて、着替えた。アナベスがナショナル ジオグラフィック チャンネルの音量を上げている間、グローバーは心ゆくまでポテトチップスを食べていました。

「あれだけの放送局があるんです」と私は彼女に言いました、「そしてあなたはナショナル ジオグラフィックをつけます。あなたは正気ですか？」

"それは面白い。"

グローバーさんは「気分はいい」と語った。「私はこの場所が好きです。」

彼も気付かないうちに、靴から翼が生えて、彼を靴底から 1 フィート持ち上げました。

地面に落ちてから、また元に戻ります。

"ならどうしよう？"アナベスは尋ねた。"寝る？"

グローバーと私は顔を見合せて笑いました。私たちは二人とも緑色のプラスチックのLotusCashをかざしましたカード。

「遊びの時間だよ」と私は言った。

最後にこんなに楽しかったのはいつだったか思い出せません。私は比較的貧しい家庭の出身でした。

私たちの散財のアイデアは、バーガーキングで外食し、ビデオをレンタルすることでした。ラスベガスの 5 つ星ホテルですか？忘れて。

ロビーで 5、6 回バンジージャンプをしたり、ウォータースライダーをしたり、人工スキー場でスノーボードをしたり、仮想現実レーザータグや FBI 狙撃兵で遊んだりしました。試合ごとにグローバーの姿を何度か見かけた。彼は、鹿が出て行って田舎者を撃つリバース・ハンターのものが大好きでした。アナベスがトリビアゲームやその他の頭の悪いものを見ました。自分の街を構築する巨大な 3D シム ゲームがあり、実際にホログラフィックの建物が表示板上にそびえ立つのを見ることができました。私はあまり気にしていませんでしたが、アナベスはそれが大好きでした。

何かがおかしいと最初に気づいたのがいつだったのかはわかりません。

おそらくそれは、VR 狙撃兵で私の隣に立っている男に気づいたときでした。彼は13歳くらいだったと思いますが、彼の服装は奇妙でした。エルヴィスのものまね芸人の息子かと思った。彼はベルボトムのジーンズと黒いパイピングの付いた赤いTシャツを着ており、髪は故郷に帰る夜のニュージャージーの女の子のようにパーマがかかかっていてジェル状になっていた。

私たちは一緒に狙撃ゲームをしました、そして彼は言いました、「すごいね、ここには2回来たことがある」数週間、そしてゲームはどんどん良くなっていきます。」

グルーヴィー？

その後、話しているときに私が「気分が悪い」と言うと、彼は私をちょっとした目で見ました。

まるでそのように使われる言葉を今まで聞いたことがないかのように驚いた。

彼は自分の名前がダリンだと言いましたが、私が質問始めるとすぐに飽きてしまいました。

私に戻ってコンピュータ画面に戻り始めました。

私は「ねえ、ダーリン？」と言いました。

"何？"

"それは何年のことか？"

彼は私を見て眉をひそめた。"ゲームで？"

「いいえ、実生活では」

彼はそれについて考えなければなりません。 「1977年」

「いいえ」と私は少し怖くなって言いました。"本当に。"

「おい、悪い雰囲気だ。試合が始まったんだ。」

その後、彼は私を完全に無視しました。

人々と話し始めましたが、それは簡単ではないことがわかりました。彼らはテレビ画面、ビデオゲーム、食べ物などに釘付けになっていました。1985年だと教えてくれた男を見つけました。また、1993年だと教えてくれた男もいます。彼らは全員、ここにそれほど長くはいなかった。数日、長くても数週間しかいなかったと主張しました。彼らは本当に知りませんでしたし、気にもしてませんでした。

そのとき、私はこう思いました。私はどれくらいここにいたのでしょうか？ほんの数時間だったように思いましたが、

そうだったのか？

なぜ私たちがここにいるのか思い出そうとしました。私たちはロサンゼルスに行く予定でした。私たちは冥界への入り口を見つけることになっていた。私の母は…恐ろしい瞬間、私は彼女の名前を思い出せませんでした。サリー。サリー・ジャクソン。彼女を見つけなければなりません。ハデスが第三次世界大戦を引き起こすのを阻止しなければなりません。

アナベスがまだ街を建設しているを見つけました。

「さあ」と私は彼女に言いました。「ここから出なければなりません。」

応答なし。

私は彼女を揺さぶりました。「アナベス？」

彼女はイライラして顔を上げた。"何？"

「出発する必要があります。」

「出発しますか？何を言っているのですか？塔を手に入れたばかりですー」

「ここは罠だ」

私がもう一度彼女を振るまで、彼女は反応しませんでした。"何？"

「聞いてください。冥界です。私たちの探求です！」

「ああ、さあ、パーシー。あと数分だけね。」

「アナベス、ここには1977年からの人たちがいます。年をとらない子供たちです。チェックインすれば、永遠に残ります。」

"それで？"彼女は尋ねた。「もっと良い場所を想像できますか？」

私は彼女の手首を掴んでゲームから引き離しました。

"おい！"彼女は叫び、私を殴りましたが、他の誰も私たちを見ようとはしませんでした。彼らは忙しすぎました。

私は彼女に私の目を直接見つめさせました。私は「蜘蛛です。大きくて毛むくじらの蜘蛛です。」と言いました。

それは彼女を動揺させた。彼女の視界は晴れた。「なんとまあ」と彼女は言いました。「どれくらい経ったんだろうー」

「分かりませんが、グローバーを見つけなければなりません。」

私たちが探しに行ったところ、彼はまだ Virtual Deer Hunter をプレイしていることがわかりました。

「グローバー！ 私たちは二人とも叫びました。」

「死ね、人間！死ね、汚らしい汚い奴！」と。

「グローバー！」

彼はプラスチック製の銃を私に向けてクリックし始めました。あたかも私とその画像から別の画像になったかのようでした。画面。

私はアナベスを見て、一緒にグローバーの腕を掴んで引きずって行きました。「違う！新しいレベルに到達したばかりだ！違う！」と叫ぶと、彼の空飛ぶ靴が動き出し、足を反対方向に引っ張り始めました。

ロータスのベルボーイが私たちのところに急いでやって来ました。「さて、プラチナカードの準備はできましたか？」

「出発します」と私は彼に言いました。

「とても残念です」と彼は言いました、そして私は彼が本気でそう言っているのではないかと感じました。私たちは彼の約束を破ることになるでしょう。私たちが行ったら心。「プラチナカード会員向けのゲームが満載の新しいフロアを追加しました。」

彼はカードを差し出したので、私もカードが欲しかった。一度手に入れたら、もう離れることはできないとわかっていました。私はここにいる、永遠に幸せで、永遠にゲームをして、すぐに母のことも、自分の探求のことも、そしておそらく自分の名前さえも忘れてしまおう。私はブルーヴィーなディスコダリンと一緒にバーチャル・ライフルマンを永遠にプレイしていただろう。

グローバーはカードに手を伸ばしたが、アナベスは腕を引っ込めて「いいえ、ありがとう」と言いました。

私たちはドアに向かって歩きました、そして、そうしているうちに、食べ物匂いとゲームの音はますます魅力的になったように思えました。私は上の階の部屋について考えました。一度だけ泊まって、本物のベッドで寝てもいいのに…。

それから私たちはロータスカジノのドアを突き破って歩道を走りました。午後、カジノに行ったのとほぼ同じ時間帯のような気がしましたが、何か違いました。天気はすっかり変わってしまった。荒れ模様で、砂漠では熱の稲妻が光っていました。

アレスのバックパックが私の肩に掛けられていましたが、それは奇妙でした。

4001号室のゴミ箱に捨てましたが、現時点では別の問題を心配していました。

私は近くの新聞売り場に走って、まずその年を読みました。ありがたいことに、それは私たちが入ったときと同じ年でした。そして私は日付に気づきました：6月20日。

私たちはロータスカジノに5日間滞在していました。

夏至まであと1日しかありませんでした。私たちのクエストを完了する日はいつか。

それはアナベスのアイデアでした。

彼女はまるでお金があるかのように私たちをラスベガスのタクシーの後部座席に乗せ、運転手にこう言いました。

「ロサンゼルス、お願いします。」

運転手は葉巻を噛んで私たちのサイズを測った。「それは300マイルです。そのためには前払いしなければなりません。」

「カジノデビットカードは使えますか？」アナベスは尋ねた。

彼は肩をすくめた。「そのうちのいくつか。クレジット カードと同じです。最初にスワイプする必要があります。」

アナベスは彼に緑色の LotusCash カードを手渡しました。

彼はそれを懐疑的に見ました。

「スワイプして」とアナベスが誘った。

彼がやった。

彼のメーターの機械がガタガタし始めた。ライトが点滅しました。ついに無限大の記号が出てきました

ドル記号の横にあります。

運転手の口から葉巻が落ちた。彼は目を大きく見開いて私たちを振り返った。「ロスのどこに行くか  
アンヘレス……えっと、殿下？」

「サンタモニカピア」アナベスは少し背筋を伸ばして起き上がりました。彼女が「あなたの  
「早く私たちをそこに連れて行ってください。そうすれば小銭を保管しておいてください。」

もしかしたら彼女は彼にそのことを言うべきではなかったのかもしれない。タクシーのスピードメーターは90度を下回ることはなかった  
モハーベ砂漠をずっと通って5本。

道中、私たちは話す時間がたくさんありました。私はアナベスとグローバーに最近の夢について話しましたが、思い出そうとすればするほど詳細が大ざっ  
ぱになってしまいました。ロータスカジノは私の記憶をショートさせたようです。目に見えない使用人の声がどのようなものだったのか思い出せませんが、それが私の知っている誰かであることは確かでした。使用人は穴の中の怪物を「我が主」とは別の何か、何か特別な名前か称号と呼んでいました。

「サイレント・ワン？」アナベスが提案した。「金持ち？どちらもあだ名だよ」  
ハデス。」

「もしかしらら…」と私は言いましたが、どちらもあまり正しく聞こえませんでした。

「あの玉座の間はハデスのものようだ」とグローバー氏は語った。「それは通常、そのように説明されます。」

私は首を振った。「何かが間違っています。玉座の間は夢の主要な部分ではありませんでした。」

そしてピットからのその声は... わからない。神の声とは思えませんでした。」

アナベスは目を大きく見開いた。

"何？"私は尋ねた。

「ああ...何でもない。私はただ――いや、ハデスに違いない。もしかしらら彼がこの目に見えない泥棒を送り込んだのかもしれない」  
マスターボルトを手に入れようとしたところ、何か問題が発生しました―」

"どのような？"

「私は――分かりません」と彼女は言った。「しかし、もし彼がオリンポスからゼウスの力の象徴を盗み、神々が彼を追っていたら、多くのことが  
うまくいかなくなる可能性がある。だから、この泥棒はボルトを隠さなければならなかった、さもなければ何らかの方法でそれを失った。とにかく、彼は失  
敗した」「それをハデスに持ってきてください。それがあなたの夢の中で声が出たことですね？その男は失敗しました。それはフューリーたちがバス  
で私たちを追ってきたときに何を探していたのかを説明するでしょう。おそらく彼らは私たちがボルトを回収したと思ったのでしょう。」

彼女の何が問題なのか分かりませんでした。彼女は青ざめていた。

「しかし、もし私がすでにボルトを回収していたら、なぜ私は冥界へ旅行する必要があるのでしょうか？」と私は言いました。

「ハデスを脅すためだ」とグローバーは示唆した。「彼に賄賂を贈ったり、脅迫したりして、あなたの母親を手に入れるために戻る。」

私は口笛を吹きました。「あなたはヤギに対して悪い考えを持っています。」

"それはどうもありがとう。"

「でも、穴の中の物体は、2つのアイテムを待っていると言っていたよ」と私は言った。「マスターボルトが1つなら、もう1つは何ですか？」

グローバーは明らかに困惑した様子で首を振った。

アナベスは、まるで私の次の質問を知っているかのように私を見つめ、私がそれを聞かないように黙って言ってくれました。

「あの穴の中に何かがあるか、想像はつきますよね？」私は彼女に尋ねました。「ハデスじゃなかったら？」

「パーシー…その話はやめておこう。だって、もしそれがハデスじゃなかったら…いいえ、ハデスに違いない。」

荒地が横たわる。私たちはカリフォルニア州線、12マイルと書かれた標識を通過しました。

単純かつ重要な情報が1つ欠けているように感じました。知っているはずの一般的な単語を見つめたとき、1文字か2文字が浮かんでいて意味が分からなかったときのようなものでした。自分の探求について考えれば考えるほど、ハデスと対峙することが本当の答えではないと確信するようになりました。他に何か、もっと危険なことが起こっていました。

問題は、ハデスがマスターボルトを持っていることに賭けて、時速95マイルで冥界に向かって突進していたことだ。そこにたどり着いて、自分たちが間違っていたことがわかったら、修正する時間はありません。夏至の期限が過ぎ、戦争が始まります。

「答えは冥界にあります」とアナベスは私に保証してくれた。「あなたは死者の霊を見ました。」

パーシー。それがあり得る場所は1つだけです。私たちは正しいことをやっているのです。」

彼女は死者の国に入る賢い戦略を提案して私たちの士気を高めようとしたが、私の心はそうではなかった。未知の要素が多すぎた。科目も分からないまま詰め込みテストをするようなものでした。信じてください、私はそれを十分に行ってきました。

タクシーは西へ疾走した。デスバレーを吹き抜ける一陣の風は、まるで死者の霊のように聞こえた。18輪車のブレーキがシューツという音を立てるたびに、私はエキドナの爬虫類の声を思い出した。

日没頃、タクシーは私たちをサンタモニカのビーチまで降ろしてくれました。見た目は映画に出てくるロサンゼルスビーチとまったく同じでしたが、臭いがさらに悪かったです。栈橋にはカーニバルの乗り物が並び、ヤシの木が歩道に並び、ホームレスの男たちが砂丘で寝ており、サーファーの男たちが完璧な波を待っていました。

グローバー、アナベス、そして私は波打ち際まで歩きました。

「今は何？」アナベスは尋ねた。

太平洋は夕日を受けて黄金色に染まっていた。行ってからどれくらい経ったか考えてみた

彼は国の反対側にあるモントークのビーチに立って、別の海を眺めていました。

どうしてそんなことすべてをコントロールできる神が存在するのでしょうか？私の理科の先生は何をしていましたか

たとえば、地球の表面の3分の2は水で覆われていたとします。どうして私がそんな権力者の息子になれるのでしょうか？

波の中へ足を踏み入れました。

「パーシー？」アナベスは言いました。「何してるの？」

私は腰まで、そして胸まで歩き続けました。

彼女は私の後を呼びました、「その水がどれほど汚染されているか知っていますか？あらゆる種類の有毒物質が存在します。」

その時、私の頭は真っ暗になりました。

最初は息を止めていました。意図的に水を吸い込むのは難しい。ついに我慢できなくなった

もう。私は息を呑んだ。案の定、普通に呼吸できました。

私は浅瀬の中を歩いて行きました。暗闇の中を見ることはできなかったはずだが、どういうわけかすべてがどこにあるのかはわかった。底のゴロゴロとした感触が伝わってきました。砂州に点在するサンドダラーのコロニーが確認できました。暖かい流れと冷たい流れが渦を巻いている様子さえ見えました。

足に何かがかすれるのを感じました。私は下を向いて弾道ミサイルのように水面から発射されそうになった。私の横を滑っていたのは体長5フィートのアオザメだった。

しかし、それは攻撃ではありませんでした。それは私を悩ませました。犬のようにかかとを上げます。一応、背びれを触ってみました。もっと強く抱きしめてと誘っているかのように、それは少し跳ねた。私はヒレを両手で掴みました。

それは私を引っ張りながら出発しました。サメは私を暗闇の中に連れて行きました。それは私を海の端に置き去りにし、そこで砂州が巨大な裂け目へと落ち込んだのです。それはまるで、真夜中にグランドキャニオンの縁に立って、何も見えないけれど、そこに虚空があることを知っているようなものでした。

おそらく150フィート上空で表面がきらめきました。プレッシャーに押しつぶされそうになったことは分かっていた。もう一度言いますが、私は息をすることができなかったはずで、太平洋の底まで真っ直ぐ沈んでしまうのであれば、どこまで深く潜ることもできるのではないかと思いました。

それから私は、下の暗闇の中で何か光り、それが大きくなり、より明るくなるのを見た。

私に向かって立ち上がった。母のような女性の声でした、「パーシー・ジャクソン」。

近づくにつれ、彼女の姿がより鮮明になってきました。彼女は流れるような黒髪を持ち、緑色の絹でできたドレスを着ていた。彼女の周りでは光がちらつき、その目は気が散るほど美しかったので、彼女が乗っている牡馬ほどの大きさのタツノオトシゴにはほとんど気づきませんでした。

彼女は馬から降りた。タツノオトシゴとアオザメが飛び立ち、鬼ごっこのような遊びを始めました。水中の女性は私に微笑んだ。

「遠くまで来たね、パーシー・ジャクソン。よくやった。」

どうすればいいのかよく分からなかったので、お辞儀をしました。「あなたはミシシッピ川で私に話しかけた女性です。」

「はい、子供よ。私はネレイド、海の精霊です。ここまで上流に現れるのは簡単ではありませんでしたが、私の淡水のいところであるナイアドが私の生命力を維持するのを助けてくれました。彼らは仕えているわけではありませんが、ポセイドン卿を尊敬しています。彼の法廷で。」

「それで……あなたはポセイドンの宮廷に仕えているのですか？」

彼女はうなずいた。「海神の子が生まれてから長い年月が経ちました。」

あなたをととても興味深く見ていました。」

突然、幼い頃、モントークビーチ沖の波に浮かんだ顔を思い出しました。

笑顔の女性の反射。私の人生の多くの奇妙な出来事と同じように、私もこれまでそのことについて深く考えたことがありませんでした。

「父がそんなに私に興味があるのなら、なぜここにいないのですか？なぜ私に話しかけないのですか？」と私は言いました。

寒流が深部から湧き出てきました。

「海の主をあまり厳しく裁かないでください」とネレイドは私に言いました。「彼は望まぬ戦争の瀬戸際に立っています。彼は自分の時間を費やすことがたくさんあります。その上、彼はあなたを直接助けることを禁じられています。

神々もそこまで好意を示さないかもしれない。」

「自分の子供たちにも？」

「特に彼らに。神々は間接的な影響力によってのみ働くことができる。だからこそ、私はあなたに警告と贈り物を与える。」

彼女は手を差し出した。三つの白い真珠が彼女の掌の上で光った。

「あなたが冥府へ旅しているのは知っています」と彼女は言った。「これを実行して生き残った定命の者はほとんどいません。優れた音楽技術を持ったオルフェウス、強大な力を持ったヘラクレス、タルタロスの深ささえも逃れることができたフーディーニ。あなたにはこれらの才能がありますか？」

「うん……いいえ、奥様」

「ああ、でも、あなたには他に何かがある、パーシー。あなたには、まだ知り始めたばかりの才能がある。あなたが成人まで生き残った場合、神託はあなたに偉大で恐ろしい未来を予言した。ポセイドンは、あなたの時が来る前にあなたを死なせるはずはない。だから、これを持って行き、困ったときは足元で真珠を砕いてください。」

"何が起こるか？"

「それは必要に応じてです。でも覚えておいてください、海に属するものは必ず海に戻ります。」

「警告はどうですか？」

彼女の目は緑色の光で点滅しました。「自分の心の言うことに従わなければ、すべてを失うことになる。

ハデスは疑いと絶望を糧とします。彼はできることならあなたを騙し、あなたに自分の判断に不信感を抱かせるでしょう。あなたが彼の領域に入ると、彼は決してあなたを喜んで離れることを許しません。信仰を保ちます。頑張れ、パーシー・ジャクソン。」

彼女はタツノオトシゴを召喚し、虚空に向かって走りました。

"待って！"私は電話した。「川で、贈り物を信じてはいけなかったわね。どんな贈り物ですか？」

「さようなら、若い英雄。彼女は声を奥に消えながら呼び返した。「聞いてくださいあなたの心に。」彼女は緑色に輝く点となって消え去った。

私は彼女を追って暗闇の中へ行きたかった。ポセイドンの法廷を見たかった。しかし、私地表が暗くなる夕焼けを見上げた。友達が待っていました。時間があまりにも少なかったので……。

私は岸に向かって上向きに蹴り上げた。

ビーチに着くと、服はすぐに乾いた。私はグローバーとアナベスに何が起こったかを話しました。ということが起こり、彼らに真珠を見せました。

アナベスは顔をしかめた。「対価のない贈り物はありません。」

「彼らは無料でした。」

"いいえ。"彼女は首を振った。「『無料のランチなどというものは存在しない。』それは古代ギリシャ語です。それはアメリカ語にうまく翻訳されました。価格が発生します。あなたは待ちます。」



そんな幸せな思いで、私たちは海に背を向けた。

アレスのバックパックから小銭を持って、私たちはバスに乗ってウェストハリウッドに向かった。私は運転手にアンティ・エムズ・ガーデン・ノーム・エンポリウムから取ってきたアンダーワールドの住所票を見せましたが、彼はDOAレコーディング・スタジオのことを聞いたことがありませんでした。

「あなたを見ると、テレビで見た人のことを思い出します」と彼は私に言いました。「子役か何かですか？」

「ええと...私はスタントマンです...多くの子役のスタントマンです。」

「ああ！それなら説明がつくね。」

私たちは彼に感謝し、次の停留所で急いで降りました。

私たちはDOAを探して何マイルも歩き回りました。誰もそれがどこにあるのか分からないようでした。それ電話帳には載っていませんでした。

私たちはパトカーを避けるために路地に逃げ込んだことが二度あった。

私は電器店のショーウィンドウの前で凍りつきました。テレビが、とても見覚えのある人物、つまり継父のスメル・ゲイブのインタビューを流していたからです。彼はバーバラ・ウォルターズと話していた——つまり、まるで大物有名人であるかのように。彼女は私たちのアパートでポーカーゲームの最中に彼にインタビューしており、若いブロンドの女性が彼の隣に座って彼の手を叩いていました。

偽の涙が頬に光った。彼はこう言っていました、「正直に言って、ウォルターズさん、もしここにシュガーがいなかったら、私のグリーンフカウンセラーは、私は廃人になっていたでしょう。私の義理の息子は、私が大切にしていたすべてを奪っていきました。私の妻は...私のカマロは...」

私は——ごめんなさい。それについて話すのは難しいです。」

「ほら、アメリカよ。」バーバラ・ウォルターズはカメラの方を向いた。「引き裂かれた男。深刻な問題を抱えた思春期の少年。1週間前にデンバーで撮影された、この問題を抱えた若い逃亡者の知られている最後の写真をもう一度お見せしましょう。」

画面は、私、アナベス、グローバーがコロラド州のダイナーの外に立ってアレスと話している粗いショットに切り替わりました。

「この写真に写っている他の子供たちは誰ですか？」バーバラ・ウォルターズは劇的に尋ねた。「彼らと一緒にいる男は誰ですか？ パーシー・ジャクソンは非行少年ですか、テロリストですか、それとも恐ろしい新興カルトの洗脳被害者ですか？ 戻ったら、一流の児童心理学者と話をします。楽しみにしてください。

アメリカ。"

「さあ」とグローバーは私に言った。私が電化製品に穴を開ける前に、彼は私を連れ去った店の窓。

暗くなり、お腹を空かせたようなキャラクターたちが通りに出てきて遊び始めました。さて、誤解しないでください。私はニュー Yorker です。簡単には怖くないよ。しかし、LAはニューヨークとはまったく異なる雰囲気を持っていました。家に帰ると、すべてが近づいているように見えました。街がどんなに大きくても、どこへでも迷うことなく行くことができました。通りのパターンと地下鉄には意味がありました。物事がどのように機能するかについてのシステムがありました。子供は愚かでない限り安全かもしれない。

LAはそうではなかった。それは広がっていて、混沌としていて、動き回るのが困難でした。アレスを思い出しました。LAが大きいだけでは十分ではありませんでした。騒々しくて奇妙で、ナビゲートするのが難しいことによって、それが大きいことを証明する必要がありました。明日の夏至までに、どうやって冥界への入り口を見つけることができるのか、私にはわかりませんでした。

私たちは暴力団員、野郎、行商人たちの前を通り過ぎましたが、彼らは私たちを彼らのような目で見ていました

私たちに強盗の苦勞をする価値があるかどうかを判断しようとしています。

私たちが路地の入り口を急いで通り過ぎたとき、暗闇から「おい、あなた」という声が聞こえました。

バカみたいにやめてしまった。

気が付くと私たちは囲まれていました。子供たちの集団が私たちの周りを取り囲んでいました。全部で6人——高価な服を着て意地悪な顔をした白人の子供たちだ。ヤンシーアカデミーの子供たちのように、不良少年を演じて遊んでいる金持ちのガキたち。

思わずリップタイドのキャップを外してしまいました。

剣がどこからともなく現れたとき、子供たちは後ずさりしましたが、彼らのリーダーはどちらかでした

本当に愚かだったのか、本当に勇敢だったのか、なぜなら彼は飛び出し刃で私に向かって攻撃し続けたからです。

スイングを間違えてしまいました。

その子供は叫びました。でも彼は百パーセント死んだはずだ、刃が通ったからだ

彼の胸を無害に貫通します。彼は下を向いた。「なんてことだ…」

彼のショックが怒りに変わるまで、あと3秒ほどあると思いました。「走る！」私は叫んだアナベスとグローバー。

私たちは二人の子供を邪魔にならないように押しのけ、自分たちがどこにいるのかも知らずに通りを急いで走りました。

行きます。私たちは鋭い角を曲がりました。

"そこには！"アナベスは叫んだ。

このブロックにある一軒の店だけが営業しているように見え、その窓はネオンで輝いていた。上の標識は、ドアにはCRSTUY'S WATRE BDE ALPACEのようなことが書かれていました。

「クラスティのウォーターベッドパレス？」グローバーが翻訳した。

緊急時以外には行くことのない場所のように思いましたが、これは間違いなく適格でした。

私たちはドアを突き破り、ウォーターベッドの後ろに逃げ、身をかがめました。ほんの一瞬後、ギャングの子供たちが外を走って通り過ぎた。

「私たちは彼らを失ったと思う」とグローバーは息を切らした。

後ろから「誰を失ったの？」という声が響き渡った。

みんなでジャンプしました。

私たちの後ろにレジャースーツを着た猛禽のような男が立っていた。彼の身長は少なくとも7フィートあり、髪の毛はまったくありませんでした。彼は灰色の革のような肌、厚いまぶた、そして冷たい爬虫類のような笑顔をしていました。彼はゆっくりと私たちに向かって進んできましたが、必要に応じて素早く移動できるような気がしました

に。

彼のスーツはロータスカジノから来たものかもしれない。それは70年代の大ヒット作でした。

シャツはシルクのペイズリー柄で、毛のない胸の半分でボタンが外されていた。彼のベルベットのジャケットの襟は、着陸帯と同じくらい幅が広がった。彼の首に巻かれた銀の鎖は、数えることさえできませんでした。

「私はクラスティです」と彼は歯石のような黄色の笑みを浮かべて言った。

私は「はい、そうですよ」と言いたい衝動を抑えました。

「割り込んでごめんなさい」と私は彼に言いました。「私たちはただ、うーん、ただ閲覧していました。」

「あのダメな子たちから隠れるということですね」と彼は不平を言った。「彼らは毎晩うろろしています。私は彼らのおかげで、たくさんの方がここに来てくれました。ウォーターベッドを見たいですか？」

私が「いいえ、ありがとう」と言おうとしたとき、彼は私の肩に大きな足を置き、私をより深く誘導しました。ショールームへ。

想像できるあらゆる種類のウォーターベッドがありました。さまざまな種類の木材、さまざまなシーートのパターン。クイーンサイズ、キングサイズ、宇宙の皇帝サイズ。

「これは私の最も人気のあるモデルです。」クラスティはヘッドボードに溶岩ランプが組み込まれた、黒いサテンのシーツで覆われたベッドの上に誇らしげに手を広げた。マットレスが振動したので、オイル風味のゼリーのように見えました。

「何百万ものハンドマッサージ」とクラスティ氏は語った。「さあ、試してみてください。撃って、昼寝してください。私は気にしません。いいえ」とにかく、今日のビジネス。

「うーん、」と私は言いました、「そうは思いません...」

「百万手マッサージ！」グローバーさんは泣きながら飛び込みました。「おお、皆さん！これはクールですね。」

「うーん」クラスティは革のような顎を撫でながら言った。「ほほ、ほほ」

「ほとんど何？」私は尋ねた。

彼はアナベスを見た。「お願いですが、こちらでこれを試してみてください、ハニー。合うかもしれません。」

アナベスは言った、「しかし、どうしたものかー」

彼は彼女の肩を安心させるように叩き、フレームにチーク材のライオンが彫刻され、ヒョウ柄の掛け布団が備わったサファリ デラックス モデルに彼女を案内した。アナベスが横になりたくないとき、クラスティはアナベスを押ししました。

"おい！"彼女は抗議した。

クラスティは指を鳴らした。「えーっ！」

ベッドの側面からロープが伸びてきて、アナベスの周りに絡みつき、彼女をマットレスに縛り付けた。

グローバーさんは立ち上がろうとしたが、黒いサテンのベッドからもロープが飛び出し、彼を縛りつけた。

「いや、クールじゃないよ！」100万人の手のマッサージで声が震えながら彼は叫んだ。「いや、全然、クールじゃないよ！」

巨人はアナベスを見て、それから私のほうを向いて笑いました。「ほとんど、くそー。」

私は立ち去ろうとしましたが、彼の手が飛び出してきて、私の首の後ろを掴みました。「うわあ、子供。心配しないで。すぐに見つけます。」

「友達を行かせてください。」

「ああ、もちろんそうします。でも、まず彼らをフィットさせなければなりません。」

"どういう意味ですか？"

「ベッドはどれもちょうど6フィートですよ、お友達は背が低すぎるのです。ぴったりに合わせなければなりません。」

アナベスとグローバーは苦しみ続けた。

「不完全な測定には耐えられない」とクラスティはつぶやいた。「えーっ！」

新しいロープがベッドの上下から飛び出し、グローバーとアナベスの足首、そして脇の下に巻きついた。ロープがきつくなり、友達を引っ張り始めた両端から。

「心配しないでください」とクラスティは私に言いました。「これらはストレッチの仕事です。おそらく背骨が3インチ余分にあるかもしれません。生きています。さあ、あなたの好みのベッドを見つけませんか？」

「パーシー！」グローバーは叫んだ。

私の心はドキドキしていました。この巨大なウォーターベッドのセールスマンに一人で対抗することはできないとわかっていました。彼剣を抜く前に首を折ってしまうだろう。

「本当の名前はクラスティじゃないですよ？」私は尋ねた。

「法的にはプロクルステスだ」と彼は認めた。

「ストレッチャー」と私は言った。物語を思い出した :テセウスを殺そうとした巨人  
アテネに向かう途中で過剰なもてなしを受けた。

「そうですね」と店員は言いました。「しかし、プロクルステスを誰が発音できるでしょうか? ビジネスにとっては悪影響です。さて  
「無愛想」、それは誰でも言えます。」

「その通りです。いい響きですね。」

彼の目は輝いた。"あなたはそう思う?"

「ああ、確かに」と私は言いました。「それで、このベッドの出来栄は? 素晴らしいですね!」

彼は満面の笑みを浮かべたが、私の首の上で彼の指は緩まなかった。「私がお客様にそう言います。毎回です。誰も仕上がりを見ようとはしませ  
ん。一体型の Lava Lamp ヘッドボードを何個見たことがありますか?」

「あまり多くはありません。」

"それは正しい!"

「パーシー!」アナベスは叫んだ。"何してるの?"

「彼女のことは気にしないでください」と私はプロクラステスに言った。「彼女には無理だよ。」

巨人は笑った。「私の顧客は皆そうです。正確に6フィートということはありません。とても思いやりがありません。そして、  
彼らはフィッティングについて文句を言います。」

「6フィートを超えていたらどうする?」

「ああ、それはいつも起こります。簡単な修正です。」

彼は私の首を放しましたが、私が反応する前に、彼は近くの営業デスクの後ろに手を伸ばし、巨大な両刃の真鍮の斧を持ち出しました。彼は、「私は  
できる限り被写体を中心に置き、両端にぶら下がっているものは切り落とします。」と言いました。

「ああ」と私は強く飲み込みながら言った。「賢明です。」

「賢いお客様に出会えて本当に嬉しいです!」

今、友人たちはロープで本当に窮屈になっていました。アナベスは青ざめていた。グローバ一製  
絞め殺されたガチョウのようなゴロゴロ音。

「それで、クラスティ... 私は声を軽く抑えながら言った。バレンタイン型のハネムーンスペシャルの販売タグに目をやった。「これは本当に波動  
を止めるダイナミックスタビライザーを備えているのでしょうか?」

「もちろんです。試してみてください。」

「ええ、多分そうします。でも、あなたのような大男でもうまくいきますか? 波はまったくありませんか?」

「保証します。」

"とんでもない。"

"方法。"

"見せて。"

彼は熱心にベッドに座り、マットレスを撫でた。「波がありません。わかりますか?」

私は指を鳴らしました。「エルゴ」

クラスティの周りにロープが巻きつき、マットレスの上に平らにしてみました。

"おい!"彼は叫んだ。

「彼を真ん中に置くのがちょうどいいよ」と私は言った。

私の命令でロープが自動的に再調整されました。クラスティの頭全体が上部に突き出ていました。彼の  
足が底から突き出ています。

"いいえ!"彼は言った。「待ってください!これは単なるデモです。」

リップタイドの上限を外しました。「簡単な調整をいくつか…」

自分がやろうとしていることに何の迷いもありませんでした。もしクラスティが人間だったら、私は彼を傷つけることはできないともかく。もし彼が怪物なら、しばらくの間塵と化して当然だ。

「あなたは厳しい取引をしていますね」と彼は私に言いました。「特定のフロアモデルを 30 パーセント割引いたします。」

「上から始めてみようと思います。」私は剣を振り上げた。

「頭金ゼロ!半年無利息!」

私は剣を振った。クラスティはオファーをやめた。

他のベッドのロープを切りました。アナベスとグローバーは立ち上がって、うめき声を上げ、ひるみ、私を何度も罵りました。

「背が高く見えますよ」と私は言いました。

「とても面白いですね」とアナベスは言った。「次はもっと早くしてね。」

私はクラスティの販売デスクの後ろにある掲示板を見ました。そこにはエルメス デリバリー サービスの広告があり、もう 1 つは「あなたが必要とする唯一の巨大なイエロー ページ!」という LA エリアのモンスターのまったく新しい大要録の広告がありました。その下には、ヒーローの魂へのコミッションを提供する DOA レコーディング スタジオの明るいオレンジ色のチラシがあります。「私たちは常に新しい才能を探しています!」 DOAの住所は地図付きですぐ下にありました。

「さあ」と私は友達に言った。

「ちょっと待ってください」とグローバー氏は不平を言った。「私たちは瀕死の状態だった。」

「それでは、冥界へ行く準備ができました」と私は言いました。「ここからわずか 1 ブロックです。」

---

18 アナベスは服従学校に通っています

私たちはバレンシア大通りの影に立って、黒い大理石に刻まれた金色の文字「DOA RECORDING STUDIOS」を見上げました。

その下のガラスドアには「勧誘禁止」とステンシルで書かれています。徘徊は禁止です。生きてはいけません。

真夜中近くでしたが、ロビーは明るく、人でいっぱいでした。セキュリティの裏側

机にはサングラスとイヤホンをした強面の警備員が座っていた。

私は友達に目を向けました。「わかりました。計画は覚えていますね。」

「計画だ」グローバーは息を呑んだ。「ええ。その計画は気に入っています。」

アナベスは「計画がうまくいかなかったらどうなるの?」と言いました。

「ネガティブなことは考えないでください。」

「そうですね」と彼女は言いました。「私たちは死者の国に入るので、ネガティブなことを考えるべきではありません。」

私はポケットから真珠を取り出しました。ネレイドがサンタにくれた3つの乳白色の球です。

モニカ。何か問題が起こった場合のバックアップとしてはあまり役に立たないようでした。

アナベスは私の肩に手を置いた。「ごめんなさい、パーシー。その通りです、なんとかなりますよ。きっとそうなりますよ」  
大丈夫。」

彼女はグローバーに小言を与えた。

「ああ、そうだね！」 「ここまでできました。マスターボルトを見つけてお母さんを救ってみます。問題ありません。」

私は二人を見て、本当に感謝の気持ちを抱きました。ほんの数分前まで、私は彼らを豪華なウォーターベッドの上で瀕死の状態にさせていたのに、  
今では彼らは私のために勇気を出して、私の気分を良くさせようとしてくれました。

私は真珠をポケットに戻しました。「アンダーワールドのお尻を叩きましょう。」

DOAのロビーに入ってみました。

ムザークは隠しスピーカーで静かに演奏していた。カーペットと壁はスチールグレーでした。鉛筆サボテンが骸骨の手のように隅に生えていました。家具は黒い革張りで、席はすべて埋まっていた。ソファに座っている人、立っている人、窓の外を見つめている人、エレベーターを待っている人。誰も動かず、話さず、何もしていませんでした。目の端ではそれらすべてが問題なく見えましたが、そのうちのどれかに特に焦点を当てると、それらが透明に見え始めました。彼らの体を通して見ることができました。

警備員の机は一段高い演壇だったので、私たちは警備員を見上げなければなりませんでした。

彼は背が高くエレガントで、チョコレート色の肌と脱色したブロンドの髪を剃ったミリタリースタイルでした。彼はベっ甲柄の色合いと、髪にマッチしたシルクのイタリア製スーツを着ていました。銀の名札の下に黒いバラが彼の襟に留められていた。

私は名札を読んで、当惑して彼を見た。「あなたの名前はケイロンですか？」

彼は机に寄りかかった。彼の眼鏡には自分の姿しか映りませんでしたが、彼の笑顔は、あなたを食べる直前のニスキヘビのように甘くて冷たかったです。

「なんて貴重な若者なんだだろう。彼は奇妙な訛りを持っていた――イギリス風かもしれないが、あたかもイギリス風だったようにも見える  
第二言語として英語を学びました。「教えてください、相棒、私はケンタウロスに似ていますか？」

「いや、違う」

「先生、彼は滑らかに付け加えた。

「先生、私は言いました。

彼は名札をつまみ、文字の下に指をなぞった。「これ読めますか？こう書いてあります」

カロン。一緒に言ってください、「気をつけて」と。

「カロン」

「すごいですね！さて、カロンさん。」

「カロンさん、私は言いました。

"よくやった。"彼は後ろに座った。「あの年老いた騎手と混同されるのは嫌いだ。そして今はどうだろう」

死んだ小さな人々を助けてもいいですか？」

彼の質問は速球のように私の胃に引っかかりました。私はアナベスにサポートを求めました。

「私たちは異界に行きたいのです」と彼女は言った。

カロンの口がピクピクと震えた。「まあ、それは爽快ですね。」

「そうですか？彼女は尋ねた。

「率直で正直です。叫ぶことはありません。『間違いがあるに違いありません、カロンさん』ということはありません。」

私たちを見つめた。「それで、どうやって死んだの？」

私はグローバーを小突いた。

「ああ」と彼は言った。「ええと...浴槽で溺れました...」

「三人とも？」カロンは尋ねた。私たちはうなずきました。

「大きなバスタブ」カロンは少し感動した様子だった。「通信用のコインを持っていないと思います。」

通常、大人の場合、アメリカン・エクスプレスの料金を請求するか、最後のケーブル料金にフェリーの料金を追加することができます。しかし、子供たちの場合は...悲しいかな、準備をして死ぬことはできません。数世紀の間、座っていなければならないと仮定してください。」

「ああ、でもコインはあるよ。」私は3つの黄金のドラクマをカウンターの上に置きました、私が持っていた隠し場所の一部  
クラスティのオフィスの机で発見されました。

「それでは……」カロンは唇を潤した。「本物のドラクマです。本物の黄金のドラクマです。これは見たことはありません...」

彼の指はコインの上を貪欲に動かしました。

私たちはとても近くにいました。

それからカロンは私を見た。眼鏡の奥の冷たい視線は穴が開いたようだった

私の胸。「今ここだよ」と彼は言った。「私の名前を正しく読めませんでした。失読症ですか？」

「いいえ」と私は言いました。「私は死んだ。」

カロンは身を乗り出して匂いを嗅いだ。「あなたは死んではいません。私は知っておくべきでした。あなたは死んでいません。」

ゴドリグ。」

「私たちは冥界に行かなければなりません」と私は主張しました。

カロンは喉の奥でうなり声を上げた。

すぐに、待合室にいた全員が立ち上がり、興奮しながら歩き始め、照明を当てました。

タバコを吸ったり、髪に手を通したり、腕時計をチェックしたり。

「できるうちに去ってください」とカロンは私たちに言いました。「これだけ受け取って、あなたに会ったことは忘れます。」

彼はコインを取りに行こうとしたが、私はコインを奪い返した。

「サービスもチップもなし。」私は自分が感じているよりも勇敢に聞こえるように努めました。

カロンは再びうなり声を上げた——深く、血も凍るような音だった。死者の霊が動き始めた

エレベーターのドアを叩きます。

「それも残念だ」と私はため息をついた。「私たちにもっと提供できるものがあつたのです。」

私はクラスティの隠し場所からバッグ全体をかざしました。私は一握りのドラクマを取り出し、コインを入れました  
指からこぼれる。

カロンのうなり声は、ライオンのゴロゴロのようなものになりました。「私を買収できると思いますか、ゴドリグ？ えー... ただの好奇心から、そこにいくら持っていますか？」

「たくさんあるよ」と私は言った。「きっとハデスは、そんな重労働に対して十分な給料を払っていないだろうね。」

「ああ、あなたは半分も知りません。一日中この精霊たちの子守りをしたいですか？」

いつも「死なせないでください」とか「無料で渡らせてください」とか。私は3000年間昇給していません。このようなスーツが安いと思いますか？」

「あなたにはもっと良い価値がある」と私は同意した。「ちょっとした感謝。敬意。いい給料。」

一言ごとに、私はカウンターの上に金貨をまた積み上げました。

カロンは、まるで何かを着ている自分を想像しているかのように、シルクのイタリア製ジャケットを見下ろした。

より良い。「お嬢さん、あなたは今、ある程度の意味を理解していると言わざるを得ません。少しだけ。」

さらにコインを数枚積み上げました。「ハデスと話しているときに、昇給についても言及できますよ。」

彼はため息をつきました。「とにかく、ポートはほぼ満員です。私はあなたたちを3人加えて出発したほうがよいでしょう。」

彼は立ち上がり、私たちのお金をすくい上げて、「一緒に来てください」と言った。

私たちは待ち構える精霊たちの群衆をかき分け、彼らは風のように私たちの服をつかみ始め、彼らの声は私には聞き取れないことをささやきました。カロンは彼らを邪魔にならないように押しのけ、「居候だ」と不平を言った。

彼は私たちをエレベーターに案内しましたが、そこはすでに死者の魂で混雑しており、それぞれが緑色の搭乗券を持っていました。カロンは私たちと仲良くしようとしていた二人の精霊を掴み、ロビーに押し戻しました。

「そうです。さて、私がいけない間は誰もアイデアが浮かびません」と彼は控え室に宣言した。「そして、誰かが私のイーージーリスニングステーションのダイヤルを再び動かしたら、私はあなたをさらに千年ここに確実にさせます。わかりますか？」

彼はドアを開けた。彼はカードキーをエレベーターのパネルのスロットに差し込み、私たちは降下を始めました。

「ロビーで待っている霊たちはどうなるのですか？」アナベスは尋ねた。

「何もないよ」カロンは言った。

"どれだけの時間？"

「永遠に、あるいは私が寛大な気持ちになるまで。」

「ああ」と彼女は言った。"それは公正です。"

カロンは眉を上げた。「死が公平だなんて誰が言ったのでしょうか、お嬢さん？順番が来るまで待ってください。あなたはすぐに死ぬでしょう、どこへ行くのでしょうか。」

「生きて出られるよ」と私は言った。

「はあ」

突然めまいを感じました。私たちはもう下降するのではなく、前進していました。空気が霧になってきました。私の周りの霊は形を変え始めました。彼らの現代的な服がちらつき、灰色のフード付きローブに変わりました。エレベーターの床が揺れ始めた。

私は激しく瞬きました。私が目を開けると、カロンのクリーム色のイタリア製スーツは黒い長いローブに代わっていました。彼のべっ甲の眼鏡はなくなっていました。彼の目があるべき場所は、アレスの目と同じように空の眼窩でした。ただし、カロンの目は完全に暗く、夜と死と絶望に満ちていました。

彼は私が見ているのを見て、「それで？」と言いました。

「何もない、私はなんとか言いました。」

彼はニヤニヤしているのかと思ったが、そうではなかった。顔の肉が透明になってきて、彼の頭蓋骨までまっすぐに見ることができました。

床は揺れ続けた。

グローバーさんは「船酔いしそうだ」と言いました。

もう一度瞬きすると、エレベーターはエレベーターではなくなっていました。私たちは木製のはしけの中に立っていた。カロンは、骨や死んだ魚、その他の奇妙なもの——プラスチックの人形、砕かれたカーネーション、金色の縁がついた濡れた卒業証書——が渦巻く、暗くて油っぽい川を私たちを漕いで渡らせた。

「スティクス川」とアナベスがつぶやいた。"それはそうです ..."

「汚染されている」とカロンは言った。「何千年もの間、あなた方人間は、



あなたが会えうすべてのもの、希望、夢、叶わなかった願い、私に言わせれば、無責任な廃棄物管理だ。」

汚水から霧が立ち込めた。私たちの頭上には、ほとんど暗闇の中に埋もれそうになっていたが、鍾乳石。前方の向こう岸は毒の色の緑がかった光で輝いていた。

パニックで喉が詰まってしまった。私はここで何をしていたのでしょうか？私の周りの人々は...彼らは死んでいました。

アナベスは私の手を掴んだ。普通の状況であれば、これは私にとって恥ずかしいことだったと思いますが、私は彼女の気持ちを理解しました。彼女はこの船に誰かが生きているという安心感を求めている。

誰に祈っているのかよくわかりませんが、私は自分が祈りをつぶやいていることに気づきました。下ここでは唯一の神が重要であり、彼こそが私が直面するようになった神でした。

冥界の海岸線が見えてきた。ごつごつした岩と黒い火山砂が内陸の高い石壁の基部まで約百ヤード伸びており、見渡す限りどちらの方向にも続いていました。緑の薄暗がりのごく近くから、石に反響する音が聞こえた——大きな動物の遠吠えだ。

「スリーフェイス爺さんはお腹が空いているよ」とカロンは言った。彼の笑顔は緑がかった光の中で骸骨になった。"悪い幸運を祈ります、ゴッドリング。」

私たちのボートの底が黒い砂の上に滑り落ちました。死者たちが下船し始めた。小さな女の子の手を握る女性。腕を組んでよろよろ歩く老人と老婆。私と同じくらい年上の少年が、灰色のローブを着て、黙って足を引きずりながら歩いていた。

カロンは言いました、「幸運を祈っています、でも、ここには何もありません。念のため、忘れないでください」私の昇給について言及してください。」

彼はポーチの中に私たちの金貨を数え、それから竿を手に取りました。彼は何かをうなり声で言いました。空のはしけを渡して川を渡ろうとするバリー・マニロウの歌のように聞こえた。

私たちは霊を追って、使い古された道を上っていきました。

私が何を期待していたのかはわかりません。パーリー ゲイツ、あるいは大きな黒いつり窓、あるいはその他のものです。しかし、アンダーワールドへの入り口は、空港のセキュリティとジャージー ターンパイクの間の交差点のように見えました。

1つの巨大な黒いアーチの下に3つの別々の入り口があり、そこには「あなたは今エレバスに入っています」と書かれていました。各入口には貫通式金属探知機が設置されており、上部には防犯カメラが取り付けられていました。この先には、カロンのような黒衣のグールがいる料金所がありました。

お腹を空かせた動物の遠吠えがとてもしばしば大きくなりましたが、どこから鳴っているのかわかりませんでした。ハデスの扉を守るはずだった三つ頭の犬ケルベロスの姿はどこにもなかった。

死者は3列に並び、2列には「勤務中」と記され、1列には「EZ DEATH」と記された。EZ DEATHのラインがちょうど進んでいた。他の二人は這っていました。

「どう思いますか？」アナベスに聞いてみた。

「高速路線はアスフォデル野原に直行しなければなりません」と彼女は言った。「コンテストはありません。彼らは望んでいません」それは彼らに反する可能性があるため、裁判所からの判断を危険にさらすことになります。」

「死んだ人のための法廷があるの？」

「ええ。裁判官が三人います。誰がベンチに座るかを順番に入れ替えます。ミノス王、トーマス・ジェファーソン、シェイクスピア、そういう人たちは。時々彼らは人生を見て、その人には特別な報酬、つまりエリジウム野原が必要だと判断します。時々彼らは決定します」

「それで、何をやるの？」

グローバーさんは「カンザス州の小麦畑に立っているところを想像してみてください。永遠に」と語った。

「厳しいよ」と私は言った。

「それほど厳しいものではない」とグローバーはつぶやいた。"見て。"

数人の黒服を着たグールが一人の霊を脇に引き離し、彼をはしゃぎ回っていました。

セキュリティデスク。死んだ男の顔はなんとなく見えがあった。

「彼はニュースを作った説教師です、覚えていますか？」グローバーは尋ねた。

"そうそう。"今思い出したよ。私たちはヤンシーアカデミーの寮で彼を何度かテレビで見ることがありました。彼はニューヨーク州北部出身の迷惑なテレビ伝道者で、孤児院のために数百万ドルを集めたのに、金メッキの便座や屋内のパットパットゴルフコースなど、邸宅の設備にそのお金を使っていたことが発覚した。彼は警察の追跡中に彼の「主のためのランボルギーニ」が崖から落ちて死亡した。

私は言いました、「彼らは彼に何をしていますか？」

「ハデスからの特別な罰だ」とグローバーは推測した。「本当に悪い人たちは、到着するとすぐに彼の個人的な注意を引きまわります。毛皮、親切な人たちは彼に永遠の拷問を仕掛けるでしょう。」

フューリーたちのことを考えると身震いがした。私は今、彼らの故郷にいることに気づきました。年老いたドッズ夫人は期待を込めて唇をなめていたことだろう。

「でも、彼が説教師なら、別の地獄があると信じているのなら…」と私は言った。

グローバーは肩をすくめた。「私たちが見ているようにこの場所を見ていると誰が言ったでしょうか？人間には何が見えているのでしょうか？」

彼らは見たいのです。あなたはとても頑固です、いや、しつこいです、そのように。」

ゲートに近づいてきました。遠吠えは足元の地面を揺るがすほど大きかったが、私はそれがどこから来たのかはまだわかりませんでした。

すると、私たちの前方約50フィートで、緑の霧がきらめきました。道が三本の車線に分かれたところに、巨大な影の怪物が立っていた。

それは死んだように半分透明だったので、これまで見たことがありませんでした。それが動くまで、それはその後ろにあるものと溶け合っていました。目と歯だけがはっきりしているように見えました。そしてそれはまっすぐに見つめていた自分。

私の顎は開いたままでした。私が言えることは、「彼はロットワイラーだ」ということだけでした。

私はいつもケルベロスより大きな黒いマスティフだと想像していました。しかし、彼は明らかに純血種のロットワイラーでしたが、もちろん、ケナガマンモスの2倍の大きさで、ほとんど目に見えず、3つの頭があったことを除いて。

死者たちはまったく恐れることなく彼のところまで歩いてきました。勤務中のアテンダントの列が彼の両側に分かれた。EZ DEATHの霊たちは彼の前足の間と腹の下をまっすぐに歩き、それはしゃがむことさえせずに進むことができました。

「彼のことがよく見えるようになってきた」と私はつぶやいた。"何故ですか？"

「私は…」アナベスは唇を潤した。「それは私たちが死に近づいているからではないかと思います。」

犬の真ん中の頭が私たちに向かって伸びてきました。それは空気の匂いを嗅ぎ、うなり声を上げた。

「生きている人の匂いがするんだよ」と私は言った。

「でも、大丈夫だよ」グローバーは私の隣で震えながら言った。「私たちには計画があるからです。」

「そうだね」アナベスは言った。彼女の声がかれほど小さく聞こえるのを今まで聞いたことがありませんでした。「計画。」

私たちは怪物に向かって進みました。

中頭は私たちに向かって怒鳴り、それから目玉がガタガタするほど大声で吠えました。

「理解できますか？」グローバーさんに聞いてみた。

「ああ、そうだね」と彼は言った。「それは理解できます。」

「何て言ってるの？」

「人間は正確に訳せる4文字の単語を持っていないと思います。」

私はバックバックから大きな棒を取り出しました。CrustyのSafari Deluxeフロアモデルから折り取ったベッドポストです。私はそれを掲げて、アルポのコマーシャル、かわいい子犬、消火栓など、幸せな犬の考えをケルベロスに向けようと思いました。死ぬつもりはなかったように、私は笑おうとした。

「やあ、ビッグ・フェラ」と私は声をかけた。きつとあまり一緒に遊んでくれないんでしょうね。

「うなる！」

「いい子だよ、私は力なく言った。」

スティックを振ってみました。犬の中頭がその動きを追った。他の二つの頭は私に目を向け、霊を完全に無視しました。私はケルベロスに絶えず注意を払っていました。それが良いことなのかわかりませんでした。

"フェッチ！"私は暗闇の中にスティックを投げました。しっかりとした良い投げでした。でカーツと音がするのを聞いたスティクス川。

ケルベロスは無表情で私を睨んだ。彼の目は不気味で冷たかった。

計画はこれくらいです。

ケルベロスは今、三つの喉の奥で新しい種類のうなり声を上げていた。

「ええと」グローバーは言った。「パーシー？」

"うん？"

「あなたが知りたいと思っただけです。」

"うん？"

「ケルベロス？彼は、私たちが選んだ神に祈る時間が10秒あると言っています。その後は...

まあ...彼はお腹が空いています。」

"待って！"アナベスは言いました。彼女はバックをかき分け始めた。

ああ、そう思った。

「5秒です」とグローバー氏は言った。「今から走りましょうか？」

アナベスはグレープフルーツほどの大きさの赤いゴムボールを作りました。ウォーターランドと銘打ってありましたが、デンバー、コロラド州。私が彼女を止める前に、彼女はボールを上げ、サーベラスに向かってまっすぐに行進しました。

彼女は「ボールが見えますか？ボールが欲しいのですか、サーベラス？座ってください！」と叫びました。

ケルベロスも私たちと同じように驚いた様子だった。

彼の3つの頭はすべて横に傾いていました。6つの鼻孔が拡張しました。

"座る！"アナベスは再び電話をかけた。

私は彼女が今にも世界最大のミルクボンドッグビスケットになるだろうと確信していました。

しかしその代わりに、ケルベロスは三組の唇をなめ、お尻をずらして座り、

すぐにEZ DEATHラインで彼の下を通過していた12人の靈魂を粉碎しました。

幽霊たちは、タイヤから空気が抜けるかのように、くくもったシューシューという音を立てて消えていった。

アナベスは「いい子だよ！」と言いました。

彼女はケルベロスにボールを投げた。

彼はそれを中口で受け止めた。それはかろうじて彼が噛むのに十分な大きさでしたが、もう一つは新しいおもちゃを手に入れようとして、頭の真ん中で音が鳴り始めました。

「捨ててください。」アナベスは命令した。

ケルベロスの頭は戦いをやめて彼女を見た。ボールは小さなガムのように彼の2本の歯の間に挟まれていた。彼は大声で恐ろしい鳴き声を上げ、それからぬるぬるして半分近くに噛みついたボールをアナベスの足元に落とした。

「いい子だよ、彼女はボールの上に怪物が唾を吐きかけているのを無視してボールを拾った。

彼女は私たちの方を向いた。「さあ行きましょう。EZ DEATH ラインのほうが早いです。」

私は言いました、「でも——」

「さあ、彼女は犬に対して使っていたのと同じ口調で命令した。

グローバーと私は慎重に一歩ずつ前進した。

ケルベロスがうなり声を上げ始めた。

"滞在する！"アナベスは怪物に命令した。「ボールが欲しいなら残れ！」

ケルベロスは泣き叫んだが、彼はその場に留まった。

"あなたはどうですか？"アナベスとすれ違ったときに私は尋ねました。

「私は自分が何をしているのか知っています、パーシー」と彼女はつぶやいた。「少なくとも、私は確信しています...」

グローバーと私は怪物の脚の間を歩きました。

お願いします、アナベス、私は祈りました。彼にまた座るように言わないでください。

私たちはそれをやり遂げました。ケルベロスは後ろから見ても怖かったです。

アナベスは「いい犬だよ！」と言いました。

彼女はポロポロの赤いボールを掲げ、おそらく私と同じ結論に達した——もし彼女がそうなら

ケルベロスに褒美を与えた、もうトリックをする余地は何も残されていない。

とにかく彼女はボールを投げた。怪物の左の口はすぐにそれをひたくりましたが、真ん中の頭によって攻撃されただけで、右の頭は抗議のうめき声を上げました。

怪物が気を取られている間に、アナベスはその腹の下を早足で歩き、金属探知機のところで私たちに加わった。

"どうやったの？"私は驚いて彼女に尋ねました。

「服従学校」と彼女は息を切らして言ったが、彼女の目には涙が浮かんでいたのには驚いた。「私が小さかった頃、父の家にはドーベルマンがいました...」

「そんなことは気にしないで」グローバーは私のシャツを引っ張りながら言った。「来て！」

私たちがEZ DEATHラインを突破しようとしたとき、ケルベロスが周囲から哀れなうめき声を上げた。

口が3つ。アナベスは立ち止まった。

彼女は犬の方を向いたが、犬は私たちを一目見ようとしていた。

ケルベロスは期待して息を呑み、足元のよだれの水たまりに小さな赤い球がばらばらになった。

「いい子だね」アナベスは言ったが、その声は憂鬱で不安に聞こえた。

怪物は彼女を心配するかのように首を横に向けた。

「すぐにまたボールを持ってくるよ」アナベスはかすかに約束した。「あれが好きですか？」

怪物は泣き叫んだ。ケルベロスがまだボールを待っていることを知るために犬を話す必要はありませんでした。

「良い犬ですね。すぐに会いに行きます。私は――約束します。」アナベスは私たちのほうを向いた。「さあ行こう。」

グローバーと私は金属探知機を突き抜けましたが、金属探知機はすぐに悲鳴を上げて走り出しました。

赤いライトが点滅。「不法所持!魔力検知!」

ケルベロスが吠え始めた。

私たちはEZ DEATHゲートを突破し、さらに警報が鳴り響き、レースをしました。

アンダーワールドへ。

数分後、私たちは息を切らしながら巨大な黒い木の腐った幹の中に隠れていました。

警備員のグールがフューリースの応援を叫びながら走り去っていく中、木の上を通り過ぎていった。

グローバーはつぶやいた、「それで、パーシー、私たちは今日何を学びましたか?」

「三つ頭の犬は棒よりも赤いゴムボールを好むって?」

「いいえ」とグローバーは私に言った。「私たちはあなたの計画が本当に、本当に魅力的であることを学びました!」

それについてはよくわかりませんでした。おそらくアナベスも私も正しい考えを持っているのではないかと思います。平

ここアンダーワールドでは、誰もが、たとえモンスターであっても、時には少しだけ注意を払う必要がありました。

グールたちが通り過ぎるのを待ちながら、私はそんなことを考えた。私はアナベスが頬の涙をぬぐいながら、遠くで彼の新しい友人を恋しがるケルベロスの悲しげな声に耳を傾けていたのを見て見ぬふりをした。

---

## 19 真実を見つけた、ある意味

これまでに見たことのない最大規模のコンサートの観客、100万人のファンで埋め尽くされたサッカー場を想像してみてください。

さて、その100万倍の広さのフィールドに人々が詰めかかっているところを想像してみてください。そして電気が消えて、騒音も光もなくなり、群衆の上で飛び跳ねるビーチボールもなくなると想像してください。

舞台裏で悲劇的なことが起こった。大勢の人々がささやき声を上げながら、決して始まらないコンサートを待って、影の中でうろろうしているだけだ。

それを想像できれば、アスフォデルの野原がどのようなものかよくわかるでしょう。

黒い草は何年にもわたって死んだ足によって踏みじられていました。暖かく湿った風が沼の息吹のように吹いていました。黒い木――グローバーはポプラだと言ったが――あちこちに群生して生えていた。

洞窟の天井は私たちの頭上に非常に高く、うっすら灰色に光って邪悪に尖っているように見える鍾乳石を除いて、嵐の雲の土手だったかも知れません。私は彼らが今にも私たちに落ちてくるとは想像しないようにしていましたが、野原の周りには、落ちて黒い草に突き刺さった数匹の鳥が点在していました。死者たちはブースターロケットほどの大きさの鍾乳石に突き刺されるような小さな危険を心配する必要はなかったのだろう。

アナベス、グローバー、そして私は、警備員のグールに目を光らせながら、群衆の中に溶け込もうとしました。アスフォデルの霊たちの中に懐かしい顔を探さずにはいられなかったが、死者を見るのは難しい。彼らの顔は輝いています。彼らは皆、少し怒っているか混乱しているように見えます。彼らはあなたのところに来て話しますが、その声はおしゃべりのように、コウモリがさえずるように聞こえます。あなたが自分たちのことを理解できないとわかると、彼らは眉をひそめて立ち去ります。

死者は怖くない。彼らはただ悲しいのです。

私たちは正門から大聖堂に向かって蛇行する新到着者の列をたどって、ゆっくりと歩きました。

黒いテントのパビリオンには次のような横断幕が掲げられていた。

エリシオンに対する裁きと永遠の滅び

ようこそ、新しく亡くなった方！

テントの後ろからは、はるかに小さな2つの列が出てきました。

左側では、警備員のグールに両側を守られた霊たちが岩だらけの道を懲罰の場に向かって行進していた。罰の場は遠くで光り煙を上げていた。溶岩の川と地雷原があり、広大でひび割れた荒野があり、さまざまな拷問エリアを区切る何マイルもの有刺鉄線があった。遠くからでも、人々がヘルハウンドに追われたり、火あぶりにされたり、サボテン畑の中を裸で走ったり、オペラ音楽を聞かされたりする様子が見えました。小さな丘が見えました。アリほどの大きさのシーシュポスの姿が岩を頂上まで動かそうと奮闘しているのが見えました。そして、私はさらにひどい拷問も見ましたが、それについては書きたくないです。

判定館の右側から来るラインの方がずっと良かった。これは壁に囲まれた小さな谷へと続いていました。ゲートで囲まれたコミュニティであり、そこがアンダーワールドの唯一の幸せな部分であるように見えました。セキュリティゲートの向こうには、歴史上のあらゆる時代の美しい家、ローマの別荘、中世の城、ビクトリア朝の邸宅が立ち並んでいます。芝生には銀色や金色の花が咲きました。草が虹色に波立った。笑い声が聞こえ、バーベキューを調理する匂いが聞こえました。

エリジウム。

その谷の真ん中には青く輝く湖があり、パハマのリゾート地のような小さな島が3つあった。プレストの島は、三度生まれ変わることを選択し、三度エリジウムを達成した人々のためのものです。そこが私が死んだら行きたい場所だとすぐに思いました。

「それがすべてだ」とアナベスは私の考えを読んだかのように言った。「そこは英雄の居場所だ。」

しかし私は、エリジウムには人がどれほど少なく、アスフォデルの野原や懲罰の野原と比べてもどれほど小さいかを考えました。人生で良いことをした人はほとんどいませんでした。憂鬱でした。

私たちは裁きの館を出て、アスフォデル野原の奥へ進みました。暗くなりました。の私たちの服から色が落ちました。おしゃべりする霊たちの群れが薄くなり始めた。

数マイル歩くと、遠くで聞き覚えのある金切り声が聞こえ始めました。地平線にそびえ立つのは、きらめく黒曜石の宮殿だった。欄干の上には3匹の暗いコウモリのような生き物、フューリーが渦巻いていました。彼らが私たちを待っていたような気がしました。

「引き返すには遅すぎると思います」とグローバーさんは物思いにふけるように言った。

「大丈夫ですよ。」私は自信を持って聞こえるように努めました。

「おそらく、最初に他の場所をいくつか探索する必要があるでしょう」とグローバー氏は提案した。「例えばエリジウムとか……」

「さあ、ヤギ少年。」アナベスは彼の腕を掴んだ。

グローバーは叫んだ。彼のスニーカーに翼が生え、足が前方に飛び出し、彼をアナベスから引き離しました。彼は草の上に仰向けになって着地した。

「グローバー」とアナベスがたしなめた。「ふざけるのはやめてください。」

「しかし、私はしませんでしたー」

彼はまた叫びました。彼の靴は今、狂ったようにバタバタしていました。彼らは地面から浮き上がり、彼を私たちから引き離し始めました。

「マイア！」彼は叫んだが、魔法の言葉は効果がなかったようだ。「マイア、もう！ ナインワン  
1つ！ヘルプ！」

私は驚きを乗り越えてグローバーの手を掴みましたが、手遅れでした。彼は迎えに来ていた  
ボブスレーのように下り坂を滑るスピード。

私たちは彼の後を追いかけてきました。

アナベスは「靴の紐を解いて！」と叫びました。

賢いアイデアではありましたが、靴に足を引っ張られてしまうと、そう簡単ではないと思います  
全速力で。グローバーさんは起き上がろうとしたが、靴紐に近づくことができなかった。

私たちは彼を追いつけ、彼が霊たちの足の間を引き裂く間、視界に入らないように努めました。  
イライラして彼に話しかけた。

グローバーはハデスの宮殿の門をまっすぐに突き抜けようとしていると確信していましたが、彼の靴が右に大きく曲がり、彼を反対方向に  
引きずりました。

坂が急になってきました。グローバーはスピードを上げた。アナベスと私は追いつくために全力疾走しなければなりませんでした。洞窟の  
壁は両側で狭くなり、私たちはある種の横穴に入っていることに気づきました。今は黒い草や木はなく、足元には岩があり、頭上には鍾乳石の薄  
暗い光があるだけです。

「グローバー！」私は声を響かせて叫びました。「何かにつかまってください！」

"何？"彼は叫び返した。

彼は砂利につかまっていたが、彼を遅らせるほど大きなものは何もなかった。

トンネル内は暗くなり、寒くなってきました。腕の毛が逆立った。ここからは異臭が漂ってきました。それは私を知るべきではないことについ  
て考えさせましたー古代の石の祭壇に流された血、  
殺人者の口臭。

それから私たちは前方にあるものを見て、立ち止まりました。

トンネルは広がって巨大な暗い洞窟になり、真ん中には街区ほどの大きさの裂け目があった。

グローバーはエッジに向かってまっすぐに滑っていた。

「さあ、パーシー！」アナベスは私の手首を引っ張って叫びました。

「でも、それは――」

"知っている！"彼女は叫びました。「あなたが夢で描いた場所です！ でももしそうなったらグローバーは落ちてしまいますよ」  
もちろん、彼女は正しかった。グローバーの苦境が私を再び動かしてくれた。

彼は地面をひっかきながら叫びましたが、翼のついた靴が彼を建物の方へ引きずり続けました。

ピットに入り、彼に間に合わせることはできそうになかった。

彼を救ったのはひづめだった。

空飛ぶスニーカーはいつも緩く履いていたが、ついにグローバーは大きな石にぶつかり、左の靴が飛んでしまった。それは暗闇の中に、裂け目の中に向かってスピードを上げました。右の靴は彼を引っ張り続けましたが、それほど速くはありませんでした。グローバーさんは大きな岩につかまり、それを錨のように使うことで速度を落とすことができました。

私たちが彼を捕まえて斜面に引き上げたとき、彼は穴の端から10フィートのところでした。もう一羽の翼のある靴は自らを引き離し、怒って私たちの周りを旋回して抗議の頭を蹴り、その後亀裂の中に飛び立ち、双子に加わりました。

私たちは皆、疲れきって黒曜石の砂利の上に倒れ込みました。手足が鉛のように感じられました。私さえもバックバックはまるで誰かが石を詰め込んだかのように重くなったように見えました。

グローバーはかなりひどい傷を負っていた。彼の手は血を流していました。彼の目は、彼が恐怖を感じたときと同じように、ヤギのように瞳孔が切れていました。

「どうやって分からない…彼は息を呑んだ。"私はしませんでした..."

「待ってください」と私は言いました。"聞く。"

何かが聞こえました——暗闇の中での深いささやきです。

さらに数秒すると、アナベスは言いました、「パーシー、ここは——」

「しー」私は立ちました。

音はますます大きくなり、私たちのほのか下から、つぶやくような邪悪な声が聞こえてきました。穴から出てくる。

グローバーは起き上がった。「え、あの音は何ですか？」

アナベスもそれを聞いた。彼女の目にはそれが見えました。「タルタロス。タルタロスの入り口」私  
キャップのないアナクルスモス。

青銅の剣は闇の中で輝き、広がり、邪悪な声はたじろぐように見えた、  
詠唱を再開する前に、ほんの少しだけ。

今ではギリシャ語よりも古い古代の単語をほとんど理解できるようになりました。まるで「魔法」のように、私は言った。 ...

「私たちはここから出なければなりません」とアナベスは言いました。

私たちは一緒にグローバーをひづめまで引きずり、トンネルを戻り始めました。足が十分に速く動かなくなりました。バックバックの重さが重かった。後ろからの音がますます大きくなり、怒ったので、私たちは急いで走り始めました。

早すぎるということはありません。

まるでピット全体が吸い込まれているかのように、冷たい風が私たちの背中を引き寄せました。恐ろしい瞬間、私は地面を失い、砂利に足を滑りました。もっと端に近づいていたら、  
吸い込まれていただろう。

私たちは苦労を続けて、ついにトンネルの頂上に到着しました。そこでは、洞窟がアスフォデルの野原へと広がっていました。風が消えた。トンネルの奥から怒りの叫び声が響き渡った。私たちが逃げ出したのは何か嬉しくなかった。

"何だって？"私たちが黒いポブラの比較的安全な場所で倒れたとき、グローバーは息を呑んだ。  
木立。「ハデスのペットの一つ？」

アナベスと私は顔を見合わせた。彼女がアイデアを考えているのはわかりました。おそらくロサンゼルスへのタクシーに乗っているときに得たものと同じものですが、彼女はそれを共有するのが怖かったのです。それだけでも私は恐怖を感じるのに十分でした。



私は剣に蓋をし、ペンをポケットに戻しました。「続けましょう。」私はグローバーを見た。

"歩けますか？"

彼は飲み込んだ。「ええ、確かに。とにかく、私はその靴が好きではありませんでした。」

彼はそれについて勇敢に振る舞おうとしましたが、アナベスと私と同じくらいひどく震えていました。

その穴にいたものは誰のものでもありませんでした。それは言葉では言い表せないほど古くて強力でした。エキドナにもそんな感情は与えられなかった。私はそのトンネルに背を向けてハデスの宮殿に向かうことにほとんど安心しました。

ほとんど。

フューリーたちは暗闇の中、欄干の周りを回った。要塞の外壁は黒く輝き、二階建ての青銅の門が大きく開いて立っていた。

間近で見ると、門に刻まれた死の場面が描かれていました。都市上で爆発する原子爆弾、ガスマスクをつけた兵士で埋め尽くされた塹壕、空のボウルを持って待つアフリカの飢餓犠牲者の列など、現代のものもありましたが、それらはすべて青銅に刻み込まれたかのように見えました。何千年も前。当たった予言を見ているのではないかと思った。

中庭の中には、私が今まで見た中で最も奇妙な庭園がありました。色とりどりのキノコ、有毒な低木、奇妙な発光植物が日光なしで育ちました。花の不足を補う貴重な宝石、拳ほどの大きさのルビーの山、ダイヤモンドの原石の塊。凍りついたパーティー客のようにそこかしこに立っていたのは、石化した子供たち、サテュロス、ケンタウロスといったメドゥーサの庭の彫像たちで、全員がグロテスクに微笑んでいた。

庭の中心にはザクロの果樹園があり、オレンジ色の花がネオンで輝いていました

暗闇の中で明るい。「ペルセポネの庭です」とアナベスは言いました。「歩き続ける。」

彼女が先に進みたい理由が分かりました。ザクロの酸味のある香りは圧倒されそうになりました。急に食べたくなかったのですが、ペルセポネの話の思い出しました。

アンダーワールドの食べ物を一食食べたら、もうここから出られなくなるでしょう。私はグローバーが大きくてジューシーなものを選ぶのを防ぐために彼を引き離しました。

私たちは宮殿の階段を登り、黒い柱の間を通り、黒い大理石の柱廊玄関を通して、ハデスの家に入りました。エントランスホールには磨かれた青銅の床があり、たいまつが反射して沸騰しているように見えました。天井はなく、はるか上にある洞窟の屋根だけでした。ここでは雨の心配はなかったのでしょうか。

あらゆる側の出入り口は軍服を着た骸骨によって守られていた。ギリシャの甲冑を着た者もいれば、英国の赤衣を着た者もあり、肩にポロポロの星条旗を掲げた迷彩服を着た者もいた。

彼らは銃やマズケット銃、あるいは M-16 を携行していました。それらはどれも私たちが気にしませんでした。私たちがホールを歩いていると、反対側の端にある大きなドアに向かって、彼らの空洞の眼窩が私たちを追ってきました。

2人の米海兵隊員の骸骨がドアを守っていた。彼らはロケット推進で私たちに笑いかけた胸の前に手榴弾発射装置を構えた。

「ご存知の通り、」グローバーはつぶやいた、「ハデスは戸別訪問には困らないだろうね」  
店員さん。」

私のバックパックの重さは今では何トンもありました。理由が分かりませんでした。開けてみたかったので確認してみました。落ちたボウリングの球を何とか拾っていればよかったのだが、今はその時ではなかった。

「まあ、みんな」と私は言った。「私たちは...ノックすべきでしょうか？」

熱風が廊下を吹き抜け、ドアが勢いよく開いた。衛兵たちは脇へ退いた。

「それは、熱中するという意味だと思います」とアナベスは言った。

部屋の中は私の夢とまったく同じでしたが、今回はハデスの王座が占拠されていた点が異なります。

彼は私が出会った3番目の神でしたが、本当に神のようだと感じたのは初めてでした。

一つには、彼の身長は少なくとも10フィートで、黒い絹のローブと金の編み込みの冠を着ていました。彼の肌はアルピノのように白く、髪は肩までの長さで漆黒でした。彼はアレスのように巨体ではなかったが、力を放っていた。彼は人骨を融合させた玉座に座り、ヒョウのようにしなやかで優雅、そして危険に見えました。

私はすぐに彼が命令を下すべきだと感じました。彼は私よりも多くのことを知っていました。彼は〜になるべきだ私の主人。それから私はそこから抜け出すように自分に言い聞かせました。

アレスのオーラと同じように、ハデスのオーラも私に影響を与えていました。『ロード・オブ・ザ・デッド』は、私がこれまでに見たアドルフ・ヒトラーやナポレオン、あるいは自爆テロを指揮するテロリストのリーダーたちの絵に似ていた。ハデスも同じように強烈な目、同じ種類の魅惑的な邪悪なカリスマ性を持っていました。

「ここに来るとは勇敢ですね、ポセイドンの息子よ」と彼は油っぽい声で言った。「あなたが何をした後、本当に勇気のあることを私にしてくれました。あるいは、あなたは単にとても愚かなのかもしれない。」

しびれが私の関節に忍び込み、横になってハデスの足元で少し昼寝をしたいという誘惑に駆られました。ここで丸まって永遠に眠ってください。

私はその感情と闘い、前に進みました。言わなければならないことはわかっていました。「殿下と叔父さん、二つお願いがあります。」

ハデスは眉を上げた。彼が玉座の前方に座ると、黒いローブのひだに影のような顔が現れ、あたかも懲罰の場から抜け出そうとする囚われの魂を衣服に縫い合わせたかのような苦みの表情が浮かんだ。私の中の ADHD 部分は、彼の服の残りの部分も同じように作られているのではないかと、仕事外で疑問に思いました。ハデスの下着に織り込まれるために、人生でどんな恐ろしいことをしなければならいのでしょうか？

「リクエストは2つだけですか？」ハデスは言った。「傲慢な子よ。まだ十分に摂取していないかのようだ。それなら話してください。まだあなたを殴り殺さないのは面白いです。」

私は飲み込んだ。これは私が懸念していた通りに進んでいた。

私はハデスの隣にある空の小さな玉座をちらっと見た。それは黒い花のような形をしており、金で飾られていました。女王ペルセポネがここにいたらよかったのに。私は、彼女が夫の気分を落ち着かせる方法についての神話のことを思い出しました。しかし、それは夏でした。もちろん、ペルセポネは光の世界では母親である農業の女神デメテルとともに上にいます。地球の傾きではなく、彼女の訪問が季節を生み出します。

アナベスは咳払いをした。彼女の指が私の背中を突いた。

「ハデス様」と私は言った。「ほら、先生、神々の間で戦争などあり得ないのです。それは...悪い事でしょう。」

「本当に最悪です」とグローバー氏は親切に付け加えた。

「ゼウスのマスターボルトを返してください」と私は言いました。「お願いします、オリンパスまで運ばせてください。」

ハデスの目は危険なほど明るくなった。「自分が持っているものを手に入れても、あえてこのふりを続けるのは終わり？」

私は友人たちを振り返った。彼らも私と同じように混乱しているようでした。

「ええと...叔父さん」と私は言いました。「あなたは『自分の行動が終わってから』と言いつけます。いったい私は何をしたのですか？」

玉座の間は非常に強い揺れで揺れたので、口サンゼルスの上階でも感じたのでしょう。

洞窟の天井から瓦礫が落ちてきた。壁に沿ってドアが一斉に開き、西洋文明のあらゆる時代と国から、何百人もの骸骨の戦士たちが進軍してきました。彼らは部屋の周囲に並び、出口を塞いだ。

ハデスは「私が戦争したいと思うか、ゴドリング？」と怒鳴った。

私はこう言いたかった、まあ、この人たちは平和活動家には見えないよ。しかし、それは危険な答えかもしれないと思いました。

「あなたは死者の主です。私は慎重に言いました。「戦争をすれば王国が拡大するでしょう？」

「兄弟がよく言うことだよ！もっと被験者が必要だと思う？アスフォデル野原が広がっているのを見なかった？」

"良い..."

「この一世紀だけで、私の王国がどれだけ膨れ上がったか、知っていますか？」

開かなければならなかった区画は？」

私は答えようと口を開きましたが、ハデスはもう調子に乗っていました。

「警備員のグールが増えた」と彼はうめいた。「判決館での交通トラブル。スタッフの残業は2倍。私はかつて金持ちの神、パーシー・ジャクソンだった。私は地中の貴金属をすべて管理している。でも出費は私のものよ！」

「カロンは昇給を望んでいる」と私はその事実を思い出して口走ってしまった。言った瞬間に願いました。口を縫合することができました。

「カロンのことを始めさせないでください！」ハデスは叫んだ。「イタリア製のスーツを発見して以来、彼は不可能だった！あちこちで問題が発生し、私はそれらすべてに個人的に対処しなければならない。宮殿から門までの通勤時間だけでも、私を狂わせるのに十分だ！そして死者は後を絶たない。いいえ、ゴッドリング。臣民を獲得するのに手助けする必要はありません！私はこの戦争を望んでいません。」

「しかし、あなたはゼウスのマスターボルトを奪いました。」

「嘘だ！」さらにゴロゴロ。ハデスは玉座から立ち上がり、サッカーボールの高さまでそびえ立った。ゴールポスト。「君のお父さんはゼウスを騙すかもしれないけど、私はそこまで愚かではない。お父さんの計画は分かるよ。」

「彼の計画は？」

「あなたは冬至の日の泥棒でした」と彼は言いました。「あなたのお父さんは、あなたに小さな秘密を守ろうと考えました。彼はあなたをオリンポスの玉座の間へ案内しました。あなたはマスターボルトと私の舵を取りました。

もし私がヤンシーアカデミーにいるあなたを見つけるためにフューリーを送っていなかったら、ポセイドンは戦争を始める計画を隠すことに成功したかもしれません。しかし今、あなたは公の場に追いやられています。貴様はポセイドンの泥棒として暴露され、私は舵を取り戻すだろう！」

「でも...」アナベスは言った。彼女の心が時速100万マイルに達しているのがわかりました。「主ハデス、あなたの闇の兜も欠けているのですか？」

「私に無邪気な遊びをしないでください、お嬢さん。あなたとサテュロスはこの英雄を助けています——ポセイドンの名において私を脅すためにここに来たのは間違いありません——私に最後通告をもたらすために。ポセイドンは私が脅迫されて彼を支持できるとも思っているのでしょうか？」

"いいえ！"私は言いました。「ポセイドンはしなかった——私はしなかった——」

「私は舵が消えたことについては何も言っていない」とハデスは怒鳴った。

私の最も強力な恐怖の武器がなくなっていることを知らせるための言葉。それで私は自分であなたを探しました、そしてあなたが脅迫をするために私のところに来ていることが明らかだったとき、私はあなたを止めようとはしませんでした。」

「私たちが止めようとしたんじゃないの？ でも——」

「今すぐ兜を返せ、さもなければ死を阻止するぞ」とハデスは脅した。「それが私の対案です。私は大地を切り開き、死者を世界に還させます。私はあなたの土地を悪夢に変えます。そしてあなた、パーシー・ジャクソン——あなたの骸骨が私の軍隊を冥府から導くでしょう。」

骸骨兵士たちは全員一歩前に出て武器を構えた。

その時点で、私はおそらく恐怖を感じていたはずですが、不思議なことに、私は気分を害したのです。

自分がしていないことで非難されることほど腹が立つことはありません。たくさんの経験をしてきました。それと。

「あなたはゼウスと同じくらい悪いです」と私は言いました。「私があなたから盗んだと思う？だからあなたはフューリーズを送ったんだ？私の後？」

「もちろんです」ハデスは言った。

「それで、他のモンスターは？」

ハデスは唇を丸めた。「私は彼らとは何の関係もありませんでした。私はあなたに即死を望まなかったのです。私はあなたが刑罰の場であらゆる拷問に直面できるように、生きたままま私の前に連れて来てほしかったのです。」

なぜ私があなたを簡単に私の王国に入れると思うのですか？」

"簡単に？"

「私の財産を返せ！」

「しかし、私はあなたの舵を持っていません。マスターボルトを取りに来たのです。」

「あなたはすでに持っているものです！」ハデスは叫んだ。「あなたはそれを持ってここに来ました、この愚か者、私を脅せると思ったのです！」

「しかし、私はしませんでした！」

「それでは、荷物を開けてください。」

恐ろしい予感が私を襲いました。バックパックの中の重さはボウリングの球のようなもの。そんなはずはない……。

肩から下ろしてファスナーを開けました。中には長さ2フィートの金属製のシリンダーがあり、両端にスパイクがあり、エネルギーでうなり声を上げていました。

「パーシー」とアナベスは言った。「どうやって-」

「私は——分かりません。分かりません。」

「あなた方の英雄はいつでも同じです」とハデスは言った。「そんな武器を私の前に持ち込めるとは、あなたのプライドが愚かです。ゼウスのマスターボルトは私から求めたわけではありませんが、ここにあるので譲ってください。きっと素晴らしい交渉材料になるでしょう。」そして今...

私の舵。

どこですか？"

私は言葉を失いました。私には舵がありませんでした。どうやってマスターボルトがバックパックに入ったのか全く分かりませんでした。ハデスが何か策略を働いているかと思った。ハデスが悪者でした。しかし、突然世界は横向きになりました。遊ばれていたことに気づきました。ゼウス、ポセイドン、ハデスは何者かによって互いの喉元に突きつけられていた。マスターボルトはバックパックの中にあり、バックパックは...から入手したものでした。

「ハデス様、お待ちください」と私は言いました。「これはすべて間違いです。」

"間違い？"ハデスは咆哮を上げた。

スケルトンたちは武器を向けた。上空から革のような翼の羽ばたきが聞こえ、三匹のフューリーが急降下して主の玉座の後ろに止まりました。ドゥズ夫人の顔をした男は私に熱心に笑い、鞭を打ちました。

「間違いはありません」ハデスは言った。「私はあなたが来た理由を知っています、私はあなたの本当の理由を知っています  
ボルトを持ってきました。あなたは彼女のために交渉しに来たのです。」

ハデスは手のひらから金の火の玉を放ちました。それは私の目の前で爆発し、そこには金のシャワーの中で凍りついた私の母があり、まさにミノタウロスが彼女を絞め殺し始めた瞬間と同じでした。

話すことができませんでした。彼女に触れようと手を伸ばしましたが、その光は焚き火のように熱かったです。

「そうだね」ハデスは満足そうに言った。「私は彼女を連れて行きました。パーシー・ジャクソン、あなたがいずれ私と交渉しに来るだろうとは分かっていました。私の舵を返してください、そうすればおそらく私は彼女を手放すでしょう。彼女は死んではいません、ご存知のとおり、まだです。しかし、もしあなたが私の気に入らないなら、それは変わりますよ。」

私はポケットの中の真珠のことを考えました。もしかしたら彼らは私をこの状況から救ってくれるかもしれない。お母さんを自由にしてあげられたら...

「ああ、真珠だ」とハデスが言うのと、私の血は凍りました。「はい、私の弟と彼のちょっとしたトリック。それを披露してください、パーシー・ジャクソン。」

私の手が私の意志に反して動き、真珠を取り出しました。

「たった3人だ」ハデスは言った。「残念だ。それぞれが一人の人しか守っていないことはわかっているだろう。

それなら、お母さんを連れて行ってみてください、小さなゴドリング。そして、あなたの友達の中で誰を残して私と永遠を過ごすつもりですか？続ける。選ぶ。さもなければバックバックを渡して条件を受け入れてください。」

私はアナベスとグローバーを見ました。彼らの顔は陰しかった。

「私たちはだまされました」と私は彼らに言いました。「設定。」

"そうだね。でも何で？"アナベスは尋ねた。「そして穴の中の声は——」

「まだ分かりません」と私は言いました。「しかし、私は尋ねるつもりです。」

「決めろよ、坊や！」ハデスは叫んだ。

「パーシー」グローバーは私の肩に手を置いた。「彼にボルトを与えることはできない」

"私はそれを知っています。"

「ここに残しておいてください」と彼は言いました。「3番目の真珠をお母さんに使ってください。」

"いいえ！"

「私はサテュロスだ」とグローバーは言った。「私たちには人間のような魂がありません。彼は私が死ぬまで私を拷問することができます。

しかし、彼は永遠に私を捕まえることはありません。私は花が何かに生まれ変わるでしょう。それが最善の方法だよ。」

"いいえ。"アナベスは青銅のナイフを抜いた。「二人は続けてください。グローバー、あなたはパーシーを守らなければなりません。

サーチャーのライセンスを取得して、パンの探索を開始する必要があります。彼のお母さんをここから連れ出してください。私がかバーします。戦いに行くつもりだ。」

「まさか」とグローバー氏は言った。「私は後ろに残っています。」

「考え直してよ、ヤギ坊や」アナベスは言った。

「やめてよ、二人とも！」心が真っ二つに引き裂かれるような気がした。彼らは二人とも私と一緒にたくさんのことを乗り越えてきました。グローバーが像の庭でメデューサに急降下爆撃をしたことや、アナベスがケルベロスから私たちを救ってくれたことを思い出しました。私たちはヘファイストスのウォーターランドの乗り物、セントルイスのアーチ、ロータスカジノを生き延びました。私は友人に裏切られるのではないかと何千マイルも心配してきましたが、この友人たちは決してそんなことはしませんでした。彼らは何度も何度も私を救ってくれただけでした。

今、彼らは私の母のために自分の命を犠牲にしたいと思っています。

「何をすべきかはわかっています」と私は言いました。"これらを取る。"

私は彼らに真珠を一つずつ手渡しました。

アナベスは「でも、パーシー……」

私は振り返って母に向かいました。私は自分を犠牲にして最後の真珠を彼女に使いたかったのですが、彼女が何を言うか分かっていました。彼女は決してそれを許しませんでした。ポルトをオリンポスに返して、ゼウスに真実を告げなければなりませんでした。戦争を止めなければなりませんでした。私が代わりに彼女を救ったとしても、彼女は決して私を許さないだろう。私は、100万年前に思われた、謎の丘でなされた予言について考えました。結局、最も重要なものを保存できなくなるでしょう。

「ごめんなさい」と私は彼女に言いました。「戻ってきます。方法を見つけます。」

ハデスの顔にあったドヤ顔が消えた。彼は「ゴドリング……？」と言いました。

「あなたの舵を見つけてあげよ、叔父さん、私は彼に言いました。「返します。カロンの昇給のことは覚えておいてください。」

「私に逆らわないで——」

「それに、たまにはケルペロスと遊ぶのも悪くないよ。彼は赤いゴムボールが好きなんだよ。」

「パーシー・ジャクソン、あなたはそうではありません——」

私は「さあ、みんな！」と叫びました。

私たちは足元の真珠を砕きました。恐ろしい瞬間、何も起こりませんでした。

ハデスは「奴らを滅ぼせ！」と叫んだ。

スケルトンの軍隊が剣を抜き、銃がカチッと全自動になり、突進してきました。の

フューリーが突進し、鞭が燃え上がった。

スケルトンが発砲したのと同じように、私の足元にある真珠の破片が、緑色の光のバーストと新鮮な海風とともに爆発しました。私は乳白色の球体に包まれ、地面から浮き上がり始めていました。

アナベスとグローバーは私のすぐ後ろにいました。私たちが浮上すると、真珠の泡から槍と銃弾が無害に飛び散りました。ハデスは激怒して叫び、要塞全体が揺れ、LAでは平和な夜にはならないとわかった。

「顔を上げて」とグローバーは叫んだ。「墜落するぞ！」

案の定、私たちは鍾乳石に向かって突っ走っていました。

泡を立てて我々を串刺しにする。

「これらをどうやってコントロールするのですか？」アナベスは叫んだ。

「そうは思わないよ！」私は叫び返した。

泡が天井に叩きつけられると、私たちは叫びました、そして…暗闇。

私たちは死んでしまったのですか？

いや、まだレースの感覚は感じられた。私たちは水の中の気泡のように、固い岩を簡単に通り抜けて登って行きました。それが真珠の力なんだと思いました。海の中は必ず海に還ります。

しばらくの間、球体の滑らかな壁の外には何も見えませんが、その後、私の真珠が海底で突き破りました。他の2つの乳白色の球体、アナベスとグローバーは、私たちが水中を舞い上がっていく間、私と歩調を合わせていました。そして——カー・ブラム！

私たちはサンタモニカ湾の真ん中の水面で爆発し、サーファーを腰から弾き飛ばしました。

「おい！」と憤慨してボードに乗りました。

私はグローバーさんを掴んで救命浮輪まで引きずり込みました。私はアナベスを捕まえて、彼女も引きずっていきました。体長約11フィートのホホジロサメが、好奇心旺盛なサメの周りを回っていました。

私は「やっつけろ」と言いました。

サメは向きを変えて走り去った。

サーファーは悪いキノコについて何か叫び、彼と同じくらいの速さで私たちからパドリングして離れました。できた。

どういうわけか、私はそれが何時であるかを知っていました :6月21日の早朝、夏至の日。

遠くではロサンゼルスが燃え上がり、街中の近所から煙が立ち上っていました。地震があったのですが、それはハデスのせいでした。おそらく彼は今、私を追って死者の軍隊を送り込んでいるのだろう。

しかし現時点では、アンダーワールドは私にとって最大の問題ではありませんでした。

岸に着かなければなりません。ゼウスの落雷をオリンポスに戻さなければなりません。何よりも、私がしなければならなかったのは、私を騙した神と真剣に話し合ってください。

---

## 20 私は親戚と戦う

沿岸警備隊のボートが私たちを迎えに来てくれましたが、忙しすぎて私たちを長時間留めておくことはできず、私服を着た子供3人がどうして湾の真ん中に出てきたのか不思議に思っていました。掃討すべき災害があった。彼らの無線は救難信号で混信していました。

彼らは私たちを肩にタオルを巻き、水を与えてサンタモニカ桟橋で降ろしました。

私はジュニア沿岸警備隊だと書かれたボトル !そして、より多くの人を救うために急いで出発しました。

私たちの服も、私の服もずぶ濡れになりました。沿岸警備隊のボートが現れたとき、私は彼らが私を水中から引き上げて、完全に乾いた状態で発見されないように、静かに祈っていました。そうすれば眉をひそめる人もいたかもしれません。だから私は自らずぶ濡れになってもいいと思った。案の定、いつもの防水魔法に見放されてしまいました。グローバーに靴を渡していたので、私も裸足でした。沿岸警備隊は、なぜ私たちの一人がひづめを持っていたのかを疑問に思うよりも、なぜ私たちの一人が裸足だったのか疑問に思ったほうが良いでしょう。

乾いた陸地に到着した後、私たちはよろよろと海岸を下り、美しい日の出に照らされて街が燃えるのを眺めました。まるで死から戻ってきたような気分だった——私もそうだった。ゼウスのマスターボールでバックバックが重かった。母に会って私の心はさらに重くなりました。

「信じられない」とアナベスは言った。「あそこまで行ったんだよ——」

「それはトリックだった」と私は言った。「アテナにふさわしい戦略だ」

「ねえ」と彼女は警告した。

「分かりましたね？」

彼女は目を伏せ、怒りが消えた。「はい、分かりました。」

「いや、そんなことないよ！」グローバー氏は不平を言った。「誰かがー」

「パーシー…」アナベスは言った。「お母さん、ごめんなさい。本当にごめんなさい……」

私は彼女の声が聞こえないふりをした。母のことを話したら、ちょっと泣きそうになった子供。

「予言は当たったんだ」と私は言った。「あなたは西へ行き、向きを変えた神と対峙しなければならない。」しかし、それはハデスではありませんでした。ハデスはビッグ 3 間の戦争を望んでいませんでした。他の誰かが窃盗を実行しました。

誰かがゼウスのマスターボルトとハデスの兜を盗み、私がポセイドンの子供であるという理由で私をはめました。

ポセイドンは双方から非難されるだろう。今日の日没までに三つ巴の戦いが始まるだろう。そしてそれを引き起こしたのは私だろう。」

グローバーは当惑して首を振った。「しかし、誰がそんなに卑劣な人間だろうか？誰がそんなに戦争を望むだろうか？」

私は足を止めてビーチを見下ろしました。「へー、考えさせてよ。」

そこで彼は、黒革のダスターとサングラスをかけ、アルミ製の野球バットを肩に担いで、私たちを待っていました。彼のバイクが彼の横で轟音を立て、ヘッドライトが砂を赤く染めた。

「やあ、坊や」アレスは私に会えて本当に嬉しかったように言った。「あなたは死ぬはずだった。」

「あなたは私を騙したのよ」と私は言いました。「あなたはヘルムとマスターボルトを盗みました。」

アレスはニヤリと笑った。「まあ、私が個人的に盗んだわけではありません。神々はお互いの象徴を奪い合っています」  
権力——それは絶対にダメだ。でも、使い走りができるヒーローは世界であなただけではありません。」

「誰を利用したの？クラリス？彼女は冬至の日にそこにいました。」

その考えは彼を面白がったようだった。「関係ない。要は、坊や、君は戦争の邪魔をしているということだ。ほら、君は冥界で死ななければならない。そうすれば、海藻爺さんは君を殺したハデスに激怒するだろう。コーブスプレスにはゼウスの主人がいるだろう」ボルト、それでゼウスは彼に怒るでしょう。そしてハデスはまだこれを探しています…」

彼はポケットからスキー帽（銀行強盗が被っているようなもの）を取り出し、自転車のハンドルバーの間に置きました。すぐに、帽子は精巧な青銅製の軍用ヘルメットに変わりました。

「闇の舵だ」グローバーは息を呑んだ。

「その通りだ」アレスは言った。「さて、私はどこにいたの？そうそう、ハデスはゼウスとポセイドンの両方に激怒するだろう。なぜなら彼はこれを誰が奪ったのか分からないからだ。すぐに、我々は楽しい三者三様のナメクジ祭りを始めた。」

「でも、彼らはあなたの家族なのよ！」アナベスは抗議した。

アレスは肩をすくめた。「最高の戦争だ。常に最も血なまぐさい戦争だ。親戚が戦うのを見るほど素晴らしいことはない、と私はいつも言う。」

「デンバーでバックバックをくれたんだよ」と私は言った。「マスターボルトはずっとそこにありました。」

「はい、いいえです」とアレスは言った。「おそらく、あなたの小さな定命の頭脳には複雑すぎて理解できないでしょうが、バックバックはマスターボルトの鞘であり、少し変形しただけです。ボルトはそれに接続されています、あなたが手に入れた剣のようなものです、それは常にあなたのポケットに戻ります、右？」

アレスがどうやってそれを知ったのかは分かりませんでしたが、軍神としてはそれを仕事にする必要があったのでしょね  
武器について知ること。

「とにかく、」アレスは続けた、「魔法を少しいじってみたので、ボルトは元に戻るだけです」



アンダーワールドに到達したら、鞆を受け取ります。ハデスに近づくと…ビンゴ、メールが届きました。途中で死んでも損失はありません。まだ武器を持っていたんだ。」

「でも、マスターポルトだけ自分用に取っておくのはどうですか？」私は言いました。「なぜそれをハデスに送るのですか？」

アレスは顎がけいれんした。一瞬、まるで別の音楽を聞いているかのようだった

頭の奥に響く声。「なぜ私は……そう……あの程度の火力を持たなかったんだ……」

彼はトランス状態を1秒間、…2秒間保持しました。

私はアナベスと緊張した表情を交わした。

アレスの顔が晴れた。「面倒なことはしたくなかった。現行犯で捕まえたほうがいい

事。」

「嘘をついているよ」と私は言った。「ポルトを冥界に送るというのはあなたの考えではありませんでしたね？」

「もちろんそうだったよ！」サングラスからは今にも引火しそうな煙が立ち上っていた。

「あなたは窃盗を命令したわけではない」と私は推測しました。「誰かがその2つのアイテムを盗むために英雄を送り込んだ。

それから、ゼウスがあなたを追い詰めるように送ったとき、あなたはその泥棒を捕まえました。しかし、あなたは彼をゼウスに引き渡さなかった。何かがあなたを説得して彼を手放したのでしょう。別のヒーローがやって来て配達を完了するまで、アイテムを保管しておきました。穴の中のあれがあなたに命令しているのよ。」

「私は軍神だ！誰の命令も受けない！私に夢はない！」

私は躊躇しました。「夢について何か言ったのは誰ですか？」

アレスは動揺しているように見えたが、作り笑いでそれを隠そうとした。

「目前の問題に戻りましょう、坊主。あなたは生きています。そのポルトをオリンパスに持っていくことはできません。頭の固いバカどもに言うことを聞かされるかもしれません。だから私はあなたを殺さなければなりません。」

個人的なことは何もありません。」

彼は指を鳴らした。彼の足元で砂が爆発し、キャンプ・ハーフブラッドの第7小屋のドアの上に頭がぶら下がっていたイノシシよりもさらに大きくて醜いイノシシが突進した。獣は砂を踏みしめ、かみそりのような鋭い牙を下ろしながら、玉のような目で私を睨みつけ、殺す命令を待っていました。

波の中へ足を踏み入れました。「私と戦ってください、アレス」

彼は笑ったが、私は彼の笑い声に少し耳障りな音が聞こえた…不安を感じた。「君にはたった一つの才能がある、逃げることだ。君はキメラから逃げた。冥界から逃げた。君にはそんなことはない」  
必要なものを持っています。」

"怖がった？"

「青春の夢の中で。」しかし、彼のサングラスは熱で溶け始めていました。

目。「直接の関与はありません。申し訳ありませんが、あなたは私のレベルではありません。」

アナベスは「パーシー、逃げて！」と言った。

巨大なイノシシが突撃してきました。

しかし、私は怪物から逃げるのはもう終わりました。あるいはハデス、アレス、あるいは誰か。

イノシシが私に突進してきたので、私はペンのキャップを外して回避しました。リップタイドが私の手に現れました。上に向かって斬っていき、イノシシの切断された右牙が私の足元に落ち、混乱したイノシシは海に突進しました。

「手を振って！」と叫びました。

たちまち、どこからともなく波が押し寄せ、猪を飲み込み、まるで体を包み込んだ。

毛布。獣は恐怖のあまり一度声を上げた。そして海に飲み込まれて消えてしまいました。

私はアレスに向き直った。「今から私と戦うつもりですか？」私は尋ねた。「それとも隠すつもりですか  
他のベットの後ろに？」

アレスの顔は怒りで紫色になった。「見てください、坊や。私はあなたを一に変えることができます。」

「ゴキブリだ」と私は言った。「あるいはサナダムシか。そうだね、そうだね。そうすれば、病気にかからずに済むだろう」  
神の皮が鞭打たれるでしょう？」

炎が眼鏡の上部に沿って踊った。「ああ、あなたは本当に油まみれの場所に叩きつけられることを望んでいます。」

「私が負けたら、私をあなたの望むものに変えてください。ポルトを手に入れてください。私が勝てば、舵とポルトは  
私のもものだから、あなたは去らなければなりません。」

アレスは嘲笑した。

彼は野球のバットを肩から振り落とした。「どのように打ち砕かれますか：クラシックまたは  
モダンな？」

私は彼に剣を見せました。

「すごいね、死んだ少年」と彼は言った。「古典的ですね。野球のバットが巨大な二本に変わった  
手刀。柄は大きな銀の頭蓋骨で、口にはルビーが入っていました。

「パーシー」とアナベスは言った。「そんなことはしないでください。彼は神なのです。」

「彼は卑怯者だ」と私は彼女に言いました。

彼女は飲み込んだ。「少なくともこれを着てください。幸運のために。」

彼女はネックレスを外し、5年分のキャンプビーズと指輪を外した  
お父さん、それを私の首に巻きました。

「和解です」と彼女は言った。「アテナとポセイドンと一緒に」

少し顔が熱くなりましたが、なんとか笑顔になりました。「ありがとう。」

「それで、これを受け取ってください」とグローバーは言った。彼はおそらく保存していたであろう平らになったプリキ缶を私に手渡した  
ポケットの中に何千マイルも入っていた。「サテュロスたちはあなたの後ろに立っている。」

「グローバー……何と言ったらいいのか分かりません。」

彼は私の肩をたたきました。私はお尻のポケットにプリキ缶を詰めました。

「みなさん、お別れは終わりましたか？」アレスは黒い革のダスターを後ろに引きずり、剣を日の出の炎のように輝かせながら私に向かってやって来た。

「私は永遠に戦ってきたのよ、坊ちゃん。私の強さは無限だし、死ぬこともできない。何を持っているの？」

もっと小さなエゴだと私は思ったが、何も言わなかった。私は足を波の中に入れ、足首まで水に戻りました。私はずっと昔、デンバーのダイナーでアナベス  
が言ったことを思い出しました。「アレスには強さがある」。彼が持っているのはそれだけだ。たとえ強さであっても、時には知恵を働かせる必要があります。

彼は私の頭を切り落としましたが、私はそこにいませんでした。

私の体が私のために考えてくれました。水が私を空中に押し上げたように見えたので、私は彼の上に飛び降り、降りながら斬りかかりました。しかし、ア  
レスも同様に速かった。彼が身をよじると、背骨に直接当たるはずだった一撃が剣の柄の端でそらされた。

彼はニヤリと笑った。「悪くない、悪くない」

彼は再び斬りつけたので、私は陸地に飛び上がりながらざるを得ませんでした。私は水の中に戻ろうと脇道に進もうとしましたが、アレスは私が何を望んでい  
るのかを理解したようでした。彼は私を出し抜いて、とても強くプレスしてくれたので、私は切り刻まれないように全神経を集中しなければならなかった。私は  
波から遠ざかり続けました。攻撃の隙を見つけられなかった。彼の剣のリーチはアナクルスモスよりも数フィート長かった。

近づきなさい、ルークはかつて剣のクラスで私に言ったことがあります。短いブレードを持ったら、近づいてください。

突っ込んで中に踏み込んだが、アレスはそれを待っていた。彼は私の刃を私の手から叩き落とし、私の胸を蹴りました。私は20フィートか30フィートくらい空に飛びました。砂丘の柔らかい砂に激突していなかったら、腰を折っていただろう。

「パーシー！」アナベスは叫んだ。「警官！」

二重に見えてしまいました。胸がまるで破城槌で殴られたかのように感じましたが、なんとか立ち上がることができました。

アレスが私を真っ二つに切り裂いてしまうのではないかと怖くてアレスから目を離すことができなかったが、目の端に私は映っていた。海岸沿いの大通りで赤い光が点滅するのが見えた。車のドアがバタンと閉まりました。

「そこだよ、警官！誰かが叫んだ。"見る?"

不愛想な警官の声：「テレビに出てくるあの子に似てる…何ということだ…」

「あの男は武装している」と別の警官が言った。「バックアップを呼びます。」

アレスの刃が砂を切り裂く中、私は横に転がった。

私は剣を取りに走り、それをすくい上げ、アレスの顔に向かって一撃を加えましたが、再び刃がそらされてしまいました。

アレスは、私が何をしようとしているのか、それを行う直前に正確に知っていたようでした。

私は波に向かって後退し、彼を強制的に従わせました。

「認めろよ、坊や」アレスは言った。「あなたには希望がない。私はあなたをもてあそんでいるだけだ。」

私の感覚は残業していました。アナベスがADHDについて言っていたことが理解できました。戦いの中であなたを生かし続けます。私はすっかり目が覚めて、あらゆる細部に気づきました。

アレスがどこで緊張しているかがわかりました。彼がどの方向に攻撃するかはわかりました。同時に、私は左30フィートのところにアナベスとグローバーの存在に気づきました。2台目のパトカーがサイレンを鳴らしながら停車するのが見えた。地震の影響で路上を徘徊していた人々や観客が集まり始めた。群衆の中に、変装したサテュロスのような奇妙な小走りで歩いている人々を見たような気がした。まるで死人が戦いを見守るために冥府からよみがえってきたかのように、きらめく霊の姿もありました。革のような翼が上空で旋回する音が聞こえました。

さらにサイレン。

私はさらに水中に足を踏み入れましたが、アレスは速かったです。彼の刃の先端が私の袖を引き裂き、前腕をかすめました。

メガホンで警察の声が「銃を捨てろ」と叫んだ。地面に置きなさい。今すぐ！」

銃？

アレスの武器を見ると、それが点滅しているように見えました。時にはショットガンのようにも見え、時には両手剣のようにも見えました。人間たちが私の手の中で何を見ているのかはわかりませんでした。それが彼らに私を好きにさせるはずはないと確信していました。

アレスが振り返って観客を睨みつけたので、私は一息つきました。5つありました。今ではパトカーが並び、その後ろには警察官の列がうずくまり、私たちに向けてピストルを向けられていた。

「これは私的な問題です！」アレスは怒鳴った。「消えてください。」

彼が手を払うと、赤い炎の壁がパトカーの上を転がった。警察は車が爆発する前に、かろうじて潜水して身を隠した。彼らの後ろにいた群衆は散り散りになり、

叫んでいる。

アレスは大笑いした。「さて、小さなヒーロー。あなたもバーベキューに加えましょう。」

彼は斬りつけた。私は彼の刃をそらした。私は攻撃できるところまで近づき、フェイントで彼を騙そうとしましたが、私の打撃は弾き飛ばされました。今、波が私の背中を襲っていました。アレスは太ももまで体を伸ばして私の後を追ってきた。

海のリズムを感じ、潮が満ちるにつれて波が大きくなるを感じたとき、突然アイデアが浮かびました。小さな波だ、と私は思った。そして私の後ろの水は引いていくように見えました。私は意志の力で流れを抑えていましたが、コルクの後ろの炭酸ガスのように緊張が高まっていました。

アレスが自信満々に笑いながらこちらにやって来た。まるで疲れ果てて先に進むことができないかのように、私は刃を下ろしました。待ってください、と私は海に言いました。そのプレッシャーで私は立ち上がるどころだった。アレスは剣を振り上げた。私は潮を解放してジャンプし、波に乗ってアレスの上をまっすぐに飛び越えました。

6フィートの水の壁が彼の顔面を直撃し、彼は海藻を口いっぱい吐き出しながら罵り続けた。私は前にやったように、水しぶき上げて彼の背後に着地し、彼の頭に向かってフェイントをかけた。彼は剣を振り上げるのに間に合ったが、今度は方向感覚を失い、トリックを予想していなかった。私は方向を変え、横に突進し、リップタイドを水面に真っ直ぐ突き刺し、その先端を神の踵に突き刺した。

その後が続いた轟音は、ハデスの地震を小さな出来事のように見せました。まさに海がアレスから吹き飛ばされ、幅50フィートの濡れた砂の輪が残った。

神々の黄金の血であるイコルが、戦神のブーツの傷から流れ出た。表現彼の顔には憎しみを超えていた。痛み、ショック、そして彼が負傷したとは全く信じられなかった。

彼は古代ギリシャの呪いをつぶやきながら、足を引かず私に近づいてきた。

何かが彼を止めた。

まるで雲が太陽を覆っているかのようでしたが、さらに悪いことに、光が消えた。音も色も消え去った。冷たくて重い存在が浜辺を通過し、時間を遅らせ、気温を氷点下まで下げ、人生は絶望的で、戦っても無駄だと感じさせました。

暗闇が晴れました。

アレスは唖然とした表情を浮かべた。

私たちの後ろでパトカーが燃えていました。大勢の観客は逃げていった。アナベスとグローバーは衝撃を受けながら浜辺に立って、水がアレスの足元に戻ってきて、彼の輝く金色のイコルが潮に消えていくのを眺めていた。

アレスは剣を下ろした。

「敵を作ってしまったね、ゴドリング」と彼は私に言いました。「あなたは自分の運命を決めた。戦いで刃を上げるたび、成功を望むたび、あなたは私の呪いを感じるだろう。気をつけろ、ペルセウス・ジャクソン。気をつけろ。」

彼の体は輝き始めた。

「「パーシー！」アナベスが叫びました。「見ないで！」

アレス神が不滅の真の姿を現したとき、私は背を向けた。なんとなくわかってたんだけど、ほら、私は灰になってしまうだろう。

光が消えた。

私は振り返った。アレスはいなくなりました。潮が満ちて、ハデスの間の青銅の兜が姿を現した。私はそれを拾い上げて友達の方へ歩きました。

しかし、そこに着く前に、革のような羽の羽ばたきが聞こえました。レースの帽子と燃えるような鞭を持った悪そうな三人のおばあちゃんが空から流れてきて、私の前に降り立った。

真ん中のフューリー、ドッズ夫人だった人が前に出た。彼女は牙を剥いていたが、今回は脅威には見えなかった。彼女はさらにがっかりした様子で、あたかも私を夕食に連れて行くつもりだったが、私が彼女に消化不良を与えるかもしれないと決めていたかのようでした。

「私たちはすべてを見ました」と彼女は声を上げた。「それで……本当にあなたではなかったのですか？」

私が彼女にヘルメットを投げると、彼女は驚いて受け止めた。

「それをハデス様に返してください」と私は言いました。「彼に真実を伝えてください、戦争を中止するように伝えてください。」

彼女はためらったが、二股に分かれた舌を緑の革のような唇に這わせた。「元気に生きてね、パーシー」

ジャクソン。真のヒーローになりましょう。そうしないと、また私の手に渡ってしまうからです…」

彼女はそのアイデアを味わいながら、くすくすと笑った。それから彼女と姉妹たちはコウモリの翼で立ち上がり、羽ばたきました。煙が立ち込めた空に消えていった。

私は、驚いて私を見つめていたグローバーとアナベスに加わりました。

「パーシー…」グローバーは言った。「それは本当に信じられないほどでした…」

「恐ろしい」とアナベスは言った。

"いいね!"グローバー氏が訂正した。

恐怖は感じませんでした。確かに涼しさを感じませんでした。疲れて痛みがあり、完全にエネルギーを使い果たしてしまいました。

「あなたたちはそれを感じましたか...それが何であれ?」私は尋ねた。

二人とも不安そうにならずいた。

「頭上にはフューリーズがいたに違いない」とグローバー氏は語った。

しかし、私にはあまり確信がありませんでした。アレスが私を殺すのを何かが止めた、そして何ができるだろうか

それはフューリーズよりもはるかに強かった。

私はアナベスを見つめ、私たちの間に理解が生まれました。その穴の中に何があったのか、タルタロスの入り口から何が話されていたのかが今では分かりました。

私はグローバーからバックバックを取り戻し、中を見ました。マスターボルトもまだ残っていました。

ほんの些細なことで第三次世界大戦が引き起こされそうになった。

「ニューヨークに戻らなければなりません」と私は言いました。「今夜までに」

「それは不可能です」とアナベスは言った、「私たちが——しない限り」

「飛んでください」私は同意した。

彼女は私を見つめた。「例えば、空からゼウスに襲われるといけないと警告されていた飛行機に乗って、核爆弾よりも破壊力のある兵器を携えて飛ぶなんて？」

「そうだね」と私は言った。「ほぼそのとおりです。さあ。」

## 21 タブを決済します

人間が物事を自分の考えで包み込み、自分のバージョンの現実に当てはめることができるのは面白いことです。ケイロンはずっと前にそう言ってくれた。いつものように、私は彼の知恵の良さをあまり理解していませんでした後で。

LAのニュースによると、サンタモニカのビーチで起きた爆発は、狂気の誘拐犯がパトカーに向けてショットガンを発砲したことが原因だったという。彼は地震の際に誤ってガスの本管に衝突し、ガスの本管が破裂した。

この狂った誘拐犯（別名アレックス）は、私と他の二人を誘拐したのと同じ男でした。ニューヨークの若者たちを、10日間の恐怖の旅に国中連れて行ってくれました。

結局のところ、可哀そうなパーシー・ジャクソンは国際犯罪者ではなかったのです。彼は、ニュージャージー州のグレイハウンドのバスの中で、捕虜から逃げようとして騒ぎを起こしたのだった（そしてその後、目撃者たちはバスの中で革服を着た男を見たこと断言するほどだった——「なぜ今まで彼のことを覚えていなかったんだろう？」）。狂人はセントルイス・アーチで爆発を引き起こしたのだ。結局のところ、そんなことできる子供はいなかったでしょう。心配したデンバーのウェイトレスは、ダイナーの外で男が拉致被害者を脅迫しているのを目撃し、友人に写真を撮ってもらい、警察に通報した。最後に、勇敢なパーシー・ジャクソン（私はこの少年を好きになり始めていた）が、ロサンゼルスで捕虜から銃を盗み、ビーチでショットガンとライフルで戦いを挑んだ。警察はちょうどいいタイミングで到着した。しかし、その壮絶な爆発により、5台のパトカーが破壊され、犯人は逃走した。死者は出なかった。パーシー・ジャクソンと彼の友人2人は無事に警察に拘留された。

記者たちは私たちにこの一部始終を伝えてくれた。私たちはただうなずき、涙を流して疲れきったふりをして（それは難しいことではありませんでした）、カメラの前で犠牲になった子供たちを演じました。

「私が望んでいるのは、愛する継父にもう一度会うことだけです。テレビで私を非行のパンク呼ばわりする義父を見るたびに、私はわかっていました...何とか..私たちは大丈夫だろうと。そして、彼はこの美しいロサンゼルス街にいるすべての人に、自分の店から無料の大型家電製品を贈りたいと考えているでしょう。これが電話番号です。」警察と記者たちはとても感動したので、帽子を回し、次のニューヨーク行きの飛行機のチケット3枚の代金を集めました。

飛ぶ以外に選択肢がないことはわかっていました。ゼウスが私を少しでも緩めてくれることを望みました。状況。しかし、それでも無理して飛行機に乗るのは大変でした。

離陸は悪夢だった。混乱のあらゆる場所はギリシャの怪物よりも怖かった。ラガーディア空港に無事着陸するまで、私は肘掛けから手を放さなかった。地元の報道陣が警備の外で私たちを待っていましたが、アナベスのおかげでなんとか逃れることができました。アナベスは目に見えないヤンキースキャップをかぶって彼らを誘い出し、「フローズンヨーグルトで終わりだ！」と叫びました。

さあ！」と言い、手荷物受取所で再び合流しました。

私たちはタクシー乗り場で別れた。私はアナベスとグローバーに、謎の丘に戻ってケイロンに何が起こったのかを知らせるように言いました。彼らは抗議し、これまで私たちが経験してきたことを考えると、彼らを手放すのは大変でした。しかし、この探求の最後の部分は自分でやらなければならないことはわかっていました。もし物事がうまくいかなかったら、もし神が私を信じてくれなかったら...

アナベスとグローバーには生き残ってケイロンに真実を伝えてほしかった。

私はタクシーに飛び乗ってマンハッタンに向かった。

30分後、私はエンパイア・ステート・ビルディングのロビーに入った。

ぼろぼろの服と擦り傷だらけの顔で、私はホームレスの子供のように見えたでしょう。私

少なくとも24時間眠っていなかった。

私はフロントの警備員に近づき、「600階です」と言いました。

彼は表紙に魔法使いの絵が描かれた巨大な本を読んでいた。私はファンタジーにはあまり興味がなかったが、この本は良かったの  
だろう、衛兵が顔を上げるのに時間がかかったからだ。「そんなフロアはないよ、坊や。」

「ゼウスに謁見が必要だ。」

彼は私に虚ろな笑みを浮かべた。「ごめん？」

"あなたは私の声を聞いた。"

私は、この男はただの定命の人間だ、拘束衣のパトロールに電話する前に逃げたほうが良いと決心しようとしていたとき、彼はこう言  
いました。」

「ああ、彼は例外を作ると思っています。」私はバックパックを脱いで上部のジッパーを開けました。

警備員は内部の金属シリンダーを覗いたが、数秒間はそれが何なのか理解できなかった。それから

彼の顔は青ざめました。「そんなことはないよ…」

「はい、そうです」と私は約束しました。「それを取り出して欲しいのね、そして—」

「違う！違う！」彼は席から慌てて立ち上がり、机の周りを手探りしてキーカードを手に入れ、そしてカードを手渡した

それは私に。「これをセキュリティスロットに挿入してください。エレベーターに他の人がいないことを確認してください。」

私は彼の言うとおりにしました。エレベーターのドアが開まるとすぐに、私は鍵を差し込み口に差し込みました。の

カードが消え、コンソールに新しいボタン、600 と書かれた赤いボタンが表示されました。

私はそれを押して待って、待ちました。

ムザークが演じた。「雨粒が頭の上に落ち続けます…」

最後に、ディン。ドアがスライドして開きました。外に出たら心臓発作を起こしそうになった。

私は空中の真ん中にある狭い石の通路に立っていました。飛行機の高さから眼下にマンハッタンが見えました。私の目の前では、白い  
大理石の階段が雲の背骨を巻いて空に向かって伸びていました。私の目は階段を突き当たりまで追いましたが、そこで私の脳は見たものを  
受け入れることができませんでした。

もう一度見てください、と私の脳は言いました。

私たちは探している、と私の目は主張した。それは本当にそこにあります。

雲の上から首を切られた山の頂がそびえ立ち、その頂上は雪で覆われていた。山腹に張り付いているのは、白い柱の柱廊玄関、金色の  
テラス、そして千の火で輝く青銅の火鉢を備えた何十もの階層の宮殿、つまり大邸宅の街でした。道路は頂上まで狂ったように曲がりくねっ  
ていて、そこでは最大の宮殿が雪の中で輝いていました。

不安定に建つ庭園にはオリーブの木やバラの木が咲き誇りました。色とりどりのテントが並ぶ青空市場、山の片側に建てられた石造りの  
円形競技場、反対側には競馬場とコロシウムが見えました。遺跡になっていないことを除けば、そこは古代ギリシャの都市でした。それは新  
しくて、きれいで、カラフルで、2500年前のアテネの姿だったに違いありません。

ここはここではいけない、と私は自分に言い聞かせました。ニューヨーク市の上空に突き出た山の先端

10億トンの小惑星のようなものですか？そのようなものが、エンパイア ステート ビルの上、何百万人もの人々の目につく場所に固定されているのに、どうして気づかれないのでしょうか？

しかし、ここにありました。そしてここに私がいました。

オリンパスでの旅は、呆然としたものだった。私は、庭から私にオリーブを投げて笑っている木の妖精たちとすれ違った。市場の行商人は、棒付きアンブロシアと新しい盾、そしてヘパイストスのテレビで放映された金羊毛の本物のグリッター織りのレプリカを売ってくれると申し出ました。9人のミューズは、コンサートに向けて楽器を調整していました。サテュロスやナイアド、そしてマイナーな神や女神だったかもしれない見栄えの良い十代の若者たちが集まっている間、公園に集まった。差し迫った内戦を心配する人は誰もいなかった。実際、みんなお祭り気分のようなのでした。彼らのうちの何人かは私が通り過ぎるのを見て振り返り、独り言をささやきました。

私は頂上の大きな宮殿に向かって幹線道路を登った。それは冥界の宮殿を反転したものであった。

そこではすべてが黒と青銅でした。ここでは、すべてが白と銀に輝いていました。

ハデスが自分の宮殿をこの宮殿に似せて建てたに違いないと気づきました。彼は冬至以外はオリンポスに歓迎されなかったの、地下に自分のオリンポスを建てた。彼とは悪い経験をしたにもかかわらず、私はその男に少し同情しました。この場所から追放されるのは本当に不公平に思えた。それは誰でも苦い思いをさせるでしょう。

階段は中央の中庭に続いていました。その先には王座が迫っている。

部屋という言葉は本当に適切ではありません。グランドセントラル駅をほうきに見立てた場所。クローゼット。巨大な柱がドーム型の天井までそびえ立ち、天井は動く星座で金色に輝いていました。

ハデスほどの大きさの存在のために作られた12の玉座は、キャンプ・ハーブラッドの小屋のように、逆U字型に配置されています。巨大な火が中央の囲炉裏ピットでパチパチと音を立てた。玉座は最後の2つを除いて空でした。右側の頭の玉座とそのすぐ左の玉座です。そこに座って私が近づくのを待っていた二柱の神が誰であるかを、私に告げる必要はありませんでした。私は足を震わせながら彼らの方へ向かいました。

神々はハデスと同じように巨大な人間の姿をしていましたが、私は体が燃え始めているかのように、うずきを感じずにそれらをほとんど見ることはできませんでした。神々の主ゼウスは、ダークブルーのピンストラップのスーツを着ていました。彼は純プラチナのシンプルな玉座に座っていた。彼はよく整えられたひげを生やしており、嵐の雲のように大理石の灰色と黒であった。彼の顔は誇り高くハンサムで陰しく、目は雨のような灰色でした。

私が彼に近づくとき、空気がパチパチと音を立ててオゾンの匂いがしました。

彼の隣に座っている神は間違いなく彼の兄弟でしたが、彼の服装はかなり異なっていました。彼は私にキーウエストのビーチコーマーを思い出させた。彼は革のサンダル、カーキのパミュダパンツ、そしてココナッツとオウムが全面に描かれたトミーバハマのシャツを着ていました。彼の肌は深く日焼けし、手は昔の漁師のように傷だらけだった。彼の髪は私と同じように黒かった。彼の顔には、いつも私が反逆者のレッテルを貼られていたのと同じ、陰気な表情があった。しかし、彼の目は私と同じ海の緑色で、太陽のしわで囲まれており、彼もよく笑ったことがわかりました。

彼の玉座は深海漁師の椅子だった。それは黒い革製のシートと釣り竿用の内蔵ホルスターを備えたシンプルな回転式のものでした。ホルスターにはボールの代わりに青銅の三叉槍が取り付けられており、先端の周りで緑色の光がちらつきました。

神々は動いておらず、話していませんでしたが、空気には緊張感が漂っていました。



議論を終えた。

私は漁師の玉座に近づき、その足元にひざまずきました。"父親。"あえて顔を上げませんでした。心臓が高鳴っていました。二人の神様から発せられるエネルギーを感じました。もし私が間違ったことを言ったら、彼らは私を木っ端微塵に吹き飛ばすかもしれないと疑いませんでした。

私の左側でゼウスが話しました。「まずこの家の主人に話しかけるべきではないですか、坊や？」

私は頭を下げて待っていました。

「平和、兄弟」ポセイドンはついに言った。彼の声は私の最も古い記憶を呼び起こしました。私が赤ん坊の頃に覚えていたあの暖かい輝き、私の顔にあるこの神の手の感覚、「少年は父親に従う。これは当然のことだ」。

「それでもあなたは彼を主張しますか？」ゼウスは脅迫的に尋ねました。「あなたは自分が産んだこの子供を主張します私たちの神聖な誓いに反して？」

ポセイドンは「私は自分の悪行を認めた」と語った。「今、私は彼の話を聞くことになるでしょう。」

不正行為。

喉にしこりが湧き出てきました。私はそれだけだったのでしょうか？不正行為ですか？神の導きの結果間違い？

「私はすでに一度彼を助けました」とゼウスは不平を言いました。「あえて自分の領域を飛び越えるなんて……パァ！彼の厚かましさをせいで空から吹き飛ばすべきだった。」

「そして、自分のマスターボルトを破壊する危険を冒すのですか？」ポセイドンは静かに尋ねた。「彼の話を聞いてみましょう。兄弟。」

ゼウスはさらに不平を言った。「聞いてみよう」と彼は決心した。「それでは、この少年をオリンポスから追い出すかどうか決めることにします。」

「ペルセウス」とポセイドンは言いました。「私を見て。」

私はそうしましたが、彼の顔に何が見えたのかわかりませんでした。愛や承認の明確な兆候はありませんでした。

私を励ますものは何もありません。それは海を見ているようなもので、海がどのような雰囲気であるかわかる日もありませんが、ほとんどの日はそれが読めず、神秘的でした。

ポセイドンは私のことをどう思っているのか本当に分かっていないような気がした。彼は私を息子として産んで幸せかどうか分かりませんでした。不思議な事に、ポセイドンが遠くに居て嬉しかったです。

もし彼が謝ろうとしたり、愛していると言ったり、微笑んだりしていたら、それは嘘っぽちに感じられただろう。人間の父親のように、そばにいないことに対してつまらない言い訳をします。それで生きていける。結局のところ、私も彼のことをまだよくわかっていませんでした。

「ゼウス様に呼びかけてください、坊や」ポセイドンが私に言いました。「彼にあなたの話をしてください。」

そこで私は、起こったことをそのままゼウスにすべて話しました。私は空神の前で火花を散らし始めた金属製の円筒を取り出し、彼の足元に置きました。

長い沈黙が続き、それを破るのは囲炉裏の火のパチパチという音だけだった。

ゼウスは手のひらを開いた。そこに稲妻が飛び込んできた。彼が拳を閉じると、金属の先端が電気で燃え上がり、ついに古典的なサンダーボルトに似たもの、つまり私の頭皮の毛を立たせるほどの弧を描き、シューシューという音を立てるエネルギーの20フィートの槍を手に入っていた。

「あの少年は真実を語っている気がする」とゼウスはつぶやいた。「しかし、アレスがそのようなことをするという事は…彼とはとても似ていません。」

「彼は誇り高く、衝動的だ」とポセイドンは語った。「血筋である。」

"主？"私は尋ねた。

二人とも「はい？」

「アレスは一人で行動したわけではありません。他の誰か、別の誰かがそのアイデアを思いつきました。」

私は自分の夢と、ビーチで感じた感情、その一瞬の邪悪な息吹について説明しました。

それは世界を止めるかのように見え、アレスは私を殺すことから身を引いた。

「夢の中で」と私は言った、「その声は私にポルトを冥界に持ってくるように言った。アレスはほのめかした。彼も夢を見ていたということ。私と同じように、彼も戦争を始めるために利用されていたのだと思います。」

「やっぱりハデスを告発してるんですか？」ゼウスは尋ねた。

「いいえ」と私は言いました。「だって、ゼウス様、私はハデスの前に居たんです。浜辺での感覚は違いました。あの穴に近づいた時に感じたのと同じでした。そこがタルタロスへの入り口でしたね。」それは？何か強力で邪悪な何かがそこで動き回っている...神々よりもさらに古い何か。」

ポセイドンとゼウスは顔を見合わせた。彼らは古代語で素早く激しい議論を交わしたギリシャ語。一言だけ聞き取れました。父親。

ポセイドンは何らかの提案をしました、ゼウスはそれを遮断しました。ポセイドンは反論しようとした。ゼウスは怒って手を上げました。「このことについてはもう話さない」とゼウスは言いました。「リムノス島の水域にあるこの落雷を浄化し、その金属から人間の汚れを取り除くために、私が直接行かなければなりません。」

彼は立ち上がって私を見た。彼の表情はほんの少しだけ和らいだ。「あなたが持っている奉仕してくれました、坊や。これほど多くのことを成し遂げた英雄はほとんどいないだろう。」

「助けていただきました、先生」と私は言いました。「グローバー・アンダーウッドとアナベス・チェイスー」

「感謝の気持ちを表すために、あなたの命は助けてやろう。私はあなたを信用していない、ペルセウス・ジャクソン。私はあなたの到着がオリンポスの将来にとって何を意味するか気に入らない。しかし、家族の平和のために、私はあなたを許しましょう」ライブ。"

「ええと...ありがとうございます。」

「また飛ぶなんて思い上がりしないでください。私が戻ったときにここであなたを見つけさせないでください。そうでなければあなたはそうするでしょう」

このポルトを味わってください。そしてそれがあなたの最後の感覚となるだろう。」

雷が宮殿を震わせました。目のくらむような稲妻とともにゼウスは消え去った。

私は父と二人きりで玉座の間にいました。「あなたの叔父さんは、」とポセイドンはため息をつきました、「いつも劇的な退場をする才能があった。彼は演劇の神様としてうまくやっていたと思うよ。」

不快な沈黙。

「先生、あの穴には何があったのですか？」と私は言いました。

ポセイドンが私を見つめた。「推測していないのですか？」

「クロノス」と私は言った。「ティターンズの王。」

タルタロスから遠く離れたオリンポスの玉座の間でも、クロノスの名は世界を暗くした。

部屋では、囲炉裏の火が私の背中にそれほど暖かくないように見えました。

ポセイドンはトライデントを握りしめた。「第一次戦争で、パーシー、ゼウスは、クロノスが自分の父オウラノスにしたのと同じように、私たちの父クロノスを千の破片に切り刻んだ。ゼウスはクロノスの遺体をタルタロスの最も暗い穴に投げ込んだ。タイタンの軍隊は四散し、彼らの山の要塞となった」エトナ山は滅ぼされ、その巨大な同盟者たちは地の果てに追いやられたのに、私たち神と同じようにタイタンも死ぬことはできないのです。クロノスに残されたものは何であれ、今もなお恐ろしい形で生きており、永遠の苦痛の中で意識を保っています。権力に飢えているのだ。」

「彼は治ってきています」と私は言いました。「彼は戻ってくるよ。」

ポセイドンは首を振った。「長い間、時折、クロノスは心を揺さぶりました。彼は人々の悪夢に入り込み、邪悪な考えを吐き出します。彼は深みから落ち着きのない怪物を目覚めさせます。しかし、彼が穴から立ち上がることができることを示唆することは別のことです。」

「それが彼の意図です、父上。それが彼が言ったことです。」

ポセイドンは長い間沈黙していた。

「ゼウス卿はこの件についての議論を打ち切った。彼はクロノスについて話すことを許さないだろう。あなたはそうするだろう」

クエストは完了しました、お子様。やるべきことはそれだけです。」

「でも——私は自分を止めた。議論しても無駄だ。それは私が側に置いた唯一の神を怒らせる可能性が非常に高いです。「……お望みのままに、お父様」

彼の口元にはかすかな笑みが浮かんだ。「従順というのは自然に身につくものではありませんね？」

"いいえ。"

「それについては私も責任を負わなければいけないと思います。海は束縛されることを嫌います。彼は身長いっばいに立ち上がり、トライデントを取り上げました。それから彼は輝き、普通の男性と同じくらいの大きさになり、私の目の前に立っていました。「行かなければなりません、子よ。でもその前に、お母さんが戻ってきたことを知ってください。」

私は完全に啞然として彼を見つめた。"私の母?"

「あなたは彼女を家で見つけるでしょう。あなたが兜を取り戻したとき、ハデスは彼女を送りました。死の王でさえ彼の借金を返します。」

心臓がドキドキしていました。信じられませんでした。「そうしますか...しませんか...」

ポセイドンも一緒に彼女に会いに来てくれないか尋ねたかったが、それはばかげていることに気づいた。海の神をタクシーに乗せてアッパー・イースト・サイドまで連れて行くところを想像しました。もし彼が何年も私の母に会いたかったなら、会いたかっただろう。そして、スメルリー・ゲイブについて考えてみました。

ポセイドンの瞳は少し憂いを帯びていた。「家に帰ったら、パーシー、重要な選択。お部屋に荷物が待っていますよ。」

"パッケージ?"

「見ればわかるでしょう。あなたの道は誰も選べません、パーシー。あなたが決めなければなりません。」

私はうなずきましたが、彼が何を言っているのか分かりませんでした。

「あなたのお母さんは女性の中の女王ですよ」とポセイドンは物欲しそうに言った。「私はこのような死すべき女性に千年間出会っていませんでした。それでも... 生まれてきてごめんなさい、お子さん。私はあなたに英雄の運命をもたらしました、そして英雄の運命は決して幸せではありません。それは決して悲劇以外の何ものでもありません。」

傷つかないように努めました。そこには私自身の父親がいて、私が生まれてきてごめんなさいと言っていた。「私はしません  
わかってください、父さん。」

「まだかもしれない」と彼は言った。「まだです。しかし、それは私の許しがたいミスでした。」

「それでは別れます。私はごちなくお辞儀をした。「私は——もう迷惑はかけません。」

彼が「ペルセウス」と呼んだとき、私は5歩離れたところにいました。

私は向きを変えた。

彼の目には別の光、燃えるような誇りが宿っていた。「よくやったよ、ペルセウス。誤解しないでください。何をしても、あなたは私のものであることを知ってください。あなたは海神の真の息子です。」

神々の都を歩いて戻ると、会話が途絶えた。ミュージシャンたちはコンサートを一時停止した。人々も、サテュロスも、ナイアドも、皆私の方向を向き、その顔は敬意と感謝に満ちていて、私が通り過ぎると、あたかも私がある種の英雄であるかのように、彼らはひざまずきました。

\*\*\*

15分後、まだトランス状態のまま、私はマンハッタンの街に戻っていました。

私は母のアパートに向かうタクシーを捕まえ、ドアベルを鳴らしました。すると、そこには美しい母がいました。ペパーミントと甘草の香りが漂い、彼女の顔から疲れと不安が消え去っていました。

彼女は私を見るとすぐに。

「パーシー！ ああ、よかった。ああ、ベイビー」

彼女は私の空気を打ち砕きました。彼女が泣きながら私の髪に手をなでている間、私たちは廊下に立っていました。

正直に言いますが、私の目も少し曇っていました。私は震えていましたが、彼女に会えてとても安心しました。

彼女は、その朝アパートに現れて、ゲイブを半分怖がらせたばかりだと言いました。彼女はミノタウロス以来何も覚えていなかった。ゲイブが私が指名手配犯で国中を旅して国定記念物を爆破したと告げたときも信じられませんでした。彼女はその知らせを聞いていなかった。一日中心配で気が狂いそうでした。ゲイブは彼女に、1か月分の給料を補う必要があるから給料をもらったほうがいいと言って、彼女を仕事に行かせるよう強制した。

始めました。

私は怒りを飲み込み、彼女に自分の話をしました。以前よりも怖くならないように努めました。それは簡単ではありませんでした。ゲイブの声がリビングルームから割り込んだとき、私はちょうどアレスとの戦いに取り掛かったところだった。「やあ、サリー！ ミートローフはもうできた？それともどうした？」

彼女は目を閉じた。「彼はあなたに会えて嬉しくないでしょう、パーシー。店は半分の利益を得ました」今日はロサンゼルスから何百万もの電話がかかってきました...無料の家電製品に関するものです。」

「ああ、そうだね。それについては……」

彼女は弱々しい笑みを浮かべた。「彼をこれ以上怒らせないでね。いいですか？」

私が去ってから一ヶ月の間に、アパートはゲーベランドと化していました。ゴミはカーペットの上にくるぶしの深さまでありました。ソファはビール缶の張り替えがされていた。汚れた靴下や下着がランプシェードから垂れ下がっていました。

ゲイブと彼の大きな愚かな友人3人がテーブルでポーカーをしていました。

ゲイブは私を見ると葉巻が口から落ちました。彼の顔は溶岩よりも赤くなった。「あなたここに来るのは緊張したよ、このパンク野郎。警察かと思ったがー」

「結局のところ、彼は逃亡者ではないのよ」と母が口を挟んだ。「それは素晴らしいことじゃないですか、ゲイブ？」

ゲイブは私たちの間を行ったり来たりした。彼は私の帰国がそんなものだとは思っていないようだった。素晴らしい。

「残念なことに、あなたの生命保険金を返さなければならなかったのです、サリー」彼はうなり声を上げた。「それを手に入れてください。電話。警察に電話します。」

「ゲイブ、いや！」

彼は眉を上げた。「今『ノー』と言ったのか？私がまたこのパンクに我慢するとも思っているのか？私のカマロを台無しにした罪で彼を告訴することはまだできる。」

"しかし-"

彼が手を挙げたので、母はひるみました。

初めて、あることに気づきました。ゲイブは私の母を殴りました。いつ、どのようにして多くの。しかし、私は彼がそれをやったと確信していました。もしかしたら、私がいなくて何年もそれが続いていたのかもしれませんが。

私の胸の中で怒りの風船が膨らみ始めました。私はゲイブに近づき、本能的にポケットからペンが出てきました。

彼はただ笑った。「何、パンク？ 私に手紙を書くつもり？ あなたが私に触れると、あなたはそうするつもりです」永遠に刑務所よ、わかりますか？」

「ねえ、ゲイブ、彼の友人のエディがさげすんだ。「彼はただの子供です。」

ゲイブは憤慨して彼を見つめ、裏声で「ただの子供だよ」と真似した。

彼の他の友達も馬鹿みたいに笑った。

「よろしくね、パンク」ゲイブはタバコで汚れた歯を見せてくれました。「荷物を持ってきて立ち去るまで5分時間をあげます。その後、警察に電話します。」

「ゲイブ！」私の母は懇願しました。

「彼は逃げた」とゲイブさんは彼女に語った。「彼を去らせておいてください。」

リップタイドのキャップを外したくてうずうずしていましたが、たとえ外したとしても、その刃は人間を傷つけることはありません。そして、ゲイブは、最も大雑把な定義では人間でした。

母が私の腕を掴んだ。「お願いします、パーシー。さあ、あなたの部屋に行きます。」

私は彼女に私を引き離させましたが、私の手はまだ怒りで震えていました。

私の部屋はゲイブのガラクタで完全に埋め尽くされていました。私はここに中古車のバッテリーの山と、彼の姿を見た誰かからのカードが付いた腐ったお悔やみの花束を持っていました。

バーバラ・ウォルターズのインタビュー。

「ゲイブはただ動揺しているだけよ、ハニー」と母は私に言いました。「後で彼と話してみます。きっとうまくいくと思います。」

「お母さん、それは決してうまくいかないでしょう。ゲイブがここにいる限りはうまくいきません。」

彼女は緊張して手を握り締めた。「できます ... 夏休みの残りの間、私と一緒に仕事に連れて行きます。秋には、また寄宿学校ができるかもしれない——」

"お母さん。"

彼女は目を伏せた。「頑張ってるんだ、パーシー。ただ...少し時間が欲しいんだ。」

私のベッドの上に荷物が現れました。少なくとも、一瞬たりとも存在しなかったと断言できたはず前に。

それはバスケットボールがちょうど入るくらいのポロポロの段ボール箱でした。上のアドレスは、郵送伝票は私の手書きでした：

神々

オリンポス山600階、

エンパイアステートビル

ニューヨーク州ニューヨーク州

ご多幸をお祈り申し上げます。

パーシー・ジャクソン

その上に黒いマーカーで、男性の鮮明で大胆な活字で、私たちのアパートの住所が書かれていました。  
そして「差出人に返送してください」という言葉。

突然、ポセイドンがオリンポスで私に言ったことを理解しました。

パッケージ。決定。

他に何をするとしても、あなたは私のものであることを知ってください。あなたはまさに海神の息子です。

私は母を見た。「ママ、ゲイブがいなくなっしてほしいの？」

「パーシー、それはそれほど単純ではありません。私は――」

「お母さん、教えてください。あの野郎があなたを殴っています。彼がいなくなっほしいですか、そうでないのですか？」

彼女はためらったが、ほとんど気づかれないようにならずいた。「はい、パーシー。そうします。それで立ち上がろうとしています」

彼に伝える勇気。しかし、あなたは私にこれをするにはできません。あなたには私の問題を解決することはできません。」

箱を見てみました。

私は彼女の問題を解決することができました。私はそのパッケージをスライスして開いて、ポーカーテーブルに置きたかったのですが、  
中にあったものを取り出します。リビングルームで自分だけの彫像庭園を始めることができます。

それが物語の中でギリシャの英雄がすることだと私は思いました。それがゲイブに値することだ。

しかし、英雄の物語はいつも悲劇で終わります。ポセイドンがそう教えてくれた。

アンダーワールドを思い出しました。私はゲイブの精神がアスフォデルの野原で永遠に漂うこと、あるいは懲罰の野原の有刺鉄線の背後で恐ろしい拷問を宣告されること、つまり永遠のポーカーゲームで、沸騰した油の中でオペラ音楽を聴きながら腰まで座って過ごすことを考えた。

私には誰かをそこに送る権利がありましたか？ゲイブも？

1か月前なら、私は躊躇しなかったでしょう。今 ...

「できるよ」と私は母に言いました。「この箱の中を一度覗いてみれば、彼はもうあなたを悩ませることはないでしょう。」

彼女はパッケージを見て、すぐに理解したようでした。「いいえ、パーシー」と彼女は言い、立ち去った。「あなたはできません。」

「ポセイドンはあなたを女王と呼びました」と私は彼女に言いました。「彼は、あなたのような女性には千年も会っていなかったと言っていました。」

彼女の頬は赤くなった。「パーシー――」

「お母さん、あなたにはそれ以上の価値があるのよ。大学に行って学位を取得したほうがいいよ。小説も書けるし、もしかしたら素敵な男性と出会うこともできるし、素敵な家に住むこともできるの。ゲイブと一緒にいることで、もう私を守る必要はないのよ」。彼を追い出させてください。」

彼女は頬についた涙をぬぐった。「あなたはお父さんにとてもよく似ていますね」と彼女は言いました。「彼は私のために一度潮流を止めてくれると申し出ました。海の底に宮殿を建てようとして申し出ました。手をかざせば私のすべての問題を解決できると考えたのです。」

"そのどこが悪いんだい？"

彼女の色とりどりの瞳は私の内側を探っているようでした。「知っていると思うよ、パーシー。あなたも私と同じで十分理解できると思います。もし私の人生に意味があるなら、私は自分で生きなければなりません。神に私の面倒を見てもらうわけにはいきません...あるいは「息子よ。私は...自分で勇気を見つけないければなりません。あなたの探求はそれを思い出させてくれました。」

私たちはリビングルームのテレビからポーカーチップの音とESPNの罵り声を聞きました。

「箱を置いておきます」と私は言いました。「彼があなたを脅したら...」

彼女は顔面蒼白だったが、うなずいた。「どこへ行くの、パーシー？」

「ハーブブラッドヒル」。

「夏の間…それとも永遠に？」

「それは状況によると思います。」

私たちは目を見つめ、合意が得られたと感じました。状況がどのようになっているのを見てください  
夏の終わり。

彼女は私の額にキスをした。「あなたは英雄になるでしょう、パーシー。あなたは誰よりも偉大になるでしょう。」

最後にもう一度寝室を見回してみました。もう二度と見られないような気がしていました。それから私は歩きました  
母と一緒に玄関へ。

「そんなに早く出発するの、パンク？」ゲイブが私の後に電話をかけてきました。"いい厄介払い。"

最後に一抹の疑念が残りました。彼に復讐する絶好のチャンスをどうやって断ることができるでしょうか？私は母を救わずに  
ここを去ろうとしていました。

「やあ、サリー」と彼は叫びました。「そのミートローフはどうですか？」

母の目には鋼のような怒りの表情が燃え上がり、私はもしかしたら、結局のところ母を良い手に任せているのかもしれない、と思い  
ました。彼女自身のものです。

「ミートローフがもうすぐ出来上がりますよ」と彼女はゲイブに語った。「ミートローフサプライズ」

彼女は私を見てウインクした。

ドアが勢いよく閉まるとき、私が最後に見たのは、まるで自分がそうしているかのようにゲイブを見つめている母でした。

彼が庭の彫像としてどのように見えるかを考えています。

---

## 22 予言は当たる

私たちはルーク以来、ハーフブラッドヒルに生きて戻ってきた最初のヒーローだったので、当然のことながら、誰もが私たちをリアリティ番  
組のコンテストで優勝したかのように扱ってくれました。キャンプの伝統によれば、私たちは月桂冠をかぶって私たちの名誉のために用意  
された盛大な祝宴に出席し、それから行列を先導してかがり火まで下り、そこで私たちの不在中に小屋が私たちのために作ってくれた埋  
葬用の布を燃やさなければなりませんでした。

アナベスの遺体はとても美しく、フクロウの刺繍が施されたグレーの絹でした。私は彼女に、その中に埋葬しないのは残念だ  
と言いました。彼女は私を殴って、黙るように言いました。

ポセイドンの息子である私には船室の仲間がいなかったので、アレスの船室がボランティアで私の聖骸布を作ってくれまし  
た。彼らは古いベッドシートを使って、境界線の周りに×印の付いた目をしたスマイリーフェイスを描き、中央には「LOSER」という  
文字が大きく描かれていました。

燃やすのが楽しかったです。

アポロの船室と一緒に歌ってスモアを飲みながら先導していたとき、私は昔のヘルメスの船員、アテナのアナベスの友人、そ  
してグローバーのサテュロスの仲間たちに囲まれ、評議会から受け取った真新しい探索者免許を賞賛していた。クローブ・エルダ  
ーズの。評議会は、クエストでのグローバーのパフォーマンスを「消化不良の点まで勇敢だ。角-

そして、私たちが過去に見たものよりもはるかに優れたひげ。」

パーティー気分ではなかったのはクラリスとその船室の仲間たちだけだった。彼らの毒々しい見た目から、父親の恥をかいた私を決して許さないとされた。

それでよかったです。

ディオニュソスの歓迎のスピーチでさえ、私の気分を弱めるには十分ではありませんでした。「はい、はい、それであのガキは自殺せずに済んで、今では頭も大きくなりました。まあ、それはハツと。他の発表では、今週土曜日はカヌーレースはありません...」

キャビン3に戻りましたが、もうそれほど寂しいとは感じませんでした。日中は一緒にトレーニングする友達がいきました。夜、私は父がそこにいるのを知りながら、起きて横になって海の音を聞きました。もしかしたら彼はまだ私のことをよくわかっていなかったかもしれないし、私が生まれてくることさえ望んでいなかったのかもしれないが、彼は見守っていた。そしてこれまでのところ、彼は私がやったことを誇りに思っていました。

母に関しては、新しい人生を歩むチャンスがありました。私がキャンプに戻ってから1週間後に彼女の手紙が届きました。彼女は、ゲイブが不思議なことに去った——実際、地球上から姿を消した、と私に語った。

彼女は警察に彼が行方不明になったことを届け出していたが、彼らは彼を決して見つけられないだろうという奇妙な予感を感じていた。

まったく関係のない話題ですが、彼女はソーホーのアート ギャラリーを通じて、「The Poker Player」というタイトルの初めての等身大のコンクリート彫刻をコレクターに販売しました。彼女はそれで大金を手に入れたので、新しいアパートに頭金を預け、ニューヨーク大学の最初の学期の授業料を支払った。ソーホーのギャラリーは彼女の作品を「超醜いネオリアリズムの大きな前進」と呼び、さらなる作品を求めている。

でも心配しないでください、と母は書きました。彫刻は終わりました。その工具箱は処分してしまいました。あなたは私を残した。書くことに目を向ける時が来ました。

彼女は一番下に追記: パーシー、この街で良い私立学校を見つけました。あなたが7年生に入学したい場合に備えて、枠を確保するために保証金を預けておきました。家に住んでもいいよ。でも、ハーブブラッドヒルに一年中行きたいなら、私は理解します。

私はそのメモを注意深く折り返したんで、ベッドサイドのテーブルに置きました。毎晩寝前にもう一度読んで、どう答えようか考えました。

独立記念日、キャンプ全体がビーチに集まり、キャビン9による花火大会が開催されました。ヘパイストスの子供たちである彼らは、数回のつまらない赤、白、青の爆発で満足するつもりはありませんでした。彼らは沖合にバージを停泊させ、パトリオット・ミサイルほどの大きさのロケット弾を積んでいた。以前にショーを見たアナベスによると、爆発は非常に厳密に順序付けられているため、空を横切るアニメーションのフレームのように見えたそうです。フィナーレは、身長100フィートのスパルタ戦士数人が海の上で息を吹き返し、戦いを繰り広げ、その後百万色に爆発する予定だった。

アナベスと私がピクニック用の毛布を広げていると、グローバーが現れて別れを告げました。

彼はいつものジーンズとTシャツとスニーカーを着ていたが、ここ数週間で彼は老けて見え始め、ほぼ高校生の年齢になっていた。彼のヤギひげは太くなっていました。彼は太ってしまうだろう。彼の角は少なくとも1インチ伸びていたので、彼は今ではいつもラスタキャップをかぶって通り過ぎる必要がありました。

人間。

「もう出発です」と彼は言った。「私はただ言いに来ただけです...まあ、ご存知のとおりです。」

私は彼のために幸せを感じようと努めました。結局のところ、サテュロスが見に行く許可を得るのは毎日ではなかった



偉大な神パンのために。でも、別れを言うのは辛かったです。私がグローバーと知り合ってまだ1年しか経っていませんでしたが、彼は私の最も古い友人でした。

アナベスは彼を抱きしめた。彼女は彼に、偽の足を履いたままにするように言いました。

私は彼に最初にどこを探すつもりなのか尋ねました。

「ちょっと秘密なんです」と彼は当惑した様子で言った。「一緒に来てくれたらいいんですが、人間とパンは……」

「分かりました」とアナベスは言った。「旅行に必要な缶は十分にありますか？」

"うん。"

「それで、リードパイプのことを覚えていますか？」

「まあ、アナベス」と彼は不平を言った。「あなたは年老いた母ヤギのようです。」

しかし、彼は本当にイライラしているようには見えませんでした。

彼はステッキを握り、バックパックを肩にかけた。彼はアメリカのハイウェイで見かけるヒッチハイカーに似ていて、私がヤンシー・アカデミーでいじめっ子から守っていた小柄な少年とはまったく似ていませんでした。

「そうですね、幸運を祈ります」と彼は言った。

彼はアナベスをもう一度抱きしめた。彼は私の肩を叩き、砂丘を通って戻っていきました。

頭上で花火が爆発しました。ヘラクレスがネメアのライオンを殺し、アルテミスがライオンを追いかけました。

デラウェア川を渡る猪、ジョージ・ワシントン（ちなみに彼はアテナの息子だった）。

「やあ、グローバー」と私は電話した。

彼は森の端で向きを変えた。

「どこに行っても、おいしいエンチラーダを作ってくれることを願っています。」

グローバーはニヤリと笑い、そして木々が彼の周囲を閉ざして立ち去った。

「また会いましょう」とアナベスは言った。

私はそれを信じてみました。二千年間、捜索者が誰も戻ってこなかったという事実...

まあ、それについては考えないことにしました。グローバーが最初だろう。そうでなければならなかった。

7月が過ぎた。

私は旗を捕獲するための新しい戦略を考案し、旗がアレスの手に渡らないように他の船室と同盟を結ぶことに日々を費やしました。初めて溶岩に焼かれることなくクライミングウォールの頂上に到達した。

時々、大きな家の前を通り過ぎて、屋根裏部屋の窓を見上げて、こう考えました。

オラクルについて。私はその予言が成就したと自分に納得させようとした。

あなたは西へ行き、向きを変えた神と対峙しなければならない。

そこにいた、やった——たとえ裏切り者の神がアレスではなくアレスだったとしてもハデス。

あなたは盗まれたものを見つけて、無事に戻ってくるのを見るでしょう。

チェック。マスターボルト1本納品。闇の兜がハデスの油まみれの頭に戻った。

あなたを友人と呼ぶ人に裏切られるでしょう。

この一行は今でも気になっていました。アレスは私の友人のふりをして、私を裏切ったのです。それがオラクルの意味するところであつたに違いない……。

そして結局、最も大切なものを救えないことになるだろう。

私は母を救うことができませんでしたが、それは母に自分自身を救ってもらったためであり、それが正しいことだとわかっていたからです。

では、なぜ私はまだ不安だったのでしょうか？

夏期講習最後の夜はあっという間に過ぎました。

キャンプ参加者たちは最後の食事を一緒に取りました。私たちは神々のために夕食の一部を燃やしました。で  
たき火が終わると、上級顧問が夏の終わりのピーズを授与しました。

私は自分の革のネックレスを手に入れ、初めての夏にそのピーズを見たとき、火の光が私の赤面を隠してくれて嬉しかったです。デザイン  
は真っ黒で、中央に海緑色のトライデントが輝いていました。

「選択は満場一致でした」とルークは発表した。「このピーズは、このキャンプにいた海神の最初の息子と、彼が戦争を止めるために冥  
界の最も暗い部分に着手した探求を記念しています！」

キャンプ全体が立ち上がり、歓声を上げた。アレスの小屋ですら、立たなければならないと感じた。  
アテナの船室はアナベスの前に誘導し、拍手を分かち合えるようにした。

あの時ほど嬉しいことも悲しいこともなかったと思います。私はついに家族を見つけました。私を気にかけてくれて、私が正しいことをした  
と思ってくれる人たちです。そして朝には、彼らのほとんどが今年の出発を迎えることになります。

...

翌朝、ベッドサイドテーブルの上に定型書簡が置かれているのを見つけました。

ディオニュソスが私の名前を聞き出すことを頑固に主張したので、それを記入したに違いないと私は知っていました

間違っている：

親愛なる \_\_\_\_\_ ピーター・ジョンソン \_\_\_\_\_、

一年中キャンプハーブブラッドに滞在する予定がある場合は、今日の正午までにビッグハウスに通知する必要があります。あ  
なたが意図を發表しない場合、私たちはあなたが客室から退去したか、または恐ろしい死を遂げたとみなします。清掃ハービーは日  
没とともに作業を開始します。彼らは、未登録のキャンパーを食べることを許可されます。残されたすべての私物は溶岩ピットで焼却さ  
れます。

良い1日を！

Mr.D (ディオニュソス)

オリンピック評議会 #12 キャンプディレクター

それはADHDに関する別のことです。私にとって締め切りは、目の前で見つめるまでは現実のものではありません。夏は終わったが、私はま  
だ母にもキャンプにも、ここに残るかどうかについて返事をしていなかった。さて、決めるまでにほんの数時間しかありませんでした。

決断は簡単だったはずだ。つまり、9か月間ヒーローのトレーニングを受けるか、9か月間教室に座って過ごすか、当然です。

しかし、考慮すべき母がいました。初めて、私はゲイブなしで彼女と一緒に一年間暮らす機会がありました。家において自由時間に街を歩き回  
る機会がありました。私

ずっと前に私たちの探求中にアナベスが言ったことを思い出しました。現実世界は怪物がいる場所です。そこで自分が優れているかどうかを学びます。

ゼウスの娘タリアの運命について考えました。もし私がハーブブラッドヒルを出たら、どれだけのモンスターが私を襲ってくるだろうかと思った。カイロンや助けてくれる友達がいない状態で、一学年中同じ場所にいたとしたら、母と私は次の夏まで生き残ることができるでしょうか？それは、スベルテストと5段落のエッセイが私を殺さないと仮定した場合の話です。闘技場に行って剣の練習をすることにした。そうすれば頭がすっきりするかもしれない。

キャンプ場はほとんど人影がなく、8月の暑さできらめいていた。キャンピングカーは皆、キャンピングで荷物をまとめたり、ほうきやモップを持って走り回ったりして、最終検査の準備をしていました。アーガスさんは、アフロディーテの子供たちの何人かがグッチのスーツケースと化粧品セットを丘の上まで運ぶのを手伝っていた。丘にはキャンプのシャトルバスが彼らを空港に送るために待機していた。

まだ離れることは考えなくてください、と私は自分に言い聞かせました。ただトレーニングしてください。

私は剣術競技場に到着して、ルークも同じ考えを持っていたことに気づきました。彼のジムバッグはステージの端に投げられた。彼は単独で仕事をしていて、私が見たことのない剣を使って戦闘用のダミーを捕鯨していました。それは普通の鋼の刃だったに違いありません。なぜなら彼はダミー人形の頭を切り落とし、わらを詰めた内臓を突き刺していたからです。オレンジ色のカウンセラーのシャツには汗が滴っていた。彼の表情はとても険しかったので、本当に命の危険にさらされていたかもしれません。私は、彼がダミーの列全体の内臓を解体し、手足を切り落とし、基本的にわらと鎧の山に変えるのを夢中で見ていました。

彼らは単なるダミーでしたが、それでもルークのスキルには畏敬の念を抱かずにはいらませんでした。その男は信じられないほどの戦闘機。私は、どうして彼が自分の探求に失敗することができたのだろうか、と再び疑問に思った。

ついに彼は私に気づき、スイングの途中で立ち止まりました。「パーシー」

「あの、ごめんなさい」と私は恥ずかしそうに言いました。「私はただ――」

「大丈夫だよ」と言って剣を下ろした。「直前の練習をしているだけです。」

「あのダミーたちはもう誰にも迷惑をかけないよ。」

ルークは肩をすくめた。「私たちは毎年夏に新しいものを作ります。」

彼の剣が渦を巻いていない今、私はそれについて何か奇妙なことに気づきました。刃は2つの異なるタイプの金属で、一方の刃は青銅、もう一方の刃は鋼でした。

それを見ていた私にルークが気づいた。「ああ、これ？新しいおもちゃ。これはバックバイターだよ。」

「陰口？」

ルークは光の中で刃を向けたので、それは邪悪に輝いた。「片面は天の青銅です。

もう一つは焼き入れ鋼です。定命の者と不滅の者の両方に効果があります。」

探求を始めたときにケイロンが私に言ったことについて考えました。英雄は決してしてはならないということです。

絶対に必要な場合を除き、定命の者に危害を加える。

「そんな兵器が作れるとは知りませんでした。」

「おそらく無理だろう」とルークも同意した。「それは他に類を見ないものです。」

彼は私に小さな笑みを浮かべて、それから剣を鞘に滑り込ませた。「聞いてください、私はあなたを探しに来るつもりでした。最後にもう一度森に行って、何か戦うものを探しに行くって何と言いますか？」

なぜ躊躇したのか分かりません。ルークがとてもフレンドリーだったので安心したはずだ。私がクエストから戻って以来、彼は少しよそよそしい態度をとっていました。彼が憤慨するのではないかと心配した

注目を集めてくれた私に。

「それは良い考えだと思いますか？」私は尋ねた。"つまり-"

「ああ、さあ。彼はジムバッグをあさり、コーラ6本パックを取り出した。「ドリンク」

私にかかっているよ。」

私はコーラを見つめて、いったいどこで手に入れたのだろうと不思議に思いました。レギュラーは無かった  
キャンプストアのモータルソーダ。おそらく、サテュロスと話さない限り、密輸する方法はありません。

もちろん、魔法のディナーのゴブレットには好きなものを何でも詰めることができますが、ただ味がしませんでした  
缶から出したばかりの本物のコーラと同じです。

砂糖とカフェイン。私の意志の力は崩壊しました。

「もちろん」と私は決心した。"なぜためですか？"

私たちは森に歩いて行き、ある種の怪物と戦おうと蹴り回しましたが、それは  
暑すぎた。理性のあるモンスターたちは皆、涼しい洞窟で昼寝をしていたに違いありません。

最初の捕獲時にクラリスの槍を折った小川のそばの日陰の場所を見つけた  
フラッグゲーム。私たちは大きな岩の上に座ってコーラを飲み、森の中で太陽の光を眺めました。

しばらくして、ルークが「クエストに出ていないのが懐かしい？」と言いました。

「3フィートごとにモンスターが襲ってくるの？冗談ですか？」

ルークは眉を上げた。

「そうだね、懐かしいよ」と私は認めた。"あなた？"

影が彼の顔の上を通り過ぎた。

私は女の子たちからルークがいかにか格好良いかを聞くことに慣れていましたが、その時の彼は疲れていて怒っているように見え、ま  
ったくハンサムではありませんでした。彼のブロンドの髪は日光の下では灰色になった。顔の傷はいつもより深く見えた。私は彼が老人で  
あることを想像できました。

「私は14歳の時から一年中、謎の丘に住んでいます」と彼は私に語った。「タリア以来ずっと…そうですね、私は訓練して訓練し  
て訓練しました。現実世界では普通のティーンエイジャーになることはできませんでした。それから彼らは私に一つのクエストを課しまし  
た、そして私が戻ってきたとき、「さて、もう終わりだ。良い人生を送ってね」みたいな感じだった。」

彼はコーラの缶をくしゃくしゃにして小川に投げ込みました、それは私に本当に衝撃を与えました。Camp Half-Blood で最初に  
学ぶことの1つは、ポイ捨てをしないことです。ニンフとナイアドからの声が聞こえます。

彼らは仕返しをするだろう。ある夜ベッドに潜り込むと、シーツがムカデと泥でいっぱいであることに気づくでしょう。

「月桂冠なんてどうでもいいよ」とルークは言った。「私はあの埃っぽいトロフィーみたいになるつもりはないよ」  
大きな家の屋根裏部屋で。」

「あなたは出発するように聞こえます。」

ルークは歪んだ笑みを私に向けた。「ああ、帰るよ、分かった、パーシー。別れを告げるためにここに連れてきたんだ。」

彼は指を鳴らした。小さな火事が起こり、私の足元の地面に穴が空いた。私の手のひらほどの大きさの、黒く光る何かが這い出てき  
ました。サソリ。

私はペンを取り始めました。

「そんなつもりはない」とルークは警告した。「ピットサソリは15フィートまでジャンプすることができます。その針は突き刺すことができます」  
服の上からでも。あなたは60秒以内に死ぬでしょう。」

「ルーク、何とー」

それからそれは私に衝撃を与えました。

あなたを友達と呼んだ人に裏切られるでしょう。

「あなた」と私は言いました。

彼は落ち着いて立ち、ジーンズを脱ぎ捨てた。

サソリは彼に注意を払いませんでした。それはビーズのような黒い目を私に向け続け、ハサミを握り締めて私の靴の上に這いました。

「世界にはたくさんのものを見たよ、パーシー」とルークは言った。「感じなかったのか——闇が集まり、怪物たちが強くなっていくのを。すべてがどれほど無駄であるか気づかなかったのか？すべての英雄的行為は——神々の手先だ。彼らは数千年前に倒されるはずだったが、しかし、私たち混血のおかげで、彼らは持ちこたえてくれました。」

こんなことが起こっているなんて信じられませんでした。

「ルーク…あなたは私たちの両親のことを話しているんです」と私は言いました。

彼が笑いました。「それで私は彼らを好きになるということですか？彼らの貴重な『西洋文明は病気だ、パーシー。それは世界を滅ぼしている。それを止める唯一の方法は、それを焼き払って、もっと誠実なものからやり直すことだ。』」

「あなたはアレスと同じくらい狂っています。」

彼の目は燃え上がった。「アレスは愚か者だ。彼は自分が仕えている本当の主人に気づいていなかった。時間があれば、パーシー、説明できるけど、残念ながら君はそんなに長くは生きられないだろう。」

サソリが私のズボンの裾に這いました。

ここから抜け出す方法があったはずですよ。考える時間が必要でした。

「クロノス」と私は言った。「それがあなたが仕えている人です。」

空気が冷たくなってきました。

「名前には気をつけるべきだ」とルークは警告した。

「クロノスはあなたにマスターボルトとヘルムを盗ませるように言いました。彼は夢の中であなたに語りかけました。」

ルークが目がピクピクと動いた。「彼はあなたにも話しました、パーシー。あなたは聞くべきでした。」

「彼はあなたを洗脳しているのです、ルーク。」

「あなたは間違っています。彼は私の才能が無駄になっていることを私に示しました。二年前の私の探求が何だったか知っていますか、パーシー？私の父、ヘルメスは私にヘスペリデスの園から金のリンゴを盗んで、それを返すよう望んでいたのです。オリンパス。私が行ったすべてのトレーニングの後、それが彼が思いつくことができる最善のことでした。」

「それは簡単な探求ではありません」と私は言いました。「ヘラクレスがやったよ。」

「その通りだ」ルークは言った。「他人がやったことを繰り返すことに栄光がどこにある？神々が知っているのは、過去をやり直すことだけだ。私の心はそれには乗り気ではなかった。庭のドラゴンが私にこれをくれた——彼は怒って自分の傷跡を指さした——そして戻ってきたとき、私が得たのは哀れみだけでした。私はその時すぐにオリンポスを石ごと引き倒したいと思いましたが、時間を待ってくださいました。私はクロノスの夢を見るようになりました。彼は私に、価値のあるもの、どの英雄も持っていなかったものを盗むように説得しました。「勇気を出して。冬至の野外旅行に行ったとき、他のキャンプ参加者が寝ている間に、私は玉座の間に忍び込み、椅子からゼウスのマスターボルトを奪い取りました。ハデスの闇の兜も同様です。あなたにはできないでしょう」それがどれほど簡単だったか信じてください。オリンピック選手たちはとても傲慢です。誰かが自分たちから盗みを働くとはい夢にも思わなかったのです。彼らの警備は恐ろしいものです。私はニュージャージー州の半分にいたのですが、嵐の轟音が聞こえ、彼らが私の盗難を発見したことが分かりました。」

サソリは今私の膝の上に座り、キラキラした目で私を見つめていました。飼おうとした私の声のレベル。「では、なぜクロノスにアイテムを持ってこなかったのですか？」

ルークの笑顔が揺れた。「私... 自信過剰になってしまった。ゼウスは盗まれたポルトを探すために息子や娘たちを送り出しました - アルテミス、アポロ、私の父、ヘルメス。しかし、私を捕まえたのはアレスでした。彼を倒すこともできたかもしれないが、注意が足りなかった。彼は私の武装を解除し、権力の品物を奪い、それをオリンポスに返し、私を生きたまま焼き殺すと脅しました。その時、クロノスの声が私に聞こえ、何を言うべきかを教えてくれました。私はアレスの頭に神々の間の大戦争についてのアイデアを入れました。私は、彼がしなければならないのは、しばらくアイテムを隠して、他の人が戦うのを見守ることだけだと言いました。アレスの目には邪悪な光が宿っていた。彼が夢中になっていることはわかっていました。彼は私を解放し、誰も私の不在に気づかないうちにオリンポスに戻りました。」ルークは新しい剣を抜いた。まるでその美しさに催眠術をかけられたかのように、親指を刃の平らに滑らせた。タイタン... へ、彼は悪夢で私を罰しました。もう失敗しないと誓った。謎のキャンプに戻ると、夢の中で、2人目の英雄が到着し、アレスからタルタロスまでの残りの道程をだまされてポルトと舵を奪われる可能性があることが告げられました。」

「あの夜、森であなたはヘルハウンドを呼び出しました。」

「私たちはシャロンに、キャンプがあなたにとって安全ではないと思わせなければなりませんでした。クエスト。ハデスがあなたを狙っているのではないかという彼の懸念を確認する必要があります。そしてそれはうまくいきました。」

「空飛ぶ靴は呪われていたんだよ」と私は言った。「彼らは私とバックパックを引きずるはずだったタルタロスへ。」

「そして、もしあなたがそれを着ていたら、彼らはそうしていたでしょう。しかし、あなたはそれをサテュロスに与えました。計画には含まれていなかった。グローバーは触れるものすべてを台無しにしてしまいます。彼は呪いさえ混乱させた。」

ルークは私の太ももに乗っていたサソリを見下ろした。「そうすべきですタルタロスで死んだ、パーシー。でも、心配しないでください、私が小さな友達に任せて、物事を正しく解決してもらいます。」

「タリアはあなたを救うために命を捧げたのよ、私は歯を食いしばって言った。「そして、これが彼女へのお返しですか？」

「タリアのことは言うな！彼は叫びました。「神々は彼女を死なせました！それは彼らが行った多くのことのうちの一つです」

支払います。」

「ルーク、君は利用されている。君もアレスも。クロノスの言うことを聞くな。」

「私は利用されてしまったのですか？」ルークの声が甲高くなった。「自分自身を見てください。あなたのお父さんがあなたのために何をしてくれたんですか？クロノスは立ち上がるでしょう。あなたは彼の計画を遅らせただけです。彼はオリュンポス人をタルタロスに投げ込み、人類を洞窟に追い返すでしょう。最も強い者、つまり奉仕する者を除いてすべてです。彼。」

「虫を止めてください」と私は言いました。「そんなに強いなら、自分で戦ってみよう」

ルークは微笑んだ。「頑張ってください、パーシー。でも私はアレスではありません。私を騙すことはできません。殿下が待っています、そして彼は私に引き受けるべきたくさんクエストを持っています。」

「ルークー」

「さようなら、パーシー。新しい黄金時代がやってくる。あなたはその一員ではない。」

剣を弧を描きながら斬り込み、闇の波紋の中に消えた。

サソリが突進した。

私はそれを手で払いのけ、剣の蓋を外した。それが私に飛びかかってきたので、私は空中でそれを真っ二つに切りました。

私は自分自身を祝福しようとしたところ、自分の手を見下ろしました。手のひらが真っ赤になってしまった

みみず腫れ、にじみ出て、黄色いガクの煙が出る。結局のところ、そのことは私を魅了しました。

耳がドキドキしました。視界が曇ってしまいました。水だ、と私は思った。前は治ってたんですよ。

私は小川によろめき、手を水に浸しましたが、何も起こらなかったようです。毒が強すぎた。視界が暗くなってきました。ほとんど立ち上がる事ができませんでした。

60秒、ルークが私に言った。

キャンプに戻らなければなりません。もし私がここで倒れたら、私の体は怪物の夕食になってしまいます。

何が起こったのか誰も知りません。

足が鉛のように感じられました。顔が焼けつくような感じでした。私はよろめきながらキャンプに向かっていきました、そして、ニンフたちが木から飛び降りた。

「助けて、私は叫びました。"お願いします..."

そのうちの二人が私の腕を取り、引っ張っていきました。空き地までたどり着いたのを覚えています。

助けを求めるカウンセラー、ほら貝の角を吹くケンタウロス。

それからすべてが真っ暗になりました。

\*\*\*

目が覚めるとストローを口にくわえていました。私は液体のチョコレートチップクッキーのような味のものをすすっていました。ネクター。

私は目を開けました。

私はビッグハウスの病室のベッドに突っ伏し、右手にはこん棒のように包帯を巻かれていました。アルガスは隅で見張りに立っていました。アナベスは私の隣に座り、ネクターグラスを持ち、私の額に手ぬぐいを当てました。

「また来たよ」と私は言った。

「馬鹿野郎」とアナベスが言ったので、彼女が私が意識を取り戻したのを見て大喜びしていることがわかりました。

「私たちが見つけたとき、あなたは緑色で、灰色に変わっていました。カイロンの癒しがなかったら...」

「さあ、さあ」ケイロンの声があった。「パーシーの憲法は一定の評価に値する。」

彼は人間の姿で私のベッドの足元近くに座っていましたが、それが私がまだ彼に気付かなかった理由です。彼の下半身は魔法のように車椅子に押し込まれ、上半身はコートとネクタイを身に着けていました。彼は微笑んだが、その顔は疲れ果てて青ざめていた、徹夜でラテン語の論文を採点していたときと同じだった。

"ご気分はいかがですか？"彼は尋ねた。

「私の内臓が凍って電子レンジにかけられたようなものです。」

「それがサソリの毒だったことを考えると、そうですね。できれば、何が起こったのか正確に教えてください。」

蜜を一口すすりながら、私は彼らにその話をしました。

部屋は長い間静かだった。

「信じられない、ルーク...」アナベスの声は震えた。彼女の表情は怒りと悲しみに変わりました。

「はい。はい、信じられます。神々が彼を呪ってくださいますように... 探求の後、彼は決して以前と同じではありませんでした。」

「これはオリンパスに報告しなければならない」とシャロンはつぶやいた。「すぐに行きます。」

「ルークは今ここにいるよ」と私は言った。「私は彼を追いかけなければなりません。」

カイロンは首を振った。「いいえ、パーシー。神々は――」

「クロノスのことは話さないよ」と私は言いました。「ゼウスは一件落着を宣言した！」

「パーシー、これが難しいことは分かっている。でも、急いで復讐に走ってはいけません。まだ準備ができていません。」

私はそれが好きではありませんでしたが、私の心の一部はカイロンが正しいのではないかと疑っていました。自分の手を一目見ただけで、すぐに剣術を使うつもりはないことがわかりました。「カイロン…神託からのあなたの予言…それはクロノスに関するものでしたね？私もその中にいたのですか？そしてアナベスは？」

カイロンは緊張した面持ちで天井を見た。「パーシー、ここは私の場所じゃないー」

「そのことについては私に話すなど言われているんですよね？」

彼の目は同情的でしたが、悲しそうでした。「君はきっと偉大な英雄になるだろう、君はそのために全力を尽くすよ準備してください。でも、あなたの前にある道について私の考えが正しければ…」

雷が頭上で轟き、窓をガタガタと鳴らしました。

"よし！"カイロンは叫んだ。"大丈夫！"

彼はイライラしてため息をついた。「神々にも理由があるのよ、パーシー。自分のことを知りすぎているのです。未来は決して良いものではありません。」

「何もせずに座っているわけにはいきません」と私は言いました。

「私たちは手をこまねいてはいけません」とシャロンは約束した。「しかし、気をつけなければなりません。クロノスはあなたが解き明かされることを望んでいます。彼はあなたの人生を混乱させ、あなたの思考が恐怖と怒りで曇ることを望んでいます。彼の望むものを彼に与えてはいけません。辛抱強く訓練してください。あなたの時が来ます。」

「私がそんなに長生きすると仮定して。」

シロンは私の足首に手を置きました。「パーシー、あなたは私を信じなければなりません。あなたは生きます。しかし、その前にあなたは来年の自分の道を決めなければなりません。私はあなたに正しい選択を言うことはできません…」私は彼が非常に明確な意見を持っていると感じましたそして、私にアドバイスしないのは彼の意志のすべてを費やしていました。「しかし、一年中キャンプ半血に留まるか、それとも七年生になったら人間の世界に戻ってサマーキャンプになるか、あなたは決めなければなりません。よく考えてください。私がオリンパスから戻ったら、あなたの決断を私に教えてください。」

抗議しなかった。私は彼にもっと質問しなかった。でも彼の表情がそこで教えてくれた。これ以上議論する必要はありません。彼はできる限りのことを言った。

「できるだけ早く戻ってくるよ」とシャロンは約束した。「アルガスが君を見守ってくれるよ。」

彼はアナベスをちらっと見た。「ああ、そして、愛する人…準備ができたらいつでも、彼らはここにいます。」

"誰がいますか？"私は尋ねた。

誰も答えなかった。

ケイロンは転がりながら部屋から出た。彼の椅子の車輪がカタカタと音をたて、一度に二つずつ、慎重に正面の階段を下りていくのが聞こえました。

アナベスは私の飲み物に入っている氷を研究しました。

"どうしたの？"私は彼女に尋ねました。

"何もない。"彼女はグラスをテーブルの上に置いた。「私は…あることについてあなたのアドバイスを受けたところです。あなたは…ええと…何か必要なものはありますか？」

「はい。助けてください。外に出たいのです。」

「パーシー、それはいい考えじゃないよ。」

私はベッドから足を滑り出させた。私が床に崩れ落ちる前に、アナベスが私を捕まえました。の波吐き気が私を襲った。

アナベスは「言ったじゃないですか…」

「大丈夫です」と私は言い張った。ルークが外にいる間、病人のようにベッドに横たわりたくなかった

西側世界の破壊を計画している。



なんとか一歩前進できました。それからもう一人は、まだアナベスに大きく寄りかかっています。アルガスが私たちを追ってきた外に出たが、彼は距離を保った。

ベランダに着く頃には顔に汗が滲んでいた。お腹が歪んでしまった結び目に。しかし、なんとか手すりまでたどり着くことができました。

夕暮れだった。キャンプは完全に人のいないように見えました。船室は暗く、バレーボールのピットは静かだった。湖面を切るカヌーはありません。森とイチゴ畑の向こうに、ロングアイランド湾が最後の太陽の光で輝いていました。

"何をする？"アナベスは私に尋ねた。

"わからない。"

私は、カイロンが私に一年中留まって、もっと個人トレーニングの時間を割いてほしいと思っているような気がする、と彼女に言いましたが、それが私が望んでいることかどうかはわかりませんでした。でも、クラリスだけを相手にして彼女を放っておくのは気分が悪いと認めました…。

アナベスは唇をすぼめて、「今年は家に帰ります、パーシー」と静かに言いました。

私は彼女を見つめた。「つまり、お父さんのところに？」

彼女は謎の丘の頂上を指さした。キャンプの魔法の境界線の端にあるタリアの松の木の隣に、家族のシルエットが立っていた。二人の幼い子供、一人の女性、そして一人の金髪の高背の男性だ。彼らは待っているようだった。男はアナベスがデンバーのウォーターランドから買ってきたものと似たバックパックを持っていた。

「戻ってきたら彼に手紙を書きました」とアナベスさんは語った。「あなたの言うとおりです。私はごめんなさいと言いました。も彼 … し彼がまだ私を望んでいるなら、学年の間は家に帰ります。彼はすぐに返事をくれました。私たちは決心しました…もう一度試してみようと思いました。」

「それは勇気が要りました。」

彼女は唇をすぼめた。「学年中はバカなことはしないでしょ？少なくとも…アイリスメッセージを送らないわけにはいかないのですか？」

なんとか笑顔を作ることができました。「私はトラブルを探しに行きません。通常はそうする必要はありません。」

「来年の夏に戻ったら、私たちはルークを追い詰めるつもりです。クエストを依頼するつもりですが、もしも承認は得られませんが、とにかくこっそりやってみます。同意しましたか？」

「アテナらしい計画ですね」

彼女は手を差し出した。振ってみました。

「気をつけて、海藻脳よ」とアナベスは私に言った。「ちゃんと見ていて。」

「あなたもですよ、賢いお嬢さん」

私は彼女が丘を登って家族と合流するのを見ました。彼女は父親をぎこちなく抱きしめ、最後にもう一度谷を振り返った。彼女はタリアの松の木に触れ、それから自分自身を許した。頂上を越えて死すべき世界へ導きます。

キャンプで初めて本当に孤独を感じました。ロングアイランド湾を眺めていると、父が「海は束縛されるのが嫌いだ」と言っていたのを思い出しました。

私は決断を下しました。

ポセイドンが見守っていたら、私の選択を承認してくれるだろうか、と思った。

「来年の夏にはまた来ます」と私は彼に約束しました。「それまでは生きてやるよ。だって、私はあなたの息子だから私家に帰るために荷物をまとめることができるように、アーガスに私を第3キャビンまで連れて行ってくださるように頼んだ。